2

八幡公民館文集

『 ふ れ あ い 』

第１号～８号　欠落

第９号　1987-4（県立中央図書館所蔵）昭和62(61)

第 10 号　1988-4（〃）昭和63（62年の活動）

第 11 号　欠落　平成元（63年）

第 12 号　1990-4（〃）平成2（元年の活動）

第 13 号　1991（〃）平成3（2年の〃）

第 14 号　1992（市原市立中央図書館所蔵）

以降発行されたかどうか不明　平成4（3年の）

内容＝前年度の公民館活動文集

八幡公民館 文集

ふれあい	第9号	1987-4	（昭和61年度の活動）
〃	第10号	1988-4	（昭和62年 〃 ）
〃	第12号	1990-4	（昭和63年 〃 ）
〃	第13号	1991	（平成2年 〃 ）
〃	第14号	1992	（平成3年 〃 ）

第9～13号 千葉県立図書館 蔵書
第14号 市川市立中央図書館 蔵書

第1～8、11号は欠落
第15号以降 発行されたかどうか未詳

ふれあい

1987.4

市原市八幡公民館

千葉県立
3.12.26
中央図書館

第9号「ふれあい」の発刊によせて

「ふれあい」9号の発刊を心よりお喜び申し上げます。
また原稿をお寄せ下さり、発刊を支えて下さった主催事業や市民サークルの方々に厚く感謝の意を表します。
「ふれあい」が回を重ねる度に充実し、多くの人々に愛され、関心と期待が高まってまいりました。また「ひばり読書会」の会員の方々より、今回も貴重な多くの原稿を戴き日常の活動の充実さに心より敬意を表します。
創立十一年目を迎えた貴会の益々の発展を念じています。
この「ふれあい」が更に多くの人から愛され親しまれ充実していきますよう心から願っております。

今は生涯教育の時代といわれております。
いろいろの機会をとらえ、もとめて、知識や教養を身につけることの大切さを痛感します。

。少にして学べば則ち壮にして為すことあり、
。壮にして学べば則ち老いて衰えず、
。老いて学べば則ち死して朽ちず、

佐藤一斉（言四録）の教訓です。

よりよいあすを目ざして、日々向上に励んでまいりましょう。

笠森寺周辺の自然林の観察

的場俊子

天候に恵まれた十二月十日、自然観察会は笠森へむかいました。

講師は、市原高校の仲村先生です。参道わきの珍らしい楠の大木、三本杉をみながら、豊富に群生しているシダについてくわしい説明を聞きました。

コモチシダ、リョウメンシダ、ベニシダ等四十種以上もあると話され、今までは、シダと一言で片づけていたものにも、きちんとした特徴・名称のあるのに驚きました。

笠森寺の遊歩道の落葉の上を歩く心地よさは、ふだんアスファルトの上を歩いているものにとっては、この上もない経験でした。両側の地層、地形、屋根、斜面には陽の木・陰の木があり、多年生草木を見やりながら自然の生い立ちに感激しました。

当寺は、国の重要文化財で、観音堂のほかに六角堂、天主堂、不動堂があります。

境内での昼食、自己紹介、記念写真、本堂の鐘をならして健康と無事を祈りました。

午後は、遊歩道の左側に足を進め、展望台に登りました。社寺森として保護され国の指定の天然記念物になっている自然林をながめ、いつまでもこの緑が失なわれないようにと願っています。

気候温暖なこの地方はしのぎよく、針葉樹林の続く故郷とくらべながら車窓の景色をながめながら帰りの車は走ります。

一日をふり返って、自分の不勉強さを知り、これから少しずつ勉強していこうと思いを新たにした一日でした。

笠森さんを歩いて

新田美津子

私たち一家が市原に移って一、二年のころ、仏像や文化財をみて歩くのが好きな義姉の誘いで、四方懸造りとして名高い笠森観音を訪ねた。

緑深い静けさの中、大きな奇岩の上にそびえる姿は、神秘的で回り緑からながめられる南房の山なみ、遠くは太平洋までも望むことができ、また境内には樹令数百年という楠、杉など暗い参道が印象的だった。

いつも歩くことが一番健康によいと知りつつも、現実ではどこへ行くにも自転車で用をたしてしまう。

仲間と自然の中を歩ける!! それを楽しみに、この会に入った。

風は冷たかったけれど、冬の日ざしがやわらかく房総に多い山合いをぬって走るバスの窓からは、遅い紅葉があちこち見えかくれする、満席の車中の談笑も二十年は若返ったようにはずんで聞こえて来る。

笠森のハイキングコースは私達を歓迎してくれているように、一面枯葉のジュウタンを敷きつめたような感触で、とても都会では想像もつかない心地よさである。

思わず胸一ぱい深呼吸をする。何と空気のおいしいこと。

先生の用意されたプリントによって、日頃気にとめなかった片すみの草にも多くの種類があり、生息地にも変化のあることなど珍しい説明を聞くことができた。

しだ類の間に千両、藪こうじ、紫式部等々、道端へ顔をのり出すように、きれいな実をのぞかしている。定家カツラには格別のものが

主催教室

サークル

ある。昔式子内親王の墓石にまつわりついていた伝説も思い出されて興味はつきない。
自然を尊び、人の和に囲まれながらすばらしい一日であった。また次への期待に胸をはずませている。

いきいき　ひととき

藤目雅子

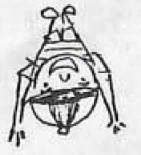
「自然観察会に参加してみませんか。」と声をかけて頂き、いつか一度は参加してみたいと思っていましたので早速出席させてもらいました。
第一回目は待望の市民の森に参加し、空気のきれいなこと、一面の緑、歩を止めてはその草花の説明を聞き、なかでも可愛想だった「オトギリ草」の伝説、
「昔、血止めとして使っていた草を秘して、他人に教えず、その草の名を何としても聞きだそうと弟をつれ出し、酒を飲ませて目的を果たし、兄は弟を切り殺してしまった。それ以来、その草をオトギリ草ということ」、また木の実がうれて赤いのを鳥たちに食べてもらい、鳥の糞に稚として残り、再び成長すること等。
新しい草木に一度名付をすると取り消しが出来ないとのこと、蛇が[illegible]くなれることは、この上ない楽しいことです。

とを考えずにつけられてしまっている。
講師のていねいな説明とお昼の楽しいおしゃべり、今日出会った方達と友好を暖めることができました。
北海道から出てきた私には本当によい勉強になりました。
雑事の多い中で、自然の力の偉大さ、ストレス解消、健康増進等、ほんとうに有意義な一日でした。
これからも友情を深め、この観察会をもっとすばらしい会になるように努めたいとおもいます。

公民館講座に出席して

下平正恵

感想文など書いた経験はありませんが、私なりに感じたままに記します。
のんびりの毎日、何かしたいと思っていたある日、市の広報を読んでいくうちに成人講座を見つけ、参加いたしました。
とまどいながら公民館を訪れ、びっくりしました。訳山の講座が開かれていて、申し込みは遅れても空席があれば参加できるときいて唐詩の教室に入り学んでいます。
最初教科書を手にしたときは、漢字の羅列でついていけるかしらと心配でしたが、先生のお話がわかり易く詩の奥行の深いのにおどろいています。
いちはら広報で、親子教室のことを知った時、月に一回なら多少無理をしても、参加してみようという気になった。そして、なれぬ手つきで竹をけずって、一日がかりで竹とんぼを作ったり、銅板を利用してレリーフを作ったり、二回に分けて、二ケ月がかりで土器を焼いたりもした。
何とか、出来合いの品物が氾濫する中において、月一回、手づくりを楽しむのもよし、父親株や母親株を上げてみるのもよし、子供の意外な発想や行動に、改めて成長を見るのも楽しいものである。



親と子のふれあい
——親子教室——

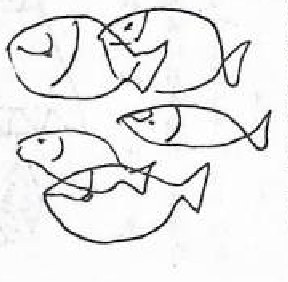
大竹和美

子供に、休日の父親についてたずねると、普段忙しいので、ゴロ寝を決めこんでいるとか、早朝からゴルフやつりに出かけてしまうという返事が返ってくることが多いと聞く。
いやはや、今の父親は、会社で一生懸命家族のために働いているにもかかわらず、子どもに見せる機会がほとんどないためか、母親と比べて、だいぶんと損をしているようである。
しかしながら、父親参観では、子供と一緒にゲームをしたり、作品を完成させたりで、けっこう子供から尊敬の眼差で見られて、父親株をあげて帰ってきたりするものである。
考えてみれば、一緒に暮らしながら、親と子で何か作ったり、半日遊んだりするというふれ合いは、子供が幼い時だけでなく、学童期においても大切だと思う。
特にこの学童期に、親がうまくやりくりして、親と子が十分にかかわっていたなら、案外、親子の断絶という問題も、話し合いで解

作文の勉強
——親子教室——

八幡小二年　白鳥梓

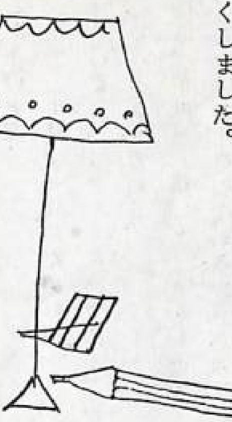
今日は、おまつりですが、公民かんで、作文の勉強をしました。おばあちゃんが、勉強にいったら、ラーメンをごちそうすると言ったので、ついていきました。
先生は、とてもやさしく教えてくださったので、よくわかりました。のでので病、からから病など、おもしろい病気が、作文にはいろいろあるので、書くのがたいへんだと思います。
先生にさされたら、お答えができたので、おばあちゃんが、「よかったねぇ。」



と、いいました。
でんれいゲームは、さい後までいくうちに、まちがってはいけないと思います。ことばは、はっきりいわないと、まちがいます。
帰りには、ヨーカドーで、たこやき、ラーメン、ポテトなどを食べました。おいしかったです。
「また、こようね。」
と、おばあちゃんとやくそくしました。

老人の役割

白鳥治子



近代社会の生活、ことに経済機構の変化に伴い、母親の就職が多く、当然、同居老人は、第二の子育てを、よぎなくさせられているが、孫の成長に従い、ある程度の勉強も見てやらなくてはいけない現状である。

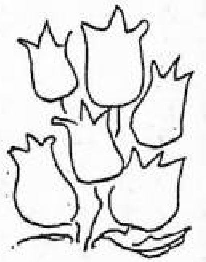
私は、大正十三年、小学校入学である。以後、六十何年の隔りは、悲しいことに、私は、化石人間となっている。何としても孫との繋りを保ちたいと思っていたところへ、『文章教室』の勉強でした。先生のご丁寧なご指導で、「物を書く」ということがよくわかり、これでいくらかでも、孫に教えられると思うとうれしくなる。

二人で宿題の作文を書く。書き損じをゴシゴシ消ゴムで消し[illegible]ーブル上にゴム屑を散らかしている孫の姿を見ると、「ニコニコ[illegible]している私は、折り返し点を過ぎ、最も苦しいと言われる二十キロから三十キロ地点に差しかかっています。

きれいに老いる、あるいは可愛く老いる、悔いなく老いるということを、これからの人生の目標にして、細々とですが、勉強していきたいと思っています。

源氏物語を受講して

上田霜枝



教室のガラス越しに、街路樹の春待つ気配が感じられます。冬は暖かく、夏は涼しく管理のゆき届いた教室で、先生は、講義の始めにいつも歳時記や時の出来事を一主婦の立場から話してくださいます。

戦中、戦後の変動の中に生きてきた私共は、この平和な時間を何と幸せな事だと感謝しております。

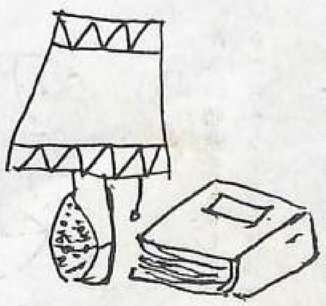
今年は、夕顔の巻が終わりました。九百年の昔、装束に身をつつんだやむごとなき人々の優雅な生活が、先生の時代背景をまじえた解説によって、美しく脳裏に浮かんできます。乳母の病気見舞に行った源氏は、隣家の垣根に咲く夕顔の花を見て、所望しますが、夕顔の花を歌等書き紛らわした扇に載せて差し上げるなど、さすが平安時代の風流をしのび時代の流れを感じました。夕顔の死に、忍ぶ恋であり、高貴の身である源氏の立場、そして又死の後までもひた

年生になるまで、私は生きていられるのか」と思うと、とても淋しくなる。

「そうだ、たとえ短かい間でも、この孫に祖母との思い出を、たくさん作っておいてあげよう」と思った。そのために、私は、孫についてゆけるだけの勉強を怠ってはいけないことを深く心に刻みこんだ。

唐詩教室に学んで

森山正子



昨年四月に、八幡公民館主催事業年間計画表に目を通し、豊富な内容に驚くと同時に、結婚して市原市民になって二十年になりながら、公民館についての認識不足に大いに赤面してしまいました。

漢詩は、数十年前、高校で学んだだけですが、興味がありましたので、思いきって唐詩教室の受講申しこみをしました。いざ出席してみますと、始めの不安はどこへやら、片山先生のかんで含めるような丁寧なお話と、豊かな学識と話題のおかげで、毎回講義時間二時間は、あっという間に過ぎてしまいます。テキストの訳も判らない漢字の羅列が、一行二行と理解できるようになり、声を出して読むと、詩の語る情景がありありと頭に浮かんできます。

唐詩は、難しい詩形と韻のきまりを厳しく守って作られている[illegible]説のおかげで興味深く勉強することができました。

何しろ軽装よろしく自動車で買物に行く今日も、牛に引かせて旅する時代も、人を愛する事情は同じで、プレイボーイは、古今を問わないものと苦笑したりしております。

平素、文学などとは、あまりにもかけ離れた生活の私には、物語の本質である「もののあはれ」をじっくり理解するには程遠いものですが、ただ楽しく友達との交流をよろこんでおります。

源氏物語　このユーモア溢れるもの

岸本静江

源氏物語の主題は「もののあはれ」にあるという。確かに光源氏の因果応報ともいえる晩年の苦悩、また宇治十帖を流れる深い仏教思想など、全編を貫く主旋律は、しっとりとあわれ深い短調であろう。しかし、五十四帖の長編がすべて「もののあはれ」一色であろうはずがない。華麗であでやかな紅葉賀、花宴、そうかと思うと、生前も死後も嫉妬の情に苦しみぬく六条御息所と、その呪いに悶える葵上、女の三の宮の源氏への降嫁に傷つく紫上など、どろどろとした情炎の世界であり、源氏と頭の中将との生涯にわたるライバル同士の争いありで「もののあはれ」などというきれい事だけではすまない人間のむきだしの人間感情、人間の業の深さまで、才媛の筆は容赦なく描きつくしている。まさに源氏物語こそ人間の喜怒哀楽の絵巻物といえよう。

さらに、この人間模様の絵巻物に、他とは多少色相を異にした色彩を「もののあはれ」とはちょうど補色の関係にあるような色彩を

日本人にはユーモアが欠けている とはよくいわれることである。が、

この絶妙な物語作家はつけ加えることも忘れなかった。ちょっぴりペーソスをきかせたユーモアの味がそれで、一巻全体がその色に染められている「末摘花」は、その代表であろう。

そもそも源氏が末摘花の邸に忍んでゆき、その琴の音を初めて聞いた晩、源氏の跡をつけていた頭中将とばったり出会い

「もろともに大内山は出でつれど

入るかたみせぬいさよひの月」

と、からかわれる導入部のおかしさ。

クライマックスの、雪の朝、暁の光で見た姫君の鼻の描写は、同性の筆にしてはちと残酷な、と思われるほど辛辣で、

「『あな、かたは』と見ゆる物は御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物（釈迦の右に侍している普賢菩薩の乗っている白象の鼻は紅蓮華の如し、といわれる）とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、さきの方すこし垂りて、色づきたる事、ことの外にうたて」

とあるが、ことの外なるは作者の歯に衣きせぬ表現であろう。

この他にも、随所の、あまりに容赦のない筆致に、末摘花を気の毒に思いながらも、ついその端的な比喩に笑いこけてしまうのである。

「末摘花」ほど一巻全体にわたって、というわけではないが、紫式部の天賦のユーモアの才は、多かれ少なかれどの巻にも見受けられるものであって、例えば「とこなつ」の近江君の軽薄さ、或は「紅葉賀」の年甲斐もなく源氏や頭中将を誘惑する源内侍の厚顔さ、など枚挙に暇がない。挙句、作者の悪戯心は憂愁に満ちているはずの宇治十帖にも及んで、最終章「夢浮橋」の末尾、出家した浮舟に会うのを拒絶された薫の、間の抜けた顔つきまで読者に髣髴とさせるのである。

これはとんでもない誤解で、我々の血液には、脈々としてこの平安朝女流作家のたくましいユーモア精神が流れているはずである。そして、牽強付会のそしりを恐れずに言うならば、この血脈は流れ流れて、中世には狂言に、江戸時代には芭蕉の「軽み」に、明治には漱石の「坊ちゃん」や「猫」に、という具合に噴出したのだろう。

更に、この流れは、日本人の文学のみならず広く文化一般に、ある時は強く、ある時は底流となってこれからも永く受け継がれてゆくであろう。

フレッシュ体操

松浦牧子

五十八年に講師南波紀子先生を迎え、フレッシュ体操が発足しました。

先生のユーモアあふれる会話と自分の体調にあわせ無理のない体操をという姿勢が運動音痴の私を五年間も引っ張って来てくださったのだと思います。

昨年は文化祭に初めて出場したところ、日頃の成果を発揮できず、人前で発表することの難しさを私は痛感しました。でも中には、反対にファイトを燃やした方々も居りました。

「何時までもフレッシュでありたい」と、これは誰でもの願いです。しかし、何の努力もなしにかなえられるものではありません。週にたった一度の運動ですが、何年も続けていると、こんなにも違うものかと思うほど、体育館での体操は、年令を忘れさせてくれます。

現在、会員数は三十名を容し、軽快な音楽に合わせて汗を流す一時間半です。

みなさん、お互いに誘い合ってこの春こそ家庭から一歩出て、フレッシュ体操にトライしてみませんか。

料理大好き人間

若葉料理　大木加津子

「砂糖大さじ一ぱい。醬油大さじ一ぱい』と言いながら調味料を量る人、野菜を切る人、卵を泡立てる人、それぞれ分担しながら、和気あいあいと活気に満ちて調理をしていく。毎月の第三木曜日、若葉料理教室風景である。

「食生活」は、私達が人間として生きていくための大切な要素であると思う。食べなければ生きていけない。食べることに関する気持ちは皆平等に持っている。それならおいしいものを食べたい。心のこもった料理をしたい。

例えば、じゃがいも一個。飢えを満たすためだけなら、ゆでたものを丸ごとぽんと出せばよい。生活に潤いがなければ、人は皆かさかさしてしまう。だから私達は作ります。じゃがいもに魔法をかけて、フライドポテト、豚バラ肉とじゃがいもの米粉まぜ煮物……等の出来上がり。どんな簡単な料理でもよい。心がこもっていれば、自然に皆の顔もほころぶし、楽しくなる。

家族が健康な生活をするには、毎日の食事が大事である。自ずと料理に関心を持つのは当然ではないだろうか。難しい料理を作る必要はない。毎日のお惣菜のヒントをこの料理教室で学んでいけば、それで十分だと思う。さらに、貧血予防や減量のための献立ても教えていただき、健康料理への関心も高まってきている。

また、季節の野菜などをとり入れて、正月料理、ひな祭りの料理、夏向きの料理など一年間の節目の行事に因んだ料理を作るとき、そこに気持ちのゆとりと喜びが生まれてくる。

このサークルには、そんなお料理大好き人間が集まっている。皆、

純粋に食べることが大好きな人ばかりだ。それに、講師の上田先生の楽しく、きめ細かな指導が魅力で、なごやかな雰囲気のうちにおいしい料理ができてしまう。

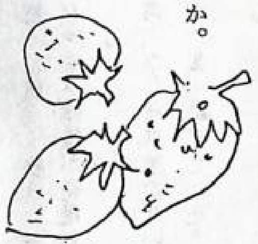
テーブルを囲んで、出来上がったものを食べながら、「おいしい」「家に帰って作ろう」と、声がとびかう。家族が「おいしい。おいしい」と食べてくれる光景が目に浮んで何となくうれしくなる。

今は、お金さえ出せば、調理済みの食品やきれいなお菓子がいくらでも手に入る。しかし、少しぐらい見た目が悪くても、やはり手造りの栄養のある食事を用意したいと思う。料理とはそんなものだ。そこには親子の断絶などなく、まさに一石二鳥である。だからこそ、私達は「お料理大好き！」宣言をしたい。

このサークルの人達は、上田先生はじめ皆いい人ばかりだ。おいしいものを食べて、心もおだやかになるのかもしれない。

最近は、社会の様子も変化し、男性も料理をする機会が増えているという。これからは主婦のみならず、男性の方々にも料理に関心をもっていただきたいと思う。

皆さん、私達と一緒に「お料理大好き！」宣言をしてみませんか。



洋裁サークル（すみれ）

小寺敏子

この洋裁のサークルは、一年を通じて季節に合わせた衣類、小物を製作します。

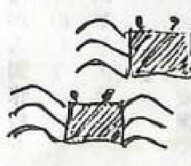
自分の好みに合わせ、流行も多少取り入れ好きな色、柄を自由に選び、自分だけの服を作っています。特別むずかしいことを習っているわけではなく、だれでもやってみたいと思う気持ちがあればできることです。

自分で縫って、自分で着る楽しみから子供に着せる楽しみ、友人に手作りのプレゼントをする楽しみもあります。

同じ趣味を持つ人達がこれだけ集っているのですから、洋裁についての情報交換も豊富で、こんなこともなるほどと、とてもにぎやかです。

指導してくださる松浦先生は、基本的なことから応用まで、また個人に合ったデザインまでと細かく、丁寧な教え方をして下さいます。

少しでも、興味のある方は、ぜひ一度、サークルをのぞいてみてください。とても楽しい雰囲気です。



深久会とのふれ合い

松本ふさ子

また、月が変わりました。私は、カレンダーに、三日、十日、十[illegible]せてくれるやすらぎの一日でございます。

私が、この公民館でお茶のお稽古を始めて早、二年の歳月がすぎました。温情溢れる先生のご指導のもとによき友にめぐり合い、幸せいっぱいでございます。

一服のお茶を呑む、お手前のお稽古をする、ここには礼儀もあります。落ちついた閑寂もあります。物の美しさ、心の美しさ。

最も立居振舞に気をくばらねばならないお茶の世界ではありますが、腰の曲った私にはとてもむずかしいことです。

「決して無理をなさらないでね……。立てなければ手をついてよろしいですよ」

と、先生は、やさしく指導して下さいます。

お手前の順序、動作、客としての礼儀作法等ただお手前を覚えることが精一ぱいの私ではございますが、遅まきながらも少しずつ茶道の深さを知り、歴史を学び、美の鑑賞にも目を向ける余裕を持ちたいと願っています。

「松本さん、私達が片付けますから、大丈夫ですか」

と、親切にいたわって下さるお仲間の方々に対し、時々、年老いた自分の存在が、皆様の重荷になっているのではないかと考えることもありますが、学ぶということは、自分に素直になることだといい聞かせております。

今日の日のために、会場の床の間に、先生の生けてくださった桃の花と白い椿をいただいて、今日も心のやすらぎを胸一ぱいに感じつつ家路に急ぐ私です。

[illegible]

風間富貴子

フォークダンスいちはらも公民館にお世話になって、今年で満十年を迎えることができました。五月には、姉妹サークルの高洲、銚子、三和と合同で、十周年記念パーティを計画中です。

フォークダンスの説明をしますと、フォークダンスは普通、皆さんが思っているよりはるかにたくさんの踊りがあって、何年踊っていても踊りきれない程です。

ラウンドダンスは、現在アメリカが主流で、社交ダンスと全く同じおどりで、全員がシークセンス通りに踊るおどりです。

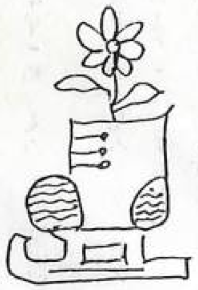
一年のうち、二、三回は市原を飛び出して、RDダンスのパーティ、クリスマスフォークダンスパーティと、一日楽しく華やかに踊ってきます。

皆さん、ご一緒に踊ってみませんか。

昭和六十一年度をふりかえって

書道サークルⅡ　神崎三恵子

私達のサークル書道Ⅱは、六十一年度生れのホッカホッカのサークルですから、やること、なすことがとっても新鮮で興味深いものでした。中でも文化祭は、日頃の私達の練習の成果をみなさんに見ていただけるという楽しみと一緒に、サークルが一丸となるきっかけとなる行事でした。一つの作品をみんなが一生懸命書き上げ、展



示するまでの数々の話し合い、一つの事に向かってみんなが少しずつ自分自身を出せたような気もします。

また、原啓子先生を中心に月一回の墨華会への出品は、ただ書くというだけではなく、自分への挑戦、作品の向上のためにとっても楽しいことの一つになりました。そして、何よりも字の下手だった私が、字を書くことが好きになりました。こんなすてきなことってそうあるものじゃないと思います。

また、書道の勉強ばかりでなく、家庭のこと、子育てのことなど、みな楽しくお話し合いをしております。このサークルの輪が先生を中心にしてもっと広がることを願っております。

音楽と広い心

アコディオン第二サークル　武田敏郎

私と音楽との出会いは、小学校時代に始まる。昭和の初期、JOAK、現在のNHKだ。当時国民型ラジオから流れていた音楽番組の中で、国民歌謡何となく耳にもしたが、親しみが増して日常生活には切り離せないものになった。

思い起せば、戦前、戦中、戦後、暗い世代に生きた人々は、平和な灯を期待したであろう。時代の移り変わりは、180度の転換をなし、音楽活動に取り組んでいる分野の方々も、日夜躍進を続け、現在の

聞いている。そして今、音楽を愛する人々は、心の広い方々の集りであることも知った。

当市にやすらぎのマイホームを求め得た私にとって、常日頃、アコが弾きたいと念願していたのが現実のものとなり、チャンスをつかむことができた。あとは、すべて実行に移すのみ、自分の忍耐力を新に見直す時期でもあり決断する気になった。先ずは、楽器であるが、私にとって大きな出費であるのは間違いないがあきらめるわけにはゆかない。そこで先生に相談の結果、紹介先のお店に出向き、やっと我がものにしたのである。

当時、東京から楽器を背負って帰った私の顔を見るなり、愚妻は、嬉しさがこぼれていたと苦笑する。これより先は、楽器をかかえての楽しさと苦しさの連続だが、石の上にも三年、笑えば若くなるの感じで三分の二が過ぎ、ゆきとどいた教室でレッスンを重ねる度に音楽とは不思議な効果を示すものだと感心した次第。

私達サークルには、希望に満ちた幼老若男女、人の心を打つ響きがあるだろうが、人生、生きるためには、さけて通れない喜怒哀楽と重り合いながら、先生と共に地域社会に向かって貢献出来る様一生懸命積極性を生かして焦らず熱意を燃やしているところである。

今年は卯年、隣り合せに辰となり、えとにあやかって、「うだつ」が上がればと願っている。

市原女声コーラス

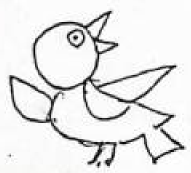
「人間は感情の動物」と言われますが、うれしい時、悲しい時、歌はよく人の心を表してくれます。喜び、悲しみ、時には怒りさえも、美しい音楽として表現できるということは、人間だけに与えられた天の贈り物でしょう。しかも一人ではなく、複数の人々の心のつながりの上に合唱できたら本当にすばらしいことです。

私共、市原女声コーラスは、辰巳台の地に20年前に誕生し、鈴木先生の熱心なご指導のもとに活動を続けてきました。

昨年は、おかげ様で20周年記念演奏会を開催することができました。歌を通してよりよい人間関係を求める方、どうぞいらっしゃってください。

ふれあい
「中国華南漓江下りの船上にて」

八幡民踊会　西口奈津子



桂花「きんもくせい」の香りが残っていた桂林から帰って三か月余り過ぎた今、二千キロ離れた中国から黄砂が日本の空を覆ったとのニュースを聞き、熱い気持ちを中国に馳せました。

漓江下りの船上で知り合った売店の親娘の姿が目に浮び、別れに戴いた「日中友好」の小さなバッジは、掛け替えのない私の宝物です。

見える奇峰鎮を進み点在する集落、水牛の群れが水面に映り幽玄の世界に入ったよう、旅での解放感は外人も日本人も壁がない。岸辺に向かってカメラを向ければ、欄干にいる人達は、場所を譲ってくれます。

少女は、私の肩に手を廻して写真を撮るというのです。父親がシャッターを押しました。私の娘のように名前も判らぬ少女、も、一度会いたい。

そして、ツアーでご一緒の皆さんとも。

南画のなかの数時間中国の親娘との出会い。あれは夢の中の出来事ではなかったかと、生涯忘れられない思いです。

スマイルが終わって

山辺雅子

私と公民館との関わりは、七年以上になります。思えば、三才と乳飲み児とを連れての参加は、ちょっと気違い沙汰だったでしょう。しかし、その頃の私は、大まじめで必死でした。子供を育てるには、自分が変わらねばと、真剣に考えたからでした。そして、人との関わりの中から多くを学び、私自身が変わりました。

市原に越してきたのは今から四年半前です。すぐに公民館を捜し出し、家庭教育学級で一年間過ごして後、このスマイルに参加させていただきました。メンバーは、自分より年上の方ばかりでした。学校のこと、子供のこと、自分のこと、家族のこと、老いについて等、身近かなことを話題にしました。私は自論をぶっつけたり、他人のお話を聞いたりして、自分の考えの甘さを反省したり、自信を得たり、新しい事を知ったりしました。

ところで、講演会では、体験し得ない多くのことを知ることができ、それは方向を示したり、頭の中の本棚にしまっておく知識となりました。その示された方向や知識が、自分の日常と結びついてこそ活用されるのであり、その時初めて、本当の「学び」が成立したといえると思うのです。

本当に「学ぶ」という事は、生き方が変わる程のものだと思います。そして、スマイルは、本当に「学ぶ」ことのできる場でした。このスマイルが、人数が少ないということで公民館での活動ができなくなりましたことを残念に思います。

国立公民館における「学び」の活動は、数冊の本（伊藤雅子著）に著されています。公民館が単なる「場所」としてあるのでなく、地域の住民のためのものとして発展されますことを、願っております。

「先ず、心の窓は、早起きでー」

名無し乃もぐり

わたしは、いたって早起き人間だ。早起きの習慣は一生の財産というが、未だに、貧乏・暇なし・稼ぎなしである。

朝の四時頃になると、きまって目がさめる。二階に寝ている皆の者が、目覚めぬようにと、忍びの術で布団をたたんで、押入れに「ポイッ。」と……。

時には、天窓が、平生より明るく思われることがあるが、こんな時には、何気なく、雨戸を開けてみるとどうだろう？……。

そこには、スウゴオク、でっかいまんまるお月さんが顔を出していることがあるのだ。

わたしは、暫く息をのんだあと、「ゆっくり」「ゆっくり」「ゆっくり」と深呼吸を続け、目を皿のようにし、またたきもせずに、見とれてしまう……。

そのうちに、心の中が充実してきて、清らかな空気を、胸いっぱい吸い込む……。

そう、こう、しているうちに、東の空が次第に明るくなり、今迄のまんまるお月さんが、次第次第に生気をなくし、視界から薄れていくのだ。

ここで、わたしは、俄かに変心、転回「今度は、いよいよ日の出が主役だよッ！」と、にんまり……。なんだって、黎明の空の輝きは、月光にもまして最高である。

その明るさは、最初は、黄金の、しとねを想わせ、それから、次々と、これに鮮明な色彩を加え、輝きを増してくる。

そのうちに、主役である太陽が「しず」「しず」と顔を出し昇る。である。

わたしは、朝日に心踊って、燃えにもえ……「吾れここに在り！」という気持ちで、まるで地球を征服したような快感にひたるのだ。

そして、「おおいッ！」「このまんまー・時間よー・止まれ！」と……号令したくなる。

人間、若かりし頃は、誰でも種々雑多な感動や感傷にひたることもできるが、このわたしのように年をとってくると、「童心」にかえり感動する光景にひたることは、「とん！」と少なくなってきている。

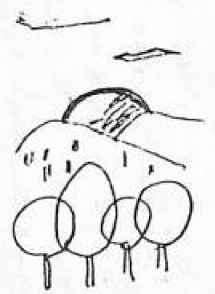
日毎、日毎に気力が褪せてきて、夜は、早々に「ダウン」してしまう。

わたしは、まずまず……「有明け」と「日の出」と「落陽」くらいのもので、この大自然の眺めは、「いつ見ても見あきない！」

「いつ、見ても、新鮮で雄大である！」

この自然のすばらしさを、こうして無償で提供してもらえるなんて！……。

これは、早起きのわたしにとっては、精神的な修養の一端でもあり、これまさしく「早起きの役得」と、いえるだろう……。



五井六三六八ー一四

越智治夫

私は現在、色々なサークルを通じて公民館にお世話になり、ご厄介になっている。今回、「ちちの木俳句サークル」（ちちの木とは、銀杏の別名で八幡にちなみ先生が命名した）と英語読書会のリーダーから、何故か大正一ケタ生れ、最低学歴の私に「ふれあい」について一文書くよう依頼された。

早速、「ふれあい」の定義を調べにかかったが、我が家の辞書（昭和二十九年、三省堂発行、辞海）には、「なれあい」「つきあい」は載っているが「ふれあい」は載っていなかった。勿論、古語辞典にも載っていなかった。最近の中学生向国語辞典には、「互にふれあうこと」「気持ちが通じること」、和英辞典には「ミーチング　オブ　マインヅ」「先生と生徒の間柄」と記載されていたが、何れも説明不足の感があり納得がいかないので、余り以前ではないと思われる「ふれあい」の語源を把握すべく、あれこれと追跡を試みたが確たるものを得ることができなかった。

たまたま、ある先生の講話の中から「啐啄同時同処」という古語のあることを知った。

「啐」（そつ）とは、卵の殻の中でひな鳥が鳴く声を、「啄」（たく）とは、母鳥が外から殻をかむことで、「機を得た母子が相呼応すること」「得がたい好機」ということである。親子、兄弟姉妹、師弟、朋友等、あらゆる人と人が互に教え、教えられ、互に努力することを示唆しており、実に「ふれあい」にピッタリの語句と思った。

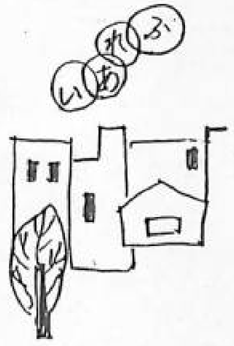
私は、化学工業関係の企業に三十八年間勤務後、数年前に退職し

現在は毎日が日曜日の身分である。「広報いちはら」に、眼がよく通るようになったのもこの頃からである。有り余る余暇を埋め生かすため、公民館は勿論のこと、公民館以外のサークルにも加入させて頂いた。卓球、陶芸、俳句、英語読書、成人講座、要約筆記、手話等々。年令だけは一人前以上であるが、経験もなく、学歴も低く、生来無器用で鈍なため、サークルの足を引っぱることがしばしばであったが、諸先生、リーダー及び先輩に支え励まされて現在に至っている。卓球には、愚息共々参加して快い汗を流している。

サークルの構成は、老若、男女、学歴、職業、境遇等、種々さまざまであるが、私は、またと得がたい多くの友人を得ることができた。サークルは人の輪と和による「ふれあい」の源泉である。サークルには、テストもなければ成績が悪くても生活を脅すような事態もないので、「ふれあい」が更に増大されている。

私も「ボケず、寝こまず」を目標に些かなりとも教養が身につくようにサークルを続けていきたい。

公民館は、市民相互の「ふれあい」を培うための絶好の場といっても過言ではない。どうかいつまでも市民によりよい「ふれあい」の場を提供してくださるようお願いしたい。



ひばり読書会

『詩の心を吟ずる』ことに思う

詩吟（国仁会）　土　岐　喜　和　子

先日知人の手みやげに、上品な和菓子を頂戴致しました。『栗かのこ』の様なもので、一つずつがきれいな和紙につつまれており、その裏に、

古里の栗もくるみも　うれたれば、
お前を思うと　母の文くる。

と云う和歌が書かれておりました。

誰でも山里の情景が眼前にうかび、子を思う母の姿を、ほのぼのとした暖かさで思いうかべるのではないでしょうか。それがふさわしい菓子であり包装でした。

でも――。その歌は本当はそんなに甘いものではなかったのです。たまたま私共、詩吟のサークルで一ヶ月程前、この歌の稽古したばかりだったのです。

それは松口月城作『母』と題する詩の中に出てくる歌だったのです。

作者、松口月城はその詩を作るに当って、二、三ヶ所の刑務所を尋ね、非行少年に会い彼等の作品、詩や短歌を見せてもらい、少年等の『罪を悔い、肉親のなげきを思い、そしてなほ、はげまし、力づけてくれる母の、無限の愛に涙する姿』を詠み、最後にその中の一人の少年のよんだ短歌、『ふるさとの栗もくるみも………』をのせてあったのです。ですからこの歌を吟ずる時は、その少年の思いを詠い入れねばならぬわけです。

しかし詩の心を吟ずるのはむずかしいことです。さいわい、指導して下さる先生にめぐまれ、すばらしい表現力と力量をおもちの先生ですからその吟を聴いていると、その情感が――自然に涙するほど感動でつたわって参ります。

私共などはまだまだ声を出すことにのみ夢中で力強い詩も、悲しい詩も、大声をはりあげてしまうのですが、それでもその詩の中に没頭出来ることのたのしみ、それが詩吟の大きな魅力でしょうか。

ストレスをふき飛ばしたい時は力強い元気な詩をみつけ、センチメンタルな乙女の頃の様な思いにひたりたい時は、藤村の『小諸なる古城のほとり』を一人で吟じてみる。

そんなことがたいした上達はしなくとも、自分達の生活の中で心の『いこいの場』になっている様に思えて、今だ詩吟のサークルからぬけだすことが出来ないのです。

アイラブ・碁

八幡囲碁同好会　金　巻　博　司

私達のサークルの大半は、苦しい時代の中で子育ても終って、ホッとしている囲碁愛好者で、『和』をモットーとしている男女の集りです。

不思議な事に、石を持つ時、打つ時、其の人の性格が出るのも面白い事だと思います。お弁当の時間には持参の『おむすび』を分けあったり、家庭の悩み事や、世間話しなど色々と、ワイワイ話に花を咲かせている姿をそばで見ていても実に楽しいもので、一緒に笑ってしまうありさまです。これもコミュニケーションの一つです。

話の中で何時も話題にのぼるのは、病気とボケる事ですが、そんな時、『囲碁を愛する者にはボケはなし』と、誰かが言った。私もその通りだと思っています。

一月下旬に新春囲碁旅行があり、修善寺に行った時、修禅寺に立寄りました。受付を見ると、交通安全祈願料千円をはじめ、たくさ

ひばり読書会

砂の女

安部公房著

白鳥治子

ストーリーは、しごく簡単なものである。昆虫採集のため砂丘を訪れた男が、砂の中に閉じこめられてしまう。その砂は、したたかな生物のように変化自在であり、巨大な壁となり男の脱出の前に立ち塞るのであった。何回もトライしてみたが、すべて空しい失敗であった。この脱出不可能という絶望の中から男は、新たな生きがいを得るのであった。

以上のような内容であるが、読んでいても、なぜ？　どうして？　不可解、不合理が頭の中に拡がって、何が何だかわからなくなってしまう。この文学を、どこから、どのような角度から切り崩さなくてはいけないのかという事がわからない。

作者は、敗戦を境とする愚劣な社会に対して虚無的になり、その出口を求めたのが「リルケ」であるという。リルケを読む事により、何かを捕らえられるかと思い、昔、斜め読みをした彼の「マルテの手記」を、もう一度読んでみた。「僕はまず、見る事から学んでゆくつもりだ。何のせいか知らないが、すべてのものが僕の心の底に深く沈んで行く。ふだんは、そこが行きづまりになる所でも、決して止まらないのである。僕には、僕の知らない奥底があるのだ。すべてのものが、今その知らない奥底に流れ落ちて行く。そこでどんな事が起るのか、一寸もわからない。」

リルケは、時代の不安と、その時代の中に、うち捨てられた居場所のない孤独と苦悩を痛切に味った詩人である。漂泊の生涯の中で、詩作を通して人間存在の究極の意義を、見出そうとしたのであった。作者の心境は、リルケに似たものがある。

これを「砂の女」の突破口として読んでみた。だが依然として、私も砂の中から脱けられない。なぜ？　又また、大きな疑問につき当たり、本を投げ出してしまう。

今までに、何冊かの本を読んだのに、なぜこれが解読出来ないのかしら。悲しみの中に突然、私の目前に「真水」が湧出した。それは、今まで本を読んでいたような、常識的な視点ではいけなかったのだ。具象画を見馴れている目で、抽象画（砂の女）を見た時の、私の視点のバランスが、崩れてしまっている事に気付いたのだ。改めて読む。

私は完全に作者のテクニックに、まきこまれていたのだ。戦後のアバンギャルド文学を、私はオーソドックスな読み方をしたのであった。だからキリキリ舞をさせられたのである。芸術の既成観念を否定し、新しいものを創造する革新的な作品に対して、その中に、とっぽりと入りこんで読まなくてはいけなかったのだ。

砂丘の蟻地獄のような穴の中に閉じこめられ、脱出不可能と知ると、教養もプライドも捨てる。やがて八方塞がりの中から、それを乗りきれる可能性を発見する。

作者の「エッセイ集」に、砂漠の砂について「一寸風が出ると、空気のように自分のまわりを囲む砂は、いらだたしい気分になり不快であるが、同時にいつでも何となく浮き浮きした気分になる」と書いてあるが、「砂の女」は、砂に対して作者が、大きな魅力を持っている事がわかる。

作者にとって、砂と壁は同質のものである。壁は人間の前に立塞がるが、それが砂と同質であるから、壁に遮ぎられた内側と外側は、自由自在な変化の対応性がある事を、作者は発見したのである。

現代作家の殆どが、この壁につき当っているのだ。それはいわゆ

る「ブランク」というものではなく、大きな時代の変化に対して、自己のアイデンチチイが厚い壁となっていたのである。この壁さえ突破すれば、そこには新鮮で自由な世界があったのだ。

なぜ？　どうしての繰返しであったが、砂と同質の壁を突破した事によって、私もこの本の心が、わかったような気がしてくる。

最初は、カフカ文学のように絶望的であったが、砂の流動に対して、ねばり強く探求し、どんどん物語を展開して行く作者の技法に対して、驚きと敬意をもった。

私にとって解読する事の難かしさを、泌々と教えてくれた作品であると同時に、「読んだ」のではなく「読めた」という所までの勉強を怠ってはいけないのだと、大いに反省させられた「砂の女」であった。

吉村昭の「羆嵐」を読んで

猪　野　春　枝

「羆嵐」は、作者が、大正四年十二月九日、北海道でおきた日本獣害史上最大の惨事といわれる苫前羆事件をもとに書いたものである。

北海道北西部の天塩国苫前郡苫前村の山間部六線沢に、人々が集団移住してきて四年目のことである。十一月下旬、下流の家で二度にわたって羆にトウキビを食い荒された。二度目に被害にあった時、助力をたのんだ老人は、極めて稀だが、体の大きな羆が、自分に合った穴を見つけられず、降雪期を迎えてからも雪の中を餌を求めて彷徨する。穴持たずは気が荒いと云ったが、その後羆が姿を見せないので遅い冬眠に入ったのだろうと隣の三毛別開拓に銃を肩に帰って行った。人々もそれ程に身の危険を感じなかった。

溪流が雪におおわれ始めた十二月九日、村では男達が、朝から冬期に仮設される氷橋の協同作業を行っていた。お昼頃突然事件が起きた。そこより三キロ程離れた家で、子供が殺害され、妻がさらわれた。だが最初は、羆のしわざとは思わなかった。しかし破れた窓にこびりついた長い髪を根から引き抜いた異様な力は、人間のものでは有得なかった。

彼等は、役場や近隣部落に救援を求めた。三毛別の区長が中心になり、五挺の銃と五十人余りの男達で羆を追ったが、その巨大さに人々はおびえ、銃は不発に終った。翌日、さらわれた遺体が山中で見つかったが、それは余りにも無残な肉体の切端だった。その夜、お通夜をしていたこの家と下の家がおそわれ、下の家の四名が死に三名が重傷を負った。人々は家の中で羆が骨をかみくだく音を聞いた。二日で死者は六人になった。この様な苛酷な自然の中では人間も単なる餌であった。

結局、羆撃ち専門の老練な猟師、山岡銀四郎によって羆は射殺された。

この本を読んだ時、羆の恐ろしさを改めて感じ背すじの寒くなるのを感じた。

「誰が悪いのでもない」

萩　原　葉　子　著

白　土　貞　子

図書館でこの本の題名を見た時は、作者の一連のものを読んでいただけに、「時の流れ」を感じました。

読書会で「蕁麻の家」「閉された庭」を又「父萩原朔太郎」「天上の花」で、両親、祖母の事、結婚から離婚に至るまでを、文筆家としての道をアドバイスをしてくれた三好達治の事を読み、そしてこの本は63才になった哀れな妹への一冊であります。

5才の時高熱のため智恵遅れとなり、母のエゴとはいえこの宿命を背負った妹、食べる事と嘘をつく事、他に何の楽しみなく人生を過ごして来た妹に対して、本人が悪いのではない、神の悪戯なのか、と云い切るまでには永い才月を感じ葛藤の日々を感じました。

又8才の時別れた母が25年ぶりで戻って来て、我儘一杯の暮らしにほとほと手をやくが79才で見送り、後日にノートに

　しみじみと我子の顔を見つめつつ
　ゆるしてくれよと詫びる苦しさ
　母なき子らよくも生きてゐて
　くれしこと思いて胸せまり来ぬ

とあり、この母にも母性愛があったかと驚く。

母と子、姉と妹、血のつながり故に苦しみ、悲しみ、姉としての責任か母を見送り妹を見守る作者の愛しさと強さを感じました。

人は過ぎてしまえば皆、清く、「自然」に返って行くものだとつくづく思いました。

恍惚の人を読んで

吉　水　正　子

テレビの「花いちもんめ」を見て、本箱のすみに閉まっている「恍惚の人」を又読んで見たくなった。此の本は、亡くなった有吉佐和子の特別作品で、恍惚の時期の発端から結末までを丹念にたどったものである。

義母が倒れ、「危篤」で九州に帰り交対で看病していた時、求めた本でした。

「科学の進歩は人間の壽命を延ばしたが、其れによって派生した事態は深刻である。私は此れ以上年をとってからでは、もう自分ではこうした小説は書けなかっただろう。」と作者は言っているが、元気だったら、まだまだ多く書いてほしかった。

平和な家庭に義父の恍惚により、色々な問題がおこる。義母が亡くなったショックで、実の息子、娘も忘れてしまい、何時も食事、身の廻りの世話をしてくれる息子の嫁、昭子だけしか、おぼえていない。

昭子は、務めながら良く義父のめんどうを見るが、毎日の事なので大へんである。もう少し夫の信利も手伝ったらと、昭子の肩をもちたくなる。

どこの家庭でも一番大へんなのは、嫁である。私の廻りの友達も、ほとんど老人をかゝえている。

九州の義母も床に伏して、今年で十四年目を迎える。十一年間は自宅で看ていたけど、もう看病にも限界がある。三年前から病院のお世話になっているので、何時呼出しが来るか分からない毎日。

いくつかの管を通して、眠っている母を見ると、可愛想で……。

信利の「親爺を見近に眺めていると、まるで蟇の油が、浸み出る様な気がする。やりきれない。」と言っている言葉が、充分に分る様な気がする。

だれだってボケや寝たきりには、なりたくはないが、人間の運命はどうする事も出来ない。

何度読んでも考えさせられる本でした。

芸者　苦闘の半生涯

野　城　千　鶴

かって私が勤めていた会社は、蓮池という花街の近くにあり、会社の隣は検番で仕事をしていると、三味線に合わせて練習する芸者さんの歌声が毎日聞こえたものです。学校を終えたばかりの私は最初芸者さんは宴席で歌や踊りを披露する、美しい女の人位にしか思っていませんでした。その内に映画、小説等で大要の事は知りましたが、作者自身が経験者というこの本は、一節一節切実に迫ってきます。人間生れてから生きて行く道は、一人一人異りますが、作者は私生児として生れ、他人の手によって育てられ、物心もつかない頃から、子守として他人の家でひもじさと人間の恐ろしさだけを知らされ、十二才で芸者に売られ、その道を歩んでいく。十二才といえば普通なら親の元でぬくぬくと育っていく時期である。芸者の世界は上べは御馳走を食べ、美しい着物を着、男性の相手をして歌い踊る結構な身分に見えるが、全く自由がなく、置屋の経営者「お母さん」の想像を絶する厳しさ、女同士の争い、話題をつかむ為の努力と気配りの毎日である事を彼女は書いています。

人間が恐ろしいと思っていた彼女も色んな人に接し、その世界に適した生き方を体得していく。

本文の中で心から私が悲しいと思ったのは、弟の為の彼女の愛と献身が無に帰した事である。自分が字が書けなくて苦労したのでと弟を学校にあげ、将来二人でマーケットを始めようという希望を持って芸者を止め、終戦後の混乱の中で少しずつ希望に近づきつつある矢先に腸結核となった弟が姉にすまないと自殺する。命をかけて愛した弟の死にこれ迄男性を絶って来たのに。再び酒にひたる作者の姿はあまりにも忍びない。

自殺しようとして助けられた老人に「人の為に尽してごらん」と云われて我に返り立ち直って子供の為に童話を書き、好意による子守役として第二の人生に強く踏み出していく彼女の真の勇気に心より拍手を送りたい。

「親の無責任から罪のかたまりの様にこの世に生れ出た者がどんなにかみじめな気持で一生を送らなければならないか私の様な人生がぜったいに繰返されない様に叫びたい気持でいっぱいです。」とこの事が作者は一番訴えたかったのだろうと思われる。現在若い人達が安易に性に走りその結果、ロッカー、ごみ箱にえい児の死体を捨てるという惨事を、ニュースで知りますがこの作者の叫びを共に訴えたい。

杜子春

磯　部　紀　代　子

「心配をおしでない。私達はどうなってもお前さへ幸せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰っても、言いたくないことは黙って御出で」

と母親の声の台詞を、十二才になったばかりの私は毎晩一生懸命練習していました。

小学校最後の学芸会で、舞台に立つのは男子だけ、ただ一人の女子として声だけの出演でしたが、劇中最高の見せ場のため、教えて下さる先生の熱心さに子供心にも応えたいと必死でした。昭和二十八年故郷のM町で公会堂が超満員だったのを今でもなつかしく想い出します。

年を重ねて再び味わいながら読んでみて、

「人間は皆薄情です」

「人間というものに愛想がつさたのです」

と語り、安らかに暮して行くには

「何になっても人間らしい、正直な暮しをするつもりです」

と杜子春に言わせています。今、地球上の国々が政治、経済、平和等大きな波となって揺れ続き、その渦中にあるとさえ考えられる日本に住み、人がどう生きるべきか思いを新たにしなければいけないと心配している現在、杜子春を書いた芥川龍之介の非凡さに目をみはるばかりです。

短編小説のあらゆる試みをした著者には、「密柑」という素朴な人間性に共感を覚える小品もあり、私は大好きです。

又俳名を「我鬼」と号し、自殺の前日、前書き「自嘲」として、

水洟や鼻の先だけ暮れ残る

と短冊にしたためて主治医に遺したのは、何ともやるせなく、心中を察して余りあり、言葉がありません。

痨咳の頬美しや冬帽子

の句もありますが、昭和二年四月七日、芥川と一緒に死ぬ約束をしていた平松麻素子が幼友達の芥川の妻に告げたため未遂に終わり、麻素子はその後結核の為清瀬療養所に入り没したそうですが、病身の為独身、句作、ろう纈染などをする聡明な女性で柳原白蓮とも親しかった麻素子の

竹を伐る音たそがれて時雨来る

の句も心に残ります。芥川の詩に

時雨

西の田の面にふる時雨
東に澄める町の空
二つ心のすべなさは
人間のみと思ひきや

ともあるように、複雑な心の奥底は誰にもわからず、真実は奥津城に静かに安らかに眠っているばかりのようです。

おもえば短い三十六年の生涯を、こみいった大家族制度の家を否定することなく、そのままひきうけて家と自我との間に巧みに平衡をとりながら、同時に作家として生きた充実した一生であったように、全集の頁をめくるたびに想像しております。

「大病院が震える日」

西　村　澄　子

門田泰明著。母を癌でなくし遺骨が七色に彩られているのを見た驚き。医師や看護婦が献身的に治療にあたる姿に感動した。この体験と、際限なく巨大化していく医療の電化時代への警告をこめて書かれたそうである。

大病院を配下におさめるべく、辣腕をふるう誠心会理事長。現台宗八郎。

営利主義に、立ち向う消化器外科部長、村瀬信彦。実子でありながら、医療機関は、できるだけ質素であるべきだとの考えのため、医療より経営を優先させる院長と、ことごとく対立することになる。

次期院長とされている異母弟、現台尚治。脳外科医としては、有能とは云えず、酒に溺れる生活のため、若手権威として名を売っている信彦とでは、医師としてのレベルに格段の差がある。そのため兄に対するコンプレックスが強く、副院長と追落しをはかる。

激しい震動が病院を襲った直後、院長が、クモ膜下出血で倒れる。誠心会を早く、親父に代って支配したい尚治は、手術もせず重度身障者病棟に移してしまう。

奇跡的に、麻痺は残ったが、頭痛から解放され、今まで忘れていた季節を感じるようになる。車椅子で病室を廻り乍ら、表情にかつてなかった変化が、生じるようになる。

緊急理事会を招集し、重度身障者用の機能回復センターの建設。そして気の毒な人達に開放する。センター内に難病治療研究所を設ける。院長を辞任し、後任に村瀬信彦を指名する。この三つのテーマは採決される。

院長も病に倒れなければ、ワンマン路線は変わることなくつゞいていたであろう。

この間の新聞にも、何人かの外科医が、自分が患者の立場になり、はじめて不便なこと、苦痛な面など分り、改善されたとのことです。

尚治。副院長は、停電で手術失敗に終らせようと企らむが、自分達が、暗闇の中マンホールに落ちてしまう。

現代の医療器械は高度に電化されたが、巨大地震がおそえば、自家発電も作動しなくなる。その場合を考えると大パニックが生じるでしょう。各病院がしんけんにこの問題と、取りくんでもらいたい。

医師が完治した患者を送り出す時は、いくど経験しても、体が震えるほど感激に襲われる。全力を尽しても患者を生かせることが、できなかった時、医学の限界とか、患者の天命とか、そんな言葉ですまされない、怒りに似た悲しみを感じる。この信彦の様な理想的な恰好のいい（これは別として）医師が多数であろう事を期待する。

吉村昭著〃冷い夏・熱い夏〃

西村妙子

一身同体ともいうべき弟が死んだ、癌であった。その弟の発病から、死に至るまでを、弟を取り巻く兄姉妹、家族などを通して、悲壮な決意で見守る著者の心情がよく描かれている。近い内、必ず来る〝死〟と真正面から向き合って、お寺の手配や葬儀の準備を、何故か沈着冷静に進めている自分を、もう一人の自分が責めている様は、どん底につき落された程の悲しみの中でさえ、食事をしなければならないという現実におかれた時の自分にも似てひどく悲しかった。又、病床にあっても尚、囲りに気を使う弟の気持を思う時、私の心はやはり、癌で逝った友の姿に重なってしまう。あと半年は持つまいと言われた頃、なるべく容態のいい内に、彼女が可愛がってくれた我が家の娘を連れて、見舞った。自分の病を、癌と知っていた彼女は、悶々と眠れぬ夜が続いていたらしい、〝夜、眠れなくて〟と話す横から、当時まだ小学生だった娘は〝ひつじが一匹、ひつじが二匹と、数えてみるといいョ〟と、幼ない発言!! その時、彼女は〝本当にそうだったね。今夜から、そうしてみるわね、ありがとう〟と優しく言ったのである。思い出すたびに、今も胸が痛い。そして最後まで囲りを気使って、それはかえって皆んなを悲しくさせた。又、時々泊りに来る彼女の一人息子は、〝癌が直る薬が出来るまで、お母さんを冷凍にして冷蔵庫にしまっておきたい〟と言った。やはり同時、小学生だった彼も、今年は大学受験の年になった。素直に成長してくれたと、御主人からの賀状にあった。これから先はもう、彼の行く道は、必ずや平坦であれといつも祈る。言葉では語り尽くせない程壮絶な死であった。三十八歳であった。

著者も親愛なる弟を失って身をけずる想いで、この作品を書いたであろう。以前に読んだ「破船」の様な、シビアな感じとは、まるで違った、根底に愛が見える。せつなくもやさしい私小説であった。

女人吉屋信子を読んで

上田霜枝

某日この本の作者である吉武輝子さんの講演会に出席しました。若い身なりと進歩的な考えに、年令もあまり離れていない私は圧倒されたものです。その吉武輝子さんの先輩でもある吉屋信子さんを女性として見る目に、興味をもっておりましたところ、読書会で読む機会を得ました。

戦中に少女時代を過した私と同年配の人の殆どが、吉屋信子の小説にあこがれ、なかば隠れるようにして読んだものです。蕗屋紅児の挿絵と共に読むその小説は、きびしい時代の乙女の夢とわづかな安らぎでもあった。と当時の若い純情をなつかしく思います。

文中に「娘時代にどんなに自分の人生に夢を描いていようとも、ひとたび嫁いでしまうとそれまですべての人生の有り様を捨て去り家風に従って生きねばならなかった。己を無にしてこそ嫁と呼ばれる女の浮ぶ瀬があった」とあります、全く実感です。私も大変封建的な県の出身で年若く何のためらいもなく、親のすゝめるままに、長男に嫁ぎ戸主（家長）である舅、姑に気に入られるべく台所のすみを這ずり廻っていた日をなつかしく思います。又「実家とさえ、みだりに往き来することが許されなかった嫁と呼ばれる女に娘時代の女友だちと心ゆくまでつき合う自由などあろうはずがなかった」とあります。その通りで、実家の親が病気になって呉れないかとか、実家に事変が起らないかとか、真剣に考へた幼稚さをいとほしくさえ思うことがあります。しかし時代の流れにつれて反撥をしながらも、ようやく自分達の時代が来た頃は、ずるずると身についてしまって、自分が姑となって時代の変った事をしっかり思い知る腑甲斐なさを身をもって感じます。

自分の信念を貫き通して女性が男性と対等に生きるには結婚も出来なかったでしょうし、同性愛の変見も同情に変えるものがあったと思います。今始めてあのロマンの小説がどんな生きざまの中から生れたのかわかり、書くことへの執念と父権時代への抵抗の強さの中から書かれたものであることがわかりました。そして、「女性が女性にやさしくなければ」と書かれていたのが印象に残りました。

「父・萩原朔太郎」を読んで

菊田浩子

十二月の例会は萩原葉子の「閉ざされた庭」が課題本であった。私はこの作者のをほとんど読んでいなかったので、この本の書かれた背景を知る為に「蕁草の家」をはじめ何冊かのエッセーを読んだ。「父・萩原朔太郎」もその中の一冊である。

「蕁草の家」では祖母にも疎んじられ、父親にもほとんど放っておかれて、可愛がられることもなかった気の毒な娘の姿ばかりが強調されていた。ところがこのエッセーでは、まったく別の明るい面が書かれていて、一才で父を亡くしその顔も知らない私にはむしろ羨ましいほどの父娘関係が浮び上ってきた。天才詩人の萩原朔太郎は娘にマンドリンを教え、自分のギターと合奏を楽しんだりする父親でもあった。

又時にはこんな話をすることもあった。

「菊池寛は偉い。彼を大衆小説家だと軽く見てはいけない。彼の文

学は非常に立派な文学だ。」又ある時は、「エレベーターの中で吉屋信子に逢った。今まで写真などで見ていた感じとはまるで違い、目の輝きはすばらしかった。これは一つの道に生きる人間の美しさだ。」と言ったという。

私はこの二つの話で、やはり朔太郎は本物だと思った。他の人が見過ごしがちな深い所まで見抜く目を持っている。

葉子は本の虫の様な少女であった。そんな娘に自分の良いと思う本「三人姉妹」などを勧めて「読んだら何かをつかまえなくてはいけないよ。」と言ったりした様である。又、文学好きの女中の感想文にもちゃんと目を通してやさしい言葉をかけてやったということだ。

幼い時に実母に捨てられ、長じては男運にも恵まれず、幸薄かった萩原葉子であるが、やはり偉大な父親の影響、そして恩恵も、たっぷりと受けているのである。

精薄の妹の面倒を見、身勝手な母親をわざわざ引き取って最後まで見守るやさしい性格は、父親から受継いだものであろう。

冷い夏・熱い夏を読んで

吉村昭著

野田和子

十代で両親と死別してから寄りそうように生きてきた、子のない弟が肺を侵されていた。

弟の病気が発見されたのは些細な偶然からであった。胃がもたれるような感じがするのでX線透視をうけた。結果は異状なしであったがついでに肺臓のX線透視をしてもらうとフィルムに写った胸部に白い影（ピンポン玉のような形をした影）が浮び上っていた。総合病院で精密検査をうけてみたら、末期の肺癌だった。外科医は「癌のなかでもきわめて稀な最も悪質なもので、手術後一年以上の生存例は皆無です。」と言う。作者は、弟に癌であることを教えるべきかどうか、親しい医者に尋ねたり苦悩する。

作者の家系には癌で死亡した者が多いが、弟は咳も痰も出ないし、決して大量喫煙者とは言いがたい。自覚症状らしいものは全くなかった。読んでいて私の家系も癌の発病者が多いから、癌ではないかと不安にかりたてられ恐ろしくなった。

作者は事実をあくまでもかくし通して死を迎えさせる方が好ましいと思い、弟には良性の腫瘍だと言う。癌とは知らずに手術をうけた。

八月に入っても梅雨のような肌寒い雨の日がつづいていた。弟の体は、鎮痛剤が神経を麻痺させ、点滴によって維持され、ベットに釘づけになる。癌組織は異常な速さで転移、増殖してゆく。更に鎮痛剤の注射の影響で幻覚が激しくなる。点滴も入らなくなり、胸の大静脈にカーテルが挿入された。ロボットみたいに体が管ばかりになった。弟は現実に襲ってくる激しい痛みからのがれるため死を願う。作者も弟が哀れになり、痛い目をして生命をのばすより、安楽に死を迎えさせてやりたいと思った。しかし、弟の肉体は死をうけいれても不思議はない状態だが執ように物体になることを拒みつづける。

作者は自分の息子と娘も弟に会わせるべきだと考えた。人間には死というものがあり、それを避けることはできないという事実を直接眼で見させたかった。

まもなく気管支内につまった分泌物が排出されなくなり呼吸困難になった。気管支を切開して分泌物を吸引する。発声ができなくなった。全く恐ろしい。そのうち弟の呼吸はかすかになった。とまる

かと思うとまた息を吸う。生に対する強い執着を感じる。

前年の異常とも言える気温の低い夏とは対照的な猛暑がつづく。弟は50才で逝った。

生きるのも難しいが、死ぬということも難しいと思った。人間は「生者必滅、会者定離」なのだから、一日一日を楽しく過ごしたいとも思う。

世間知らずの私は死の意味について考えないでいましたので、会員の皆さまの体験談や、ガン告知の是非、安楽死の問題、献体等についての御意見、たいへん興味深く伺った。

毎日何と無く生きていましたが、生きてゆくということは、一刻一刻死への接近を意味している。願わくは楽に死にたい。

「カルメンの悲劇」を観て

佐藤禎子

ピーター・ブルック演出のオペラ「カルメンの悲劇」を観た。若い頃から感じていた、オペラに対する疑問や異和感など、もやもやしたものが一気に吹き飛んだ思いだ。

日本人によるオペラでは、歌手の演技力がとても気になったし（20年も前は、門外漢のはたちの女の子でも、その稚拙な演技に思わず下を向いてしまうような場面があった）、また芝居としての流れの中で、それを止めるような詠唱部分など、オペラとはこういうものだと言われればそれまでだが、どうもピッタリこないものがあった。オペラはむろん音楽のジャンルに属するので、音楽を聴かせることが優位になるのは当然だが、歌劇というからには、もっと演劇的に洗練されていなければおかしいのでは、と漠然と考えていた。

しかし、この公演は、それらの思いを全く取り去ってくれた。

まず舞台だが（銀座セゾン劇場）、最前列の客席のある床の空間が舞台となっている。そこには装置といわれるようなものは殆ど無く、床には土が敷いてあり、麻袋のようなものが三つばかり放り出してある。始まる直前に、指揮者を先頭にオーケストラの人々が客席の通路から土の上を通って左右の袖に入って行く。土の上には彼等の足跡がペタペタと残っている。

私達の知っている「カルメン」は、タバコ工場前の広場で繰り広げられる賑やかな場面から始まるが、こゝではヒダのいっぱいある、華やかで情熱的なカルメンの姿はなく、タバコ工場の女工達も衛兵達もいない。布を被って、地べたでトランプ占いをしているカルメンの所へ、ホセに逢いに来る、地味な服装のミカエラが登場する場面から始まる。被った布をパッとはねのけて姿を見せるカルメンは、地味な色合いの服に関係なく、すばらしく情熱的でセクシーだ。また、一枚のカーペットを広げることにより、そこが酒場になったり、舞台をひと回り歩くことによって遠い場所への移動を表したり、能舞台を想わせるような場面もある。失意のホセが肩を落して、歌いながらトボトボと舞台の奥へ歩いていくなどというのは、今までのオペラでは考えられなかったのではないか。演技者（歌手）も白人だけでなく、肌の黒い人も黄色い人もいてとらわれていない。見る方も全く異和感を感じない。そして、演技者が一方的に演じるだけでなく、常に客席への投げ掛けがある。そのために舞台と客席に一体感があり、心地良かった。目の前に展開されていたのは、歌唱力のあるすばらしい芝居だった。

芸者　苦闘の半生涯

増田小夜著

桑原千香

今年も毎月一冊づつ十冊文庫を会員の皆様と共に読ませて頂きましたが、私にとってこの作品程、魂の叫ぶ声を感じさせた本は有りませんでした。

遮二無二活路を求め、喘ぎ悶え苦しんだ芸者さんの魂の記録です。何とも早や想像を絶する程に物凄い幼少期、子守はまるで人間ではないような地主の扱い方、冬の塩尻で足袋もはかせてもらえず、冬の川での洗濯、寝床も麻の袋にボロをつめたものが物置の隅に有るだけ……。そして自分の歳も名前も知らず……。

十二歳で芸者屋へ売られ、何が一番おそろしいかと聞かれたら、「人間」と答えた事でしょうと著者は書いています。のんびりと育った私には、何とも胸にこたえます。病院の施療室が天国だなんて、今の子供さん達は本当に幸福だなあと思います。

この方の青春、誰が奪ったのでしょう。

でも救いは有りました。本山青年です。せめて彼が日本の土を踏んでいるうちに死を願い、彼がいつも一番似合うと言ってくれた薄桃色のアサガオの模様の浴衣で諏訪湖へ天国へ行くべく身を投げましたが未遂でした。

そして終戦、弟さんとの生活、弟さんも大変不幸な幼少期を過しているのに、この姉思いの素直さ、やさしさ少々嫉妬を感じる位でした。結局、腸結核で倒れた甲さんは、「もうこれ以上姉さんに苦労はかけたくない。」と自殺してしまいます。この頁で思わず涙が出てしまいました。

本山さんは生きていました。でも彼は結婚し一児の父でした。奥様も心やさしい良い方でした。お別れせねばと心に決める著者も気持のすがすがしい方だなあと思いました。

今はどうしてお過しなのでしょう。童話、大変楽しく美しいお話でした。「子鷹のピー子」傑作だと思いました。影絵で絵本に出来たら素晴しいだろうなあと思いました。

今様、女良寛様のような、又悲母観音様のような気が致しました。著者の上に心静かな日々が有りますように。

豊田穣の母ふたりの記を読んで

宮吉慶子

作者の長男克男は高校生時代発病し、精神科の入退院を繰り返している。その原因を母方の家系に異常な血が流れているのではないかと作者すなわち主人公は疑っている。又作者には十七才で列車から飛び降りて自殺した伊久子という妹がいる。自殺の原因は、はっきりしないが昭和二十年に十四才で母を亡くし四年程の戦後の日々を少女はどんな気持ちで過ごしたのだろうか。遺書には「お母さんのところにゆきます」と書かれていた。

母は十人姉弟であった。作者は母の家系を地元の役場郷土史家土地の有志又新聞社の方々と八方手を尽くし辿っていき、彼の祖先が南部の豪商野村家から出ている事を確かめる。血族結婚による血の異常が長男に現われたと確認する。

本書はドキュメンタリーで作者は親族知人を傷つける事にもふれて書いている。真実に迫りそれを表現するという事で仕方のない事かとも思われるが、その〝真実〟なるものが、作者の考えた真実になるおそれはないのだろうか。

さて表題の母ふたりの記、実母キトシは作者が戦地にいる時に亡くなるのだが、どんなに無事な帰還を願ったか、戦死の公報を受け取りさぞ力を落とした事だろう。しかしそれは誤報であった。母が亡くなる時「穣がいるので少しもさみしくない」と言う。死後の世界はわからないが、待っていると思った息子を捜しても見つからず、いない事がわかった時どんなに母は喜んだ事だろう。実母に対する思い出は皆暖かいというより熱いものを感じる。一方義母と作者との確執が書かれているが、読者側から見ると二、三行き過ぎはありますが、後妻に入り実子もなくその夫に亡くなられた六十八才の老女が金銭的に自己中心的になったにしてもそれを責められるでしょうか。作者は義母加久江の考え方を西美濃の室町時代からの風土的に培われた女の保身の処世術で、彼女を責めたのは間違っていたと反省するので読者としても一安心である。

それにしても家系を辿るという事は、先人達の生き方がドラマチックであればある程、興味深いと考えるのは不謹慎でしょうか。

私自身は平凡に生きられたら一番幸せである。

自伝的なものを読んで

石橋みな子

先日新聞で見たのですが、何かの読書感想文コンクールで、新潟から上京して来ていた18才位の女性が渡辺淳一著「花埋み」について書き、最優秀賞を受けておりました。その方は、「花埋み」の主人公である荻野吟子の（日本での女医の草分け的な人で、その本は19才～63才までの吟子の生涯について書かれている）生き方に教えられ、いろいろな挫折を乗り切って定時制高校も仕事も通し終える事ができた、と書いておられました。

昨年私が読んだ本の中にも自伝的なものが何冊かありました。「花埋み」もその中の一冊、萩原葉子「蕁麻の家」「閉ざされた庭」や、増田小夜「芸者・苦闘の半生涯」、中野孝次「麦熟るる日に」、志賀直哉「和解」など。いずれも印象に残るものばかりですが、小説と違って自伝的（的であるから小説の部分で読まなければならないこともあるが）なこれらの本に出会うと特に私はいつも心の中で〝自分だったら〟の問いかけを始めてしまう。実際に起こった事や、済んでしまった事が書かれているだけに〝自分だったらこうはするだろうか……どうして？……いや、やっぱり！……〟等とつい感情が移入され、一人芝居よろしく、くどくどと反趨する事となる。揚げ句には、私なりの結論のようなものを出して心の引き出しへしまい、一応の決着をみる。——と、ここまでくると実際私が経験した事でもないのにさも経験したかのような錯覚に陥る事さえあるからおそろしい。

が、それにつけても私が自分自身の生き方についてこの年にして（？）あまりにも、確固たる信念らしきものがなく、それが自伝的なものを読む事によって裏付けられたりもするが、また「ああ、誰でも多くはそうなのかも……」などという安堵感をも（こちらの方が多い）得られて、〝目と心の経験〟を多くの本からするのが好きである。

少し前、目にしたのだが、現代文明の危機の一つに「感性の衰滅」があると言う。感性の衰滅とは、人間の喜びや悲しみの感覚の衰えだ。山に汗して登っても空中ケーブルで登っても、頂上をきわめたことでは変わりがない。しかし、そこに伴う心の動きの違い、それは亨楽と喜びの違いで、亨楽は厳しい困難を克服しなくても手に入れられるが、喜びはそれなしには得られないという。

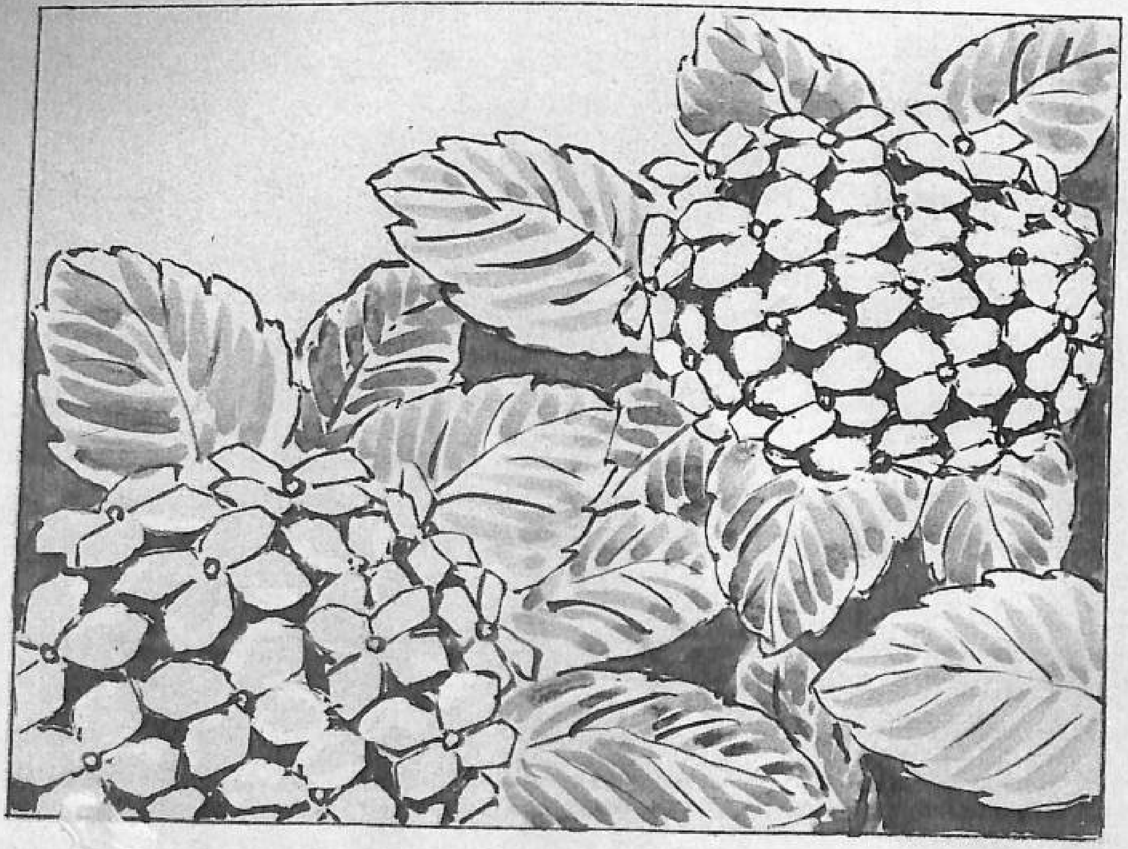
28ページ九29

「日本人とユダヤ人」イザヤ・ベンダサン
小川芳子

編集後記

八幡公民館発行の文集「ふれあい」九号が出来上がりました。
一年間の活動の成果や日頃の考え、ご感想・ご意見を頂き有難うございました。
この文集が多くの学級やサークル、読書会の方々に読まれ、文集を通してなぐさめられたり、励まされたりして、ふれあいの輪が大きくひろがっていくことを願っています。
今後も皆様方のますますのご活躍を心からお祈りいたします。
本号の発行の遅れましたことをおわび申し上げますとともに、お世話になった方々、寄稿して下さった方々に厚く御礼申し上げます。

ふれあい



1988.4

市原市立八幡公民館

I 13-2-(10)号

千葉県立
3.12.26
中央図書館

第10号「ふれあい」の発刊によせて

公民館活動のまとめとも言える「ふれあい」10号の発刊を心よりお喜び申し上げます。
また、寄稿して下さった主催事業・サークル活動の方々に心からお礼を申し上げます。また、今回も多数の会員から原稿を載いた「ひばり読書会」の日頃の活動の充実ぶりに、敬意を表します。

この「ふれあい」が多くの人に愛され、公民館が地域の皆様方に益々親しまれ、生涯学習の場として、また、ふれあいとやすらぎの場として充実した役割を果せることを願っています。

主催教室

郷土史講座	生きがいを求めて	地引久雄	1
親子教室	参加してよかった親子教室	松浦牧子	1
〃	楽しかった親子ゲーム	白鳥梓	2
成人講座	対話を求めて	田村三郎	3
家庭教育学級	子供を伸ばすエネルギーは？	坂梨祝子	4
婦人学級	視野を広め心豊かに	高浦節子	5
唐詩教室	白楽天と私	中川勝人	6
〃	唐詩の世界にひたれる楽しさ	金光直敏	7
〃	懐しく楽しいひととき	中村敏秋	8
古典文学教室	平安の昔に心をはせて	高橋英子	9
自然観察会	自然は心の友	御船順子	9
〃	野草観察の楽しさ	田中鑑生	10

菅野町政の傑作八幡公民館	中村きく	11
早春賦	坂梨祝子	12

生きがいを求めて

郷土史講座　地　引　久　雄

六十の手習いと言う諺もありますが、私は喜寿の勉強ということになります。

農家の母子家庭に次男として生れたのは、明治の年の終りでした。小学校を卒業して間もなく、或る企業に就職しました。

それから定年までの五十有余年間、社会の荒波と戦いながら、只、只、己の職業に対する勉強と、技術の昇上だけに心身を費してきました。

そして退職後の残り少ない人生をこの地に定めました。而しながら企業技術者の老人には一般社会への融和に乏しく、近隣との交流も少なく、従って毎日が休日の淋しさでした。

そんな或る日『広報いちはら』で公民館の講座や教室並に各種の「サークル活動」のあることを知りました。早速申しこみをして、郷土史講座を拝聴することになりました。

講師の各先生から市原市を始め県内各所の歴史や史跡に就いてのお話と古墳や遺跡の現地探訪などで、全く無関心であった文化財や遺跡、歴史など僅かに判るようになり興趣も出て、同好の友も現われて、多くの人達との「ふれあい」の輪も広がりました。

人生は死ぬまで毎日が勉強だと言われておりますが、私も公民館講座のお陰で、年令を忘れて、この由緒ある市原市で生れ育ち、そして墳墓の地としたことを誇りに『ふれあいとやすらぎのあるまち』に生きがいを求めていきたいと思って居ます。

纒りの無い、思いのまゝを綴りましたが、公民館は私達市民の学習の場であり、そして憩いの園でもある事を知りました。

今後多くの市民が気易く利用することを希望すると共に、講師の委嘱や、サークル指導などにご苦労された、公民館職員の方々に感謝申し上げて終りに致します。

文化財　遺跡めぐりや　秋高し

参加してよかった親子教室

親子教室　松　浦　牧　子

私が初めて親子教室を知ったのは、六十一年の広報「いちはら」でした。

最初の年、気のりのしない子供達に、お友達と一緒だからと無理やり参加させました。盛り沢山の楽しい諸行事をこなしていくうちに、次第に子供達も興味を示し、翌年には、やる気のなかった弟の方から「又参加したい。」と言い出しました。

私も勤めをする様になって、貴重なお休みにおっくうですが、一ヶ月の内の一日、それも二時間ぐらいだからと参加しました。

五月に菊地こう先生の「家庭の躾」についてお話しを聞いたり、六月には、千葉市埋蔵文化財調査センターへ、内田小学校、田中操校長先生の指導のもと、往復十㎞程度の道のりを親子でハイキングをしました。

九月の白鳥譴爾先生の竹細工では、学校でも指導されていないナイフの扱い方を習い、初めはぎこちない手付きでしたが、会が終わる頃には、「優雅に飛ぶ竹トンボ・スピードがありすぎ何処へ飛ぶかわからない竹トンボ」と個性ある作品が次々に完成しました。

野菜鉄砲の時など、先生が自宅から持っていらっしゃった怪獣のおへそに、見事命中させた人には、その怪獣がもらえるとあって、大根の弾を手にした子供達の目は真剣そのもの、つい親の方も「もっと右、もっと左」など口々に熱の入った声援を送り、学校でもこんな熱い眼差しをしているのだろうかと思いました。

赤ちゃんの頃は「笑った」「歩いた」とたわいのないことでも、心の底から誉めることができたのに、いつのころからか怒鳴ることが多くなり、自分の余裕のなさに考えさせられていた時だけに、子供が小さい時から「作る喜び」と「いろいろの経験」をさせ、多くの感動をさせることが、大人になってからの自信につながるのではと思うようになりました。経験豊かな先生方を招いてくださる公民館主催行事に参加するのが、最も身近で気軽な場だと思います。

仕事仕事で〝暇がない〟と言っているお父さん達に、大きくなってから親の権威を振りかざすより、一緒に遊べる時期にこそ父親の威厳を示し、株をあげるチャンスではないでしょうか。

楽しかった親子ゲーム

親子教室　三年　白鳥　梓

今日の勉強は、「親子のゲームあそび」です。公民館では、いろいろなことを教えてくれるので、とても楽しいです。

まず、ジャンケンゲームです。ぼくは、そんなにかてませんでした。

かたたたき、ひざたたきは、となりの人とすっかり仲よしになりました。

だるまさんごっこ、先生が、「だるまさん」と言ったら、先生の言うとおりにする。ところが、先生が、「だるまさん」と言わないのに、立ったり、すわったりする人もいました。先生のいうことをしっかりと聞かなくては、いけないと思いました。

次は、いすとりゲーム、でれでれしていると、いすがなくなってしまいます。ぼくは、一かいもいすはとれませんでした。

指の数字遊び、親指が一、人さし指が二、中指が四、薬指が八、小指が16です。先生が10、と言うと、親指と中指と小指を出します。やっているうちに、指がこんがらがっちゃいました。指を全部たすと三十一になります。

「ペコポコゲーム」、ペコと先生が言ったら、手のひらをあい手の手の上にのせてポコといったらぎゃくに、手のひらをあい手の手の下に下げます。先生が、早口でペコポコと言うとまちがってしまいます。

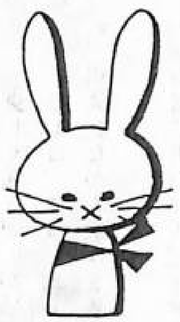
「おふろ遊び」、あついかな、ぬるいかな、よーくかきまぜて、おゆの中ではゆらゆらと、まどの外にはお星様。と、歌いながら、そのまねをします。今度ぼくは、おんせんにいったらこれを歌いながらはいりたいと思います。

「鼻つまみ、耳つまみ」は、右手で鼻をつまみ、左手で耳をつまみ、あいずがあると、手をぎゃくにしますが、おばあちゃんは、まちがってばかりしてました。

「十五夜さんのおもちつき」「十五夜さんの、もちつきは、トーン、トーン、とってた。とって、とって、とってた。ひっついた、ひっついた、ひっついた、ひっつい、ひっつい、ひっついた。おっこねた、おっこねた、おっこね、おっこね、おっこねた、シャンシャンシャンシャーンのシャンシャンシャン」と歌いながら、二人一組で、おもちつきのまねをします。

調子があわないと、手をはさまれます。いっしょうけんめいやったので、おいしいおもちができました。

楽しく遊んで、あっという間に二時間すぎてしまいました。ゲームをするには、おちついて、先生のあいずをよくみていないと、まちがえてしまいます。



対話を求めて

成人講座　田村三郎

さて書出しは何にするかとても迷う。感想文・随筆等は一度も書いた事の無い私ですが、思いついた事をペンの進むまま書いてみました。私が八幡公民館主催事業の講座に初めて参加させていただいたのは二年前の自然観察会でした。それ迄は八幡公民館とは、私にとっては縁の無い遠い存在でした。昭和六〇年五月定年退職する迄、会社と言う巨大な組織、一定の枠組の中でいつも同じ様なスケジュールとサイクルの中で動いて居た日々、それが或日より時間に拘束されない自由な時間を持つ事の出来た事、あこがれの自由人に、一日二十四時間の時間を私なりに自由に使える楽しさを摑み、あれもしたいこれもしたいと。読書、レコード鑑賞、（特にレコードはビゼーの歌劇マリア・カラスの歌うカルメンの組曲が好きで何回聞いても飽きない）庭造りに畠仕事、又小旅行等々新聞は角からすみ迄と、日々此の様な生活に満足しきって居た私にも何か物たらないものを感じ、それは何かと、それは私と本、私とレコード等々ですべて一方通行の対話の無い事でした。それから対話を求めて何をすれば良いか、色々な本、新聞等の情報を集めて居た時、目に入って来たのが広報「いちはら」でした。それには各公民館主催事業で二講座・四教室・二学級と自然観察会、一〇余りの講座が有るのを知り、さっそく八幡公民館に電話をし講座の内容・申込について御尋ねした所どの講座に参加されても良いと言う事でした。早速、唐詩教室、古典文学教室其の他二講座、自然観察会と貪欲な迄に参加させていただいて居ます。今は友人も出来、多くの人々と親しくなり講座のある日が待ち遠しいくらいです。最近市原市いや千葉県、日本中で大いに話題になって居る稲荷台一号古墳より、一五〇〇年余り前の古代のロマンを呼んで居る銘文入りの鉄剣が発見された事が報じられて、私達も大いに興味を引く所です。古い市原を知る上にも、古代史講座が開設されればと思う今日此頃です。

子供を伸ばすエネルギーは？

家庭教育学級　坂　梨　祝　子

一月二十六日、家庭教育学級主催の映画会に出席した。映画は、「子供を伸ばす叱り方」「ダンプの母さんと六人の子供たち」「育てていませんか？いじめっ子、いじめられっ子」の三本であった。

先ず「子供を伸ばす叱り方」

このストーリーは、よくどこの家でも見られるパターンである。例えば「勉強すんだの？　片付けは？　忘れ物はないの？」など、母さんは、吾子が気がかりでいちいち干渉をする。また、子供のしたことを理由も聞かずに頭から叱りつけているのである。

丁度この時、この家におばあちゃんがやってきた。おばあちゃんは長年にわたる子育ての経験をいかし、次々におこるトラブルを難なく処理していく。おばあちゃんの解決法は、嫁と孫の間にはまって、「どうしてこういうことをしたの？」と優しく孫に問いかけ、その原因がわかると、嫁さんに向かい、「わたしは、こうしたらいいと思うがねえ。」と自分の主旨を説明し、相談しながら次々と善処していくという手法である。

それから、或る日、家族が連れ立って動物園に出かける。子供たちは大喜びで嬉しさの余りおどけて猿真似をはじめはしゃぎだす。この時、折しも身体障害者が足を引きずりながら通りかかった。子供は事にのって、この障害者の真似をやり出した。これを見た父親は、厳しく吾子を叱り、涙ながらに説得し諭した。

このように、ここに登場してくる三人の叱り方は、見ていていろいろと考えさせられた。

次に「ダンプの母さんと六人の子供たち」。これは、ダンプの母さんが、四人の子供を残し主人に先だたれ、その挙句交通事故で両親を失ったかわいそうな姉弟を引きとり吾子同様に六人の子供達の面倒をみていくというストーリーだ。

最初は、六人仲良く暮らしていたが、日が経つにつれて、四人の兄妹達が、自分の大事な母さんを奪いとられたような気心地におそわれ結末として、二人の姉弟に冷たく当りちらした。二人の姉弟は悲しくなって、亡き父母を慕い、遂には死を覚悟した。と同時に、吾子同様に親切にしてくれたダンプの母さんを思い慕うのである。

こうした事態を知った母さんが、正義感と燃えるような母性愛で六人の子供たちを諭し、無我夢中、懸命に育ててゆく物語である。

最後に「育てていませんか？いじめっ子、いじめられっ子」

これは或る幼稚園に展開された出来事である。過保護な母さんに育てられているいじめられっ子。これとはうらはらに、「人に負けてくるな。」というはりきり母さんからいたみつけられ育てられているいじめっ子、この二組の葛藤のシーンが次々と展開されていく映画だった。

ここで、私の所感として独善的な「婆放談」を登場させることにする。

映画で見たこの三点は、誠にもって〝道〟に入り感動的であった。こと、子育になると、その人の境遇にもよるようだが、先ず時代の流れに作用されるように私には思われる。何故なら、自分の子供の頃は、親からも学校からも軍隊式といおうかスパルタ式といおうかまずまず躾が厳格であった。修身教育のせいかもしれない。礼儀作法の点では申し分なかった。

それがどうだろう？　この自分が子の親となってみると、何の教えもなさずに、ただ慈しみの視線を吾子に与えるだけ。「勉強しなさい。」とか「その行儀は！」など叱った記憶はないのだ。これは、戦前戦後という悲惨な時代に育ったせいもあろうか。生きんが為に食わんが為に一生懸命働いた……。誰もが心を一つにして励まし生き抜いてきた。

こうした助け合い思いやりの精神や団結心が現在の日本を築きあげたのであろう。子供の面倒などみる暇がなかったのだ。

子どもは親の姿を見て育ちながら親の悪いところをも見ていると いうことだ。真の子供の教育は、親の姿にあり、無言の情熱にあるようだ。これ、所謂、ダンプの母さんの姿をさしている言葉だ。

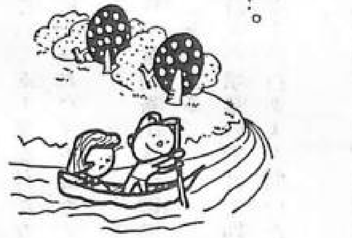
さて、吾家での自分は、子育てに関しては一さい片目をつむり、息子夫婦にまかせっきりである。しかし、両親不在の場合には、某家のおばあさんと同様な手段で、じっくりと孫を諭し解決していく。いろいろな体験の中でほめることは、子供を伸ばす大きなエネルギーになり、これが長所を伸ばし短所をなくする教育法だと心得ているからである。

過保護は、正しい人生路線を狂わせてしまうという。——自立心を失わせ、我儘、勝手な心を増長させるばかりか愛情教育とはうらはらにまさしく凶器を与えるに等しいという。

現代の生活様式は、昔とはまるっきり変ってきている。核家族化し、家庭の電化でいよいよ主婦たる者の任務が安易になってきている ことだ。だから余りにも余暇があり過ぎて余力を増すばかり……。たぎる出るエネルギーをば愛する吾子のためにと加算する。これが溺愛であり、過保護ということだろう。

子どもの人間形成に及ぼす叱り方、ほめ方、親子関係、親の考え方・態度などは、ほんとうにむずかしいものだと改めて考えた次第である。

「ヤッホ！」　「ヤッホ！」
日本はよか国、黄金の国さあ！
わけてやりましょッ！　諸国の人にも……。
不満と慾ばり、もうもう捨てて……。
いつも、にっこり感謝をしましょッ！



視野を広め心豊かに

婦人学級　高　浦　節　子

子育てに、パートに、せっせと頑張っている若いお母さんたちを見ると、わたしも「現代社会に取り残されてはいけない、これからは何でも吸収し視野を広めたい」と思い、早速申し込んだ。菊地こう先生の「家庭の躾」という講演会でした。

婦人学級に参加して、ほんとうに良かったと思っています。

毎回、テーマ、趣向を変えての催しは、知識や趣味を持たなくても、誰でも気軽に仲間入り出来ることです。

鋸山バス研修では、山の自然に触れ、汗を流して登った石段、山肌に安置された千体の羅漢に魅せられ、四方竹、沙羅双樹、という珍らしい植物に出合いました。

秋の料理講習では、季節の素材を生かした料理の数々に、香りと味覚を満喫し、作る喜びと、チームワークの和が生まれました。

木の葉舞う十一月、遠山あき先生の講演会がありました。

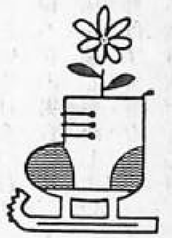
先生は、飾り気のない謙虚なお方で、「文化功労賞」を受賞された時「肩書きのない代表」と思ったら嬉しくなった。そして「農業を誇りに思っている」とのことです。

毎日「忙しい忙しい」といっていると、心が亡びてしまう。ふと、自分を反省したり。

「生きがいの創造」をテーマに、体験談を交えての感動するお話は、胸にこみあげるものがありました。「いいお話でしたね、またおききしたいですね。」会場から聞こえました。

先生の、苦悩のあとに生れた今のしあわせを、喜ばずにはいられません。

婦人学級に参加して、家庭の話題も豊かになりました。これからも、多くの人が参加し、交流の輪を広げたいと思います。



白楽天と私（唐詩教室に学んで）

唐詩教室　中川勝人

唐詩の世界に初めて親しみを覚えたのは、今から五十年程前、旧制中学の漢文の時間である。胡瓜という仇名のある国漢の教師が、その好みもあったのであろう。授業中屢々唐詩選の中から名詩を選んで、陶酔したような表情で吟じ、そして説明を加えた。

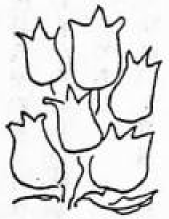
そのとき初めて私は唐代の詩人李白、杜甫、白楽天などの名を知った。中でも白氏文集が日本の平安の都の女流文人清少納言の教養に与えた影響など、その老教師は熱っぽく語ったものである。

時は移ってそれから四、五年後、昭和十九年四月、北中国の見渡す限りの麦畑の緑が萌える頃だった。日本軍十万が蔣介石直系の中国軍四十万と真正面から衝突する所謂「河南作戦」が発動された。そのとき私は多くの進攻兵団の中で戦車師団の砲兵で参加した。兵団の突進目標は古都「洛陽」である。作戦が進行し、敗走する敵を追って五月初め「龍門」という所に着いた。私達はこゝで踏みとどまった敵の激しい反撃を受けた。折柄の降雨と泥濘の中を這いずり廻るような死闘が四日間昼夜の別なく続いた。そばを伊河が流れ国宝的に有名な「竜門の石仏」がある。砲撃は制限された。文字通り歩兵団の肉弾戦でこの竜門を突破したのが五月十日、休む間もなく竜門峡谷を通過して洛陽平野へ突進を始めたその日の午后だった。走る砲車の上から道路左右を見ていると右側に石段があり、入口脇に石柱が立っている。「白楽天の墓」と刻んである。私の搭乗する砲車はあっという間に通り過ぎてしまった。恐らく誰も気が付かなかったに違いない。しかし私は一瞬その石柱に刻まれた字を見たのだ。

こゝが中唐の官僚詩人白居易の晩年の隠棲地「竜門香山寺」跡であると知ったのは戦争が終ってずっとあとのことである。日中両軍は日中両国に昔から知られた高名な詩人の墳墓のそばで四日間も銃砲声を轟かせて戦っていたわけで、地下の白楽天が聞いたらさぞ悲しい思いであったに違いない。

私達はそれから洛陽総攻撃に参加したあと出発地の大黄河北岸に戻ったが帰りは別の途を辿ったので再び竜門を見ることはなかった。

今回公民館の唐詩教室に学ぶ気になったのもそんな過去の思い出があるからで、片山先生の朗々と読誦される詩を聞くたびに今は亡き中学のときの漢文の老教師のことや、二十才から四年間の青春を送った黄土の大陸の街や村、一瞬に見た唐代の大詩人の眠る香山、その下を流れる清冽な伊河の水、そして峡谷を抜けた時に見た洛陽平野のどこ迄も続く青い麦の広がりを憶い出すのである。



唐詩の世界にひたれる楽しさ

唐詩教室　金光直敏

国敗れて山河在り　城春にして草木深し

敗戦の一兵士として故郷の城下町に帰った私であった。南北朝時代、南朝の雄として熊本北部の菊池を拠点として、九州に勢威を張った菊池氏一族の居城は、「雲の上城」と呼ばれていた。その城跡の丘に立って幾度この詩を口ずさんだろう。

青春二十才の精神世界が崩壊し去った後の虚脱、喪失、虚無、絶望。どれだけの悲しい言葉をあげても、語り尽くせないものがあった。「国は敗れたが昔変らぬ山河があるではないか」何度自分に問いかけたことか。

東に大阿蘇の噴煙を背にして、優美な山裾を南北に広げる鞍岳、北に大分県の山岳と境を分つ八方岳。そしてその二岳を水源として発する菊池、迫間の二川。この山紫水明の故郷が、ともすれば自暴自棄になりがちな私の青春を支えてくれた。

あれから四十数年、今私は八幡公民館の唐詩講座の学生として勉学中であるが、回顧して真に感慨無量なものがある。

「俳句を志す者は、文学・歴史の勉強を、芭蕉は万葉集・古今集等の古典文学、更に中国の杜甫、李白、白楽天等の詩人や、思想家老子の影響を多大にうけている。我々も学ぶべきである」と説く大木五大夫先生に触発されての唐詩教室参加である。

初日教室に入りその華やかさに先ず圧倒される。男性は僅かに数名、若い婦人たちが絶対多数。老人大学、福祉センター俳句・俳画教室・八幡青少年会館の俳句教室等総て六十才以上の人を学友としている私には、若い女性たちが唐詩を学んでおられることに敬意を表すると共に燦めくまぶしさを感じた。

教室の運営、休憩時の茶菓の分配、後片付け等当番制で迅速に処理される。教室内の雰囲気も熱心さと共に和やかさに溢れている。講師がまた素晴しい。元東洋大学教授の片山一先生。中国の詩の世界に登場する大人の風格がある。柔和で微笑を絶やさず、悠々と時にはユーモアをまじえての講義。低いが良く聞える話術。絶叫型の講師でご本人も聴講者も疲れ果てる講座の多い中で、実にしっとりと唐詩の風雅幽玄の世界をご説明戴いて真に感銘深いものがある。

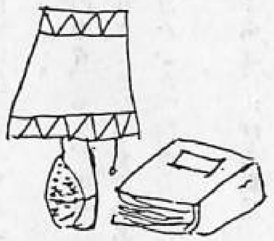
「師良し、学生また良し」の唐詩教室であるが、講義終了と同時に午后の俳画教室受講に駆けつけるため、誠に心苦しく思っている。何か私にでもできることがあったら声をかけてもらいたい。それは私の生き甲斐の一つになると思うから。

最後に私たちがより良く学べる環境づくりのためご配慮戴いてい

る公民館長はじめ事務局職員ご一同に心からお礼を申し上げて擱筆する。

懐しく楽しいひととき

唐詩教室　中　村　敏　秋



広報「いちはら」で、唐詩教室が開かれることを知った。私は詩吟をやっているので、早速申込み参加させていたゞき、一年を終ろうとしている。いづれ訪れるかもしれないボケの防止の為にもと、色んな講座や教室に顔を出しているが、この唐詩教室の発見は殊のほかうれしかった。あとで聞くと、五年以上も前から開かれているとの事で、最初から参加出来なかったのが残念である。

受講者は男四名、女二六名である。古くから引続いて受講されている方が多いようにお見受けしている。先生から詩の読み方を教わり、みんなで声を揃えて読み、これを繰返す。（こゝで大抵おほめの言葉をいたゞく。呵呵）それから詩の解釈をしていたゞく。こゝまでは普通であるが、この教室では、詩の作者のこと、又其の時代背景、或は当時の国情等々について実にわかり易く、面白くお話していたゞいている。これが楽しみで仕方ない。若い頃習った、歴史や漢文の時間の話を思い出し、実に懐しい。受講者は老いあり若きあり、又男女一緒で、夫々の今までの生活環境も異なる人々である。先生の講義も、学校での授業と異なり、むつかしいことだろうとお察し申し上げる次第である。

教室の中は実に和気藹々である。皆さんお知合いの方が多いためかもしれないが、実に気分がいい。又この教室の特徴として、途中の休けい時間に、お茶が各人に配られる。おまけにお茶菓子まで出る。どなたかの旅行のお土産とか、いたゞきもののおすそわけとかいったものらしい。いつもどなたの差入れかをお聞きしながら、有難く頂だいしている。いたゞくだけでなく、たまにはと思いながら未だ実現してなく、申訳なく思っている。

教室に通って一年になろうとしているが、お教えいたゞいている七言・五言絶句の中で時たま詩吟で吟ずる詩にぶつゝかることがある。全く知らない他国で知人に会った気持、共に経験はないがこんなものかもしれない。ああ！君はこゝに居たのか、と思わず一人で詩を口ずさんでしまう。懐しい限りである。こんな気分を味わえるのも詩吟・唐詩教室のおかげと一人悦に入っている。又風景をよんだ詩などは、抑揚をつけて口ずさめば、自ずと情感が湧き出てくるものである。唐詩を学ぶ人は詩吟もやってみては如何でしょうか。

今年、はじめから「琵琶行」という白楽天の長い詩の講義がはじまった。以前詩吟の大会で聞いたこともあり、感慨深く楽しく受講している。又八月には、中国に漢詩の旅で出かけ、張継の「楓橋夜泊」の寒山寺や、馬鞍山の李白の墓等を訪ね、じかに唐詩にふれてみたいと楽しみにしている。

来年度も唐詩教室は開講されるとの事である。沢山の方々と一緒に勉強でき、沢山の友ができることを期待している。

最後に教室のお世話をして下さる公民館の職員の方々、この講座のお世話をして下さる先生に厚く御礼申し上げ筆をおきます。

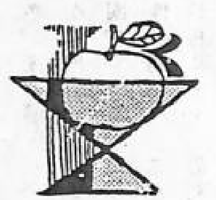
平安の昔に心をはせて

古典文学教室　高　橋　英　子

「源氏物語」は「桐壺」からはじまって「夢浮橋」まで全部で五十四帖、各帖ごとに美しい題名がつけられている。親・子・孫と三代にわたる宮廷社会の愛と悩み苦しみ、理想と現実を描いている。今と風俗習慣がちがい言葉もちがっているが、人々の心や愛情の持ち方は少しも今とはちがっていない。歴史では書けないさまざまな人間模様をからませた源氏物語。紫式部が二十四才の頃から書き初め三十四才の頃完成したらしい。

本年度は、五帖「若紫」が終ろうとしている。先生の静かな朗読に丁寧な解説、情景が目に浮かび平安の昔に心をはせている。

世界の人々にまで親しまれている源氏物語。一人ではとても読むことのできない古典の勉強が多くのお仲間と御一緒できうれしく思っている。最後の五十四帖まで受講できたらどんなにすばらしいことだろう。



自然は心の友

自然観察会　御　船　順　子

八幡公民館の自然観察会に参加させていただいてそろそろ一年になります。春の「分目新生、光風台方面」「鹿野山」秋の「権現の森」「養老溪谷」そして冬の「高倉観音方面」と五回、いつもバスは満席、年齢層も七〇代から三〇代となかなかの盛況です。

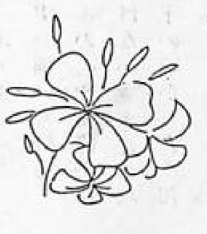
市原は少し奥に入ると自然がいっぱい残っていて観察することなど忘れるくらい、どっぷりと草の香り、木の香り、空気のおいしさに身をゆだねてしまいます。草木一本一本をいたわる様な愛情深い根本先生のお話。「これは何という草ですか？」と何度伺ってもニコニコと答えて下さる。こんなに同じことをおききして恥かしい、老化現象かしら？と自分自身あきれていると「何度でもきいて下さいよ。私の方も記憶が鈍ってきていますから呼び起させて下さい」と先生。なごやかな会話の中に時間が過ぎていきます。

今まで目のかたきにしていた庭や畑の草々、道端で知らぬまに踏みつぶしていた雑草一本一本にも名があり、花が咲いて実がついて、落ちて枯れて、そして又春と共に新しい芽を出す。「植物の一生と人間の一生は同じなんだなあ」と自然の輪廻を感じ、毎回心が豊かになって帰ります。

お茶、お花、編物、アートフラワー、パッチワーク等若い時から好きでかじったものはいろいろあります。では今は「趣味は？」と人にきかれたら「自然観察」と答えています。仲間がいればよけい楽しくなりますが、一人でも、いつでも、どこでも、いくつになっても、その人の心の持ち様で楽しめる自然、便利さに慣れっこになってしまった心を謙虚にさせる自然、これこそ趣味の行きつくところじゃないかなあ等思ったりします。

考えてみると私たちの観察する自然は道端の自然ですし遠くに行けるのも道路のおかげ、車のおかげで決して太古からの自然ではありません。といって野草観察にはいわゆる人工庭園で、あるいは植物園で草花を眺めるのとは違った楽しみ……意外性「あら！　こんなところに。」「これが〇〇〇！」と云った楽しみがあります。最初は鳥が種を落したのか、風で飛んできたのか、誰かが植えたものか判りませんが四季の移りかわりを超えて、形づくられた調和は是非大切にしたいものです。

いつも良い企画をして下さる公民館のスタッフに感謝しています。これからもよろしくお願い致します。新しい方もどんどん参加して下さい。地元の方も、転勤族も、新住民も市原の自然に親しむことによって、ふるさと市原が好きになることでしょう。



野草観察の楽しさ

自然観察会　田　中　鑑　生

私は、昭和五十八年四月から昭和六十二年三月迄、県立老人大学陶芸科に籍があったものですから中学時代から関心の深かった（その当時は長野県上田市周辺でしたが）郷土史講座以外は参加出来ませんでした。

昨年四月以後は陶芸作品をつくると共に、郷土史講座、自然観察会に参加させていただいています。

昭和六十二年度の自然観察会は根本先生指導の下に、第一回五月十五日鎌倉街道、第二回六月十八日鹿野山の野草、第三回公民館で七月九日「楽しい野草の話」、第四回十月八日権現山の野草、第五回十一月十二日養老溪谷の野草とありまして、最後は、二月二十五日高倉観音の野草について学習しました。

自然観察会にはいつも根本先生はじめ公民館の館長さんも拡声器等を持たれて同行され、又遠くから阿部さんにも参加していただいて非常に有難く思っています。今年度の自然観察会の当日は今迄全部快晴で非常に天候にもめぐまれて、朝、公民館前でバスに乗車する時の皆さんの顔色は何か希望にみちて、一つでも多くの植物の名前を覚えて帰ろう!!この様に感じられ、又帰りのバスの中の感じでは皆の満足した様子も伺えるのでした。

第一回目は早春の田圃と畠の多い道を新生の辺から光風台迄根本先生に私達のわからない植物の名前を教えていたゞきながら歩いたのですが、道端の数多くの植物の名前を間違いなく教えることも大変なことだと思いました。

第二回目は鹿野山迄足をのばしたのですが、もう真夏の様に気温が高く山歩きも大変でした。途中マムシ草、山百合、シモツケ草等沢山花が咲いていて目を楽しませてくれました。

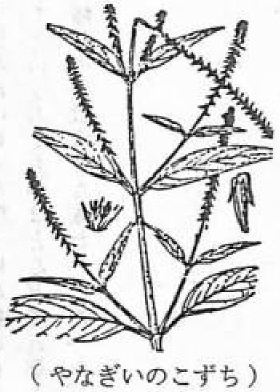
第四回目は茂原街道、六地蔵バス停近くから途中根本先生に植物の名前を教えていたゞきながら権現森に入り武峰神社のある権現山頂上（一七三、三米）にのぼって、帰りには茂原街道の反対側の道に出て長南から追分に出るバス道路迄歩いたのですが、途中野ブドウの木があったり道端にカラスウリが沢山あったりよいながめでした。

根本先生もはじめて「ヤナギイノコズチ」を観察して、私達に植物観察の楽しさを教えてくださいました。

第五回目は養老溪谷駅前から宝栄橋を渡り夕木台を通ってバンガロー村に出て昼食をとり、そこから共栄橋を渡ってバス道路迄出たのですが、この途中には先生しか知らない他所にない珍しい植物が二種類あるとのことで興味をもってその植物を教えていたゞきました。その植物の名は、「のぶき」「かなびき草」でした。

十一月ともなるとやはり花をつけた植物もうんと少なくなって、その代り農家のまわりには柿の実がすゞなりになっていて、私の様な柿の好きなものは食べたくなったくらいでした。

いろいろとりとめもなく書きましたが根本先生も御苦労なことで大変でしょうが出来ましたら来年度もこの会を続行されます様希望致します。



（やなぎいのこずち）

菅野町政の傑作八幡公民館

中　村　き　く

昭和二十四年十一月全国優良公民館の一つに選ばれ、文部大臣表彰を受けて、菅野町長は晴れの天皇拝謁を賜った。二十五年には秩父宮妃殿下がわざわざ視察にお見えになっている。習志野騎兵連隊の厩舎を利用し、中学校を建てたばかりの八幡町には、使い残りの材料があった。「よしこれでつくろう」敷地は八幡宮の所有地石尊様と決まる。白鳥孝治氏、中学校建設に引続き建設委員長、毎日、町民二三十人勤労奉仕。もちろん厩舎の残材だけではとてもたりない。白鳥委員長は材木商、敷地内の大松を切り製材し、公民館の主柱、通し柱は末八寸、見事な杉、丸杉六本をどこからか苦面してくるなど大活躍だった。職工組合勤労奉仕の組合は既に中学校建設で十分経験ずみである。公民館の天井に描かれた畳二十枚大の美しい四季の花、当時千葉高の先生をしていた日本画の山口達先生、白鳥委員長からの八幡町のためにと再三たのまれ、腰をあげたが、問題は絵具。当時千葉に絵具などあるわけない。東京へ捜しにゆき、ようやく本物を見つけたが、なんと三万円。当時、役場の職員の本給が七百五十円。ざっと三年三ヶ月分の給料に当る高い買物だったが、白鳥委員長は購入を決めた。製作がまた大変。開館式まであと十日余り、山口先生は学校から一週間の特別休暇をもらい、中学校の作法室で製作に入った。畳二十枚分のベニヤ板を前に下絵に二日、あとは無我夢中、昼夜を分たず、最後の二日徹夜、栄養剤を打ち打ちの強行軍で完成した時はバッタリ。晴れの開館式にも出席できなかったという。三十二才という若さであった山口先生を包む菅野町長、白鳥委員長以下町民の熱気が先生を励まし支えたことに間違いはない。報酬はなし、あとで菅野町長からそっと米が届いたが、それで十分

人生意気に感ずですよ。と。

この絵は公民館取壊しの時一緒に解体され、五十六年、山口先生の手で補修され現公民館の天井を飾っている、シャモの絵、鳳凰と共に八幡地区の文化財として大事に保存されるでしょう。

わずか三ヶ月足らずの工程で勤労奉仕は延べ四千七百人、どん帳なども町民が寄付し文字通り町の総力をあげての竣工であった。コケラ落しは、実りの秋を待って行われ中村吉衛門一座が招かれた。本物の歌舞伎を見るのは初めてという人たちがほとんどで近郷近在から、どっと人が繰り出し八幡宮の森は大変な賑わいになった。

早春賦

もぐり

「鳴呼!!」　「早春!」
残雪を　頭上に　頂き
連山を背景にして
湖面が　ひろがるよ…。
満々と　水をたゝえ
軟らかな　太陽の陽射しを浴びて
オレンジ色した　小波を
いっぱいに　漂よわしている。

「時折」　岸辺に密集した葦の中で
遊び戯むる　小鳥たちの
「囀り」と　「はばたき」とが
静寂を縫って　聞こえてくる
湖面を巡る　その一角には
見事しょうしゃな　枝ぶりの黒松と
天を突くような孟宗竹とが
互に優美を　競いあっている。
こうしたその中程に　「七分咲の白梅」が
いと清楚な姿で　恰かも
「春はもうもう　すぐそこだ!」と
「鶯」の　訪れを　待っているかのよう!
「鳴呼!!」　今年もまたして春がやってくる!
青春の移り香に陶酔しながら
「吾れ今!　玆に　ひとり!」
「優雅風流の夢!」「相　果てる事なし!」

サークル

詩吟（国仁会）　『詩の心を吟ずる』ことに思う　土岐喜和子……15

八幡囲碁同好会　アイラブ碁　金巻博司……15

書道(一)　「市原だより」に出演して　村上てる……16

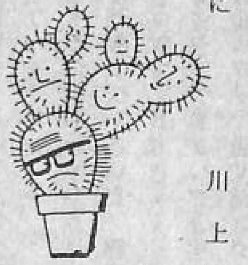
箏サークル　伝統の音に親しむお箏教室　林美有記……17

八幡民謡教室　健康で優雅な日々を送る希い　西口奈津子……18

英語読書会
ちちの木句会　私の姓　越智治夫……19

パンの花サークル　趣味を育てよう　征矢康子……20

フォークダンス　ラウンドランスと共に　川上伊都子……20



『詩の心を吟ずる』ことに思う

詩吟（国仁会）　土　岐　喜　和　子

先日知人の手みやげに、上品な和菓子を頂戴致しました。『栗かのこ』の様なもので、一つずつがきれいな和紙につつまれており、その裏に、

古里の栗もくるみも　うれたれば、
お前を思うと　母の文くる。

と云う和歌が書かれておりました。

誰でも山里の情景が眼前にうかび、子を思う母の姿を、ほのぼのとした暖かさで思いうかべるのではないでしょうか。それがふさわしい菓子であり包装でした。

でも――。その歌は本当はそんなに甘いものではなかったのです。たまたま私共、詩吟のサークルで一ヶ月程前、この歌の稽古したばかりだったのです。

それは松口月城作『母』と題する詩の中に出てくる歌だったのです。

作者、松口月城はその詩を作るに当って、二、三ヶ所の刑務所を尋ね、非行少年に会い彼等の作品、詩や短歌を見せてもらい、少年等の『罪を悔い、肉親のなげきを思い、そしてなほ、はげまし、力づけてくれる母の、無限の愛に涙する姿』を詠み、最後にその中の一人の少年のよんだ短歌、『ふるさとの栗もくるみも………』をのせてあったのです。ですからこの歌を吟ずる時は、その少年の思いを詠い入れねばならぬわけです。

しかし詩の心を吟ずるのはむずかしいことです。さいわい、指導して下さる先生にめぐまれ、すばらしい表現力と力量をおもちの先生ですからその吟を聴いていると、その情感が――自然に涙するほどの感動でつたわって参ります。

私共などはまだまだ声を出すことにのみ夢中で力強い詩も、悲しい詩も、大声をはりあげてしまうのですが、それでもその詩の中に没頭出来ることのたのしみ、それが詩吟の大きな魅力でしょうか。

ストレスをふき飛ばしたい時は力強い元気な詩をみつけ、センチメンタルな乙女の頃の様な思いにひたりたい時は、藤村の『小諸なる古城のほとり』を一人で吟じてみる。

そんなことがたいした上達はしなくとも、自分達の生活の中で心の『いこいの場』になっている様に思えて、今だ詩吟のサークルからぬけだすことが出来ないのです。

アイラブ・碁

八幡囲碁同好会　金　巻　博　司

私達のサークルの大半は、苦しい時代の中で子育ても終って、ホッとしている囲碁愛好者で、『和』をモットーとしている男女の集りです。

不思議な事に、石を持つ時、打つ時、其の人の性格が出るのも面白い事だと思います。お弁当の時間には持参の『おむすび』を分けあったり、家庭の悩み事や、世間話しなど色々と、ワイワイ話に花を咲かせている姿をそばで見ていても実に楽しいもので、一緒に笑ってしまうありさまです。これもコミュニケーションの一つです。

話の中で何時も話題にのぼるのは、病気とボケる事ですが、そんな時、『囲碁を愛する者にはボケはなし』と、誰かが言った。私もその通りだと思っています。

一月下旬に新春囲碁旅行があり、修善寺に行った時、修禅寺に立寄りました。受付を見ると、交通安全祈願料千円をはじめ、たくさ

んの祈願種類がありました。色々あるものだなァと読んでゆくと、なんと、『ボケ封じ祈願料千円」と書いてありました。

何処かの観光団の一人で、五十才位の女性が大きな声で

『あんたボケ封じ祈願料千円と書いてあるわよ、安いじゃない……どう……』

あんたと言われた六十才位の男性は

『馬鹿ァ……まだ早えーよ……』

そばに居た数人が苦笑しました。

六年前の五月初旬ニューヨークに行った時、セントラルパークの桜が満開でした。近くのベンチに二人の白人が、何と折畳の手製の碁盤で詰碁の研究をしていました。

日本に行った時覚えたとの事でした。ビニール袋に黒石と白石がそれぞれ入っています。大きな手で窮屈そうに取り出す石が小さくみえます。ニューヨークに囲碁クラブのようなものがあるらしい、私より一寸強いかな、そんな程度にしか見えませんでした。

別れる時その白人が

『アイラブ　ゴ』と言って握手しました。もう一人が、『ボケマシェーン』と、両手をひろげ日本語で言ったのがおかしかったです。

今、修禅寺の境内で満開の梅を見ていると、ニューヨークでのことが甦ってきます。「ボケマシェーン」と、「ボケ封じ」に苦笑してしまいました。会員には一人もボケが居ないのも不思議です。

囲碁ファンの皆さん、残り少ない人生を有意義に楽しく過ごしましょう。

コミュニケーションの場として、八幡囲碁同好会（男性は日曜日）、碁友会（女性は金曜日）に入会してみませんか。

『ボケ』ませんよ!!

「市原だより」に出演して

書道(一)　村　上　て　る

千葉テレビの新春特別番組として私達の住んでいる「市原だより」を放映することになり、「わが故郷十年間の変貌」というタイトルで、この街で生れ育ち今は立派に成人した若者達が、市長さんを囲んで市原市の変貌の様子や、将来の市政への期待等をなごやかに語り合いました。

この座談会の中で、現在の公民館のサークル活動のひと駒が紹介されることになり、五井公民館から花道・茶道のサークル、八幡公民館からは書道・お琴のサークルが紹介されました。お正月らしさを演出するためにこのサークルが選ばれたようです。

私達書道(一)のサークルから、竹内たきさん、鈴木一江さんと私の三人が出演いたしました。この番組への思いがけない依頼に、当初私は大分ためらいましたが、意を決して参加いたしました。

丁度放映の一ヶ月前にあたる昨年十二月二日に、リハーサル及び本番撮りが千葉テレビ局で行われました。

私達は当日市原市の送迎バスで他のサークルの方々と、それぞれのお道具を持って、テレビ局へと向いました。

サークル紹介のために用意されたスタジオには、広い部屋の一部に十畳位の和室の舞台装置が出来上っていました。

リハーサルが終り、さて、本番です。

お琴の演奏が終り、次は書道サークルの出番です。用意された机に竹内さんと鈴木さんが座り筆を運びます。私はその脇で市長さん

と岡本アナウンサーのインタビューに答えます。前面、両脇からのカメラと、まぶしいばかりのライトをあびながら……。

＊　　＊　　＊

岡本アナ　書道サークルは結成して何年になりますか、そしてメンバーの構成はどうなっているのですか。

村　上　五年目になります。

書道サークルは四組ありますが、私達書道(一)のメンバーは十五名でございます。メンバーの書道歴はさまざまですが、初心者の方も多くいらっしゃいます。

岡本アナ　お稽古はどの様にしていますか。

村　上　毎月第二、第三の水曜日、午前十時から十二時まで先生のお手本についてお稽古しています。

岡本アナ　ではサークルのPRについて

村　上　私達のお稽古は、毛筆を主体にペン習字も行っております。

主な内容としては、書写練習や、各個人の作品を先生に添削していただいています。又教材になる古典に関連して書道史の勉強もしています。

メンバーの日頃の練習の効果を発表する場として、毎年秋に行われます公民館の文化祭には作品をたくさん展示しています。

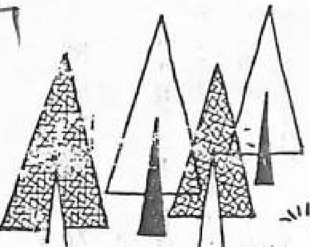
市長さん　書道はいいですね。私も若い頃やっていましたが、今は大変役に立っています。

と、その具体例をあげて下さいましたが、市長さんの温かい寛容なお人柄を感じました。私達の出演時間は五分位でしたが、緊張していたため私は思っていることが充分に発表することが出来ませんでした。

本番が終り、スタジオから解放されて、思わず控室のソファにドォーと腰をおろしました。本当に長いひとときに思われました。

私にとって、はじめてのテレビ出演でとりこしの心労もありましたが、書道を通してこの様な貴重な体験をさせていただいたことをありがたく思っています。

昭和六十三年一月二日十時三十分放映



伝統の音に親しむお箏教室

箏サークル　林　美有記

今年の正月八幡公民館「お箏教室」の面々は、千葉テレビの要請を受けて市原市の紹介番組に出演し、未熟ながらも日頃のお稽古の成果を発表できる機会を得て、一同大喜びでしたが日頃のけいこと違って、ライトの下では内心ビクビクだった事の反省はあったものの、これからの精進に楽しみが増した事でした。より多くの人の参加を希望して、若干の紹介をさせていただきます。

「おこと」は「琴」「箏」などと言われている楽器の通称で、日本古来の「和琴」は、すでに飛鳥、あるいは奈良時代の初期からあ

り、琴は奈良時代に、箏も同じ頃に唐から十三弦箏が伝来しました。
木をくり抜いた長い胴に弦を張った、この種の楽器は、東アジアを中心に数多くの種類があって、日本をはじめ、中国、朝鮮、ベトナム、タイ、ビルマなどに似た楽器があります。
おおざっぱな分類では、一本ないし七本の弦で、弦を支える柱(じ)のないものが琴、十三弦で柱のあるものが箏、二十弦以上のものは瑟(しつ)といわれています。
結婚式の祝辞の中でよく「琴瑟相和し」などと使われますが、合奏して良く音の合う琴と瑟を夫婦仲の良い例えとしたものでしょう。
日本では琴も箏も「こと」と読んで親しまれていますが、この楽器は古くは、僧や学者のものであって、格式ばかり高く女性などは近づけなかったものだと言うことです。
しかし、十七世紀に京に八橋検校(けんぎょう)と言う人があらわれ、目の不自由であった自身の立場から、箏の指導は盲人、習うのは家庭の婦女子と言う原則を打ち立て、盲人の職業としてもひとつの道をつけたと言われています。
今日、箏曲の古典の名曲の中には、八橋検校の手になるものが数多く残っており、又、「春の海」に代表される近代の箏曲の名作の数々を残した宮城道雄も目の不自由な中で、その鋭敏な感覚を箏に生かしていることは興味深いことです。
さて、あらゆる音楽が全く違和感なく取り入れられている今日の日本で、この伝統ある「箏の調べ」が、お正月の街か或は結婚式場など、あらたまった時と場所でしか聞かれないのは残念な事だと思います。
日本の音楽史上においても、非常に重要な役割を果たしてきた箏曲をとおして、伝統的な日本文化の良さ、日本のこころを理解し、身につける事は、国際化の進むこれからの社会で、外国の人々との心の交流にも役立つのではないかと、特に若い人達の参加を期待しております。精神的なゆとりと、楽しみを求める一般の方々にも、手軽に家庭で演奏できる楽器としての「おこと」に取り組む、身近な場所として、教室の扉を開けております。
当公民館では毎週金曜日午後一時から五時まで婦人を対象に、五時から九時までを青少年を対象に皆さんと楽しみながら弾いております。おことを持っていない方でも気楽に参加出来ますので、一度お越しになりませんか。

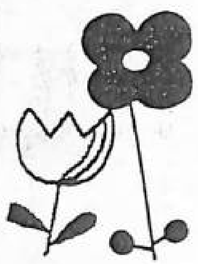
健康で優雅な日々を送る希い

八幡民謡教室　西口奈津子

一昨年暮のこと、私は或る稽古場で、気分が悪くなり翌年お正月にかけては薄氷を踏む思いの毎日でした。幸い大事に至らなく間もなく快復しました。それ以後の一年余りは三ヶ月に一回ずつ、精密検査を受けて自分でも少しでも体質が変えられたらと、まず食事をチェックする為医師に相談して「ライフプランニングセンター」の栄養士を紹介して頂き、一週間のコンピューター診断を依頼したり食事の改善にも努めてみました。
医師が、「そろそろ自信がついて来ましたか。」と云われたのは三、四ヶ月すぎた頃でした。一年以上過ぎた今は体調もよく以前よりも心が軽く、まわりが展けて何も彼も愉しく思える程になりました。ともすれば崩れそうになる気持を強固に保つには健康な身体になりたいと云う希いに他なりません。「健康」「スポーツ」「医療」などのこれからの社会への対応に関する記事が毎日目に入ります。人生八十年、九十年の時代、健康に対する意識が高まって来たのは確か、定年退職後の生活も長いから夫婦が共に行動するペア社会を育て、生き生きとした愉しい生活を歩んで行きたい。
今は毎日がたのしくいつも何かに感謝し、心静かな生活が続けられ好きな趣味を更に勉強していきたいと希っています。

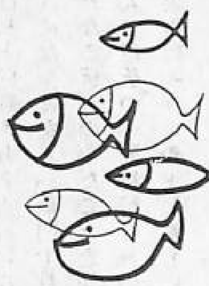
私の姓

英語読書会・ちちの木句会　越智治夫



毎日新聞の調査では、石井、白鳥及び湯淺が千葉県を代表する姓であるように、私の姓は、清家(せいけ)仙波(せんば)と共に愛媛県を代表する姓である。「越智」を名乗る人は殆ど愛媛県出身者(一部は奈良県出身者)と思えば間違いないと思う。
常日頃、私が淋しく思っていることは私と同姓の有名人のいないことであった。最近、俳句を教わるようになってから「蕉門十哲」(芭蕉の高弟十人)の中に「越智越人」なる俳人のいたことを知った。荷兮(かけい)と共に名古屋の住人で芭蕉の「更科紀行」の旅に同行したことで有名な人である。代表作に「うらやましおもい切時猫の恋」がある。
江戸時代に私と同姓の有名人がいたことから、私の姓のルーツをたぐってみた。神武天皇の喧嘩相手(其の后帰順したが)である饒速日命(にぎはやひのみこと)から始り、この天孫の子が宇摩志麻遅命(うましまじのみこと)で物部氏、穂積氏の祖である。物部氏は大和朝廷の有力な氏族として軍事に関与した物部を卒い、有為転変を繰り返しながらも強大な勢力を誇った。この物部八十氏(もののべやそうじ)の中に初めて越智氏がクローズアップされた。代々、伊予国(いよのくに=愛媛県)越智郡に住し、水軍として栄えた、いうならば海賊である。また、一部は中世以降上洛し大和国(やまとのくに=奈良県)高市郡に豪族として土着し現在に至ったわけである。
縁は異なものと云うが、私の家内の旧姓も非常に珍しく、結婚の話があった時真偽の程を疑ったぐらいで「日ノ丸」という、義父の話では以前は「日丸」(ひまる)であったが維新のドサクサで現在のものになったようである。愛媛県伊予市に現存する姓で私の戸籍謄本に明記されている。
私は企業の関東進出により、二十有余年、市原市に住んでいるが、当初、初対面の人からまともに呼ばれたことはなかった。「こしちさん」「えちさん」もっともひどいのは、「エッチさん」淋しい限りであった。もっとも電話帳には当時、私の同姓は載っていなかった。合点のいかないのは、千葉市越智町の地名が現にあり、文字も同じなら、読み方も同じなことである。幸い最近、同姓の国務大臣が出現したので誤って呼ばれることもないと安堵している。
私は人の名前を誤って呼ぶことは最も失礼なことだと思っている。幸い日本語には都合のよい代名詞があるので活用すべきだと思う。しかし乍ら、代名詞を永く使うことは折角の友情にもひゞが入ることがある。

要は早く名前を覚えることが重要だと思う。



趣味を育てよう

パンの花サークル　征　矢　康　子

八幡公民館に、パンフラワーサークルができて、早五年余り、長くお世話になっております。

パンフラワーの素材は、パン粘土です。粘土に油えのぐを混ぜ、そして粘土を練ります。ですから、油彩により鮮やかな色彩と重厚味、その上、半永久的に変らず、褐色、変色がほとんど少なく、深みのある色調が楽しめます。全くの手づくりアートなので、自分のオリジナルです。用途も広く、指輪、イヤリング、ブローチ、バックル、コサージュ、壁掛、盛り花、多種多様に応用できます。

パンの花の宣伝になってしまいましたが、主婦の皆様、余暇を楽しみましょう。作りましょう。

皆で手を取り合って、自分に秘められた病原菌を吹き飛ばしましょう。視野を広げましょう。何か没頭できる趣味を育てましょうよ。

ラウンドダンスと共に

フォークダンス　川　上　伊　都　子

エアロビックスにはじまり、社交ダンス、ジャズダンス、ディスコダンス等、今、世の中は踊る宗教にとりつかれた老若男女が大勢います。私もその仲間の一人です。

ところで『ラウンドダンス』という名前のダンス、御存知ですか？　私達、フォークダンスのサークルでは、この数年、このラウンドダンスを主に練習しています。

野球やテニスに軟式・硬式があるように、フォークダンスにもその種類がいくつかあります。例えばスクェアーダンスがそのひとつです。そして子供の頃誰でも一度は踊った「オクラホマ・・・」や「マイムマイム」のような伝統的なものに比べて、今一番ナウイのが、『ラウンドダンス』です。

とは言ってもこの新種のダンス、アメリカから日本に上陸したのは、もう十年以上も昔のことと聞いています。

ステップは99％が社交ダンスのそれと同じであり、パートナーチエンジも無く、カップルで踊るところも社交ダンスと全く同じです。それならば社交ダンスとどこが違うのかと、よく問われます。

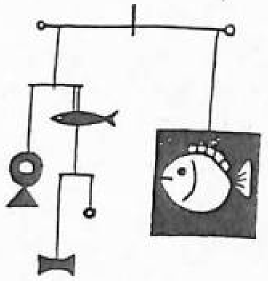
社交ダンスとラウンドダンスの一番大きな違いは一曲毎に決まった振り付けがついているかどうかというところにあります。

今、あるラウンドダンスのパーティ会場で、「慕情」と言う曲が流れたと想像して下さい。曲が始まると全員が大きな輪になり、全てのカップルが同じ方向にしかも同じ動きで流れていきます。日頃別のサークルで練習している見知らぬ人々の集まりであっても、ひとつの曲を足並そろえて踊れるということは、文字通り輪から和への変身です。ラウンドダンスの醍醐味はここにあります。

私の脚は二本です。けれどもその二本の脚を使ってのステップの種類は星の数にも似ています。覚えても覚えても新しいステップが待っています。

どんなけいこ事でも同じですが、人間は今自分ができている事よりも、ほんの少しだけ難しい事をしてみようと望むものです。

毎月のように新曲が生まれていると聞いていますが、それだからこそ一曲でも多く次のパーティでは踊れるようになりたいという単純な願いにつられて、公民館へ通い続けています。



88-4

ひばり読書会

クリスマスとお正月　小川光子……25
「小さき者へ」を読んで　野田和子……26
「台所から北京が見える」を読んで　宮吉慶子……26
「鍋の中」を読んで　石橋みな子……27
「太陽の子」を読んで　野城千鶴……28
「生まれ出づる悩み」を読んで　白土貞子……28
「水のように笑う」を読んで　佐藤禎子……29
「太陽の子」を読んで　西村澄子……29
千葉県東方沖地震　磯部紀代子……30
「将軍」を読んで　白鳥治子……31
「てだのふあ（太陽の子）」を読んで　西村妙子……32
「車輪の下」を読んで　上田霜枝……32
「平家物語」と私　桑原千香……33
一人旅　松本尚子……34
「人間の罠」を読んで　菊田浩子……35
「事件に生きた女たち」を読んで　卜部恵美子……36

クリスマスとお正月

小川光子

私は満六才の折りは東京市市ヶ谷に住んでいた。近くの飯田橋の教会に毎日曜ごと通い、クリスマスは年中行事の一つとして心の中に叩き込まれていた。私の幼い時代は皆総てがその様に…と云う訳ではなくごく一部の人達だけの習慣だったと思う。当時はクリスマスツリーは教会だけで家には無くプレゼントはカードを貰うだけで家に帰ってどんなにこれ見よがしに靴下を枕元に置いて寝ていてもプレゼントは入って無かった。サンタクロースは家には来なかったのである。でも家中で迎えるクリスマスは何か浮き浮きした気分が必ず有った。

今私はクリスマスは千葉の教会で主人と共に祈り、老人だけの軽い祝膳を共に囲んでそれなりの気分を味わう事にしているのだが…昨年のクリスマスを教会で済ませ大勢の友と共にお昼を頂き思いきり歌って散会した後、千葉のそごうに立ち寄ったがそこには年の暮れの慌だしさが見られて子供の頃から親んでいたクリスマスの浮々した気分が無かった。そして直ちに私達は横浜のそごうに向った。それは私の友人が院展に出品している絵を見に行く為だったのだが横浜に着いた途端、子供の頃から味わっていたクリスマスの浮々したものが有った。懐かしかった。

こゝ四年程、私は主人と共に白子海岸に初日の出を拝みに行っている。

初めての年、午前五時に辰巳台を出発、夜道を海岸へと急ぐ、浪乗り道路に着くと車は東側にビッシリと並び私達もその間のよい処を選んで横付けする。暗い砂浜には五、六個所、焚火を囲む黒い人影が見える、寒いので暖をとるのであろう。天空がうす青くそして淡いローズ色に色付くと除々に砂浜にも色彩が浮き出て来る、そして東の水平線らしき一角が一きわ淡々と青く白く替り行くとちりめんのしわの様な海面が灰色に浮き立つ、と一条の金色が海面を渡り浜辺をさしてキラキラと輝く。私達もそれを見て車を出て寒風にさらされ乍ら手を合わせて待つ。水平線が金色に染る。と見るうち日輪のへりがダイヤモンドの様に輝くと砂浜のあちこちから「おーッ」と声にならぬ声があがってかしわ手を打つ音が処々に聞こえ私達も礼拝して日の出る迄動かない、砂浜に立つ人々も全身金色に染り美しい。私はこの気分が好きで出掛けるのだが昨年頃から雰囲気が異ってきた。

砂浜に大勢の黒い人影が動き焚火の数が増した。暗い海岸近くを水しぶきをあげて自動車が走り廻る、若者たちのシルエットが動き廻る賑やかな声、音が有るのだろうが車の中に居る私には聞えない。幸いな事だ。何時もの様に天空が淡くローズ色に変化すると東の水平線の一角が淡い青色に浮き立つ、でも今年は特に東に雲が多く初日の出は望めないかもしれない。天空は美しいローズ色に染まるが海面に金色の光は無く柔らかなちりめんの様な海面がベージュ色になると何と、砂浜に花火が何発もあがり、白い凧がそこ・こゝに舞い昇った。「おーッ」と云う声もかしわ手の音もない。雲の向うのお日様の姿は雲のへりの金色で想像するしかなかった。『初日の出』のセレモニーではなく「フェスティバル」に白子海岸は変化していたのであった。

何の変哲もない毎日繰返される「日の出」と云う自然現象に正月の元日だけ課された「初日の出」の想いを込めた世代の差を、ほろ苦く噛みしめた年頭であった。

「小さき者へ」を読んで

（有島武郎 著）

野田和子

先日出先で、上手に歩けるようになった男の子が、私の傍に来たりして、危なっかしくハラハラしていました。私と幾つも歳の違わないと思われる端正な男性が来て、用事をしていると、男の子は、全身の力で両手を挙げました。すると男性は荒々しく抱き上げ、左手で先程の続きを始め、男の子は同じ事がしたくて片腕の中で暴れています。まるで眼前が別世界のように思われて、思わず魅入ってしまいました。エリート女性の著しい社会進出を見聞きする昨今、忘れがちだった異性の逞しさを感じました。

『小さき者へ』は、作者が信仰と妻を失い残された幼い男の子達への父性愛を描いた自叙伝です。大正六年十二月七日朝から原稿用紙に向かい、夜ふけの二時ごろまでに一気に書きあげたのです。

子供達の母は結核になり、二年間の闘病後六才・五才・四才の子供を残し他界しました。金銭面は自由でした。隣に住んでいた理智的なU氏が同じ病気になったが、貧しく薬を飲めず祈禱にすがり、老母と幼児を残し全く無資産で死亡する境遇を、自分らの上流社会と比較して反省しています。子供達にも考えるようにと書いてあります。今は時代が変わり、創造性という言葉をよく耳にします。戦後生まれの私には、いつの世も死というものは平等で、運命のようなものが存在するように感じられました。

そして、父を踏台にして恐れず人の世の旅に登るように。最後の一句『行け。勇んで。小さき者よ。』が印象的で、私は遠くから微笑んでいたと思いました。

作者は、大正十二年（四十六歳）に波多野秋子という人と縊死自殺した。本文中、子供達の母が『子を思う親の心は日の光世より世を照る大きさに似て』と詠じたとも書いています。ふと、淋しいものが胸を過った。

「台所から北京が見える」を読んで

（長澤信子 著）

宮吉慶子

三才と一才の男児をもつ二十五才の母親が、十数年後の子供達が成長し、親離れした後の、自分の生きがいに不安をいだき、新聞の人生相談に投書をする。家事のひまに自分のライフワークをしっかりと身につけたいと。回答に「人の手がけぬ外国語を家事の片手間にマスターしていくのもプラスになります」その言葉が中国語と彼女を結びつけた。その後十年間は具体的な夢ができ充実した気持ちで育事に没頭する。夫の大阪への転勤を機に、三十六才から中国語の勉強を始める。その勉強ぶりに鬼気迫るものがあったと夫は書いている。学費は自分で稼ぎたいと、午前中は病院、午後から准看護学院へ、週一回夜間の中国語学校へという日々が続く。もちろん家庭では主婦の仕事がある。四年目に通訳ガイドの試験にパス、翌年准看の資格を得る。自分の生き方を真剣に求める人達で「四十雀の集い」という会をつくる。それぞれの体験談がお互いの励みになり刺激となる。通訳初仕事は日中国交回復を記念し、北京と東京の定期就航第一便のお客様を迎える事で、血の通った中国語にふれ、本場の生きた中国語の洗礼を全身に浴びたようだと書いている。その翌年長年の夢であったあこがれの中国の地に、針麻酔視察という目的をもって降り立つ事ができた。思い出多い七年間の大阪生活を終え、夫の転勤で又東京に帰る事となる。引越しの荷物で中国語関係

の本とノートとテープとカードで、ダンボールが十個以上出来たという。彼女の宝物である。東京の生活が軌道に乗り始めたころ、母にボケの徴候が見え次第に進んでいった。そんな母に家族全員がやさしかった。母の姿は未来の自分の姿のようにも思えたが、子供の成長を側面からただ見守るだけにしようと決意する。

話せるだけの中国語ではなく、その民族の歴史、文化、風俗習慣を知るため大学に入る。次第に通訳としての仕事もふえ、一年間に十回位中国を往復する。そして生きがいとは熱いものが胸をよぎる瞬間ではないかと作者は思う。これから六十、七十才に向けて胸のときめきが聞こえてくるという。平常の生活の中で自分の生き方に問題意識を持ち、目標をしっかり見つめ、その目標に向かって昼夜たゆまぬ努力を続ける。それも一人よがりにつっ走るのではなく、回りの人達の理解を得、家庭生活の中で非常に見事な程、合理的に勉強している。勉強量としては大変なものであるが、彼女特有の創意工夫でリズミカルとでも言いたい様な方法で能率良く進められていく。これは素晴らしい事だと思う。そして彼女は現在に満足する事なく、次の熱い瞬間を台所仕事をしながら求め続けるだろう。そんな彼女を夫は暖かく見守るだろう。

温水にとっぷりつかった生活をしている今の私に良い刺激になった。私も熱いものがよぎる瞬間を求めてみたくなった。

「鍋の中」を読んで

（村田喜代子 著）

石橋みな子

田舎に住むお婆さんのところで、十六才から十九才のいとこ同士四人の孫が一夏を過ごした時のこと。元気でぼけてもいないと思っていた八十才のお婆さんの記憶によって孫達は自分達の家系の中の闇の部分を知らされることとなる。気違いのおじや、不貞をはたらいたため天罰がくだったおじがいた事、また自分の親さえも実母ではないという事などなど。

孫の一人、たみ子はそれらの人々や現象を、お婆さんの記憶の大きな鍋の中で浮き沈みしながら踊らされる具のようだ、と思うのである。そんなお婆さんの鍋は怖い……と。

だが、その後しばしば、言ったことさえも否定したり、幾通りにも変化するお婆さんの記憶に、孫達は〝お婆さんの記憶はでたらめなんだ〟と結論を出すに至る。そして、たみ子は考える。結局、真実はわからないが、無理に解明する必要はない。現在も自然に生きているお婆さんにはかなうはずがないのだから、自分も現在を信じて生きていこうと思うのである。

作者は、文中で〈年寄りとはなんと不思議な人達なのだろう〉と言っている。

そうだ！ 読みながら何とも懐かしいものに出会ったような気がしていたのは、こんな体験を私自身がたみ子達の年令よりもずっと下回っていた時にしており、幼稚な思考ながらも「実感」としてその時強く印象に残ったことがあったからなのだ。不思議な共感をおぼえたというところだろうか。

小学校の頃、私も毎夏、田舎にあたる養祖母のところへ遊びに行っていた。その頃すでにかなりの年令であったお婆さんは、テレビ等もない時代であるから私相手に、親せきや近隣の人達の事など実に様々な事を話していたように記憶している。その内容は、時代のせいもあったろうが、どちらかというと良い事よりも哀しみの方が多かったように思う。

だが、当時は当然の事ながら私の生活は遊びが中心で、一歩外へ

出ると田んぼではどじょうが、山ではトンボやバッタが待っていたから話はすぐ忘れたようだ。それでも、そんなお婆さんの言う事を理解出来ないなりに、大人の世界はなんていろんな事があって大変なんだろう、複雑な社会なのだ、とはずっと思っていたものである。

そして、年寄りは親達とは違った考え方をするとも思ったことである。まず、すべての事に寛容で、受け入れたように見えてすぐ否定したり忘れたり、またとんでもない時にそれらが出てきたり、と不思議だったのである。たみ子達の結論のようにお婆さんの言う事は〝でたらめだ〟とは思わなかったけれど、当時の私にとって、現実感の薄いゆったりとした田舎での時間は、どんな事件を聞かされていたとしても、きっとたみ子のように自然の中に置いてこられたに違いない、とさえ思える空間だったように思う。

ともかく年寄りとの交流があれば、誰でも多かれ少なかれこの「記憶の鍋」を経験していると思う。何もかも「鍋の中」に入れて生き続けている（いた）年寄りに、私は脱帽なのだ。

芥川賞を受けたこの「鍋の中」を吉行淳之介氏が評して「この本には不思議なユーモアがある」と言っているが、私も読み終えて、同感と手を挙げたくなったことだ。

「太陽の子」を読んで

（灰谷健次郎 著）

野城千鶴

〝てだのふあ〟とは沖縄の言葉で、太陽の子という意味だそうです。

この作品を読み、沖縄戦の激しさで、多くの人の命の犠牲、戦争の後遺症とも云うべき、様々な心の苦しみを胸の痛む程感じました。

小学校六年生の主人公、ふうちゃんと沖縄亭に集まる沖縄出身の人達を通して本当の勇気、命の大切さ、やさしさを、教えられました。戦争による悲惨さは日本中にあり、犠牲者の命の尊さ、特に若く散って行った命を惜しむことは、人々の心に強く残っていたのにもかかわらず、喉元過ぎれば の例えの如く、高度成長を遂げた現在、思いやり、やさしさ、命の大切さがだんだん失われようとしている現状を、作者は我々に問いかけているのではないでしょうか。

多くの人の命の犠牲の上に今の日常があるという事をつい忘れて、ともすれば不満、不平の方向に陥りがちな心を反省させられ、人間として一番大切な、心のあり方を考えさせられた。私にとって心に残して置きたい一冊の本でした。

「生れ出づる悩み」を読んで

（有島武郎 著）

白土貞子

この本は読み尽くされていますが今年も選ばれました。

一九一八年北海道岩内出身の画家木田金次郎の少年から青年期を作者への手紙、スケッチ帖等をもとに書かれています。

画才に恵まれた青年の貧しく厳しい生活の中で画に限りなく情熱を持ちつづけた姿に作者ならずとも感動します。

北の荒々しい海で漁夫の激しい労働に追われる様子は、私も漁業の盛んな街に育ったのでこの青年の暮しの風景はなつかしく子どもの頃を思い出しました。

船を出しても大漁の保障はなく徒労に終る事もしばしば、日焼の顔でボヤいていた男達や、急な吹雪で遭難し一夜明けると太陽がまぶしく雪に輝き昨夜の悪夢に茫然としていた大人達に自然の力の恐しさを感じた事を覚えております。

遭難から無事帰った時に「今夜ははあおまんまが甘えぞ」と父親の言葉につくづく生きていた幸せが伝わって来ます。

作者のハイレベルの生活と青年の環境があまりにも隔りが大きすぎるが、「紙の中に生れ出づる」苦しみ、あせり、藻掻きは同じ創作の道を歩む作者に相通じるものを感じます。

人間個々にもっている天性や感性に北の端に生まれた一人の青年を葛藤のうずに巻きこむ、しかし平凡なものにとっては「光る」を持った人生は尊くすばらしいと思い、これを磨くことにより神聖な芸術を導びかれて行くことを信じます。

岩内出身の松本さんが何年か前、小田急デパートで行われた木田金次郎の個展のポスターや絵葉書を持参され郷里のお話をされました。同郷の人の心の暖かさを感じました。

「水のように笑う」を読んで

（関川夏央著　双葉社刊）

佐藤禎子

著者は一九四九年生まれの、いわゆる団塊の世代の人である。著者が三十五才～三十七才までの、生活の断片記録四十九編から成っている。

『わたしたちは時代の子である。時代から自由ではない。時代がつくりあげる価値観からも自由ではない。……五〇年代から八〇年代まで時間をつらぬいてかわらないもの、かわり得ないものはなにか、わたしたちはなにに強く束縛されているか、束縛されつつもどんな幻想に慰安を見い出しているのか、それを知りたいと書きつづけたが……』とあるが、本当に身の丈で物を見、ユーモアとアイロニーに満ちた文章は大変楽しい。幼時から名うてのひねくれものでとおっている、などと言っているが、ひねくれとは、表面だけ見て事足れりとせずに横から裏から物が見られることではないか。

一見軽く冗談をいいつつ時と共に流れていくポーズをとりながら、根っこのところはそうじゃないというのが、緑雨について書かれている部分にもうかがえる。明治の作家斉藤緑雨の死の周辺を書いた編では、明治の知識人の生命をつくしての仕事ぶり、威厳に満ちた生と死を、文筆を業とする人として大変重くうけとめている。大勢の人々がのりこえられなかった貧困や病苦からはかなり開放された現代、信じられない程の便利さや平均寿命の延びなどである面の豊かさを享受しているわけだが、ひとの知恵、原稿の質は昔の人に比べてあがっているとは思えない。こういうことに対しても著者は、自虐を含んで〝水のように〟笑っているのだろう。

著者はこの本を同時代人に読んでもらいたいと言っている。彼の定義する同時代人とは、現状に飽食せず、同時代的現象を真摯に受けとめ、冷静に批評しようと試みる人。批評する精神を内包しつつユーモアを失わない人。私もつとめて著者の同時代人でありたい。

「太陽の子」を読んで

（灰谷健次郎 著）

西村澄子

どんなかと思い乍ら読みはじめるうちに、作者のお腹のなかに云いたいことが沢山あり、伝えたい言葉があふれる様にあって、それがひと思いに流れでてくるような感じでした。

「太陽の子」のふうちゃんは、六年生。神戸で琉球料理「てだのふあ」おきなわ亭」（てだは太陽。ふあは子。）をやっている家の女

の子。お母さんの手伝いをしながら、神経症のお父さんを暖かく見守り、勉強も頑張る明るくちょっと甘えん坊のところもある気のつくやさしい子。

お店に集まる沖縄出身の若者や老人の生き方に目をむけると、彼らがなぜか黒いかげを引きずっているのに気がつく。沖縄の悲惨をきわめた話は誰もしたがらない。

ふうちゃんのお父さんも、南部の海岸で砲弾をさけて逃げまわったのが原因で、戦後数十年を経て、精神的妄想におちるようになる、発作のたびに、ふうちゃんを助け出さなくてはと思うようになる。

病院の保護室に入れられた時、ついに行った「オジやん」は「心の病んでいる者ほど人の心が必要なのだ。」と一緒に出して貰えるまで頑張ったそうです。人に対しては思いやりが深くなければ思っていても出来ないことです。

受持の若い先生と手紙の交換をしているうちに「えらい人」というのは「えらい政治家。すぐれた仕事をした芸術家。学者。名の残るような実業家と云うような人達を思っていたが、今人間がえらいと云うことはそんなことではないと思いはじめています。…どんなに辛い時でも、どんなに絶望的な時でも、本気で人を愛することが出来る人が、えらい人なのだと思う。」とふうちゃんは、人間の根源的な優しさに気がつくようになります。

友達の若杉とき子から先生への手紙は、反抗している理由など、気持が読んでいる者にも切実に伝わってくるようでした。

人に裏切られてばかりいたため心までゆがんでしまった「キヨシ少年」をふうちゃんをはじめ店に集まる人達で、気ながに暖かく見守ったため、素直な人の心の痛みがわかる少年に立ち直ります。

私も沖縄に行く機会があれば、観光目的だけでなく、沖縄の本当の過去をしっかりと見てこようと思っています。

この本は大人が読んでも考えさせられましたが、今の子係達にも、ふうちゃんの思いやり、やさしさをわかってもらいたく、是非読んでもらいたいと思います。

千葉県東方沖地震

磯部紀代子

グラッグラッと揺れた時読書会の為公民館の一階会議室にいました。その日は年末のため一週間早く十二月十七日でした。縦揺れではないかと思った時、十年位前の伊豆の河津町下佐ヶ野の震度七の直下型地震と比べていました。あの時は夜中で山が地響きを立ててゴウーと凄い勢いで襲って来るようでした。あの時よりは少し弱いかなと思いつつ時計をみると十一時過ぎでした。扉を開けておかなければと歩き出しましたらおさまりました。鉄筋建築物での地震は圧迫感が強く感じられました。皆さんと一緒にいましたので、それぞれの人の動きに性格が表れていました。

話し合っていた課題本の「太陽の子」灰谷健次郎作の本はとても考えさせられる事の多い内容で、沖縄八重山諸島の風俗、習慣等、波照間島が果ての美島と云われていること等作者の教師としての目が隅々迄行き届いていて、日本と沖縄の歴史、人頭税、猫ユンタという歌に託して虐げられた女の気持を後の世に伝えたり、草花遊びの花人形、クバの葉の舟、ヤラブの葉の凧等、子供の夢をふくらませる楽しい野辺遊びの事、パナリ焼の壺は赤土の粘土にカタツムリをまぜ、スキの葉で焼き上げる世界でも例のない新城島の焼物であること等、精神を病んだ父親と不幸や悲しみ、下積みの生活から逃れられずに生きている意味や、死につながる悩みや苦しみを追求する内容にもかかわらず、全体に明るい光が流れている本で深い感銘を受けました。

午後からの「ちちの木」俳句会も地震直後にもかかわらず十五名出席、いつもの通り済ませて帰宅しましたら、我家は棟瓦の破損、ガラス陶器等かなりの被害がありました。

震度五、五千葉県下の瓦の破損は六万世帯以上、余震も数え切れない程でした。一月末の報道では地盤の固いしっかりした地域に被害が多かったと聞きました。これからも日常の注意が必要だとつくづく思いました。

私の家の近所はほとんどの家で棟瓦の破損が見られますので、修理はいつになるか見当もつかない状態です。

千葉県は半島ですので大昔は海だったのではないかと考えられますが、住みやすい土地柄ですので、天災のないことをただただ祈る毎日です。

「将軍」をよんで

（芥川龍之介著）

白鳥治子

二〇三高地の戦いを読んで、ふと第二次世界大戦の時の日本と比較してみた。その敗戦の最大原因は、指導階級にある人々の、あまりにも浪花節的、及び非科学的な物の考え方ではなかったかしら？

機関銃のロシア軍に対し、三八式歩兵銃で手向った日本軍。以後約半世紀後の日本の竹槍戦法は、負けて当然である。二〇三高地の戦いは、大人と子供との戦いである。以後のアメリカと日本の戦いは、全くレベルの異なる国との戦争であった。

二〇三高地の戦場のすさまじさに、武士道とは死ぬ事との、儒教的精神の乃木将軍に肩をたたかれ、「お国の為に死んでくれ」と励まされても、死の恐怖に発狂する兵士。それでも、次から次と死にくる日本兵を見て、ロシヤ軍は恐ろしくなったのか、二〇三高地は陥落したのであった。

軍神、乃木希典の胸に輝く多くの勲章は、その陰に、どのくらいの兵士の命が失われたのであろうか。

明日の命のわからない戦地の兵の為の慰問劇は、兵にとっては、内容が何であろうと最高の喜びであった。だが、それが乃木司令官の好む内容の芝居でなければ、彼はこれの中止を命じるのであった。外国武官も、この乃木の態度を大いに批判していたのである。

儒学者、玉木文之進と、その甥吉田松陰を師とした乃木は、喜怒哀楽の表現をしないのだ。人間だったら、うれしかったら笑い、悲しかったら泣いてなぜ悪いのか。精神主義の日本は最後までそれを押し通して敗戦を迎えたのであった。

誰でも死は恐ろしい。特攻隊に覚醒剤を注射して出陣させる。生き残りの隊員は覚醒剤中毒となってしまった。戦後の非行青少年の第一ピークのトップは、「特攻帰り」であった事に対して、何のお詫びの言葉もない。

神さりましし大君の、御あと慕って死んで行く乃木の正装写真を、かつての部下、中村少将はこれを応接間に掲げていた。それがいつのまにか、十七世紀のバロック絵画の頂点にいたレンブランドの自画像に変わっていた。

少将の息子が変えたのである。乃木を尊敬して止まぬ少将であったが、ゼネレーションを認めた彼は、これに反対しなかった。

レンブランドは多くの自画像を書いた人である。ありのままの自分自身を見つめ、自分の内面を深くえぐり出して画いた画家である。

それと比べて、乃木夫妻の正装の写真は、あくまでマスコミ用の為ではないかと考える如何にも江戸っ子、芥川らしい皮肉を感じる。
読後まもなく「二百三高地」という映画を見た。「さだまさし」が主題歌を唄っている。
山は死にますか。山は殺しあいをしますか。
川は死にますか。川は殺しあいをしますか。
切々と語りかけるような歌声に、日本がもしここで負けていたら……万感交交であった。

「てだのふあ（太陽の子）」を読んで

（灰谷健次郎著）

西村妙子

灰谷健次郎。彼の作品と見ただけで、やさしい兎の目が笑えむ、兎の目は子供達の目か、又、それを育む心を持った大人の目か。いや著者自身の目に違いない。

この物語もてだのふあ沖縄亭に集まる兎の目を持った人達ばかりの織り成す、哀しくも暖かさで胸が一杯になる作品である。復帰前の沖縄で、必死に生きて来た人達の思いに、戦争を知らない私でも申し訳けなさで一杯になる。主人公、ふうちゃんの明るさと、お母さんの賢さ、戦争の犠牲となって精神を病んだお父さんの律儀さ、傷つき易いキヨシ少年の純心さ、愛する人達を守り抜く、たくましさ、そして。てだのふあ沖縄亭に集まる人達は皆、この上なくやさしい。それは、辛く哀しい延長線上にある本当のやさしさだから、読者に迫力を持って訴えかけてくる。昨年の天皇の沖縄訪問、結局病気で皇太子が代理を務められたが、代読した天皇のお言葉を私は深い関心を持って、一語もらさず聞いていた。もうがっかりして、はっきり言って腹が立って来た。今は言論の自由で、何を言っても差しつかえないのだが……。新聞を見ても、その事に関する国民の非難の声は、とうとう見当らなかった。私と同じ気持、ましてや、沖縄の人ならば、もっと激しい感情を持ったであろう。天皇訪問阻止が、あれだけ叫ばれていたのだから……。空港におり立って、土下座をするぐらいの事!! しかし誰もそんな事を公言する様な者はいない。いたとしても、報道などされるわけがない。政治的な思想でも何でもなく、ただ率直な感情として、沖縄の人達の今までの辛酸苦をねぎらい、謝罪の言葉が欲しかった。いや、もうやめよう。

この作品を読み終えて、何とも言えない暖かい涙と共に、希望、勇気、生きる、だから人間は素晴らしい、月並な言葉でしか表わせなくて腹立たしいが……。まさに、灰谷健次郎作品であった。灰谷作品の〝兎の目〟、〝先生どないしょ〟という詩など、やさしい、暖かさと共に、どこか毅然とした、しなう事があっても、決して折れない力強い信念の様なものがみえる。子供達には、こうした大人が必要だとつくづく思う。子は親を選べない。せめて、それに近い大人でありたい。

「車輪の下」を読んで

（ヘルマンヘッセ著）

上田霜枝

不勉強な私のため或日友達が何冊かの本を運び込んでくれました。その中の一冊の表紙に「子供の心と生活とを自らの文学のふるさととするヘッセの代表的自伝小説」と書かれた文庫本がありました。ヘルマンヘッセ、以前耳にしたような気がする名前でありました。

詩人だったか小説家だったか定かでないままに読んでみることにしました。

小さい町に住むヨーゼフ・ギーベンラート氏はごく普通の仲買人兼代理店主だった。商才も人並で町のおやじ連と共通の読書といえば新聞に限られ、貧乏人のことは餓鬼とののしり、裕福な人間のことは成り上り者とそしり、内的生活は俗人のそれだった。彼には一粒種の自慢の男の子があった。ハンスである。彼は疑いもなく天分のある子供であった。教師も牧師も同級生も皆少年が鋭敏な頭の持ち主であることを認めた。とにかく特別な存在であった。当時小さな町では官費で神学校に行くことが一番の出世の糸口であった。ハンスも州でただ一人皆の期待と名誉を担って神学校へ入学するが、彼自身は気の小さい神経質な子で名誉と期待にかけて精神的動揺は大きかった。寄宿舎生活が始まるがきびしい規則と、それぞれ個性をもつ少年達の共同生活にハンスは戸惑った。その中でハイルナーは自分の考えや言葉をもち詩を作り自由な生活を楽しんでいた。学校の規則に従わない彼に誰も友達はいないがハンスとはお互いに友達であった。その内ハイルナーは学校を追われ、ハンスもノイローゼになり退学する。そして皆の期待と羨望の中から遠ざかり、反対に同情と変人扱いされながら肉体労働者となる。やがて酒を知り、恋も知り、かつての天才少年が又、別の社会で悩むようになる。

これが私の拙い読解力でつかんだ大要です。

ハンスがヘッセ自身ですが事実はハイルナーの方が近かったと云われています。秀才と認められるが故に少年らしさを捨てて期待と暗示に怯えながら悩みぬいてノイローゼになります。

この小説は明治三十九年の作品ですが、今の時代も変わらない事実があるのではないでしょうか。丁度受験の季節、子供達のことを本当にどれだけ周囲の人々が知っているでしょうか。

ヘッセは少年時代自殺を計ったことが度々あったようですが「神がわれわれに絶望を送るのはわれわれを殺す為ではなくわれわれの中に新しい生命を呼びさますためである。詩人には自分の力でなるほか仕方がないと悟り危険な試行錯誤をくり返し独学で文学修業した。」と晩年書いています。

自殺の記事を新聞で見るたびに子供達は行きづまると死ということをむしろ詩的に美しく考えるのでしょうか。死に急がないで徹底的に悩みぬく強さがあればあの少年少女の中にすばらしい文学者が出たかも知れないと思うのは苦労知らずの凡人の戯言でしょうか。とにかく世界的な文学者が生まれるには子供の時から非凡な生き方があったことを知り、これからは少し違った見方で本を読む事が出来るのではないかと思えてきました。

「平家物語」と私

桑原千香

「俊寛」を母と共に鑑賞したのは、いつの頃であろうか。その時も是非「平家物語」を原文で学びたいと考えた。そしてある夏、薪能で又「俊寛」を楽しむ機会に恵まれ、いよいよその感を強く持った。

師事するならば、絶対に一流の講師でなければ意味が無いという思いがした。

幸い「平家物語」の舞台を何回もご自分で歩かれた杉本苑子先生に教えて頂ける事になり、現在に致っている。先生の話術にすっかり魅せられて、少々の体調の悪さも何んのその皆勤した。非常に残念であるが、先生のお身体が悪くなられ、一月で終了する事になっ

た。下巻は田中澄江先生が引受けて下さる。又違った味わいが有るのではと、今から期待もしている昨今である。

能面から受けた感じでは、どうしても俊寛三十八才とは思えなかった。原文に接して初めてわかった。俊寛で使用する面はとにかく物凄い、悽愴である。

今年盛夏、「能面はミステリアス」展に、国立劇場資料館へ一人で足を運んだ。

やはり能に親しむならば、絶対に古典文学がしっかり頭に入ってなくては、話にならないとつくづく感じた。

又、全巻を三十分間にした、前進座の嵐圭史氏の朗読も素晴しかった。琵琶で木原錦秀女史の「那須与一」の段も心深く味わいのある演奏であった。新春には又木原女史の「盛綱先陣」を楽しむ事になっている。今からとても待ちどおしい。興味の有る皆様もお誘いしようと思っている。

又、八幡公民館の図書室の桑原様に杉本苑子氏の著作を沢山読ませて頂けて、本当に感謝致している。

このようにいろいろな形で「平家物語」を勉強出来る事を幸せだと思う。今度は絵巻物展等々も足を運びたいものである。そうだ！講談を聴いてみたい。そして時間と体力が続くかぎり物語の舞台を自分自身で歩き確かめたいと願っている。

一人旅

松本尚子

思いたったら吉日で、ふっと姉崎から離れてみたくなり、側に有った時刻表に目を通す。今時刻は九時だった。あまり遠くには行けないし、日帰りだから家をあけるとなるとそこは主婦、頭にうかぶのは、帰ってからの食事の用意だった。そうだ、カレーライスは忙しい主婦のために考えた料理なんだ、なんて自分勝手に思ったりして、夕食を作っておけば、我が家の欠食児童に文句を言わせないですむのです。ついでのホームベーカリのスイッチも入れて、タイマー付なので、学校から帰って来るころには、焼きたてのパンが出きているのだ。便利な物は、上手に使いこなさなくては、一日の時間がもったいなく思います。子供には「PM七時までに帰る。」と、書き残して、姉崎発十一時五十分、快速逗子行に決った。サッサと身仕度をして家を出た。

天気も良くて、少々風が強かったがそんなのは気にならなかった。窓ぎわに席を取り、一駅ごとに見なれた景色なはずなのに、なんともきれいに見えた。汽車に揺れながら考えごとをするこの感じが、たまらなく好きなんです。思えば、私が姉崎へ越して来たのは今から十三年前、その三年後に六才の娘と四才の息子の手を引いて、ひばり読書会にお世話になりました。子供が大きくなってから何かをしなくてはと考えず、逆に小さくても何か出来る事はないかと思っていた事が、本を読む事だったのです。本当に良かった、沢山の色々な本に出会って。ひばり読書会のメンバーも多少の入れ変わりはあったけれど、心なごむやさしい人達ばっかりです。この縁を大切にしていきたい、いつまでも……。

長澤信子さんの、「台所から北京が見える」この本との出合いも又、これからの主人との老後を楽しく過ごして生きる事のヒントになりました。年を重ねても、気持だけは明るく若くありたいものです。

逗子に着いたら、海でも見ようと思っておりました。なんせ思い付きの旅ですもの。

姉崎から二時間十四分かかり、揺られ、揺られ、いろいろな事を考えていたようにも思ったが、早く着いたように感じられました。

逗子の駅に着いて、すぐに帰る時刻を調べる、手帖にメモして、君津・木更津行が一時間に二本あった。千葉までなら何本もありました。逗子の駅の回りはこじんまりとしていたが、この駅にふさわしい雰囲気がありました。おりてすぐ右手に交番があり、広場には沢山のタクシーが止まり、広場のすぐ近くには商店がありました。風が冷たかった。二月ですもの寒くて当り前、とにかく歩いてみよう。すぐに目に付いたのが魚屋さん、沢山の魚の中に、なんともうまそうなナマコがありました。大きくて二個入を買ってしまいました。ビニールの袋をぶら下げて又歩き始めました。この寒さでは海を見るのは無理と思いつつ、とにかく海の道を聞こうと、通りがかりの子供に声をかけたら、親切に教えてくれました。足のむくままに歩いていたのだが、今歩いている方向が海へむかっていたのだから、すごいカン・・・。お茶屋の前を通った時に、主人の好きなほうじ茶が切れていた事を思い出し、いつもなら安いのを買うところ、少少高いのを買いました。

そこで私の気持はユーターンしたのです。時計を見たら君津行に間に合いそうなので、小走りにかけ出しなんとか間に合い又窓ぎわの席に着いたのです。

私の一人旅なんて、逗子までナマコとほうじ茶を買いにきたのかしら、そう思ったらそのまま眠りについたのです。途中、東京と千葉で目があき、五井まで眠れるヘアピン年令に。

なんともしまらない一人旅であったけれど、病み付きになりそうです。

「人間の罠」を読んで（曽野綾子著）

菊田浩子

曽野綾子がすぐ浮んでくる様な題名である。

雪子というまだ大学へ通う女性が物語の主人公で、次の重要人物は、生まれたばかりの雪子とその母親を捨てて、インドのライ病院で働く父親である。

さて物語はこの父親に会いに行こうと決心したところから始まる。父親の住んでいるインドのアグラという都市は、タジ・マハールという世にも美しい大理石で出来た宮殿があり、観光地として名が通っているのであるが、一方貧困とライ病も共存している。

雪子を通して作者の人生観、哲学がひしひしと伝わってくるのであるが、小説として見る時、まだ年若い、人生経験も浅い女性に、この様な気使い、考え方、態度は少し無理がある様に思う。解説者がいみじくも書いている様に、「見過ぎた人」の目であって、それは深い傷を体験している人でなければ理解出来ない見方でもある。

雪子は母と共に実父に捨てられたのであるが、物心つく頃には、敬虔なクリスチャンである立派な養父と、魅力ある実母とのあふれる愛情につつまれて、経済的にも何不自由なくすくすくと育っている。

この様な環境の若い人が、このヒロインの様な感じ方、見方が出来るとは私にはどうしても信じられない思いがする。

読み進みながら、この小説の主人公は、もっと人生経験豊かな女性でなければ…と何度も思ったことである。

準主人公である雪子の実父は、〃インドのライ病院で働く日本人医師〃なんて新聞の見出しになる様なタイプの人間とはまるで反対の、仕事のない時は朝から酒びたり、自分が深く関わった女性にも何ら責任を感じない、といった男である。しかし雪子は短期間ではあるが、多くの問題をかかえたこの町で父親と共に行動し、その仕事ぶりも、酔いどれの怠けぶりも、又孤独に堪える姿も目の当たりにして、実父に対する自身の中にある感情に変化が生じたのを感じている。

この作者は、この世はもともと苦しみと悲しみに満ちている所なのだ……といった諦観を持っていて、そこから種々発想が広がっていくので、読んで楽しくなる様な小説は一つもない。しかしなにかしら共鳴するところがあって愛読するのである。

「事件に生きた女たち」を読んで

（渥美雅子著）

卜部恵美子

逆境に襲われる時、誰しもそれは突然の出来事のようです。だか、心構えなどあるわけがない。うろたえる、混乱する、八方塞がりになる、そして、身も心もクタクタ、ボロボロになってしまう。そんな時、一体どうしたらいいのか、この本を読みながら、私も一話ごとに戸惑い、うろたえ、迷う事ばかりでした。本を読み終えた後も、しばし茫然としてしまいました。

でも、そのうちに気が付きました。人間が生きていく時に大切な事、それさえ見失わなければ、どんな逆境の時だって必ず立ち上がれる。そしてこの本にも至る所に、それが書かれてあった事に気が付きました。それは家族の絆、夫と妻との絆、親と子の絆という事でしょうか。

女性が社会の一線で仕事をするにしても、経済的にいくら自立していても、家族の協力、心のつながりが得られなければ、満足感、充実感が得られないのだと思います。

この本を読んで、その様な事を感じました。でも、と思うのです。〃絆を大切にしなければいけない〃と、意識しなければならない状況というのは、やはり、逆境や不幸の最中の事であって、決して楽しい事ではないと思うのです。

家族の事はあまり気にせず、自分のやりたい事を好き勝手にやっていたい、それぞれの人生だもの、と、あまり逆境を知らない私は今思っています。

昭和62年　選書

月日	書名	作者名	出版社
4. 26	眠れる美女	川端康成	新潮文庫
5. 23	隅田川暮色	芝木好子	文芸春秋
6. 25	薮の中、将軍	芥川龍之介	新潮社
7. 23	表と裏	土居健郎	弘文堂
8. 27	かげろう日記遺文	室生皐星	福武書店
9. 24	だれが君を殺したのか	イリーナコルユノウ作 上田眞而子訳	岩波文庫
10. 22	「小さき者へ、生れ出づる悩み」	有島武郎	新潮社
11. 26	居酒屋兆治	山口瞳	新潮社
12. 17	太陽の子	灰谷健次郎	理倫社
1. 23	台所から北京が見える	長澤信子	東京ジャーナルセンター
2. 25	事件に生きた女たち	渥美雅子	毎日新聞社
3. 24	槿（あさがお）	吉井由吉	福武書店

昭和６２年度　ひばり読書会会員名簿

	氏名	住所	電話
1	小川光子	市原市辰巳台東２－１９－５	74－8127
2	野田和子	〃　辰巳台西３－１２－１１２	74－9148
3	宮吉慶子	〃　辰巳台東４－１８－６	75－2452
4	石橋みな子	〃　辰巳台西４－１４８	74－3324
5	野城千鶴	〃　山木６６５	41－1106
6	白土貞子	〃　若宮３－７－４	43－0734
7	佐藤禎子	〃　若宮６－２６－６	41－9096
8	西村澄子	〃　若宮６－１３－７	41－8717
9	磯部紀代子	〃　能満６３６－５	41－6499
10	吉水正子	〃　能満１０５－１	41－1098
11	白鳥治子	〃　八幡５２３－２	41－3319
12	西村妙子	〃　八幡２４７－８	41－6718
13	猪野春枝	〃　根田４８４－３	22－1236
14	上田霜枝	〃　山田橋１２２－２	43－9675
15	桑原千香	〃　岩崎西１－１	(呼)宇佐美方 22－8814
16	松本尚子	〃　姉崎１０５０－１１	62－2974
17	菊田浩子	千葉市小仲台１３１６－１	0472 55－5073
18	石島千代子	市原市八幡石塚１－３－１２	41－5864
19	中村和子	〃　若宮２－９－１	41－8661
20	寺尾よしみ	〃　若宮１－７－３	41－3239
21	卜部恵美子	〃　山田橋６７９－８	41－9745
22	本間啓子	〃　青葉台２０－５	61－4944

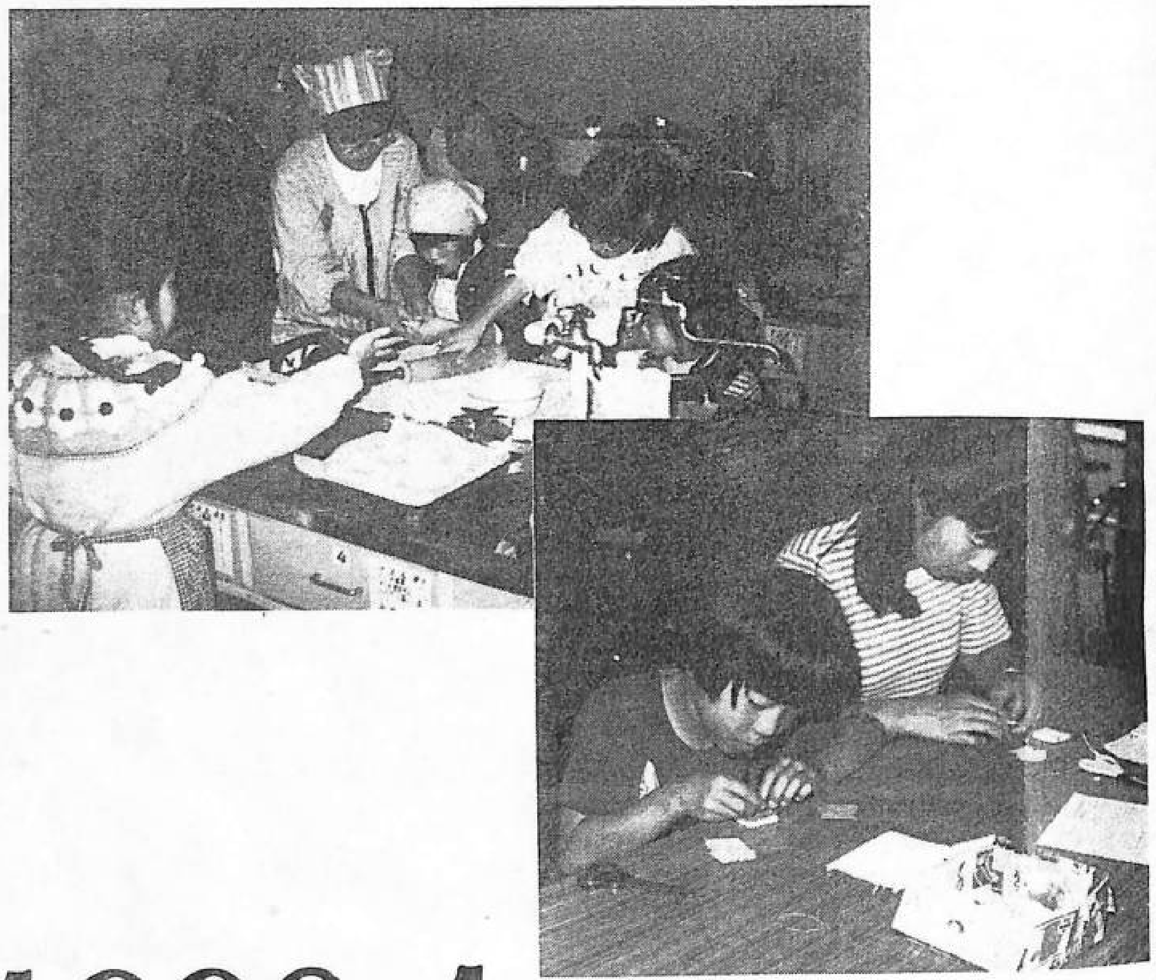
88-4

編集後記

八幡公民館発行の文集『ふれあい』十号ができあがりました。一年間の活動の成果やご感想ご意見をいただき有難うございました。

本号の配本の遅くなりましたことをおわびいたしますとともに、いろいろとお世話になった方々に厚く御礼を申し上げます。

ふれあい

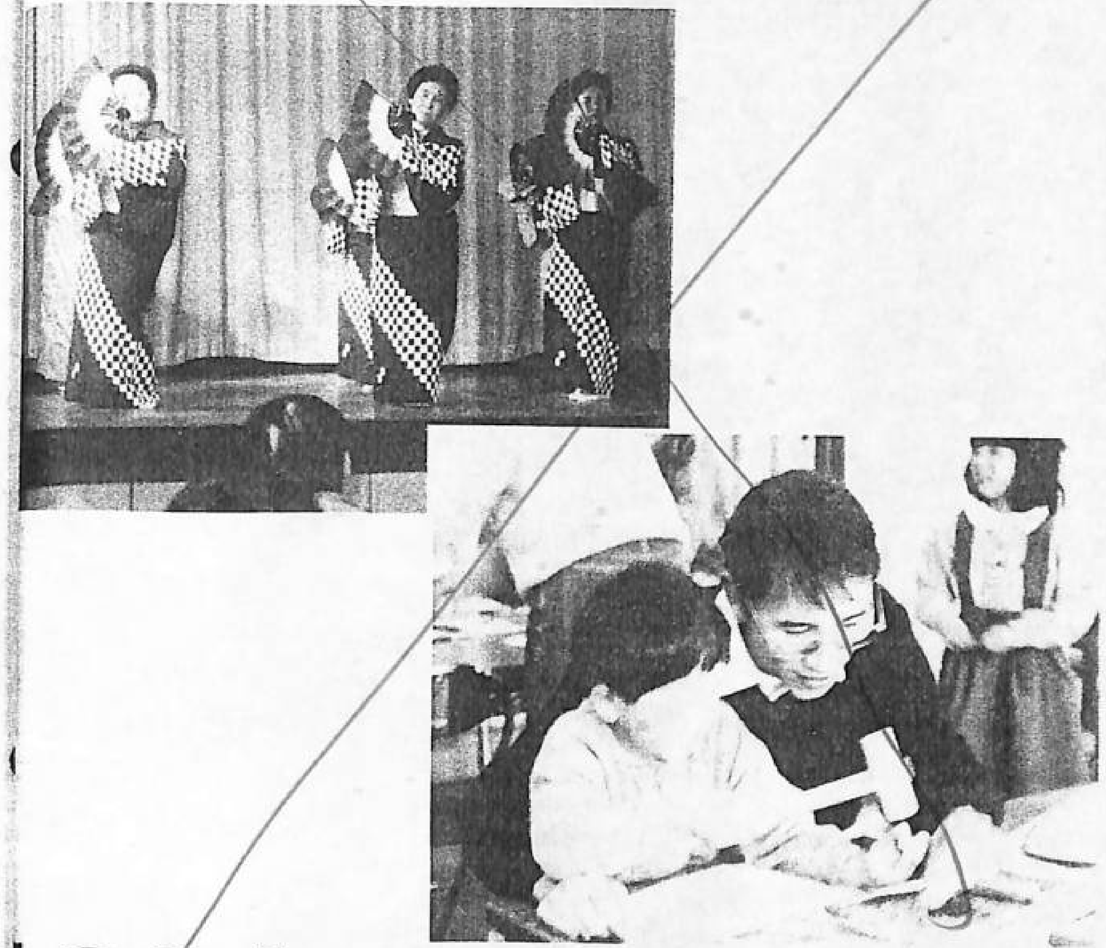


1990·4

市原市立八幡公民館

第11号は欠落、　第12号

ふれあい



1991.

市原市立八幡公民館

昭和63年度の記録
平成元年の

千葉県立
3.12.26
中央図書館

第12号「ふれあい」の発刊によせて

新しい年号、平成元年度の記念すべき年の「ふれあい」12号の発刊を心よりお喜び申し上げます。

学歴社会から学習社会への推進の中で、社会教育施設のあり方が論議されている昨今、当公民館での主催事業や自主活動であるサークルへの参加数が昨年度より増えているということは、学ぼう、求めよう、とする皆さんの熱意の表れと深く敬意を表します。

今回、ご指導下さっている講師の先生をはじめ、主催事業やサークル活動参加会員の方々、また昨年にひき続き「ひばり読書会」の会員の方より多数の充実した原稿をお寄せいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

この「ふれあい」が多くの人に愛され、公民館が、地域の皆様方にますます親しまれ、生涯学習の場として、ふれあいが広がり、やすらぎの場として充実した役割を果たせることを願っています。

公民館長　山田展男

主催教室

成人講座	成人講座に学んで	足立キン	1
〃	学習を通してよき友と巡り逢う	菅野　貞	1
郷土史講座	郷土史講座をふりかえって	田中鑑生	2
〃	講座の一年を省りみて	地引久雄	2
親子教室	お料理作り	白鳥　梓	3
〃	親子教室にさんかして―モビール作り―	若井真理子	4
〃	親子教室に参加して	森田美智栄	5
家庭教育学級講座	子供と共に映画を見て	北角恵美子	5
		本澤厚子	
		朝倉多珠代	
唐詩教室	「唐詩教室」へ通って	片山　一	6
〃	中国漢詩の旅	中村敏秋	7
古典文学教室	源氏物語を受講して	白鳥治子	8
〃	「源氏物語」に寄せて「源氏物語絵巻」雑感	岸本静江	9
〃	源氏物語―須磨の巻―	中村きく	10
自然観察会	植物雑記	多賀孝子	11
〃	自然を愛するということ	山口由富子	12
国際理解教育講座	国際理解講座に想う	倉田和子	13
〃	国際理解講座に参加して	中本邦子	14
〃	国際理解教育の推進について	新保育夫	14
初級ワープロ教室	ワープロ教室に参加して	大木加津子	15
	文化祭所感	山岡秀哉	16

成人講座に学んで

成人講座　足立キン

六月、あなたの年金について受講しました。勤め人の妻は年金を掛けなくていいと言われて掛けなかった私は、大変なことをした、もっと早くこんなお話をよく聴いていればと思ったことでした。

八月には食品添加物、十月には薬の常識について学びました。自分では知っているつもりが実際には何んにもわかっていなかったことを自覚、こんなことでは毎日、毒になる物を知らず知らずのうちに口にしていたことになると反省しました。

七月、非行と教育、十一月、教育講演会でした。いずれも県や市原市の実情にくわしくふれた内容で身のひきしまる思いでした。

一回一回の講話ごとに多くの知識を得ることができました。また多くの先生方とも面識ができました。友人も数多く、おかげで世間が広くなって来ました。

このように度々公民館に寄せてもらっていますと「成人講座以外の分野でもちょっとのぞいてみようか？」「ちょっと気分転換に参加してみよう。」とだんだん欲が出て、あの学級この講座と寄りたくなって来ます。そうして「これがわたしの生涯学習かな？」と、自分なりに考えています。

おじゃまでしょうが、来年度も皆さま、どうぞよろしくお願いします。

学習を通してよき友と巡り逢う

成人講座　菅野貞

私は七十才になってようやく自分の時間が持てる様になり、これからは何か勉強して余生を有意義に過したいと思うようになりました。

丁度、公報いちはらで八幡公民館の主催事業としていろいろの講座のあることを知り、早速申込みました。然し五月のその日が近づくにつれ何となく不安になり、私の様な者が果してついて行けるだろうか、皆レベルの高い人達の集りではないだろうか、などなど考え、どうしたものかと躊躇せざるを得ませんでした。

でも、意を決し、兎に角行って見る事にしました。

最初は緊張感と顔見知りの人もいない淋しさとで二時間の勉強が非常に長く感じられました。それでも二、三回出席している中に次第に周囲の人と顔馴染になり、又講師の先生方も優しく、冗談など色々言ってやわらかい雰囲気を作ってくれますので、勉強もとても楽しみになり、最初の心配も全くの杞憂に過ぎませんでした。

年金のこと、食品添加物のことなど学んでいる中にいつしか少しづつですが、成長してゆく自分に気付き、こんな素晴しい学習の場を持てた事を有難く感謝いたします。

そして何より嬉しい事は親しい友達の出来た事です。住所をききますと何と、皆私の家の近くに住んで居たのです。それからは、急速に親密度を増し、同年代に生きて来た者同士の共通の話題に刻のの経つのを忘れて仕舞う程です。

人の出逢いとは不思議なもので公民館の講演会で偶然隣り合せに座った人やにこやかに声をかけて下さった方達とこんなにも親しく

なるなんて夢にも思いませんでした。

これからも更に勉強に励み、充実した老後を送りたいと思っております。

誠に拙ない文章でお恥かしい次第ですが、感想の一端を述べさせて頂きました。

郷土史講座をふりかえって

郷土史講座　田　中　鑑　生

私は昭和十年、十一年と長野県上田中学校在学四、五年生時代に「郷土研究部」に在籍し、いろいろな勉強をして以来、郷土史に多大な関心をもってきました。

それで昭和四十七年、辰巳団地に居をかまえることになってから千葉県、特に市原市の郷土史を深く研究しなければと思い文化財センター主催の文化財発掘調査の発表会に出席したり、八幡公民館主催の郷土史講座を受講したりすることに致しました。

平成元年度の八幡公民館主催の郷土史講座は、五月に酒井登志生先生の市原の民話、六月に田中喜作先生の市原の祭、七月に市川教生宮司の飯香岡八幡宮の話があり、八月には田中操先生の市原の神社仏閣に関する話があり、九月には青柳至彦先生の指導で市内の史跡めぐりを行い、十月には天羽正博先生の市原の石仏、十一月には田中操先生の市原の合戦史、十二月には立野晃先生の市原の富士信仰、平成二年一月には近藤敏先生の市原の文化財、二月には瀧本平八先生の市原の古建築についての話があり、三月には青柳至彦先生の奈良の大仏と将門伝説の話が行われる予定です。五月の酒井先生は「ぷっつあるべえもじな」という民話の本を千葉日報社から出されている方で市原の民話についても各地区につたわる民話を非常におもしろ、おかしく話されました。市原の祭については祭の意味、種類、型、市原市内の祭の例を飯香岡八幡宮外各神社について話があり市川宮司さんからは八幡宮に関するお話のあと皆で八幡宮に赴き大刀、御輿等をみせていたゞきました。

神社仏閣については市原市内の神社の祭神等歴史的にみる豪族領主の開発等について詳しく話がありました。市内史跡めぐりは二子塚古墳、天神山古墳、木造薬師如来坐像、薬王寺の算額、日吉神社、外二ヶ所を見学し、各々について青柳先生よりわかり易い説明を受けました。「石仏」では仏像、石造物について学び「市原の合戦史」では椎津合戦、池和田合戦、八幡合戦、小弓合戦等について、富士信仰については、市原各地にいまも行われている富士講について、「市原の文化財」については、発掘調査の結果等、「古建築」については博物館に行かなくては見られないような貴重な資料の展示もあってよい勉強ができました。

山田館長さんはじめ公民館職員に感謝します。

講座の一年を省りみて

郷土史講座　地　引　久　雄

人生八十年時代と言われ、また生涯学習とも聞く、郷土史講座を受講して数年、古墳や遺跡を尋ね或いは発掘現場を訪れて、伽藍の配置や出土品を見学し、また各地の文化財や仏像を拝観して郷土の歴史を学んできたので、一年を振り返ってみることにした。

始めは五月十三日で「市原市に伝わる民話について」酒井先生のお話。村の片隅での小さな文化遺産や、ふるさと昔話しなど講義のほかに先生の著書を無料で載いた。

七月は「飯香岡八幡宮の由来と文化財に就て」市川宮司の講義。後刻現地に於て宝物や文化財を拝観し柳楯神事のお話など拝聴した。

九月は市内史跡めぐりで、総員四十余名が大型バスで出発、姉崎の二子山古墳や天神山古墳その他を見学し、続いて不入斗の木造薬師如来像、薬王寺の算額、風戸の聖観音立像、能満の府中日吉神社など多くの遺跡や文化財を拝観し、青柳先生の案内と蘊蓄ある説明に聞き惚れながら秋の一日を楽しく過ごした。

十月は天羽先生の講座。「市原の石仏について」仏像の如来、菩薩、明王、天、羅漢など種類と意味。石塔の種類や構造その他、所在箇所等資料に依って詳細に教授された。

そのほか田中先生の講座では「市原の神社を歴史的にみる豪族と領主の開発」や戦国時代の様々な合戦についての講義に市原の歴史に思いをこめて拝聴した。

今年二月は「市原市の古建築について」、瀧本先生の講義は豊富な資料と貴重な図面や現物の展示などによるお話しで、建築意識に乏しい者には興味深く感じると同時に当時の建築技術の優秀さ偉大さに感銘した。

市原市には飯香岡八幡宮や府中日吉神社、国分寺薬師堂、其の他多くの文化財、古建築が保存されている。今後の拝観に参考となった。

内容豊富な講座で時間が短く惜しかった。後日の再講をお願いしたい。

お料理作り

親子教室　白　鳥　梓

作ったもの

1. 変わりちまき
2. コーンスープ
3. フルーツサラダ

「変わりちまき」

野菜　にんじん　竹の子　グリーンピース　しいたけを、さいの目に切り、水につけたもち米と野菜を、油でいため、スープの素を入れてホイルに包んでむしました。

「コーンスープ」

コーンの缶詰にスープの素、牛乳、卵、パセリが材料です。パセリをみじんに切りますが、まな板がすべると、けがをするから、下に布巾をしいて切るように、先生が教えて下さいました。家に帰って、母にこのことを教えてあげたら、「いいことを勉強して良かったわね。」と言いました。

「フルーツサラダ」

材料は、バナナ　みかん　ピーナッツ　ドレッシングです。みかんは皮をむいて、すじをとって、丸く切り、バナナは皮をむいて、うすい斜め切り、ピーナッツは包丁でみじん切りにします。

この時、ピーナッツが飛ばないように、かわいた布巾の上で切りました。こうすると、ピーナッツは散りません。また一つ、いいことを教えて下さいました。

丸皿の回りに丸く切った、みかんを並べ、次に、みじんに切ったピーナッツをバナナとまぜ合わせて、まん中にもりつけて、ドレッシングをかけてでき上がりです。

「かたづけ上手は、お料理上手」とふだんから、祖母がやかましく言っておりますので、みんなで、急いでかたずけました。

楽しい試食です。テーブルの上は、色とりどりで、とてもきれいでした。ちまきは、ホイルから皿にうつさないで、ホイルを開きながら食べました。

こんなにおいしく出来るとは思いませんでした。たくさんあったので祖母は、ちまきを持って、巡礼の旅にでました。

これからは、男の子も、お料理ができないといけないので、もっとたくさん習いたいと思います。

親子教室にさんかして
ーモビール作りー

親子教室　若井真理子

わたしは、公みんかんの親子教室のなかでいちばん心にのこったのは、モビール作りです。

前田周一先生が教えてくださいました。

はじめにかたい紙にすきな絵を書きました。わたしは、ケロッピなどいろいろ書きました。絵を書いたあと、はさみで切りぬき、銅線でむすびました。お母さんが少し手つだってくれました。つぎに、お母さんが、はり金をペンチでまげている時、絵をまた書いて、銅線をつけました。ペンチでまげたはり金に銅線をまきつけ、その下にかいた絵をぶらさげました。人さし指でバランスをとり、三角に切った小さな紙をはって止めました。そのあと、弟が作ったモビールと合体させました。先生もほめてくださいました。モビール作りをした人全体の中で私と弟、お母さんとで作ったのが一番大きかったような気がしました。

「モビール作りに行ってよかった。」

とわたしは思いました。車で家に帰り、すぐにおばあちゃんに見せたら、

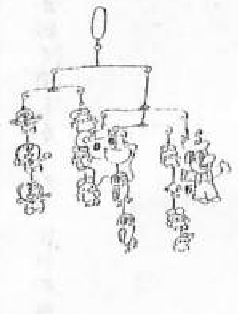
「大きいねえ。」

とびっくりした顔でいいました。そのあと、かざる所をきめました。作る前、自分のへやにかざろうと思っていたけれど、弟の作ったのと合体してしまったから自分のへやには、かざれなくなってしまいました。わたしは、

「あーあー。」

と、思わずいってしまいました。自分のへやにかざれないのはとてもざんねんでした。またこんどの親子教室にさんかして作ってみようと思っています。

モビール
（私と弟のを合体させた）



親子教室に参加して

親子教室　森田美智栄

自転車のペダルを力強くふみながら、私は公民館へと急ぎました。今日は日曜日、月に一回の親子教室です。母に進められて入った親子教室では、行くたびに楽しいことを教えていただきました。レクリェーションの面では「イストリゲーム」や「ジャンケンゲーム」「りすときこり」などのさまざまなゲームを教えていただきました。ちらっと母をみると、とっても楽しそうでした。私ももちろん楽しくて、後で友達にもおしえてあげました。工作では、少しこしのまがりかけたおじいさんの先生でした。そのおじいさんはいろいろなことをしっており、やさしく教えてくれましたので最後までがんばって作れました。絵画教室の色ぞめもちょっとおり方を変えたり、色のつけ方を変えたりするだけでいろいろな形になり、びっくりしてしまいました。毎回出たかったのですが、子供会のミニバスもやっていましたので、出られない日も多く、特におかし作りのときは、とても残ねんでした。私ももう六年生なのでこれでおわりですが、こんなすばらしい教室なのでもっともっとたくさんの人に入ってもらいたいです。

いろいろなことを教えて下さった先生方、みなさんありがとうございました。

子供と共に映画を見て

家庭教育学級講座
八幡幼稚園　園長　北角恵美子
教員　本澤厚子
教員　朝倉多珠代

二月十三日、火曜日に、園児と共に八幡公民館に映画を見に行きました。幼稚園ではなく、公民館で映画を見るのだということを園児に伝えると、いつもとは違い場所も変わるということもあり、皆それぞれに期待を持ち楽しみに待っていました。

最初の映画は、交通安全に関するもので、子供達にもよく知られているアニメの主人公達がもとになり出ていたので、子供達は終るまで興味をそらさずに見ることができました。今まで交通安全に関する指導としては、一学期に二度、園庭に模擬道路を設定し、信号の見方や道路の渡り方等について、市の交通安全課からの指導を受けました。又、二学期の終りには、実際に宮田交通公園へ行き、やはり、一学期と同じように模擬道路を歩いたり、さらにゴーカードに乗るなどして、指導を受けました。さらに屋内では腹話術なども見せていただき、楽しみながら勉強をすることができました。このような経験を経て、今回の映画をみたことが、来月から小学校に入学し、行動範囲が広がってゆく幼児にとって、さらに良い経験となったのではないかと思われました。

二本目は「典子は今」という映画を見ました。この映画は内容的にみて幼稚園児にとってはやや高度で難しいものであったように思われました。その為、映画を見ている時の子供達の様子も前の映画とは違い、じっと画面を見つめて観ている幼児もいれば、内容がよく理解できずに、やや、興味を失ってしまっている幼児もいて、様

々でした。

映画が終った後で、子供達に感想をきいてみたところ、手がないのに足を使って一生懸命頑張っているので偉いと思った。手がなくて可哀相だと思った。又自分がもしその立場だったらどうしようかと思ったなどが出てきました。実際のところ、難しくてよくわからない幼児が多かったようですが、子供達は子供達なりに、この映画から何か強烈なインパクトを感じ取っていたのではないかと思われました。

終りに、このような素晴らしい映画を見せて下さった公民館の方々に感謝致します。どうもありがとうございました。

「唐詩教室」へ通って

唐詩教室　講師　片山　一

千葉駅を過ぎると田園風景が目に入ってくる。それまでの環境が一変し、四季折々の変化を確実に伝える自然の風景が。

幸か不幸か下町（日本橋浜町）に生まれたため、子供の頃から自然に対して強い憧れがあった。でも人間は自然の産物であるから当然と言えば当然だが、何にせ土の気が殆んどない土地柄だったから憧れも一入だった。公園があるにはあったが、所詮は造りもの。そんなせいか、たまに父に連れられて行く釣は無上の楽しみだった。隅田川に架かる新大橋を渡って、今の江戸川区の南部に行ったと記憶しているが、放水路の下流は釣人で賑っていた。確か木造りだった葛西橋を渡って暫く行くと、その辺りは未だ小川が流れ、小鳥が飛び交い、白鷺が忍び歩きする自然がそのまま残っており、河口近くに行くと葦の茂みに水鳥さえ見られた。そして茅葺き農家が点在し、遠く鶏犬の啼鳴が聞こえてくるまことに長閑な風景の中、母手作りの弁当を持って日がな一日遊んでいられた。

そんな思い出を窓外の景色にだぶらせて、茅葺き屋根を置いてみたり白鷺を画いてみたり、思い出を楽しむ習慣ができてしまったが、遠い昔の思い出が蘇る時間など凡そ持てなくなった私にとって、千葉ー八幡宿の十分間は貴重な一時である。それもこれも八幡の公民館と御縁があったから、更には中国思想を学んでいたから、見えぬ糸に感謝しながら玄関を入る。

他と比較するわけではないが、ここは館全体が活気に充ちている。生涯学習が言われて久しいが、館長を始め先生方が建館の精神を十分に認識し、情熱を持って運営に当たられているからだろう。それかあらぬか生徒さんの顔も亦生き生きとしている。それやこれやの結果が何時の間にか六年のお付合になったのだろうが、生徒さん方の真摯な学習態度には常々感服させられている。

或方がこの欄で、「遠い昔に学生を終えた人達が、こうして再び…」と感想を述べておられたが、「学んで時にこれを習う」（『論語』・学而）皆さんの真摯な態度に接すると、ひとりでに「古の学ぶ者は已の為にし・今の学ぶ者は人の為にす」（同・憲問）の一言が浮んでくる。この言葉は、昔が悪く今が良いと受取られかねないが、実は反対で、昔の人は已の徳性を養い、心を定めるために学問をしたが、今の人は唯々人に知られんがために学問をするという意味である。功名実利・世に出るためだけの学問を戒め、養性定心・学問本来の在り方を訓たものであるが、今や既に本来の在り方を実践している皆さんの、「又説（悦）ばしからずや」の笑顔に接すると、まこと講師冥利に尽きる思いがする。

未だ若い方も多勢いらっしゃるが、「炳燭の明」という、晩学の有意義を訓えた故事がある。七十歳だった晋（春秋）の平公が、臣下の師曠に晩学を嘆いた時、師曠が、若年時の学問を朝の光に、壮年時の学問を昼の光に、そして晩年の学問を夜燭の明りに喩えたものである。

臣（師曠）これを聞けり。少にして学を好むは日出の陽の如し、壮にして学を好むは日中の光の如し、老にして学を好むは炳燭の明の如しと（『説苑』・建本）。

「燭」はそもそも持ち歩く明りのこと。従って晩学を、何処でも照らせる手燭の明りに喩えたこの故事は、大変含蓄に富むものであるが、願わくばその意の有する所を含味され、笑顔に自信の花を添えられんことを。

中国漢詩の旅

唐詩教室　中村　敏　秋

唐詩教室に学んで三年になる。毎回二十数名の出席者で、女性が圧倒的に多く、和気藹々の勉強を続けている。柔和で微笑を絶やさない先生の、時にはユーモアをまじえての講義が実に絶妙である。二時間があっという間に過ぎてしまう。どうか来年度も沢山の方々に参加していたゞき、一緒に勉強し、よき友が出来ることを楽しみにしている。

さて一昨年五月、中国シルクロードの旅、八月には李白の墓のある馬鞍山に漢詩の旅をする機会を得た。詩吟を練習しているので、折にふれ今まで習った漢詩を口ずさみながらの旅であった。その思い出を書いてみたい。

シルクロードの旅は、一行十五名で、北京→ウルムチ→トルファン→敦煌→酒泉→西安→上海十二日間の旅であった。

ウルムチからトルファンへの道はゴビ（砂でなく石ころで覆われているところ）の砂漠でどこまでも一本の道がはてしなく続く。道路にそって木の電柱がある以外何もない。この光景をバスで眺めながら幾度となく口ずさんだ詩、それは辺塞詩人として名高い岑参の「磧中作」馬ヲ走ラセテ西来天ニ到ラント欲ス……今夜ハ知ラズ何レノ処ニカ宿セン平沙万里人煙絶ユ。又同じ辺塞詩人王昌齢の「出塞行」秋天曠野行人絶ユ馬首東来スルハ知ル是レ誰ゾであった。辺塞守備にあたる将兵の郷愁がよくわかる。こんな処までもやって来たのかと哀愁すら覚える。

トルファンは砂漠の中のオアシスで、カレーズの井戸からこんこんと溢れんばかりの水路が走り、両岸にポプラや葡萄が植えてある。これぞ王翰の「涼州詞」葡萄ノ美酒夜光ノ杯……の葡萄であろう。休けい所の売店にもこの詩が沢山並んでいた。尚夜光杯は祁連山の玉で作られた酒杯で、敦煌で、作っている現場も見学し、詩吟の友への土産とした。

敦煌から酒泉への途中、安西というところで休けいした。有名な王維の「元二ノ安西ニ使スルヲ送ル」の安西である。送別会でよく吟じられる詩である。渭城ノ朝雨軽塵ヲ浥ス……西ノカタ陽関ヲ出ズレバ故人ナカラン。陽関は安西よりはるか西の敦煌の西南にある

のに、どうゆうことだろうと一寸気になった。

西安では華清池を訪ね、白居易の「長恨歌」春寒ウシテ浴ヲ賜ウ華清ノ池温泉水滑ラカニシテ凝脂ヲ洗フを思い出す。揚貴妃がはいったといわれる浴槽は整備中で、外観だけを見て来た。

漢詩の旅は一行三十五名で上海→蘇州→南京→馬鞍山→上海六日間の旅であった。一緒に詩吟をやっているメンバーである。詩聖といわれた盛唐の詩人李白のお墓を訪ねようということである。平素練習している吟にも李白の詩は多い。李白のお墓に詣り、馬鞍山の詩の愛好者と太白記念館で詩吟の交流会もやって来た。余談だが当地のテレビ局が会の模様をさかんに撮影していた。お墓の入口には李白の詩が沢山石に刻まれていた。その一つ「天門山ヲ望ム」天門中断シテ楚江開ク……両岸ノ青山相対シテ出ヅの風景は船で観光出来るそうだが、今回は行かなかった。この会では今年十月香港、桂林経由で再度馬鞍山を訪ね、李白の墓地の一角に参詣記念碑を建てる計画をすゝめているので、その時は観光したらよかろう。馬鞍山の高台のホテルから長江を望み、案内人に項羽の「垓下ノ歌」の現地だと説明を受けた。時ニ利アラズ騅逝カズ騅ノ逝カザル奈何ス可キ虞ヤ虞ヤ若ヲ奈可セン。さぞかし無念であったろう項羽の胸中を憶う。

蘇州ではみんなに親しまれている張継の「楓橋夜泊」の寒山寺を訪ねた。鐘つき堂の前で合吟した。中国の人も珍しそうに取りまいて聞いていた。月落チ烏啼イテ霜天ニ満ツ…… 姑蘇城外ノ寒山寺夜半ノ鐘声客船ニ到ル。土産店にこの詩の拓本や書がいっぱい並べてあった。鐘つき堂では各人鐘をつき、この音が客船までとゞいたのかと大喜び。

筆をすゝめていると次から次へと思い出はつきないが、紙面も大巾に超過してしまった。最後にこの一年間、唐詩を楽しく、わかり易くご指導下さった片山一先生並びに教室のお世話をして下さった公民館長はじめ担当職員の方々に厚く御礼を申し上げ筆をおきます。来年度もよろしくご指導の程お願いいたします。

源氏物語を受講して

古典文学教室　白　鳥　治　子

公民館の古典文学講座として、源氏物語は昭和五十九年五月十一日に第一回が始りました。以来昭和から平成と変りましても、御熱心な伊藤先生の御講義は続き、毎月皆様と一緒に楽しく勉強しております。

若い頃に読んだ源氏物語は、何となく好色を感じ、その頃はファッション化している時代なので、源氏物語は「壬用の乱」と共に皇室批判として、おおっぴらに読めませんでしたが一般常識として表面だけを流し読みしておりました。多くの人生経験をした現在の年令で泌々とした気持で読むと、実にすばらしい物語だと感じさせられます。

私の趣味から言うと同時代の女流作家として、清少納言の「枕冊子」に傾いておりましたが、講座の回を重ねるにつれて、紫式部のスケールの大きさ、物語の構成上のテクニックなどにすっかり捕われてしまいました。

以前、文学の持つ毒素にとっぷりと浸っている。円地文子さんと、

作家の田中澄江さんのお二人が源氏物語について対談をなさいましたが、田中さんは「女性から女性へと、何の反省もなく遊び続ける源氏は大嫌いだ」と発言なさいました。

クリスチャンの田中さんだから当然の発言だとは思いますが、文学は道徳とは違うのです。田中さんも「物を書く人」であるならばなぜ源氏物語を文学として読んでくれないのかしらと、悲しくなった事が想い出されます。

一巻ごとに登場する女性の為に、紫式部は源氏の君を、これでもか、これでもかと、ひたすらにこの世の人とも思えない美しい男性として書いており、それに対して、「私は何をしても咎められない身分だ」と言って、うそぶく源氏を、作者はチクリ、チクリと針を刺しているのがうれしくなってしまいます。

ただひたすらに男性の来訪を待つ女性。王朝時代の女性の嘆きがよくわかる気が致します。好色家とは一度手中にした女性には見むきをしませんが、源氏は彼女達を皆、六条院という宏大なハーレムに住まわせたのですが、紫の上の気持はどんなであった事でしょうか。

入道の宮にしても、不倫の子を産んで死にたい気持だったのに、源氏が復活すると東宮を帝位につけるために、あれこれと画策をするしたたかさを持っているのには驚きます。

千年も前のこの作品が今も日本は勿論、世界にも読まれている事のすばらしさが、わかってきたような気がします。何とか健康を維持して最後まで勉強を続けられますよう、ひたすらに祈る気持でございます。

石山寺にて

みず澄める瀬田にうつれる紫の
色は変らじ今も昔も　　治子

「源氏物語」に寄せて
「源氏物語絵巻」雑感

古典文学教室　岸　本　静　江

国宝の源氏物語絵巻にとりつかれてもうどの位になるだろう。図版を展げるたびに、その骨格の雄大さ、色彩の豊かさ、構図のユニークさ、そして何よりもその品格の高さに圧倒されてしまう。

後年、さまざまの画家や流派が、源氏物語を題材にして、絵巻物、屏風絵、扇面絵、掛物の絵、果ては家具調度の類にまで作品を残しているが、私の知る限り、先に挙げたどの点をとっても国宝の絵巻に匹敵するものは一つもない。

ふんだんに金泥をほどこした土佐光吉・光則など土佐派の作品、おだやかで庶民的な住吉具慶、如慶などの住吉派の作品はいわずもがな、俵屋宗達の伊勢物語図など琳派の華麗な筆使いが大好きな私でも、やっぱり国宝に比べると口惜しくなる程、品位の点で見劣りしてしまう。画面の奥からにじみ出る凄ましい程の輝きが違うのである。

品位だけではない。国宝絵巻のどの絵にもみられる大胆な構図、建物の柱や縁の縦横な線、前栽の草花の乱れによる登場人物の心理の表出法など、後年の画家の手法がかえって古臭く見えるほど新鮮

である。

が、何といっても物語が五十四帖なのに現存する絵巻物は僅かに十九帖。千年の歳月で色彩が剝落してさえこの美事さなのだから、五十四帖分そっくり残っていたらどれほど見ごたえのあることだろう。特に「関屋」の風景の雄大さに感激した目には、現存しない「須磨」や「明石」はどんなに素晴らしかったことか、と今更ながら惜しまれてならない。この場面を描いた宗達派の屏風絵も住吉如慶の絵巻も酷評すればポンチ絵のよう。僅かに昭和の画家、安田靫彦の「須磨」が品格を感じさせはするが、これとて松林を逍遥する光君と三位中将の近景ばかりで、本文で流麗に語られる須磨の浦景色は全く描かれていないのである。

もしこの人物達の背景を横山大観が描いていたら、と想像する。品位の点でも風景描写でも申し分ないかも知れない。そうだ、あの「若紫」は大好きな速水御舟に描かせたい。初々しく艶やかな作品になろう。「安珍と清姫」を描いた小林古径にはあの巻、歴史絵の前田青邨にはあの巻を是非、と、ないものねだりは果てしなく広がってゆき、A・マルローの「空想の美術館」にならって、私も一人ひそかに「空想の源氏物語絵巻」を繰り広げる昨今である。

源氏物語―須磨の巻―

古典文学教室　中村　きく

ただばく然と美しい物語の世界に酔いしれていて、さて原稿用紙にむかってみると「何を覚えたか」「何を感じ」となると、さあ大変だと思った。だが、何か書きたいという気持ちはあるのだ。

今日の学習は、教科書P55からで須磨に来られてからの源氏の様子や気持ちがのべられている場面である。

伊藤先生が、いつものように澄んだ美しい声で今日学習する場面を読んでくださる。続いて学級生が復唱する。復唱しながら源氏の様子や登場者の様子をこんなであったろうかなど想像するのは楽しい。

先生が語句について解説してくださると、その場面の様子が今度は前の自分勝手な想像のときより鮮明になったり、全くちがった考え方をしていたとわかったりするので学ぶ者の喜びが増す。

斉読もすらすら進むようになり、声に出して読む楽しさ、うれしさを体験している。みんなと共に読む喜びを知ったのである。

ーまして五節の君は、綱手ひき過ぐるもくち惜しさに、琴の声風につきて遥かに聞こゆるに、所のさま、人の御ほど、ものの音の心細さ、取り集め、心あるかぎり皆泣きにけり。―

五節の君の父が大宰府の任期も果てて上京する折、源氏のおわすことを知って、こんなさびれた浦に身分高い源氏ほどのお方がと、琴の音色とともに皆泣いたのだ。

―「琴のねに引きとめらるる綱手縄
たゆたふ心君知るらめや
すきずきしさも人なとがめそ」
「心ありて引き手の綱のたゆたはば
うち過ぎましや須磨の浦波
いさりせむとは思はざりしはや」―

お琴の音にひきとめられて、綱手縄のようにたゆとう私の心をあ

なた様はご存知でいらっしゃいましょうか、出すぎたやり方も、おとがめ下さいますな、おゆるし下さい。（五節）

本当に私（源氏）を思う心があって…須磨で漁りをしようとはお思いにはならなかったのでしょうか。（源氏の返歌）

このように先生はお茶も飲まれず急ピッチ、二時間立ちっ放しで古典を読みくだいてくださる。紫式部の描いた世界を私達に橋渡しして下さる先生に感謝するばかりである。

一年間をふり返り楽しく学べた嬉しさが強く心に残った。

植物雑記

自然観察会　多賀　孝子

本年度、六回実施された観察会で特記したいことは、何と言っても、数多くのシダ類に出合えたことだと思う。

三石山では、ハイホラゴケ、ホウビシダ、コバノヒノキシダ、オニヤマブソテツ、地を這うように伸びるツルデンタ、クモノスを思わせるクモノスシダ、ベルベットのような肉厚なビロードシダ等、ほとんどが初めて出合う珍しいものばかり、又、久留里では「合せんゼンマイ、合するソウ」と、教えられたそのイワガネゼンマイ、ヘラシダ、タチシノブ、茶花のフユノハナワラビと、オオハナワラビ、正月のお飾りのウラジロ、やはり裏が白いコシダ等、正にシダの宝庫、一つ一つ根本先生の説明を聞きながら、しっかり名前をメモする。

自然破壊が急速に進む中、これだけ貴重な環境がまだ残されていたことに、安堵するとともに、この自然を守る為に関係者の尚一層の御努力を願いながら又、来年も、そして毎年訪れたい場所になった。

次に、非常に残念に思うことがある。この会の目的は、植物の観察を通して、自然愛護の知識と理解を深めることであって、採集禁止であることは言うまでもない。しかし、特に珍しい植物に出合ったりすると手折ってしまったり、根ごと抜いて持ち帰る人を見かけることもあり、同じ会員として恥入るばかりである。公民館の担当者をはじめ、根本先生からも出発前には必ず注意を受けているのであり得ないことと思っていただけに返すがえすも残念でならない。

しかし、根本先生は、そのような場面に出合った時こそ自然保護の為の意識改革のチャンスであり、貴重な植物を守る努力が必要であることを説いていかなければならないのではないかと言われた。たしかに問題の人をこの会から除籍しても何の解決にもならないことに気がつく。今後とも理解してもらえることを期待してお互いに注意し合っていきたいと思う。

この会の講師である根本先生が、以前から切望されておられる「万葉植物園」について次に記したい。

近くでは、市川市に、東京にも大小いくつかの万葉植物園があり、四季折々に植物愛好家が訪れ、親しまれている。

この市原の地は古代からの遺跡も数多く残る土地、自然条件も万葉植物園を育てるのに適しているとのことで、その実現を目差して現在まで何度となく市役所などに足を運ばれ御努力頂いた結果、ようやく、市議会に議案提出され、次年度継続審議となり、どうやら希望が持てる段階までこぎつけたのではないかと思われる。満々

と水を湛える高滝ダムを廻り、傍には万葉の草花を観賞できる日の近いことを願いながら、先生の御奮闘に会員一同の声援をおくりたい。

自然を愛するということ

自然観察会　山口由富子

冬枯れの草の中は、思いのほか暖かい。北風も、私のまわりは、そっと吹いて通り抜けて行ってくれているようだ。

あめ色の草たちの小さなさゝやきを聞きながら、そっと寝ころぶと、空が青い。

かって、青春の頃、人の世に心傷つき、山へ逃げ込んだ私は、北アルプス穂高連峰の前穂高と奥穂高へ突き上げる岳沢の山小屋でアルバイトをしていたことがある。

七月、八月の登山シーズンが済んで、潮がひいたように静まり返った山の空は、今日のように青かった。

そして更に、青さに深みが増し、落ちて来はしないかと思うほどの重量感があった。

清澄な空気の中、太陽の光りはなにはばかることもなく、ねじまがる岳樺の葉や幹に降り注ぎ、ミヤマシシウドやトリカブトの花も短かい生を精一杯　歌しているようだった。

太陽・空気・水・大地――

それらは全て、自然そのものであった。自然の恵みを満身に受けて育った人々も自然味が、つまり、人間味が多かったように思う。

しかし、それが、いつの間にか変ってきた。それは、陽光・空気・水・大地が全て汚染され、食物もほとんどが添加物で汚れた時、人の心も蝕まれ汚れてきたのである。自己本位の人間が増え、他人の痛みや苦しみを理解しようとはせず、むしろ不幸を喜ぶ傾向にあり、そして加えて自分自身の感情の発露には全くはばかることを知らない――。

食生活にしてもインスタント食品が増え、栄養の点からいっても非常に偏りが多くなっており、まな板のない家庭すらあるという。実に信じられないようなデータもある。

こうしたアンバランスな食生活は、情緒障害を招来し、こうして人間性の崩壊となるわけである。

つまり、自然の崩壊は自然だけに止まらず全ての崩壊に通ずるということである。ただ単に山や川や木や花や草が無くなるというだけではないのである。

山や林が切り開かれた時には必ず、そこに作意的な手が入る。家が建てば生活排水が出、空気中には車や暖房器などからの有毒ガスが放出される。ゴルフ場ならば農薬による土壌及び樹木の汚染があり、キャディさん達の身体障害や鳥獣類の奇形など弊害を数え上げたら枚挙に暇がない。また一説に、このまま行けば、東京の水はわずか四年で飲めなくなるという。理由は、東京の水がめといわれている多摩湖の周囲に辛くも生涯の夢の結実であるところのマイホームが首都圏を追われ、ここに本意なくも林立し、その生活排水が流れ込んでくるからである。

これは東京だけの問題ではなく、この市原についても同様なデーターが出始めている。そして又、ある学者の説によると、現在二十

14.15欠

八才以下の人間の平均寿命は、四十八才で終わると言われているのである。

いくら医学が進歩してもそれ以前の問題で地球と人類は着実に破滅への歩みを進めているのである。

〃かくすればかくなるものと知りつゝも
　やむにやまれぬ大和魂〃

これは吉田松陰の辞世の句であるが、私たちの生活の便利さや快適さは、やむにやまれぬ魂の発露とは程遠く、言うなれば怠惰な精神の寄りどころとしての発展と言うべきなのではないだろうか。はたして、これでいいのだろうか。

私たちはこの公民館活動を通して、自然の美しさや尊厳の姿を充分に理解し満喫してきた筈である。そして同時にそうした自然の存続を願わない者はいない筈である。

さればこそ、私たちは更に一歩、歩みを進め受動的な姿から脱皮し、ひろく、おゝきく大局的な見地に立ち、自然を愛し、人を愛し地球を愛する集団の一員でありたいと願うばかりである。

国際理解講座に想う

国際理解教育講座　倉田和子

日本の歴史的な流れの中で、最大の出来事はやはり「鎖国」を廃し、「開国」を実行した日であろうと思います。日本人のほとんどが鎖国という長い眠りの中に安住し、世界の動きに目を閉じて暮して来た頃、逸早く日本の危機を察知していた薩摩藩の島津斉彬は下級藩士の西郷吉之助を教育して行きます。NHKの大河ドラマ「翔ぶが如く」の中で、ある日斉彬は「将来、日の本もエゲレス、オランダ等世界中の国と肩を並べて行かねばならん日が必ず来る。その日のために吉之助は何をせねばならんと思うか」とたずねます。すると吉之助が「せねばならん事は沢山ありますが、まずは相手国から学ぶが早道でござりましょう」と答える場面があったのを、覚えていらっしゃると思います。私にとって、この会話は大変印象的でした。この斉彬と吉之助の態度が今の私達にとって国際理解上、一番必要ではないかと思うからです。その点から、この公民館の講座はとても良い役割を果していると思います。色々な国の料理作りを教わりながら、講師の先生から、母国の話をしていただいて、多くの事を学ぶ事が出来ました。私は一品持寄りのパーティーには以前から教わっていた外国料理を持って行く様にしていますが、これは楽しいものです。私はこのクラスが、これからも続いて行く事を願っている者の一人です。こういう楽しみと共に、国際理解に必要なのは各人の主体性だと思います。理解は自分一人だけの世界ではなく必ず相手がいます。だから、外国の方から話しを聴いて、判らない点は質問し又、こちらからも考えを表明することでお互が判り合い、理解に一歩近づいて行くのだと考えます。そこから更に一歩進んで、行動し、勇気と決断で自分のからを破る難かしさも経験するのです。この理解の手段となる言葉の違いも難かしさの一つでありますが、たとえ、外国語が話せなくとも、あなたが、心を開き、相手の話しを良く聴くところから理解が始まるのです。「聞く」ではなく「聴く」です。この「聞く」は大きな門がまえの中に小さな耳、これでは相手が大声で話してやっと少しきこえるのです。私達は外

くりとハガキに表れてきた。
「わぁ、できた」と思わず声を出してしまった。
「習うより慣れろ」である。ここで学習したことを生かすにはワープロを何度も打つしかない。今やワープロ全盛時代。初めて打ったワープロで年賀状を出せた喜びを忘れずに、我が家のワープロを活用していきたいと思っている。

文化祭所感

副実行委員長　山岡秀哉

元号は平成と改まり、過ぎし昭和への愛着と新しき時代への期待と胸ふくらむまま交錯の春夏が過ぎ、すっきりと文化の秋を迎えました。

当館を拠点として研究活動を続ける私共にとり文化祭は大切な発表の場であり地域住民の皆様とのふれあいを得ること友情と謝恩を深める年一度の楽しく重要なカーニバルでもあるのです。

本年も十一月四日五日の両日とも快晴に恵まれ、山田館長並職員の皆様に特別の御協力を頂き各役員と実行委各位が共に和気あいあいのうちに会場の準備をすすめ万端整い平成元年度文化祭が開催されました。昨年程の国際フェステバルの様な目玉こそ有りませんが其の内容の充実については目を見張るものが有りました。まず展示場の各作品ですが一段と進歩著しく創意と努力の見事な出品でした。又各室案内控の皆様も交代制でしたか、マナーも申分なく気持よく拝見できました。模擬店についても流石に心をこめての手作り品で人気も最高十一時の開店が待ち切れぬ有様、料理部門の皆様の協力苦心の成果と拝察。さて終日二階の一室にこもり茶の接待一途の茶道の皆様にも感謝、作法知らずの私共でも心和み静のひとときを満喫させて頂きました。演芸部門についても其の域を越えた技術を習得しながらもアマらしく真摯で謙虚な発表内容は親しみ易いプログラムの工夫など素晴しく楽しく拝聴しました。各々が地域に密着した理想の活躍をされていることを実感し欣喜致しております。体育館において盛大に、且、整然と各担当部門の競技と発表が行われて、精一杯文化祭を盛り上げて頂きました。では本年の文化祭の目玉は何であったのか、と振り返りますと、それは即ち各部門サークルの発表内容の進歩と文化祭協力への充実であったと信じております。

然し乍ら、この成果については本年も多勢の地域住民の皆様の御参加の賜であることは申すまでもなく、今後も皆様と一体となり之を盛り上げ、且皆様の叱咤激励を頂きたいとお願い申し上げます。

各部門サークルの皆様が当館を愛し守り一致協力しての行動の輪も厚くなりましたが、更に魅力ある行動的団体に進歩する為に御願いしたい事は、当館長の指向による熱意ある主催事業の各講座等を是非御支援されて生涯教育の真の目的成果を会得して頂き之を生かして頂くことでございます。

盛会裡に終了できました平成元年度の文化祭、皆様に厚く御礼を申し上げるとともに来期も尚発展を期して努力致しますので宜敷く御支援御協力の程お願い致します。

最后になりましたが何かと気配り不足により不行届の点が有りましたこと深くお詫び申し上げます。関係者一同充分に反省協議を致し来期に生かしたい所存でございます。

サークル

ちびっこクラブ　念願だった母子サークル　森田文子……19
〃　ちびっこクラブに入会して　轟佳子……19
初級中国語教室　私と中国語　梅谷道子……20
崩木会　踊りの楽しさ　福田夏……20
八幡民踊会　踊り　中村きく……21
東京アコーディオンサークル　アコーディオンで楽しい仲間作り　深谷みどり……22
いちはら女声コーラス　アニーローリー　上塚和子……22
自然運動「宇宙」　自然運動は素晴らしい　中西正子……23
獅子の会　踊りの中の言葉　日高享幸……24
手作りの会　花大根　磯部紀代子……24

念頭だった母子サークル

ちびっこクラブ　森　田　文　子

ちびっこクラブが発足して、五年が過ぎました。当初八幡幼稚園のPTA室をお借りして、お母さん方が始めたのを、翌年、公民館が改築されたと同時に、念願がかない、サークルとして認められ、多少なりとも保母の経験があるという事で、講師をおひきうけしてきました。3歳から幼稚園へ入れるのは、早すぎる。又公立は5歳から入園なので、それまで集団で時々遊べる場所が欲しいと、小さいお子さんを持つお母さんや、子供達にとって、このサークルは、必至でした。

現在五十名の会員がおります。人数が多すぎるので、4歳児は、青少年会館をお借りし、3歳児が毎週水曜日お世話になっています。他のサークルに入られていて、御覧になったおじいちゃんや、おばあちゃんが、ウチの孫もぜひと、連れて来られる方もおり、他のサークルの皆様や、沢山の方の暖かい見守りの中で、母子共々、サークルも生長してきました。講師の他に、役員、更にお母さんが毎月交代で、一諸に遊んだり、折紙指導をしたりして、お母さん先生をして下さいます。家に子供と居るだけでは、イライラして叱ってばかりいたのに、のびのびとした気持でリフレッシュできますと、ニコニコしてお話しなさるお母さんに逢いますと、本当によかったと思います。行事も色々と盛大で、七夕のおたのしみ会、運動会、クリスマス会と、お母さん方、更にお父さんや、おじいちゃん、おばあちゃん家族中で準備を手伝って下さったり、参加して下さいます。両親や、周囲からこんなに愛されて育っている子供達は、絶対非行に走る事はないと思います。今年度も、3歳、4歳とサークルで過した子供達は、設備の整った公立幼稚園へと進級していきます。来年度は又五十余名の会員が予定されています。周囲のやさしい大人達に見守られながら、泣いたり、おこったり、笑ったりして過ごす事でしょう。こんな蜂の巣のようなサークルを暖かく見守り継続させて下さっている館長さん初め、職員の皆様方に深く感謝致します。私も微力ではありますが、一人でも多くのおさな子の笑顔と、であえるよう努力していきたいと思います。又、他のサークル会員の皆様方、御自分のお子さんや、お孫さんと同じようにどしどし叱ったり、ほめたりして下さい。御迷惑のかかる事もあると思いますが、よろしくお願い致します。

ちびっこクラブに入会して

森　佳　子

入会当初、子供達が集団生活に慣れていないので、最初の一ヶ月間は、お母さんが一緒について様子を見るという事でスタートしました。我が末娘も親べったりの状態だったので、心配していた通り、結局最後まで残るはめになってしまいました。私がクラブの役員なので他の人に迷惑をかけてはいけないと思い、家に帰らず最後まで下（ロビー）で待っているからと、子供に言い聞かせる日々がしばらく続きました。連休明けまでに何とかなれば良いと覚悟を決め、気長に構えたのが良かったのか、その後はぐずる事もなく順調に進みました。そして、行事等の仕事でかまってやれない状態でもケロッとしており、反対に、私が子供におこられるまでに成長しました。

このように成長してきたのも、先生やお当番のお母さん方が温かく見守り、御指導下さったお陰だと感謝しております。また、このような場を提供して下さり、うるさい子供達の声にも目をつむって下さった館長さんをはじめ、館員の皆様方のお陰だと思います。一年間、本当にありがとうございました。

私と中国語

初級中国語教室　梅谷道子

趣味と実益を兼ねた、生涯学習を、何にかやってみたいと、漠然と考えていました。隣国の広大な国土、長い歴史、そして、シルクロードに興味が有ったことなどがキッカケとなり、軽い気持で中国語を学んでみようと思いました。中国は私にとって、全くの他国では有りません。少なからず縁のある国でも有ります。父が検察官として、赴任してたハルピン市で、私は生まれました。一九八七年に初めて、中国へ旅行しました。昭和四十年前後の日本に似ていると思いました。とくに、東北地方は、きびしい風土の中でも、人民は実にたくましく暮しています。日本人観光客は、それ程多くなかったのか、立ち止まると、いつの間にか人垣が出来てしまうのです。一人の婦人が遠慮がちに、今買って来たばかりと思われる、小さなトマトを買物袋から取り出して、手に握らせてくれました。「謝謝」と、お礼を言うと、嬉しそうに笑顔を返してくれました。会話が無くても暖かさ、優しさが充分に伝わって来ました。人との出会いのすばらしさを実感し、心まで豊かにしてしまう中国に、すっかり魅せられてしまいました。親切だが決して媚ず、自分の国を誇りにし、プライドを持っている。しかし、その反面、天安門事件が起るように、いつ政治情勢が変化するか分からない。不安な面も有ります。それでも私は、中国をもっとよく知りたい。それにはまず、言葉を学び、覚え、それを通してお互いを認識し、交流して行き度いと言う気持があります。中国語は、たまたま漢字と言う日本人にとって共通の文字で、理解しやすいと考えていましたが、実際習ってみますと、やはり外国語ですから、そう簡単には上達出来る道理は有りません。〃一辺八学、一辺八忘〃の学習成果で、落ち込むことも有りますが、言葉の学習に向き不向きはなく、やればやっただけの効果が必らず現われる。気楽に長い時間をかけて、ステップを一段一段登って行ければ良いと、自分をはげましながら教室に通っています。中国文化に影響を受けたものが、日本には沢山ありますし、顔形も同じく、本当に親しみやすい身近な国です。中国語は年令層が広く、五十才、六十才になっても学習出来る言葉だと思います。「ウサギとカメ」の、カメの心境で続けて行くつもりです。

踊りの楽しさ

崩木会　福田夏

日の光を燦々とあびた若芽が崩えるように若々しく希望にあふれる会にしましょう。と崩木会と名付け、鈴木つね子先生を迎えて踊りの会を持って早や十数年、公民館を利用させていただいて十余年の歳月が流れました。

人々は悲しくては踊れません。楽しいから踊る、踊るから楽しいのです。長唄に合せて踊る日本舞踊は古典的なすばらしさは勿論ですが、私共が教えていただく民謡踊の素朴さ、演歌の楽しさ、それにも増して、市丸唄うところの俗曲に始まって小唄、端唄に合せて踊る楽しさは、又格別なものがあります。あるときは大宮人に、あるときは粋な江戸前の兄さん、可憐な町娘と、浮世離れの夢物語りを、日頃の雑事を忘れて踊る楽しさは、何事にも替えがたく思います。

それに毎年行われる市民会館での発表会の楽屋での心踊る雰囲気、又普段したこともない厚化粧、派手な舞衣装、老いも若いも浮々と着替えている様は、おかしくもあり、楽しくもあります。

相当の年配の方々のかわいらしい踊り、若い人々のはつらつとした踊り、なまめかしい踊り、みんな生き生きとしています。

私は去る年、体調をくずして一年間会から遠ざかっていたことがあります。そしてある日再び会に顔を出した時のことでした。何時も何気なく接していた仲間が、着物姿で踊っているのを見てハッと驚きの目をみはりました。着物姿の何と美しいこと、しばし見とれてしまいました。和服と踊り、切っても切れないもの、ここらにも踊りの楽しみがあるなあ、と感じました。

こんな数々の楽しみを教えてくれた鈴木先生に改めて感謝の気持で一杯です。これから何年続けられるかわかりませんが、健康に注意して崩木会の芽を枯らさない様、頑張りたいと思います。

踊り

八幡民踊会　中村きく

茜澄む富士を背にして踊りけり

忙しい農作業の合間を縫い、さんざん注意され、なおされ、それでも二度と無い人生を無に過ごさぬよう、週一回、公民館で踊りの稽古。振りかえってみると、畦ぬりの途中、五分でもとかけつけた日もあった。それからまた子を連れて盆踊り、遊び疲れて背負って帰りながら頭の中で踊ったこともあった。——

習うとは、自ら羽をふるってばたばたさせることとか。先生が会員に「わからない個所の有る人はどうぞ。」とおっしゃる。でも、私はこれだけ教えてもまだわからないのかと思われたらーと手も上げられない。ドジばかりやるのは私だけ。注意を受けるのは悲しい。それなのに右を向いても左を向いても何を聞いたのか、わからない。だからといって、止めれば自分に負けたことになる。そのうえ、目をかけてくださる先生に済まない。先生を有り難いと思わなければーと、隣りの人の真似をする。頭の中が空っぽになったり、ふっと踊りのほかの事が頭にちらつくともう間違ってしまう。手に書いたのを見直して練習し直す。先生が「舞台は一発勝負、練習不足は通らない。」と声を大きくする。全くその通りである。あまり気を張りすぎると、扇が手に張りついて回らなくなるし、どのように踊ったのかもわからなくなる。ふだんが大事、他所ゆきなんてとてもできないのだと覚る。

こうして苦労してやっと体で覚えた踊りはあっと言う間の三分間が勝負なのである。

一つの舞台が終わると次の舞台に向かって新しい踊りを習う。

このようにしてもう十幾年、髪に白いものの混じる年になった。おかげで友達にも恵まれ、切っても切れぬ仲となった。そして今、日本中、どこへ旅しても宴に歌われる歌ならたいてい踊ることができるようになった。お風呂につかうタオル一本で「木曽路の女」「命くれない」「長良川」など。見知らぬおばさんの歌に合わせて踊って大拍手、歌ったおばさんにも、ありがとうと礼を言われる。

踊りとは、何と楽しいことだろう。残る命を踊りと共に暮せるならば、腰も曲がることなく、世の中に置いていかれることも無いだろう。それどころか、老も程遠いものとなるだろう。週に一度着物を着てきりりと帯を結び、負けられないとがんばるつもりである。

アコーディオンで楽しい仲間作り

市原アコーディオンサークル　深谷　みどり

「こんにちは」「いやーしばらく」明るい挨拶が行き交う。素ぼくで明るいアコーディオンの音と同じで市原アコーディオンサークルのふん囲気は明るく飾り気がない。皆月二回の練習日に会うのを楽しみにしている。四十～五十才代、同じ年齢層が集まっているということもあるが、何よりも皆アコーディオンが三度の御飯より好きという人達なのだ。ただ年のせい(?)で覚えが悪く教えて下さる山岡秀哉先生には大変ご迷惑をおかけしている。何度もスケッチバックしながら進めてきた教則本、初級がもう少しで終るところ迄こぎつけた。終りの方はさすがに難しく練習する顔は皆真剣そのもので、この時ばかりは皆仕事のことも家族のことも(!)忘れているのではないだろうか。

市原アコーディオンサークルの特徴は、教則本を綿密にこなし基礎をしっかり身につけていく傍ら、演奏活動を通して楽しく歌を歌う仲間作りをしていくことだと思う。私たちのサークルは市の社会福祉協議会のボランティアグループに所属している。夏には〝親子で歌う音楽の夕べ〟を開き、日本や世界の美しい歌をアコーディオンに合わせてみんなで歌う催しを持っている。この催しは童謡の良さを見直してもらう機会にもなっている。又年に三～四回老人ホームや病院を訪問し、みんなで楽しく歌を歌う場を作っている。演奏を聞いてもらうのもいいが、アコーディオンに合わせてみんなが歌う全員参加の集会はとてもすばらしい。帰り際、手を握り「本当に楽しかった！」「又きっと来てね！」と言って下さったりすると、弾きそこねたことも忘れ、重たいアコーディオンも軽くなる。

今年も、山岡先生をはじめ皆健康第一に、アコーディオンの練習にいそしみ、楽しい音楽の仲間作りをしていきたい。

アニーローリー

いちはら女声コーラス　上塚　和子

スコットランドのこの美しい曲は、日本語訳では「妹と」という題名で歌われることもあります。この歌を歌っている時、丁度その少し前、妹さんを亡くされた団員が妹さんの事を思い出され、歌えなくなってしまわれました。隣りの団員も事情を聞いてもらい泣きして、歌えなくなってしまわれたとか。

毎週火曜日の午前中は、今晩のおかずも、家計のやりくりも、亭主子供の事も、一時忘れて歌の世界に思いを通わせています。一人ではとても声を張り上げられませんが、「みんなで歌えばこわくない」の気持で、精進しております。しかし、そこは良い指導者のもと、声を張り上げているとは言いましても、指揮棒一つで自在にあやつられ、すばらしいハーモニーを生み出しています。何やら、お釈迦様の手の上を駆け回る孫悟空の様な心持になります。

舞台で脚光を浴びて歌うのは気持の良いものですが、舞台の袖で出を待つ間、「運命共同体」、「一蓮托生」という言葉が私の頭をチラリとかすめ、舞台で歌う以上に緊張しますし、仲間が心強く思えてもきます。

好きであればこそ歌い続けられるのでしょうが、家族の理解、自分自身の体力、良い施設、良い指導者と仲間、地域社会のサークル活動に対する理解が無ければとても続けられるものではありません。コーラスに限らず、各種サークル活動を続けていかれるというのは、現在とてもしあわせな状態であると思い、何かしら目に見えない大きなものに対して感謝の念を抱かずにはおられません。これからも〝休まず、遅れず、目立たず〟の三点をモットーに、ずっと歌い続けられたらと思います。

コーラスを一緒にやってみたいと思っていらっしゃる方、わがいちはら女声コーラスには、とても良い先生がいらっしゃいます。必ずやあなた自身の気付いていない、すばらしい才能を引き出して下さることゝ存じます。ぜひ一度見学にいらして下さい。

自然運動は素晴らしい

自然運動「宇宙」　中西　正子

昨年、熟年のためのツアーに参加して、いろいろな方々と一緒に旅をしました。その方々の中には、同じ年の御夫婦なのに外見上は年の近い親子にみえてしまう程、奥さんの背骨が曲がっている人もいました。又、背が高くてきれいな人なのにひどい猫背の方もいました。背筋が伸びて正しい姿勢でいたら、もっと若く、もっと美しくみえるのにとても残念だと思いました。

昨年の六月に自然運動に出会って、勉強し始めていた私は正しい姿勢という事が気になってしまうのです。そして、人間は年をとった時、姿勢が良いかどうかという事で、実際の年令より若くみえたり、老けてみえたりするものだと思いました。姿勢が良いという事はどんなにか素晴らしい事だと思います。私は年をとった時に、背筋をしゃんと伸ばして、生き生きと生活する年寄りになりたいと望っています。姿勢の悪さで、体の具合が悪くなったりしたら、つらいのは自分です。そして、家族にも迷惑をかけることになります。

自然運動を始めてから、私の体におきた変化は身長が4ミリ伸びた事と、足の裏のはだの荒れが大分きれいになってきた事です。年と共に身長は縮むものだと思っていたのに、この年になって数ミリでも伸びるなどという事は大変な驚きです。今では今年の健康診断でどの位身長が伸びるのか、とても楽しみです。昨年十二月三日に、全日本自然運動連盟の発表会がありました。大野桂子先生と一緒に行ってきましたが、たくさんの指導者の方々が年令を感じさせない程、若々しく見えました。信じられないことですが、私には50代の

方と聞いても30代にしかみえませんでした。顔だけでなく、全身が美人という感じで、本当に美しいという事はこういう事なのではないかと思いました。私もできるだけ、素晴らしい体に近づく様に頑張りたいと思います。

自然運動の最も良いと思う所は、自分の体は自分で整えるという事です。経絡を刺激して、エネルギーにあふれた体にしてゆきたいと考えています。一生続けていける自然運動は本当に素晴らしい。

踊りの中の言葉

獅子の会　日　高　享　幸

舞う鳶の、かなめ返しや、初日の出

お正月に、鳶と日の出という組合せに恵まれ感激し、俳句にしたいものだと考えましたが、情景を美しく表現しようとすると、かえってこの情景をこわすことになり、句にすることは、あきらめていました。

今月二回目の舞踊のお稽古の時、先生から扇の使い方で、「かなめ返し」という言葉を教わりました。扇が先生の手先から、初日に光る鳶のようにひるがえるのを拝見しました時「これだ」と私は思い、そのまま俳句に使わせて載きました。私はこの句に今満足しています。

古典の日本舞踊を学ぶには、いろいろの要件が必要かと思われますが、踊りには何一つ適したものの無い私を知りながら、何だか踊りが教わりたくなり、一昨年よりこの日本舞踊を習い始めました。

教えられる先生には大変ご迷惑かと思っていますが、お陰様でもうすぐ二年になるところです。

この「かなめ返し」は舞踊の専門の言葉と思われますが、踊りに関係の少い方でも、扇から受ける美しいひびきがあるいはご理解載けるのではないかと思います。

舞踊の事はまだ何一つ解っていない私ですが、日本舞踊は古くから独自の美しさを追求されて来たものだけに、その中から生れる名付けや、言葉には独特の適確さと、つやを持つものが多くあるように思われます。

伝統の日本舞踊を学びながらこのような言葉の貯金も出来るなんて本当に幸なことだと思います。私にこのような機会を作って載きました事を感謝しています。

より多く学び、より多く日本伝統の文化の理解を深めたいと思っています。

花　大　根

「手作りの会」　磯　部　紀　代　子

嶽にも輪飾ゆるる舟揚場
とりあえず密柑をむいて一人旅
勢以という名の祖母も亡し黄水仙
桃をみて陽気なふりの人といる
雨やんで四天王寺の朝桜
板の橋渡れば寂光花盛り

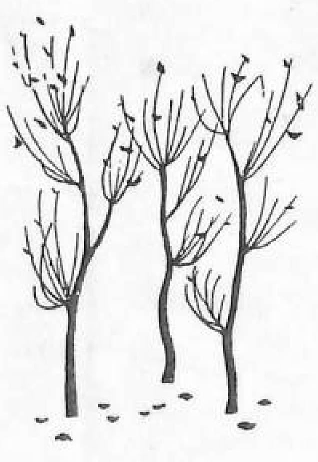
桜花夢の途中で散りにけり
熱いシャワー浴びて見に行く朝桜
長谷舞台ひとりの遍路が桜追う
地図にない故郷さがし皐月冷え
他人事のように聞きおり花大根
みどり児の真直な目に花大根
岡寺に人影もなし藤の花
無器用な人と暮して茄子植える
新緑や自立説く人楚々と立つ

リクルート二句

立葵人の脆さにゆれており
境界線天道虫も歩き出す
歯ぎれよい話を聞けば濃紫陽花

大洗　磯前神社

夏祓おえて見渡す太平洋
古き夢新しき夢濃紫陽花
喫茶店に金魚も遊ぶ昼下がり
石橋をたたいてばかり梅雨寒し
清濁を合わせのむ群れ梅雨出水
通り過ぎてはいけない人に千日紅
雑踏に見えつかくれつ夏帽子
松明をかざし沖へと海女祭り
ビール飲み取替えたきは脳細胞
梨食めば喉のどこかに消費税
他人のことと聞き流しおり萩の花
さまざまな人といこえり萩の花
ためらいを風に遊ばせ秋の蝶
いつの世も揺れて咲きおり萩の花
成行きにまかせてしまひ秋扇
店仕舞を夫に頼んで月の座へ
柿落ちて平家屋敷のしずもれり
浮島と呼ばれ池塘の草紅葉
落葉池この家の主がみまかれり
冬桜仏母の寺の門に咲く
遠くより風聞こえ来しなめこ汁
雪の匂ひする絵葉書の届きけり
静物画のような人いて冬安居
言いだせば引かぬ母いて寒の入り
いい訳を聞きあきて又年の暮
白菜を割れば子猫の立停まる
つぎはぎの嘘みえてくる石蕗の花
降る雪七曇りの涯に佐渡ヶ島



ひばり読書会

平成元年度の出会い　石橋みな子……29
「ねじめ正一さんを囲む会」に参加して『高円寺純情商店街』　小出文子……29
アンネの日記を読んで　野城千鶴……30
アンネの日記を読んで　小川光子……31
李起昇「ゼロはん」を読んで　宮吉慶子……32
ガラスの動物園　佐藤禎子……33

平成元年度の出会い

ひばり読書会　石橋　みな子

平成元年度も良い本に出会った。そして、記しておきたい言葉や内容がそれぞれなので、一冊の感想文というのではなく、何冊かより心に留まったところを書いてみようと思う。「現代家族」は端的にいって、身近でありおもしろい作品だった。主人公の勇作が、青木教授との関係の中で、自分の確固たる人生観が危ぶまれていた事を感ずる部分がある。私達にも順調にいっている時はそれが、ある。と思っているのだが、回りとの関係で成り立っているものも多く、危機に直面して根底をくずされるという事も大いにあることだ。

「女の老い支度」では、たくさんの心強い言葉に出会った。一部だが＜老いは自分一人のために使ってよい時間を充分持て、少なくとも若い人より無欲になれるし、捨て身にだってなれる＞＜若い人達が年を取ることにも希望があるのだと分かってくれたら、私は老いを生きることにも充分に使命があると思う＞＜私は自分ほど、最も身近で、味のある友人はいないと思っている＞－などなど、とにかく現実をしっかりととらえた上で希望の見える一冊である。

「ベートーヴェンの生涯」は、課題本として読んだ後に、自分の本を持ちたくて本屋に注文し購入した位だ。そして、その後すぐ引き続いて「ゴッホ」の本に出会ったが、何か両者にとても似たものを感じたものである。

両者共に、信仰にもよるのだろうが強い意志や執念で一生貫いている。もちろん、並の障害ではなかったからそれを越えるにはどれほど大きな力を必要としたか、そしてまた、どれほど大きな力がついたことか。

しかし、最近私は自伝的なものに出会うと以前のように主人公側から味わってきた点とまた違い、その周囲の人達の悲しみや困惑の方を思われて、しばし黙禱する事もある。

が、それにつけても、この「ベートーヴェンの生涯」を書いたロマン・ロランが、自分の「救済者」として、それに捧げる感謝の歌である。とあとがきに書き、生涯を通してベートヴェンを尊敬していた事実には大いに感動した。

人が他人の欠点までをもまるごと抱えこんで尊敬したり信頼する姿を見聞きするにつけ、単純な私としては、うん、人間ってイイゾイイゾと嬉しくなって幸せな気分になれるから、やっぱり本との出会いはやめられない。止まらない。

「ねじめ正一さんを囲む会」に参加して
『高円寺純情商店街』

ひばり読書会　小出　文子

君津中央公民館で、去年の十一月二十五日に「ねじめ正一さんを迎えて」と題した、著者を囲む会が催されました。これは千葉県YBC（読売ブッククラブ）君津市読書会連絡協議会、君津市立移動図書館の共催で、千葉県立中央図書館、読売新聞社の後援によるものです。

私の入っているひばり読書会が、千葉県立中央図書館外奉仕課で、

十冊文庫を利用している関係上、この催しを知り、ねじめ正一氏のお話を聞きたいと思い参加しました。懐しい削りかつをと煮干しの味、乾物屋に育った少年のグッド・オールド・ディズ。駅前商店街の「人情と勘定」の世界と紹介されるこのテキストにひかれました。書店に出ているのを見た時から、買って読んでみたいと、思っていたからです。この高円寺純情商店街は、第一〇一回の直木賞を受賞しています。内容は、天狗熱、六月の蝿取紙、もりちゃんのプレハブ、にぼしと口紅、富士山の汗、真冬の金魚の六篇から成り、長篇小説というより、個々の題に応じて、別々に焦点を置きながらも正一少年を主人公として、その周囲の人々や近所の様子が一貫して細やかに描かれています。今となってはもう戻ることの出来ない。でも振り返ると手が届きそうな近さの、ノスタルジックな商店街。

もともとねじめ氏は、詩人で、二十八才の時から詩を書きはじめて、昭和五十六年に詩集『ふ』で第三十一回H氏賞受賞、他にも多くの詩集があり、又ユニークなエッセイストとして『ねじめの歯ぎしり』『長島茂雄デラックス』他などがあります。

囲む会でねじめ氏は、詩のパフォーマンスをしていたことを例をあげて面白く語り、現在の氏の生活ぶり、ねじめ民芸店の事、いろいろの講演会やその様子などもう笑ってばかりの愉快なお話でした。特に少年時代の思い出話が多くだじゃれを言うのが好きで、目立ちたがりやで、それは今もそうだそうです。

中二の時の受持の先生との出会い、野球部のエースだった事、祖母の死、父の上着のポケットの中から映画の切符（ストリップの券も）を黙って取って観てしまった事などがこの作品にとって掛け替えのないものであり、これらの思い出がふくらんで、三年間掛けて書き上げたそうです。初めての小説に自分の中の大事なものを出してしまったと語っていました。最後に参加者からの要望に応じて彼は自作の詩「あーちゃん」を朗読しました。これは以前NHK教育テレビのETV8で見た事があると気づきました。詩人が自作を朗読するものでかなり個性的な詩が多く印象的でした。私は偶然の出会いにうれしくなり、テキストとして持参した本にサインをしてもらいねじめ正一氏にとても親近感を持ちました。

アンネの日記を読んで

ひばり読書会　野城千鶴

この日記を読んでいると、明るくて可愛い少女から、精神的に成長してゆくアンネの姿が、頁を繰るごとに浮かび上ってきます。この日記の素晴らしさは、十三歳から十五歳の少女の書いたものとは思えない程の確かな心の目で、自分を見、大人達を鋭く観察しながら、戦争という大きな社会問題をとらえ、子供特有の純粋な心で描写していることです。いつ連行されるかわからない恐怖の中でも決して希望を失わず、日課の勉強に励み常に自分を見つめ、人間としての心を高めてゆく彼女の強さに、私はふと蓮の花にも似た美しさを連想致します。隠れ家の中で他の家族と共に生活する息苦しさも持ち前の明るさで切り抜け、彼女の目は、欲と虚栄心をまとう大人の心を見抜いています。この観察力にはたじろぎさえ感じます。親子の係わり方についても彼女はただ反抗するのではなく、普通の子供ではない自分の長所を認めて欲しいと、はっきりとした意見を述べています。がここで感じることは、親として子供の意見をきちんと聞き、どの程度なっとくのいく回答をしてやることが出来るかということです。過去の経験から日常の忙しさを理由に、親の立場を利用して、おさえつけてかたずけていた様に思います。子供の成長過程での親の悩みの一つは、異性との交際ではないでしょうか。アンネの愛はお互いの精神を高め合う愛であり、人間にしか出来ない尊い異性との係わり合いだと思います。少女達皆がこんな素敵な恋をしたら、大変意義のある青春とすることが出来るのではないでしょうか。戦争に対し彼女は、復興と破壊の矛盾を上げて書いていますが、現在は戦争の為の破壊だけではなく、科学の発達に伴う自然破壊をも皆で考えなければいけない大きな問題だと思います。アンネは「つまらない人間で一生終わりたくありません。世の中のため、人類のために働いてみせます。」と言っていますが、彼女が現在生きていたなら、どんなにか多くの仕事を成していたことでしょう。この短い人生でこんなにも素晴らしいメッセージを、私達に残してくれたのですから。私はこの日記はアンネの命と引替えに世に出た、彼女の魂の様な気がしてなりません。

アンネの日記を読んで

ひばり読書会　小川光子

一九二九年六月十三日生れのユダヤ人の有名な女の子、アンネ、何とそれは私より一ケ月早いお姉さんと言うだけの同い年、自由で明るく無邪気でいながら鋭く周囲の社会状況を画いている文章に魅せられて了った。この世に生きた場所がドイツと日本だったと言うこと。軍国主義化していく社会の中でアンネは、何と自由に個性豊かに育ったのだろう。

私は昭和初期を東京に育った。幼い想い出の中で街なかに金髪碧眼色白の美しい子供達をよく見かけた。母は「白系ロシヤの人達よ」と教えてくれた。「気の毒に。ロシヤを追われた人達よ」、話は私の生れる前に遡ぼる。一九一七年大正五年ドイツ国籍のレーニンはボルシェビッキ党を率いてロシヤ革命に成功しロシヤ共産党の基礎を築いた。それまでロシヤの皇帝の許にいた人達は追われて世界に散っていった。欧州・米国・そして一部が日本に居たのだ。美しい青い眼が心なしか寂しさを湛えていた様に記憶している。一九二九年昭和四年上り坂の経済大国米国ニューヨーク市場の株価が大暴落をする。忽ち全世界に影響が及び大不況の嵐が世界を吹き荒れる、日本でも他所事では無く「大学は出たけれど」の言葉が残っている通り都会に出ても職が無く当てどなくさまよう人が巷にあふれ、故郷に帰っても農民は農産物価格が暴落し苦しみ喘いでいた。千葉にも疲弊農村の言葉が残っている。それに対して当時の政権自由民権党は何等対処する事もなく国民の怒りの中で軍が徐々に力をつけ一九三六年昭和十一年二月二十六日、当時の首相官邸を襲うクーデター事件が起る。そして世界に（日本民主政治いまだし）の感銘を与えて了った。そして一九三一年満州事変、一九三二年満州国独立。一九三七年支那事変、一九四一年大平洋戦争へと軍国化がすゝみ第二次世界大戦へ発展する。そして民族意識としては日本では鬼畜米英のヤンキーであり、米国では（黄い猿）イエローモンキーのジャップだった。

ドイツでは一九一八年第一次世界大戦に敗れ一九二〇年猛烈なインフレに中産階級はすべてを失い、失業者は保守的な共和制に焦ち、軍国主義的な体制への移行を願望した。一九二一年ナチス台頭、除隊を強いられた軍人、財閥に反感を持つ失業者、共産主義革命におびえる実業家、地主等々が、ナチスに望みを託した。党首はオーストラリア生れのアドルフ、ヒトラーであった。ヒトラー及びナチスはドイツの栄光の衰退をユダヤ人と過激分子のせいにした。そして一九二九年世界大不況の中でヒトラーは力を強め悪意ある攻撃をユダヤ人に向ける。現実にはユダヤ人は過去何世紀もの間、ドイツ社会に多くの顕著な貢献を成し遂げていたがヒトラーは劣等民族として卑めた。この時代であろうか、アインシュタイン博士が多くのユダヤ人の為に渡米費用を購う為、チャリティ・コンサートを開き、自ら第二バイオリンを弾いている。そして米国へ移住、有名な相体性理論を発表し、原子の世界へ眼が展らかれる。一九三三年ヒトラー独裁政治へ、そしてユダヤ人追放、イギリス、フランスと戦争、ポーランド、デンマーク、ノルウェーに侵入、オランダ、ベルギー、フランスになだれ込み、フランスは六月二十二日降伏する。そして一九三九年相互不可侵条約を破ってロシャに侵攻する。そんな時であろうか。伊太利ムッソリーニ政権スペイン、フランス政権等軍国政権があり、一九三六年、日独伊防共協締が結ばれる、昭和十一年代、東京では東大、京大などへ入った頭のよい男子の父母は（赤）マルクス主義にだけはなるな。と言い又祈ったものだ。ドイツのゲシュタポに対して日本では特高警察があり赤を狙い、有無を言わさずしょっぴいて拷問にかけた。一九四〇年日独伊三国同盟。私の小学生時代のクラスにフランス駐在外交官の子が居た。ナチスにやられて殆ど逃げ帰った様な事を言っていたがその子は可愛い、花柄のお洒落な半靴下をはいていた。東京の子でもそれは憧れの姿だった。そしてアンネも…可愛いゝ写真が私の追憶を刺激する。アンネは私の小六から女学校に当る三年間ユダヤ人の子供は学校から追い出され隠れ家に住んでいるのだ。それはこれから青春時代を迎えようとする女の子にとって致命的な打撃であったろう。私の時代、学校は楽しい処であった。でも一九四四年頃は軍隊教育の最たるもので女学生が軍歌を歌わせられ行進をさせられた。思春期の私にとってイライラの最高潮にあった。或る日例の通り軍人の教官が行進をさせながら軍歌をハ調で歌わせた。私はそれをホ調で飛び出し歌い続けた。終り近く教官の顔を盗み見ると私を睨み付けていた。終った時教官は私を殴り付けるかと覚悟したが殴らなかった。そんな折、ドイツではアンネは日記を書き綴る。現代、アルバニアではギリシャ人を排折しブルトーザーにギリシャ人一家を縛り付け、大勢の前で走らせて惨殺したと言う事だ。そして現体制に反対し逮捕されている政治犯十万人そして此の二年間に一七〇人が処刑されている。有ってはならないアンネの世界が現在でもある。明るく自由で感じ易い美しいギリシャの少女が何人もいるであろう。一つの思想だけで国を統一し反対する者を実力行使で排除する、リトアニア・ルーマニア・アゼルバイジャン等。民族対立の深刻化が伝えられている。今日本は平和な経済大国ではあるがこのニュースに無関心であってはならない。アンネの日記が絶えた一九四四年八月、青春の中でのアンネの絶叫が聞こえる様だ。そして書かれていない絶望と恐怖も。…一九四五年八月、日本敗戦！

でも今に至るまでアンネは若く美しくみづみづしい思想と可愛いゝ姿のまゝだ。私の様な婆さんではない。

李起昇「ゼロはん」を読んで

ひばり読書会　宮吉慶子

釜山への関釜フェリーの船内で、朴英浩と中野佳子は出逢い三日間の韓国での旅を同行する。英浩はバイクで警察の検問が嫌で逃げ友人を交通事故でなくす。彼は事故現場から逃げるが、そんな自分自身に怒り日本に居たたまれなかった。一方佳子は、韓国人であることが重荷だという恋人在顕の苦悩、日本人とは結婚させないという彼の両親の思考、血が穢れると激怒した彼女の伯父。それらすべてが理解できず韓国へ行けば何か解かるかも知れないとフェリーに乗る。自分の気持ちを整理し再出発をしたかったのだろう。釜山に着いた英浩は涙を流す。憎しみに燃えながらも母親を育くんだ土地に懐かしさを感じそんな自分に驚くのである。ソウルの旅館で李江恵と出逢う。李の何事にも穏やかな態度に彼も素直に李の話を聞く事が出来、父親に対してある種の理解も出てくる。鄭貞淑という日本語を学ぶ女性と出逢う。マッコルリ（酒）を飲みながらの英浩と貞淑とのやり取りで「韓国なんてのは子供を置き去りにして逃げて行ったお袋みたいなものだ」と涙をこらえながら言い放ち、次々と暴言を貞淑にあびせる。彼の妥協しない若さだけで酒が入っていた

とは言え、あんな毒舌をさせた作者の意図が解からず、何遍もくり返し読んでいるうちに訳もわからず鼻がツンと痛くなった。日頃祖

国とか民族という事を考えずに生活している私には、貞淑の常識的な建設的な意見は良く理解できるが、何か官僚的な言葉として伝わって来た。「韓国よりも日本の方が上だという思い上がった心根、この日本社会の常識」と作者は言うが、そんな常識が今の日本のどこにあるのだろうか。そう考える私は世間知らずなのだろうか。「誰が差別してもあなた自身があなたを差別してない限り大丈夫」を初めとして佳子の言葉は私の言葉と重なる。今でも地球上には色々な種類の差別があり私自身じかにそれを感じる事もある。〃朝鮮人　という差別がどうして日本にあるのか解からない。両国の間に歴史上の行き違いが何遍かあったにしても。英浩は韓国での短かい時間の中で、佳子、李、貞淑と出逢い自分自身、父親、韓国の人々や国について、温かい目で見る事が出来る様になったのではないでしょうか。

ガラスの動物園

T・ウイリアムズ
小田島雄志訳

ひばり読書会　佐藤禎子

舞台は一九三〇年代のアメリカ、セントルイスの裏通りにあるアパート。アマンダは、自分勝手な夢を追いかけて蒸発してしまった夫の写真を部屋にかけて、極度に内気な娘ローラと、息子トムの三人で暮している。生活は靴会社の倉庫に務めるトムの収入と、アマンダのパートタイムの収入でどうにか支えているという心細いものだ。ローラは、少し不自由な足にコンプレックスを持ち、そのせいでハイスクールを中退してしまう。アマンダはローラの行く末を心配し、無理してビジネス学校へ入れるが、内気なローラはささいな

ことがきっかけで学校へ行かなくなってしまう。職業もだめなら結婚をと、アマンダはトムの務め先の若い男性を夕食に招待したが、そんな事とは知らずにやってきたジムにはフィアンセがおり、アマンダは大いに落胆してしまう。彼女の心配のタネはローラだけでなく、息子のトムもだ。トムは詩を書く夢多き若者だが、理想とは縁遠い職につかざるを得ず、生活の重荷も背負い、口やかましいアマンダの気持ちはよく理解しながらも現実から逃げ出したくて苦しんでいる。アマンダは、息子のトムが夫と同じように自分とローラを捨てて出ていってしまうのではないかと気が気でない。アマンダは我が子を愛し、良かれと思ってすることがどうも裏目に出てしまう。

彼女は裕福な農園の娘として生れ、多くの人にちやほやされて育ったことが忘れられず、時にそのことが現実の中に紛れ込んでしまうという愚かしさを持っている。ローラは、彼女に幸せな結婚をさせようとやっきになっている母とは正反対に、ガラス細工の動物を集め、この動物たちとだけやすらかな心の交流をしているような、繊細な娘だ。今から30年近く前に初めてこの戯曲を読んだ頃、時に劣等感が大きくふくらんで押しつぶされそうな時など、ローラに自分を重ねて大いに共感をもったりなぐさめられたり、いつも彼女を身近かに感じ続けていた。今、時を経てアマンダと同じ年頃になりまた読み返してみると、新しい発見がかなりあった。アマンダは愚かで可愛くて哀れな母親ではあるが、生活の不安、子供達の先行きの不安に対して明るさとバイタリティでがんばっていく。すごいなぁと敬服する。現代の日本の若者からは想像できない就職難の中を、若い身で母と姉を養っていかなければならないトム。時にやり場のない怒りを暴発させながらも、ローラと共に母を思いやっている。

それでもどうにもならない切なさがなんともやり切れない。若かった私は、ローラにだけ目がいって、母親やトムは殆んど隅へ押しやっていたことに気付かされた。アマンダがトムに「自分の事しか考えないんだから」と叫ぶが、自分の狭い考えの中でがんじがらめになっていた若い頃を苦しくも懐しく思い出した。そして再読の楽しさをしみじみと味わった。

ひばり読書会　平成元年度課題本

	書　　名	作　者　名	出　版　社
1	現代家族	黒岩重吾	中央公論社
2	女の老い支度	重兼芳子	海竜社
3	ノルウエイの森	村上春樹	講談社
4	火宅の人	檀一雄	新潮社
5	スキャンダル	遠藤周作	〃
6	ベートーヴェンの生涯	ロマンロラン 片山敏彦訳	岩波文庫
7	テレビ症候郡	ムーディ．ケイト	家の光協会
8	紅水仙	司修	講談社
9	アンネの日記	アンネフランク 深町真理子訳	文芸春秋
10	ゼロハン	李起昇	講談社
11	ビジネスマンの父より 息子への30通の手紙	キングスレイ．ウオード 城山三郎訳	新潮社

あとがき

市原市立八幡公民館発行の「ふれあい」十二号誕生に際し、編集の機会に接することができましたことを幸運に存じております。

ご寄稿は、学ぶ苦労に触れた方、友を得た喜びを述べられた方、公民館を使っての所感を述べられた方など、多岐にわたっておられました。

主催事業担当講師や会員、各サークル会員の方が、それぞれの立ち場から提言されており、いずれも、平成元年度という大きな節目にあたるこの一年間の歩みを、ただ単に、ふりかえるばかりでなく、これからの公民館の発展に期待する強い意欲を感じた次第です。

諸事多忙な皆さまにかかわりませず、貴重な原稿をお寄せいただきましたことは、当公民館を愛し、育てようとのお心の表れと深謝いたしております。

ここに、ますます「ふれあい」の輪が大きく広がりますことを切望し、末尾ながらお礼申し上げます。

133

ふれあい

1990・4

市原市立八幡公民館

ふれあい

1991.

市原市立八幡公民館

第１３号「ふれあい」の発刊によせて

情報化・国際化・高齢化社会の到来をむかえ、市民のライフサイクルが大きく変わり、新しい人生の価値感が模索される時代になってまいりました。公民館は、社会教育施設の１つとしての機能をはたす役割りをになっています。

本年度主催教室として１４講座、登録サークルとして１０６、また１年間の学習発表の場としての文化祭・武道祭を行ってまいりました。これらの活動、諸行事を通して行った内容について、まとめた文集が「ふれあい」です。この文集の中にはサークルの１つである「ひばり読書会」の作品も掲載しました。原稿をお寄せいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

公民館は市民の人たちの出会いのコミュニケーションの場でもあるわけです。この度の「ふれあい」を通して、一層の理解を深められ、心豊かな毎日が過せれば幸いと存じます。

公民館長　　元　吉　　　隆

主 催 教 室

◦成人講座	成人講座に於ける所感	坂梨祝子	1
	成人講座に参加して	中村きく	2
◦郷土史講座	郷土史講座を受講して	秋葉　平	2
◦親子教室	親子教室に参加して	吉田千恵子	3
◦家庭教育・婦人学級	家庭教育・婦人学級に参加して	根本美佐江	4
◦唐詩教室	唐詩教室を終って	講師 片山　一	4
◦古典文学教室	源氏物語を受講して	大内八重子	5
◦自然観察会	野草に魅せられて	角　輝子	6
◦ワープロ教室	ワープロ教室に参加して	篠田　章	7
◦国際理解講座	国際理解講座に出席して	小倉久美子	7
◦幼児体力づくり教室		指導者 北島　肇	8
◦文化祭所感		文化祭実行委員長 小沼平見	9

千葉県立
'93.10.05
中央図書館

成人講座

成人講座に於ける諸感

坂梨祝子

タイトルは「詩の心」　講師は前田孝一先生。先生は中学校の校長先生をなさった方で、現在は市原詩人会の創刊者である。

詩の心には感性と理性が両立し、感情には言葉が必要である。そして、ここには詩的なリズム感があり、理性と感性のバランスありで、詩の心が生まれてくるということだ。詩はとかく心の豊かな人に宿る。殊に科学者に多く見られ、彼の湯川秀樹氏然かり……それから先生はにこにこしながら高峰三枝子さんを２、３回指摘し申された。これは自ら心に湧いてきた異性に対しての詩的な情感であって愛から恋慕ということかな、この私だってどうやら前田先生のような感情にとらわれることが多々ある。相手の知的な人間像にすっかり心を奪われて遂々夢うつつになることがある。それから、先生は加茂中学校の校歌の作詩者でもある。誠にステキな作詩でありこれにはいたく感銘しました。それから先生は胸を張って私達に校歌を朗々と唱えて下さった。なんと声量たっぷりでいいお声。これには終始一貫耳を傾け固唾をのんで心酔した。わたしは第一高等学校の寮歌、あゝ玉杯に花うけて……を、また高峰三枝子さんの湖畔の宿を思いおこした。それから次々と情熱的な名曲を連想し、そのうち詩の世界へとめろめろのめり込んでしまった。先生は暫らくして「皆さん今、ここに氷があるとしたら、この氷に対してどんな印象がわきますか」とお聞きになりました。一時シーンとして声がなかったが暫らくしてＡさんが手を挙げ「平和」と答えられた。すると先生は「これは、これは実に素晴しい答です。氷がとけて平和になる。この答こそ立派な詩の心ですよ」と、お賞めになった。――成る程、やはり感受性の高い人がやはり詩的人物と言えそうだ……。実は、私はこのＡさんとはまるっきり反対のイメージを意識していたのだ。暗黒と戦争である。私はそもそも太平洋戦争で零下２３度という酷寒のところから脱出してきた引挙者です。それに今現在、全世界が来る１月１５日を期して中東湾岸で戦争がはじまったというニュースが世界中をかけめぐりとびかっている最中である。私は、ここにおいて全く重苦しい気持を余儀なくされたのです。

心の美学なる、詩の心と云う講座には不適格だとして即答を避けた。

今日はこの素晴しい、詩の心と言う講座に遭遇し心にしみついていた汚れが一気にきれい、さっぱりと拭いとられたような誠にすがすがしい感じであった。詩には、満身をわかしてくれる、素晴しいエネルギーと、美しい夢がある。

成人講座

成人講座に参加して

中村きく

「生き甲斐の創造」について五月の始めは秋葉先生のお話でした。もう顔ぶれも同じで来ない人がいると心配です。今は人生８０年代の開幕です。高齢者社会の到来によって、ライフサイクルが変わる。今日の事は今日やれ、追いかけられるようではだめだ。やりたい時がチャンス。これからの生き方を考える。７つの別れに耐える会社、家族、収入、若さ、情報、仕事、未来の夢からの別れがある。昔語りばかりではお先まっ暗である。仕事に生きる、趣味に生きる、奉仕に生きる、あくなき求道精神、生き甲斐、話が合う、同世代、肉体はやむを得ないが精神の老化には注意すること。いよいよ自分も仲間入りをする時がくる。物が食べたい、飲みたいからといって食べたり飲んだりしているだけでは身が持たない。まったく同感同感。明治生まれの人は如何に粗食にたえていたかということ。また、９月にはクレジット社会というお話でクレジットカードでの買物についてお聞きしました。クレジットでの買い物は借金と同じで高い物を買っているとの事でした。買い物の様子を映画で見て空おそろしくなりました。また１２月には人権講話のお話を聞き、いじめの話には毎回身につまされました。忙しいと思いますがこの話をもっと若い人に聞かせてやりたかった。１月１１日の「詩の心」については白木白成という詩人が八幡にもいたそうです。明治３０～４０年頃中央に出たそうです。始めて知りました。詩は感動を書く。「病あらば詩にいやすべし」「家なくば詩と住むべし」松尾芭蕉は自然が住家であった。「わざわい起らば詩にのがるべし」詩は思っていてもなかなか書けない。「朝な夕な髪くしづける乙女の日」あのみずみずしい心はもう、４０年も前に置いてきてしまった。大変だなあ、美しいなあと思う時がある。またみにくい物も美しく見る感性と理性の両方育てないとだめだ。物を見たら「美しい、たそがれ、誰かな、彼かなと思う。また子や孫に対して「廊下を静かに」と言うよりは、足音をよく聞く事だ。忙しいからでなく、詩の心のちょっとしたものをとらえる。詩はショック、感動したことなど先生は目を輝やかせて２時間話された。先生は夢多き青年のように見えた。生活にくたびれ、病と戦い年を重ねてしまった、身を洗い直さなければだめだと言った。このお話をむだにせず心にたたき込んで新しい年をすごすつもりです。

郷土史講座

郷土史講座を受講して

秋葉平

私が郷土史講座に参加するようになってから、もう５年程になります。退職以前は何かと勤務が忙しく、参加する機会に恵まれませんでしたが、今では郷土史講座を受けて、知識や教養・見聞を深めることが、何よりの楽しみになりました。平成２年度の郷土史講座は、次の表の通り実施されました。

その内容の一つ一つについて、詳しく述べる紙面の余裕はありませんが、いつもいつも講師の先生方の熱心な講義には頭が下がります。その上、ご自身の長年の研究結果をまとめて、講座用の資料を作られ、更に貴重な写真やビデオ・真刀や建築部品・大工道具などの実物を見せていただくなど、本当にありがたいことだと思って居ります。

No.	月	日	内容	講師
1	5	12	上総国府はどこ	立石泰三
2	6	9	よろいと刀	石井昭房
3	7	14	市原の古建築(II)	滝本平八
4	8	11	房総武田氏の興亡	田中　操
5	9	12	市内史跡めぐり	青柳至彦
6	10	13	仏像について	宮内速男
7	11	10	大工道具の変遷と建築	滝本平八
8	12	8	飯香岡八幡宮と豪族	田中　操
9	1	26	土器と生活	高橋康男
10	2	9	市原の歴史と地名	田中喜作
11	3	9	市原の文学と歴史	青柳至彦

また、市内の史跡めぐりも楽しいものの一つです。今年度は、古く上総五社の一つである島穴神社を訪れ、立派な彫刻・松平定信公直筆の扁額とそれにまつわる鷹匠の話。山口の谷深い里にある、座高2.75mもある日本一の堂々たるお地蔵様。市原俳諧の祖である飯島吐月の墓（野毛法泉寺）。正風遠州流の花匠義寛斉高一志の句碑（今津延命寺）。などを見学し、市原にもこのように立派な建造物や彫刻、そして優れた文化人のいたことを知り感銘を受けました。

このように、我が市原市には数々の史跡や建造物・石造物をはじめ彫刻や工芸品・無形民俗文化財等があります。今後も数多くの市民が各公民館主催の郷土史講座に参加して、市原市の歴史を知り、文化財に接していただきたいと思います。と同時に、これらの文化財を一堂に展示できる博物館の建設を、市当局にお願いします。

親子教室

親子教室に参加して

吉田千恵子

広報いちはらの募集をみて、年８回あるという親子教室に申し込み、今までにレクに始まり七宝焼焼き、こま作り、料理、ケーキ作りまで５回出席しました。

そのなかでも、子供が小３の女の子なので、料理とケーキ作りは母子共々楽しくできました。普段、手伝いといっても皿洗いぐらいしかしていなかったのに、教室では、とても楽しそうに目をかがやかせて

「私にもやらせて」と言う言葉が何度も聞けました。

包丁を使って、皮をむいたり切ったりあぶなっかしい手つきで、はらはらしましたが、案外できるものです。家にいるとこんな風に見ていられないのですが、教室では子供ののびのびした姿に接する事ができたと思います。

でき上がり、みんなで食べるケーキや料理は格別おいしかったです。子供も自分で作った料理がうまくできて大変うれしそうでした。

この頃、この教室のあと台所に来て、話をしながら私のする事をよく見ていて、時々手伝ってくれる様になりました。この教室をきっかけに興味を持ったことでしょう。何にでも興味を持ってチャレンジする子供になって欲しいと思います。

家庭教育・婦人学級

家庭教育・婦人学級に参加して

根　本　美佐江

上の子供が学校より、公民館の一年間の主催事業一覧表をもらってきました。下の子も春から学校へ行き、送り迎えの時間も気にせずに少しは時間に余裕ができるかな、と思い色々な事を経験して、視野を広めたいと思い家庭教育・婦人学級に申し込みをしました。

最初に「食事のインスタント化を考える」という、是枝幹子先生の講演会でした。現在の食事は、火や包丁を使わなくても出来るインスタント化が進んでいるが、塩分や糖分を考えると一概にはよいと言えない。便利なものは良きに利用し、体の害にならないようにしたい。食べ物の頭文字を取り、「オカアサンヤスメ　ハハキトク」を、「オカアサンダイスキ　ママステキ」に出来る様に、インスタント食品に手を加えて、脂肪分を少なく繊維質を多くとると良いと教えていただきました。

秋の料理講習会では、一番だしのとり方、青菜のゆで方を初歩から教わり、季節の素材を生かした料理の数々に香りと味覚を満喫し、目で見て、口にして味わう二度の喜びを教えていただき、また各グループに分かれての和やかな雰囲気が生まれました。

寒い一月には、「袋物作り」があり、針と糸を持つ事があまり上手でない私は、ドキドキしながら行きました。でも松浦征子先生のとても解りやすい説明や、廻りの人達に聞きながら二時間位で、りっぱなショルダーバッグが出来上がり満足して帰ってきました。

毎回、そして、趣向を変えての催しは、知識や趣味を持たなくても、誰でも気軽に仲間に入ることができ、家庭の話題も豊富になり、参加してよかったと思っております。これからも、多くの人が参加し、交流の輪を広げていただきたいと思います。

唐詩教室

唐詩教室を終って

講師　片　山　一

早いもので、講読が終ってみると、何時の間にか7年の歳月が流れている。当初、テキストが学生用であるところから、少し難かしいかと思ったが皆さんの熱意によって、一応読了することができた。行きつ戻りつの講読になってしまったため、初年度から出席の方々には少なからず迷惑をかけてしまったが、その反面、返って良く理解できた、との声もないではないので「功罪相半（あいなかば）」

ということにしていただきたい。

唐詩は、近体詩（絶句・律詩・排律など）の成立によって格式厳正な詩風が完成し、唐代文化の華といわれ、「漢の文・唐の詩・宋の詞・元の曲」と併称されるようになったものであるが、「詩」はいうまでもなく、その時代の思想文化・社会情勢を背景に出てきたものである。古くは「志の之（ゆ）く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す」（『詩経』・大序）といわれているが、平たくいえば人の心が物に感じて言葉になったものである。それだけに詩は、読む人の人間性というか情緒の面、経験によって培（つちか）われた道徳的・芸術的・宗教的その他の感性と深くかかわっているものである。その意味で、成人対象の講座は大変意義のある「場」ということになるのであるが、幸い此処にその場を得、拙（つたな）い講読ながら最後まで読み終えたことに深い喜びを感じる次第である。

ところで館長から来年度（平成3年）も、という要請があった。区切りのついた時点で幕に、と思っていたのでいささか迷ったがお請けすることにした。とはいっても、御承知のように中国の古書は、四書（大学・中庸・論語・孟子）五経（易・詩・書・春秋・礼記）に代表されるように、極めて堅いものが大部分である。従って、講座に向くテキストがなかなかみつからない。が、あれこれ捜した結果、やっと多少軟いと思われる講座向きの『二十四孝』がみつかったので採用することにした。この書は文字通り二十四人の孝子の話であるが、既に「孝行」という言葉が死語に近づいている現在、「孝は百行の本」といわれ、人倫の最高徳目に掲げられていた時代に生きた方々と、改めて孝行者（誇張されてはいるが）の話を読んで、孝心の美しさにふれるのも、また有意義ではないかと考える次第である。

古典文学教室

源氏物語を受講して

大　内　八重子

「いずれの御時にか、女御更衣あまたさぶらい給いけるなかに……」慣れない文語体にたどたどしい音読。私が源氏物語を受講するようになって7年になろうとしています。桐壺の巻にはじまり、帚木、空蝉、夕顔、若紫、末摘花、須磨、そして今受講中の明石の巻で八帖、七冊になります。音読も気持ちがいい程の響きになりました。伊藤先生との始めての出会いは、昭和57年公民館における主催事業の一つとして古典文学を取り上げて戴いた時です。どんな方が出席されるのか講義についていけるかなど一人心細い思いをしながら教室に臨んだ事を覚えております。が、そんな心配をよそに先生の講義は、文の解釈、文法の説明はもちろんのこと勉強の仕方まで丁寧に指導して下さるものでした。以来先生の講義はのがさず受講すべく、姉崎、有秋台、五井、辰巳、八幡公民館とがむしゃらに足を運んだ時期もありました。源氏物語においては、全54帖という長編を勉強出来る機会を作って下さった八幡公民館長さん、いつもお世話して下さる先生方に感謝するばかりです。講義は、まず先

生の飾らないおしゃべりから始まります。家に咲く四季折々の花、街路樹の移り変わる様子、時には野菜の高値の話など主婦の部分をちらりと覗かせてくれ、社会情勢にまで発展したりと短い時間に心を柔げてすんなりと本題に導いてくれるといった具合です。制度、風俗、習慣の違い、それに千年という時間的距離があるにもかかわらず源氏の藤壷の宮に対する恋、夕顔への愛、末摘花、紫上、明石女君との出会い等々、いつの世にも相通ずる人間の情愛、そして政治的対立抗争、歴史的背景の説明を折りまぜながら、平安の世界を案内して下さる先生の講義にいつの間にかひき込まれていくのは私一人でしょうか。この時ばかりは主婦であることを忘れ母親である事を忘れて、ただ美しい物語の世界にひたれる楽しさを味わっております。

長いおつきあいということもあって、教室内の雰囲気は最高です。先生の名講義もさることながら、古典文学を勉強しようとする同じ目的をもつ仲間があるからこそ7年も続けてこれたと思っています。これからも刺激を求めて、そして源氏物語54帖を読み切ることを夢みて頑張っていきたいと思いますので、これからもよろしくご指導をお願い致します。

自然観察会

野草に魅せられて

角　　輝　子

野草に魅せられて20年近くにもなりました。謡曲の仲間のご夫婦で野草好きな方に、瀬又の杉林の中に破れ傘の芽立ちを見に連れていって頂き、あまりの可愛さに病付きになりました。野草の本を片手に休日ごとに4人で山歩きをして教えて頂きました。市原植物研究会にも入れて頂き、根本先生を始め皆々様の温情に満ちたご指導で次々と勉強ができ感謝しております。まだまだ野草が多く、オキナ草、梅鉢草、スハマ草、カタクリ、クマガイ草、コアツモリ草等々心に刻まれた草々の思い出と、その折々に接した野草好きの特有のやさしさが懐かしいです。主人がパソコンで忙しく一緒に山に行く機会が少なくなってきました。自然観察会のお仲間に入れて頂き、公民館の担当の方々の細心のご配慮で再び夢を見せてくださいます事は、何よりのよろこびです。

この20年間に私の庭の野草を見に来てくださった方、山にご一緒した方々との思い出もさることながら一番の喜ろこびです。何時のまにか長女、次女夫婦、今春大学を出る孫娘まで私以上に野草好きになってくれた事です。一緒に山を歩いたり、志賀高原に行ったり楽しい思い出ができました。もう一つの楽しみは庭に野草や山芋をそだて、春先から秋まで友達と野草料理でにぎやかな一時が持てた事です。

〝君がため、春の野に出で　若菜つむ　我が衣でに雪はふりつつ〟でもありませんが、庭の隅々を探しまわり、セリ、ゴギョー、ハコベラ、ホトケノザ、ナズナ、フキノトウ等を見つけ七草なずな　唐土の鳥が渡らす。何時までも自然が守られこんな楽しみが続きますよう願っております。庭の野草の芽もかれ草の中でぼつぼつ動き始め、木々も小さな芽がふくらみ始めております。これから、あそこには、あの山にはと花に会いに行く日を楽しみにしております。野草はそれぞれの自然の中で会うのが一番美しいと思います。

これからの公民館活動の予定を楽しみに心はずませながら待ちのぞんでおります。

ワープロ教室

ワープロ教室に参加して

篠　田　　章

言葉とは口から出れば何も残らない。電話では事務的になってしまう。本当の真心は伝わらない。しかし、字の下手な私にはお便りも満足にできない。そんな自分に愛想をつかしておりましたが、退職して暇もできたのでワープロを購入いたしました。しかし、説明書が理解できず悪戦苦闘の日々が続き、何度投げ出そうとしたか、だが孫達や公民館図書室の先生の助言と激励に支えられ、文章らしい物の出来た時の感激は忘れられません。

今回5月8、15、22、29の4回に渡り、後藤先生の親切丁寧なご指導により、ワープロとはこんなに便利で素晴らしい機械かと驚き、後藤先生と共に講座を催して下さいました公民館の先生方に厚く感謝致しております。以後方々に便りを書き、先方は迷惑でしょうが自己満足しております。本当に有難うございました。

年をとった夫婦は親友になれ、結婚生活45年、子供も孫もどんどん離れてゆく。私共も今になって考えました。お互い楽しく過ごそう、これからは、意地も張らず、やって貰った事には素直に感謝し二人寄り添っていこう。これから何年かは、分からないけれど悔いの無い生活をしようと、何事も楽しく、全く趣味の違う2人であっても、それぞれの仲間との交流もあり、お互いの会話も弾み、老春も又楽しの心境です。

国際理解講座

国際理解講座に出席して

小　倉　久美子

「申し込んだけど都合で出席出来ないから」との友人より引継ぎ、原稿依頼も断り切れずに引受けてしまったものの、熱心な方々を差しおいて筆をとることに逡巡をおぼえております。「中国料理とマナーについて」ということで、最近身近に感じられる中国、お隣りでいながらなかなか行かれない国、そして日本文化にとっては昔からその恩恵に浴している中国と、私達にとって中国料理は漢字と共に親しく接してきたものです。

1日目は講義のみかと覚悟しておりましたが即お料理実習も学ばせて頂きました。

ひと口に中国料理といっても、日本の26倍もの広さを持つ中国です。地方によってそれぞれ味付

けから素材も違い、北方系＝北京（黄河流域）、南方系＝広東（海岸地域）、江系＝上海（揚子江下流）、四川系＝四川（山岳地帯）と４つに大別されます。暖かい地方では薄味、寒い地方では濃く辛口、海岸近くでは魚介類や海産物を使い、山岳地帯ではその土地でとれる特産物をと、その土地の料理として個性を持ったものになるわけです。でも古くからの民族の移動に伴い、又新しく北京を中心にして南京や四川へ都が移されたこともあり、それにつれて北方風とか南方風とかいう地域の区別と共に、多くの共通点もあるという複雑な間柄もあるようです。

日本の水の料理に対して油の料理と、特色も知り、九州と気候の同じ上海は、日本に一番近い料理でお米もおいしく、砂糖、醤油等をもちいるとか、主客は入口より正面奥が上席は日本と同じと思われますが、円卓の場合の主客と主人は対角線にと。その他暑くても温い食物をとった方が良い等、最近はやり出した薬膳料理も中国の人達にとっては日常のことであり、本物指向で多種類のものをバランス良くほとんど残す所無く食し、人数にこだわらぬ大皿盛りでなごやかに食事をすることが即健康につながることと思われます。

実習は本格的にスープは鳥ガラから作りましたが、３日も４日もかけて気長に煮込む料理となると、広大な土地と悠久の心を持つ中国の人の気質と、狭い島国の日本の人達との差がはっきりあらわれ、料理にも各国の文化が読みとれました。

幼児体力づくり教室

指導者　　北　島　　馨

「すごい！　できた、できた」

Aちゃんにお母さん、お父さんの目が注がれ、一段と大きな歓声と拍手が、広がります。Aちゃんは、ひとりで高いところからとびおりることができ、マットの上で大得意です。何とも言えない、すばらしい表情です。

毎月、第一・第三土曜日の午後、八幡公民館の講堂で、心身に障害をもつ幼児のための体力づくり教室を、おこなっています。今年度は、メンバーが７名。幼児を中心に、小学低学年の子もいます。健常児との交流も考慮にいれ、常時、３・４名の健常児が、手伝いを含め、一緒に楽しく過ごしています。障害をもつ幼児の保護者の方も参加しますので、総勢１５名程になります。

平成２年度の目標は、大いに身体を動かし、いろいろなリズムを、いろいろな動き・運動を身につけることです。内容としましては、①ボール遊び・なわとび遊び　②動物体操　③リズム遊び　④ゲーム遊び　⑤アスレチック遊び　⑥おやつ・休憩　⑦おはなし　の順序で、２時間３０分程かけておこなっています。

この幼児体力づくり教室は、八幡公民館のご厚意で、主催事業として、昭和５４年７月に発足し、平成２年度の今年度で、もう１２年めに入っています。伝統として、いきづきはじめています。幼児

の発達段階を把握し、スモール・ステップでの指導を大切に、無理のないように、楽しい雰囲気の中で、ひとりでできる動き・運動・リズムを、仲間とのかかわりができるように、すすめています。

国際障害者年を契機に障害児者に対する理解が深まり、さらに市原市が障害者福祉都市を宣言し、市内にいろいろな取り組みをするグループが生まれています。八幡公民館での幼児体力づくり教室も、その一つともいえるわけですが、市民の皆様に、その存在を知っていただければ幸いです。機会がありましたら、幼児の生き生きとした姿を、ちょっとのぞいてみてください。

なお、心身に障害をもつ幼児の入会を、いつでもしています。時には、就学問題についての話し合いもしています。また、指導してくださるボランティアを、あわせて募集しています。

連絡先　　市原市西広３８９－６　　℡　２１－８６７２

文化祭

文　化　祭　所　感

文化祭実行委員長　　小　沼　平　児

「光陰矢の如し」と申しますが、月日のたつのが早いもので、平成と改まり、２年が過ぎました。特にこの１年間は早かった様に思います。内外情勢を見ましても、国外では湾岸危機、国内におきましては、天皇即位の礼、又交通事故による死亡者は戦後最高とか、身近かな所では季節外れの台風による竜巻や、隣り町の茂原市では大変な被害がありました。さて、各サークル代表者の皆様の協力を頂き、平成２年度の文化祭実行委員が選出されました。私達にとりまして文化祭は大切な発表の場であり、地域住民の皆様とのふれあいの場で、友情と相互理解を深める年一度の楽しい「イベント」でもあるのです。

本年度も１１月３日、４日の両日、元吉館長はじめ職員の皆様にご協力を頂き各役員と実行委員各位が共に和気あいあいのうちに会場の準備を進めることができました。平成２年の文化祭が開催されました。展示場の各作品を見せて頂きました。書道・絵画・生花・ちぎり絵・くみひも等見事な出品で、１日で取り外すのがもったいないように思いました。模擬店についても心のこもった手作りの品で、人気も最高でした。開店して間もなく売切れた様子、発表部門についても琴演奏、民踊、詩吟、歌と朗読、着付け、合唱、アコーディオン演奏、市原市民バンドと、それぞれサークルの個性が出ていて大変よかったと思います。体育室におかれましては、市原市武道連盟会長、田久保先生を中心に剣道、少林寺拳法、空手、合気道と、各担当部門の競技と発表が行われました。その後に市原ソシアルダンス、八幡リズム体操、宇宙、市原ファミリースクエアーズのダンス発表が行われて文化祭を盛り上げて頂きました。４日の日は、朝からあいにくの土砂降りの雨にもかかわらず多勢の地域住民の皆様にお越し頂きまして誠に有難うございました。私にとりまして今回の体験は初めての経験でもあり、挨拶にしても又話し合いをまとめる事もできない私でしたが、反省会には多勢のサークル代表者に御出席頂いて、多くのご意見を賜り皆様に厚く御礼を申し上げるとともに、次回の発展を期して努

力致しますので宜しく御支援御協力の程お願い致します。

サークル

（平成２年度分）

№.	サークル名	№.	サークル名	№.	サークル名	№.	サークル名
1	たんぽぽ	18	ひまわり	35	パステル教室	52	いちはら女声コーラス
2	美幸会	19	大衣会	36	彩紅会	53	八幡民踊会
3	美幸会(初)	20	もみじ和裁	37	風雅教室	54	獅子の会
4	あやめ	21	しらゆり会	38	日本画	55	やよい会
5	手編みヴォーグ	22	なでしこ	39	手結び着付教室	56	華の会
6	すずらん	23	婦人生花	40	雅	57	萌木会
7	手作りの会	24	青年生花	41	睦会	58	市原ソシアルダンスサークル
8	くみひも	25	深久会	42	国仁会	59	市原ファミリーダンスサークル
9	ラタン教室	26	煎茶(一)	43	さつき会	60	宇宙
10	竹の会	27	煎茶(二)	44	翠謡会	61	スポーツダンス研究会
11	チューリップ	28	あけぼの	45	市原アコーディオン	62	ラウンドダンス市原
12	和紙ちぎり絵	29	八水会	46	民謡教室	63	健康体操
13	木喰虫	30	墨瑤(一)	47	わらび会	64	健康美容体操
14	ビーチ	31	墨瑤(二)	48	さくら	65	八幡リズム体操
15	パンフラワー	32	書道(一)	49	おこと教室	66	ヨーガ八幡
16	洋裁すみれ	33	書道(三)	50	青少年おこと教室	67	若菜料理教室
17	白ゆり	34	美術教室	51	市原市民ばんど	68	市原料理

№	サークル名	№	サークル名	№	サークル名	№	サークル名
69	八幡料理	79	英会話	89	若宮レディース	99	かよう会
70	フラワー料理教室	80	千葉友の会	90	わかみやクラブ	100	市原八幡スポーツ少年団
71	白百合クッキング	81	ちゝの木	91	O.B.B.会	101	高令者卓球クラブ
72	さくら料理教室	82	こしばの会	92	市原ジュニアバドミントン	102	オレンジ
73	ヘルスクッキング	83	ひばり読書会	93	八幡バドミントンク・ラブ	103	白球会
74	老大市原学友会	84	女性囲碁碁友会	94	光バドミントンクラブ	104	市原クラブ
75	八幡ちびっこクラブ	85	中国語初級教室	95	ファミリークラブ	105	スターダスト
76	根の会	86	D.V.B.C	96	楠の子クラブ	106	気康会
77	この指とまれ	87	フエニックス	97	なのはな	107	
78	市原断酒新生会	88	いしづか	98	市原卓球愛好会	108	

1　1　サークル名　たんぽぽ
　2　講　師　松井悦子先生　　代表者名　西山キミ子　電話４３－８１２６
　3　活動内容と抱負
　お友達の作品の出来上り等楽しみながら次に作りたい作品などを先生と一緒に話しながら色々な手編みに取りくみたいと思います。

2　1　サークル名　美幸会
　2　講　師　斉藤幸子先生　　代表者名　田口寿恵　電話４３－０６７８
　3　活動内容と抱負
　基礎を大切にして応用のきく手編みを楽しみたいと思います。
　「あい（愛）　あむ（編む）　ニット」
　文化祭に向けて一作品づつ心をこめて編みたいと思います。

3　1　サークル名　美幸会初級
　2　講　師　斉藤幸子先生　　代表者名　市原光江　電話４３－１３６３
　3　活動内容と抱負
　若い人から人生のよき先輩たちまで和気あいあいと話しながら手を動かしています。新しい毛糸を作るのもよいけれど、古い毛糸もいかして作品を作ってみようと思います。

4　1　サークル名　あやめ
　2　講　師　田中芳江先生　　代表者名　渋谷加代　電話２２－８１７１
　3　活動内容と抱負
　会員の皆さんは、日頃勤めている方ばかりなので、なかなか作品は出来上がりませんがマイペースで作っています。でも時には小物や、アクセサリー等も作って楽しんでいます。

5　1　サークル名　手あみヴォーグ
　2　講　師　田付民子先生　　代表者名　斉藤勝子　電話４１－８４２８
　3　活動内容と抱負
　一針一針手を動かしてあんでいくセーター、衿ぐり袖ぐりの丸味も思いのまゝ、ヴォーグメジャーを使用して減目増目をします。思いのまゝの作品が出来ます。
　どうぞ皆さん、お気軽に入会して下さい。

6　1　サークル名　すずらん
　2　講　師　田中芳江先生　　代表者名　増田ふじ子　電話２２－２４０７
　3　活動内容と抱負
　編み物の基礎編み、製図、技法（編み方）　毎月の第１・３の水曜日に午後１時より楽しくやっております。ぜひおいで下さい。これから主人のセーターと、息子のアラ編みのすばらしいセーターを編みたいと思います。

7　1　サークル名　　手作りの会
2　講　　師　　無　　　　　　　　　　代表者名　磯部紀代子　電話41－6499
3　活動内容と抱負
さまざまな手作りの物を縫いながら、会員相互の親睦を深めています。

8　1　サークル名　　くみひも
2　講　　師　　松川とも枝先生　　　　代表者名　戸谷富美子　電話43－4374
3　活動内容と抱負
伝統工芸のいろいろな紐の組み方を学び、帯締めやネックレス、ブローチ、ベルトなどアクセサリーやキーホルダーやかべかけなどに利用出来るものを作り、年令を問わず楽しいサークルです。新会員を募集してます。

9　1　サークル名　　藤ラタン教室
2　講　　師　　斉藤いつ子先生　　　　代表者名　安達順子　電話43－5560
3　活動内容と抱負
優しい先生の指導のもとで、いろいろな藤の糸を使い、お人形、鉢カバー、壁かけなどさまざまな作品を編んでいます。手作りの物で、身の回りを暖かくしたいと思っています。

10　1　サークル名　　竹の会（総合手芸）
2　講　　師　　山崎可依子先生　　　　代表者名　栗田晴代　電話22－8607
3　活動内容と抱負
○水引・短冊、色紙・お正月用小物各種
○フラワー・ペーパー・リボン・ビーズを使用して季節に応じた花の作成をする。
○水引きやペーパー等を使った工芸盆栽の作成をする。

11　1　サークル名　　チューリップ・アートフラワー
2　講　　師　　須原京子先生・葛西まり子先生　　代表者　伊藤チエ子　電話41－4904
3　活動内容と抱負
白生地から染色してインテリヤの花やコサージュなどを作り楽しんでいます。文化祭には一年間作りおわった作品をもちよって作品発表会をしています。

12　1　サークル名　　和紙ちぎり絵
2　講　　師　　寺田楊子先生　　　　代表者名　小倉久美子　電話41－4574
3　活動内容と抱負
このちぎり絵教室は花を題材にした女性の方の身近なよりよい勉強と思います。お陰様でこれ迄にも多くさんの方が見え、現在も多勢の人達が楽しく勉強しています。これからもより多くの方々との出会を大切に一生懸命頑張ります。

13　1　サークル名　　木喰虫（木彫り）

2　講　　師　　堀田笙子先生　　　　代表者名　安本由紀子　電話41－9732
3　活動内容と抱負
毎週火曜日（月4回）、鏡、文箱、お盆、マガジンラックなど身近なものを、楽しみながら、気長に掘っています。今年も公民館文化祭にむけて、大作を発表できる様、頑張ります。

14　1　サークル名　　ピーチ（ロマンドール）
2　講　　師　　牧とし子先生　　　　代表者名　市川奈奈　電話
3　活動内容と抱負
紙粘土で出来る愛らしい人形達や、壁飾りのリースや動物など、小物にお花もいっぱい。お部屋はメルヘンの世界。みんなで造る楽しいひと時を自分の分身達が、見る人達にも小さなお話の機会を与えてくれる。難しいけれど出来上がった時の喜びは大きい。

15　1　サークル名　　パンフラワー
2　講　　師　　征矢泰子先生　　　　代表者名　肥田幸生　電話41－0207
3　活動内容と抱負
皆さんパンの花を作ってみませんか。パン粘土で自由な形、好きな色で、創造性豊かに自分を表現してみましょう。趣味を持つことは、人生の二重の喜こびです。お友達もできます。美しく老いるため、好きなことを持ちましょう。

16　1　サークル名　　洋裁すみれ
2　講　　師　　松浦征子・国原恵美子先生　　代表者名　時田愛子　電話21－5230
3　活動内容と抱負
松浦先生とアシスタントの国原先生とにフレンドリーに洋裁を教えて頂いて、メンバーが家族的で和気あいあいの学習をしております。おかげで友達ができ、その上流行の手作りの洋服を着ることに一種の誇りをもっております。

17　1　サークル名　　白ゆり洋裁
2　講　　師　　小沢よし子先生　　　　代表者名　丹下和子　電話41－8296
3　活動内容と抱負
洋裁の基本習得と技術向上を目的とし、又、人との出会いを大切に人間性を豊かなサークル活動を目ざしていきたい。

18　1　サークル名　　ひまわり
2　講　　師　　松浦征子先生　　　　代表者名　井尻保栄　電話41－7985
3　活動内容と抱負
「ひまわり」は全員28名、活動日は第1・第3水曜日。和気あいあいとした雰囲気の中で松浦先生のご指導のもと、ホームドレスからフォーマルウェアーまで巾広い洋服を作っています。楽しく学び、より美しく装いたい方のための教室です。

19　1　サークル名　　大衣会
2　講　　師　　西川代志子先生　　　　代表者名　藤田房江　電話４３－７０８１
3　活動内容と抱負
基礎縫いから、単衣・袷長・コートなど和服全般の縫い方、和服の手入れ一般常識など和服離れの折、日本の伝統衣服を広く伝え、作る喜び・着る楽しさを味わっています。

20　1　サークル名　　もみじ和裁教室
2　講　　師　　桜井ふみ子先生　　　　代表者名　森田文子　電話４３－０７４８
3　活動内容と抱負
初めて着物を作る人にもていねいに教えて下さり、又会員も和気あいあいと、気ながに、自分で縫った着物を着る日を楽しみにして、活動しています。早く、上手になることを夢みています。

21　1　サークル名　　しらゆり会
2　講　　師　　寺崎寿真先生　　　　代表者名　田隈富子　電話４１－５７９１
3　活動内容と抱負
勤め帰りのひと時を心静かに花と語らい友達との和を広げて、おけいこをしています。秋の文化祭を楽しみに今年も頑張りたいと思っております。これからも、多くの方々とのふれ合いを大切にサークルを続けたいと思います。

22　1　サークル名　　なでしこ
2　講　　師　　田中京華先生　　　　代表者名　斉藤和代　電話３６－２１６９
3　活動内容と抱負
「見風流」　皆様あまり聞き慣れないかと思いますが、生花の新流派です。現在、八幡公民館において毎月、第１・３木曜日の午後６時３０分から９時までの間活動しております。美女ばかり６人で皆、師範を目指して頑張っております。

23　1　サークル名　　婦人生花教室
2　講　　師　　松原博水先生　　　　代表者名　北川和枝　電話４１－３８９２
3　活動内容と抱負
婦人生花教室は公民館活動の中でも２０年近く続いております。先生のお花への情熱と前向な姿勢は華道以外の日常生活に必要な事柄もお教え頂き、月２回の２時間のお勉強も充実感でいっぱいです。本年も個々の教養と日本文化の良さを子孫に残す為にも続けて参りたいと思います。

24　1　サークル名　　青年生花
2　講　　師　　松原博水先生　　　　代表者名　安藤啓子　電話４３－４３５６
3　活動内容と抱負
青年生花サークルは、夜お勤めの帰りの方が、生活の中に潤いとやすらぎを求めて勉強

しています。いつでも入部できますからどうかお越しください。

25　1　サークル名　　深久会
2　講　　師　　深見宗久先生　　　　代表者名　小林美代子　電話４１－１９５８
3　活動内容と抱負
八幡公民館における文化祭での発表。一般茶道、入席、床の拝見、お薄、濃茶、略点前、包ぶくさ、重茶わん、続きお薄、茶箱点前等々。お茶を通して仲間の親睦と親交を深め、より久しく続けて、更に生きがいの一つとして行けたらと願っております。

26　1　サークル名　　煎茶（一）
2　講　　師　　永田ヒサ江先生　　　　代表者名　細井けい子　電話２２－０７９７
3　活動内容と抱負
公民館の文化祭に参加、及年１回五井会館で開催の花展茶席にも参加しています。主婦が多いので、また仕事をもっている人もいる為、少しの時間を有意義に使い、楽しんでいます。これからも少しずつでよいから長く続けられる様、常に思っています。

27　1　サークル名　　煎茶（二）
2　講　　師　　永田ヒサ江先生　　　　代表者名　堀口弥生　電話４１－３４４７
3　活動内容と抱負
公民館文化祭及び年１回五井会館花展茶席への参加と、月２回夜の少しの時間に修得した成果を発表して居ります。勤務の都合で時間を取るのも大変ですが、あせらず続けて、日常の生活に少しでも役立てられる様、これからも楽しみながら続けたいと思う。

28　1　サークル名　　あけぼの
2　講　　師　　山口宗甫先生　　　　代表者名　篠崎玲子　電話７４－７５８４
3　活動内容と抱負
主に裏千家茶道の基本を修業しています。きゅう屈なとか古臭いものと言う印象がありますが、やさしさの中に厳しさがある先生の教えのお陰で楽しく茶の湯の稽古をしています。四季を逸早く感じ落ち着きをとり戻す清寂の中で、すぐさま時は過ぎて行きます。

29　1　サークル名　　八水会
2　講　　師　　松村美枝子先生　　　　代表者名　小笠原多津子　電話４３－１３２１
3　活動内容と抱負
お茶に興味のある方達に、広くのんびりと楽しんでおけいこの出来る教室としてやっております。いつでも気軽にお立寄り下さい。

30　1　サークル名　　墨瑤（一）
2　講　　師　　安藤くに子先生　　　　代表者名　徳政さく　電話４３－８７４０
3　活動内容と抱負

現在１３名で月３回、木曜日の午前中漢字の（毛筆）楷行草書の練習を行っております。習字の練習を通じて、今までよりなおよきコミュニケーション作りに努力して行く事をめざしております。

31　1　サークル名　かな書道（二）
　2　講　　師　安藤くに子先生　代表者名　新川弘子　電話４１－７１４６
　3　活動内容と抱負
まだ始ったばかりの教室ですが、俳句、和歌などを書いて楽しんでいます。年末には年賀状も勉強しました。日常生活に役にたつように素適なかな文字が書けるように皆張りきっています。ご一緒になさりたい方はどうぞお入りください。

32　1　サークル名　書道（一）
　2　講　　師　袰田麗香先生　代表者名　蛭田礎子　電話４１－１９０３
　3　活動内容と抱負
。書に親しみ毛筆上達のため頑張っています。
。新しい書体に挑戦し作品作りを目指す。

33　1　サークル名　書道（三）
　2　講　　師　河津武夫先生　代表者名　神田辰雄　電話４３－０５４６
　3　活動内容と抱負
楷書で千字文を半紙に六字書くことを主体として行書細字等、基本的なことを勉強しています。中高年が多いですが若い方も熱心に練習しています。今年は脱落する者がない様に楽しく仲よく休まず勉強したいと願っております。新加入者を歓迎致します。

34　1　サークル名　八幡美術教室
　2　講　　師　在津義人先生　代表者名　堀川正夫　電話７４－７２７５
　3　活動内容と抱負
私達のサークルは、講師の在津先生を始め、全員が公務員、会社員、学生と昼間はそれぞれ仕事を持つ者の集りです。年令もテンエイジャーから熟年者まで誰でも気軽に参加できるサークルで、自由に自分を主張することをモットーとしております。

35　1　サークル名　パステル教室
　2　講　　師　福原照夫先生　代表者名　小手弘子　電話６１－３０１８
　3　活動内容と抱負
「絵を学ぶという事は何か」を常に考え、唯単に技術を身につけるのではなく、物の見方、考え方を深め、個性的で創造性のある表現を目ざして、楽しく描きながら、親睦を深めたいと思います。

36　1　サークル名　彩紅会

　2　講　　師　岡村順一先生　代表者名　阪田博子　電話４１－７６３９
　3　活動内容と抱負
教室では主に静物、人物、デッサンなどをし、初夏には写生に出かけます。年２回（総美展、市展）に作品を出品し評価を受け励みとして勉強しております。昨年はサークル会員より初の県展入選をはたしたのを機会に、更に後に続くよう励んでいきたいと思います。

37　1　サークル名　風雅教室
　2　講　　師　大木五大夫先生　代表者名　本領恭子　電話４３－８３６３
　3　活動内容と抱負
自然とのふれあいを大切にして心に感じるものを画に表現出来ればと勉強しています。植物を主に勉強しましたが平成３年は動物に挑戦したいと張り切っています。画の横に俳句も書くことが出来れば最高だと一層精進努力致したいと教室中頑張っています。

38　1　サークル名　日本画
　2　講　　師　仲林敏次先生　代表者名　山元和子　電話４３－６７８２
　3　活動内容と抱負
一週間に一度の教室でいつも楽しく通わせていただいております。四季の移り変りなど自然に対する思いが勉強になります。これからも皆さんとの和を大切に、少しでも上達できる様に頑張りたいと思います。

39　1　サークル名　手結び着付教室
　2　講　　師　鈴木文子先生　代表者名　長谷川芳江　電話４１－９４８１
　3　活動内容と抱負
道具を使わずに手結びで着付ける方法を習っています。着付けをしながら人との和をだいじにし、和気相々となごやかにやっていきたいと思います。

40　1　サークル名　着付サークル（雅）
　2　講　　師　芳口千恵先生　代表者名　芳口千恵　電話４２－０２０７
　3　活動内容と抱負
「類は友を呼ぶ」と云う言葉がありますが、着物好きの友と出会い着付サークルを行ってまいりました。年一度の文化祭での着付ショー、織元への見学と充実した活動です。今後は視力障害者の方に教え、伝統ある着物の着付を母から娘に伝える事が出来ます様願っています。

41　1　サークル名　詩吟サークル睦会
　2　講　　師　河合登志子先生　代表者名　太田正則　電話0438－41－2541
　3　活動内容と抱負
古くから知られている日本、中国の詩にメロディをつけ、肺の空気を全部はきだす事は、健康のため大変よく、少人数のサークルですので、皆、和気合々楽しく活動しています。

又、身近なお祝い事にも、すばらしい詩を、ご披露することもできます。

42 1 サークル名 国仁会
2 講 師 鷲見国仁先生 代表者名 高橋キヨ子 電話74－1076
3 活動内容と抱負
国仁会八幡教室は日本国風流総師範、日本コロンビア吟詠音楽会々員鷲見国仁先生の指導の下に毎週木曜10時から11時40分迄詩吟を、11時40分から13時迄吟舞のお稽古を気藹々の内に続けております。入会は随時となっています。

43 1 サークル名 さつき会
2 講 師 代表者名 新田正之 電話41－8754
3 活動内容と抱負
謡曲と小鼓を月2回、曲目を選んで3回以上反復し、習熟に努めた。伝統芸術のよさを多くの人に知って貰うこと、手ほどきを手伝うこと、サークル員をあと2～3名増を期したい。

44 1 サークル名 翠謡会（46） 謡曲観世流
2 講 師 角 一平先生 代表者名 羽根司郎 電話74－1021
3 活動内容と抱負
毎月第3日曜日、午後1時～5時迄、八幡公民館和室にて月例会を開催しています。年に2回位謡曲大会終了後、親睦小宴会を行なって居ります。日本古典芸能の継承保存と地域同好者の親睦をはかっております。

45 1 サークル名 市原アコーディオンサークル
2 講 師 山岡秀哉先生 代表者名 角田昭一 電話74－8751
3 活動内容と抱負
アコーディオンの同好者で、講師により技能を習得し、これを児童に還元し、福祉施設を慰問したり地域社会に参加し地域の文化向上に寄与する。

46 1 サークル名 民謡教室
2 講 師 藤野謡村先生・鈴木鈴章先生 代表者名 小沼平見 電話41－4393
3 活動内容と抱負
地域の皆さんと民謡を楽しみながら普及と親睦を育てていき、地域住民の一人でも多くの人に民謡を楽しく唄ってもらいたいと思います。

47 1 サークル名 わらび会
2 講 師 藤野謡村先生・鈴木鈴章先生 代表者名 藤野久子 電話41－6431
3 活動内容と抱負
月2回第2木曜と第4木曜午后6時より8時40分迄第2和室に於て、民謡或は三味線

等皆で楽しみながら励んでおります。尚今年は全国大会の会場に市原が選ばれたので一層張切っております。県大会及び市原市の大会等は例年通りなので頑張りたいと思っております。

48 1 サークル名 さくら（琴）
2 講 師 池田昭波染先生 代表者名 荒木敏子 電話41－9298
3 活動内容と抱負
日本の伝統芸能である箏曲（琴）、三絃の普及と継承の為、サークルを開きました。親しめるお琴、会員の和、市原三曲会の参加、公民館文化祭の参加などを目標に、なごやかなサークル活動をしております。ぜひ御参加ください。

49 1 サークル名 おこと教室
2 講 師 林美有記先生 代表者名 岸 絢子 電話43－6927
3 活動内容と抱負
初めてお箏を手にされる方が対象にするから姿勢、手のかまえ方、正しい調絃、初歩の練習曲を中心に進めております。箏はやさしく美しい日本の音といわれています。この機会に是非生活の中に箏の音色を取り入れて見ませんか。初めての方、特に歓迎します。

50 1 サークル名 青少年おこと教室
2 講 師 林美有記先生 代表者名 杉田裕子 電話36－6759
3 活動内容と抱負
初めての方にも、わかりやすく従来の習慣にとらわれない新しい方法でけいこをしています。箏は日本人が日本人の感性で育ててきた民俗楽器です。楽しいサークルですので是非参加してみませんか。

51 1 サークル名 市原市民ばんど
2 講 師 無 代表者名 田中雅彦 電話62－8228
3 活動内容と抱負
臨海まつり、成人式等の演奏
個人個人のレベルアップ

52 1 サークル名 いちはら女声コーラス
2 講 師 金木 哲先生 代表者名 大川和歌子 電話43－3667
3 活動内容と抱負
来年の6月創立25周年記念演奏会に向けて練習しています。全団員が健康で臨めたらと思います。お腹から声を出すと、病気をする暇がありません。欲を申せばもう少し人数が増えると良いと思います。声のボリュームがアップするのですが……。

53 1 サークル名 八幡民踊会

2　講　　師　篠田希代皷先生　　代表者名　西口奈津子　電話６１－０１９９
3　活動内容と抱負
舞踊を通して地域の人達との交流やボランティア活動に参加したり、精神の統一と健康増進、人の和を大切にし楽しい人生をすごしたく一同念願しています。

54　1　サークル名　獅子の会
2　講　　師　坂東三和司朗先生　　代表者名　日高享幸　電話４１－７８５３
3　活動内容と抱負
坂東三和司朗先生に依る面接懇切な指導が受けられます。文化祭その他で日頃のけいこぶりを発表します。日本舞踊（古典）鑑賞会などもあります。

55　1　サークル名　やよい会
2　講　　師　関谷きよ先生　　代表者名　加瀬井勝子　電話４１－０９４６
3　活動内容と抱負
民踊を毎週木曜日
健康と友和

56　1　サークル名　華の会
2　講　　師　藤見華香先生　　代表者名　宮田えい子　電話７４－６５８４
3　活動内容と抱負
日舞に親しみ、かつ技術の向上をはかるべく活動している踊り好きの仲間達です。
今年も前に習った曲の復習を続けながら、古典の研究や新しい曲にチャレンジしていきたいと思います。皆さんも私たちの仲間になって活動してみませんか。

57　1　サークル名　萌木会
2　講　　師　鈴木つね子先生　　代表者名　鈴木いち　電話４１－１６３２
3　活動内容と抱負
新舞踊・日本舞踊
今年もいろいろと発表の場があると思いますので、健康に気をつけて、八幡公民館の名を恥かしめない様に、頑張りたいと思います。

58　1　サークル名　市原ソシアルダンスサークル
2　講　　師　小川武久先生　　代表者名　小川武久　電話４１－５５２０
3　活動内容と抱負
ＬＥＴ’Ｓ　ＤＡＮＣＥ、ジルバやタンゴ、ワルツにルンバ、どうです皆さん踊ってみたくありませんか。当サークルは毎週火曜日夜7時から「明るく楽しくカッコよく」をモットーに、生き生きした社交ダンスサークルです。

59　1　サークル名　市原ファミリースクエアーズ

2　講　　師　古川晴彦先生　　代表者名　泉水憲夫　電話６１－０２０５
3　活動内容と抱負
スクエアダンスは、男女４組８人でカントリーウエスタンの曲にのり、皆で同様に踊るダンスです。毎週の様に開かれるパーティではスクエアの友好の輪が無限に広がります。まちがっても気にしない気楽に健康に良いダンスをぜひどうぞ。毎週木曜１８：３０～２０：４５です。

60　1　サークル名　自然運動「宇宙」
2　講　　師　大野桂子先生　　代表者名　中西正子　電話４１－９７６０
3　活動内容と抱負
経絡を刺激する運動で、気功などを取り入れて呼吸の仕方も含めた体操を行なっております。ゆっくりした自然運動ですので年令に関係なくできます。明かるく、なごやかなサークルをめざしています。その上美しい姿勢でいられるように勉強しています。

61　1　サークル名　スポーツダンス研究会
2　講　　師　加瀬光章先生　　代表者名　黒沢武夫　電話２１－７７７２
3　活動内容と抱負
１０ダンスのマスター

62　1　サークル名　ラウンドダンス市原
2　講　　師　塩川喜美代先生　　代表者名　加勢のり子　電話４３－３４２８
3　活動内容と抱負
今年から中高年の方も対象にしました。若い方からそうでない方まで音楽に合わせて楽しく踊っています。頭と身体の運動にたいへんいいです。

63　1　サークル名　健康体操
2　講　　師　板橋裕一先生　　代表者名　金氏節子　電話４１－９７１４
3　活動内容と抱負
健康体操（操体法）は体のゆがみを正して健康増進し、むりなく自然にできる体操です。今年も健康で頑張ります。

64　1　サークル名　健康美容体操
2　講　　師　扇谷ミユキ先生　　代表者名　甲斐富美子　電話２２－６４９３
3　活動内容と抱負
健康美人を目指して、運動不足、ストレス解消、そしてちょっぴり豊かな肉体のシェイプアップのために週一回の楽しいひとときを過しています。音楽に合わせて、リズム運動、ストレッチ、ヨーガ等むりをせず笑顔を絶やさずに。

65　1　サークル名　八幡リズム体操

2 講　　師　太田和子先生　　　代表者名　葛西まり子　電話４３－３３５２
3 活動内容と抱負
市広い年齢の方々が集まっております。各種の体操を行なっています。ダンス、ストレッチング、足腰を鍛える体操などですが、体を動かす事ばかりではなくいろいろな話をしたり、楽しい家囲気がこのグループの特徴です。心と体のリフレッシュを目的とします。

66 1 サークル名　ヨーガ八幡
2 講　　師　丹野千恵子先生　　　代表者名　藤田礼子　電話４３－４０３５
3 活動内容と抱負
主婦中心の健康法です。運動不足を解消して若さを保つためできるだけ継続を目標にしています。

67 1 サークル名　若葉料理
2 講　　師　上田悦子先生　　　代表者名　大石千代美　電話４３－７５７４
3 活動内容と抱負
バランスのとれた食生活を考え調理実習を行なう。
おいしい物をたくさん作り食べたい。

68 1 サークル名　市原料理
2 講　　師　上田悦子先生　　　代表者名　篠田きよ子　電話４１－１７０４
3 活動内容と抱負
昭和５１年よりスタートしています。公民館を午前９時から午後１時までお借りして、会員３５名で毎月第３火曜日が実習日です。主に毎日のおかずを基本に３～４品会員の皆様が腕を振っています。他の活動として年一度の文化祭に模擬店に協力しています。

69 1 サークル名　八幡料理教室
2 講　　師　寺門明子先生　　　代表者名　高山文子　電話４１－１７６０
3 活動内容と抱負
月１回第１火曜日、午前１０時～午後１時まで門川先生の御指導の下で会員の方々が和気あいあいと楽しく学んでいます。和洋、中華、おやつのケーキなど、レパートリーをふやして、それをもとに自分なりの料理をしたいと思います。

70 1 サークル名　フラワー料理教室
2 講　　師　寺門明子先生　　　代表者名　山崎浪代　電話４１－３８６４
3 活動内容と抱負
現在の会員は２３名です。毎月１回八幡公民館をお借りして寺門先生を講師に招いて、料理の基礎を勉強するとともに実習しております。また市主催の文化祭にも参加して好評を受けております。今後は高令者社会の進む中で、家庭で簡単に出来る料理を勉強したいと考えております。

71 1 サークル名　白百合クッキング
2 講　　師　田中憲子先生　　　代表者名　藤山栄子　４３－７０３１
3 活動内容と抱負
マンネリ化しがちの毎日の食事を、田中憲子先生の指導で、毎月１回４、５人のグループで、和気相々にお料理の勉強をさせていただいております。楽しい食生活をする為に、全員で協力していきたいと思います。

72 1 サークル名　さくら料理教室
2 講　　師　寺門明子先生　　　代表者名　正田由里子　電話４３－５６５０
3 活動内容と抱負
家庭料理を中心に、ちょっとした工夫でおもてなしにもなるようなお勉強をしています。材料の切り方、盛りつけで同じお料理が生きたり、死んだりするのはとっても楽しい事です。今年は懐石のお勉強ができたらと思っています。

73 1 サークル名　ヘルスクッキング
2 講　　師　寺門明子先生　　　代表者名　千々松美幸　電話９５－１２３５
3 活動内容と抱負
第１・第３木曜日の月２回、和洋中の家庭料理又はお菓子などを中心に習っています。夜間の料理教室なのでどうしても人数が少ないのですが、先生を囲んで和気あいあいとやってます。現在は女性ばかりなので、男性の方も募集したいと思います。

74 1 サークル名　千葉県老人大学市原地区学友会
2 講　　師　なし　　　代表者名　白井　照　電話４１－１０６７
3 活動内容と抱負
高齢者で生涯学習を実践する同志的団体で年間行事予定を基に学習に、親睦に励む楽しい団体で１０年余の歴史があります。

75 1 サークル名　八幡ちびっこクラブ
2 講　　師　森田文子先生　　　代表者名　平野美津子　電話４１－６７９０
3 活動内容と抱負
子供の自由を尊重し、遊びを中心とした友達作りに重点をおく。初めての集団生活に慣れる事を目的とし、今後も継続して行きたい。

76 1 サークル名　市原市手話サークル　根の会
2 講　　師　田中　収先生　　　代表者名　籾持省吾　電話４１－９６８６
3 活動内容と抱負
市原市に住む聴覚障害者と健聴者が交流しながら福祉の向上をはかる目的で活動して居ます。そしてコミュニケーションを良くする為に手話を勉強しています。ろうあ協会の行事にも参加協力して楽しく交流を深めています。

13

77　1　サークル名　　文化集団このゆびとまれ
2　講　　師　　無　　　　　　代表者名　阿南信廣　電話７４－１７６２
3　活動内容と抱負
うた部、学習部その他に分かれて会員のやりたいことをたくさん実現していきたいと思う。その他演劇鑑賞やスポーツなど、一言で規定できない巾の広さ、融通のきくのが我が集団のよさです。今年は会員も大きくふやしたいものです。

78　1　サークル名　　断酒新生会
2　講　　師　　松本忠男先生　　　　代表者名　曽我　讓　電話７４－２６６７
3　活動内容と抱負
当会に入って３年４ヶ月です。４５年間のアル中と酒乱をピタリと止め、家庭は地獄から天国の花園に一変しました。この世から１人でも多く不幸な人を減らしたいと思います。会長以下温かな人達の集まりです。気楽に参観に来て下さい。

79　1　サークル名　　英会話サークル
2　講　　師　　川端千鶴先生　　　　代表者名　谷　元吉　電話２３－６５２７
3　活動内容と抱負
毎週水曜日の夜１９時～２１時まで活動しています。昨年の秋から、帰国子女のいわゆるバイリンガルの女子大生に、先生になって頂いて、楽しく勉強しています。海外旅行に行っても困らない程度の会話力を身につけようと頑張っています。

80　1　サークル名　　千葉友の会
2　講　　師　　　　　　　　　　代表者名　飯塚修子　電話２２－１９５９
3　活動内容と抱負
衣食住、家計、子供の教育の事など身近かな生活を題材に学びつつ、よい家庭からよい社会を創るため、共に励まし合いながら活動している。“婦人之友”の読者の集りです。今年は創立６０周年を迎え、近隣の方にも輪を広げたいと願っています。

81　1　サークル名　　ちちの木会
2　講　　師　　田中風木先生　　　　代表者名　米津志津　電話２１－１３９７
3　活動内容と抱負
月１回第３木曜日、田中風木先生指導による俳句教室。その折５句自作の俳句を無記名で投句互選する。又先生の選及び添作がある。
今や俳句は生活の詩である。折々感じたものを俳句にして発表しましょう。

82　1　サークル名　　こしばの会
2　講　　師　　前之園亮一先生　　　代表者名　中村喜美子　電話７４－１３００
3　活動内容と抱負
最古の王賜の鉄剣の発掘や、国分尼寺の遺跡など、市原には数多くの古代史跡があり、折に触れ書物からだけでなく学べないものを先生から伺うことができる。講師の前之園先生は大学で教鞭をとられ、研究の成果を書物として著わされている。

83　1　サークル名　　ひばり読書会
2　講　　師　　なし　　　　　　代表者名　石橋みな子　電話７４－３３２４
3　活動内容と抱負
県立図書館の十冊文庫を利用し、本を読んだ感想を話し合う。一人一人の感性による読後感をお互いに聞けるのは、とても楽しみです。抱負としては、今年１５周年になるので「記念文集」を作ろうと思っています。

84　1　サークル名　　女性囲碁碁友会
2　講　　師　　小島敦司先生　　　　代表者名　田中信子　電話６２－０８１１
3　活動内容と抱負
女性の為の囲碁教室です。少しでも多くの女性の方にこれからの生涯学習の一環として親しんでいただきたいと思います。

85　1　サークル名　　中国語初級教室
2　講　　師　　垣花和美先生　　　　代表者名　相川松枝　電話２１－３９６７
3　活動内容と抱負
愉快な中での会話練習です。忘れては覚えの繰り返しですが、細く長く楽しくをモットーにしており、興味のある者は見学にいらっしゃって下さい。お待ちしております。

86　1　サークル名　　ＤＶＢＣ
2　講　　師　　なし　　　　　　代表者名　佐田　正　電話２４－１２１１
3　活動内容と抱負
バレーボール、バスケットボールの好きな仲間の集まりです。チームの和をたいせつにして、体力維持、向上を目標にし、試合で勝てるようにがんばっています。

87　1　サークル名　　フェニックス
2　講　　師　　　　　　　　　　代表者名　近江真理子　電話４１－７６１８
3　活動内容と抱負
メンバーの入れ替わりもあり、心機一転、名前を変えました。フェニックスの名前通り和やかなチームです。勝つことも大切ですが、ひとりひとりを大切にしてチームワークを図り、みんなで楽しくバレーボールをやっています。

88　1　サークル名　　いしづか
2　講　　師　　草野弘子先生　　　　代表者名　大塚一枝　電話２２－１９３６
3　活動内容と抱負
バレーボール。市の大会での勝利。体力維持。

89　1　サークル名　若宮レディーズ
2　講　師　無　代表者名　大宅慶子　電話43－5597
3　活動内容と抱負
バレーボール、今年は優勝するように頑張ります。

90　1　サークル名　わかみやクラブ（バレーボール）
2　講　師　無　代表者名　長塚千種　電話41－5758
3　活動内容と抱負
ひとりひとりは、決して上手とは言えない我がチーム。時々勝てるのはチームワークの力だと思っている。健康で明るい生活をするために、コツコツと練習している。バレーボールの好きな方、ご一緒しませんか。毎週金曜日午前中練習。

91　1　サークル名　ＯＢＢ会
2　講　師　山越安行先生　代表者名　吉川るり子　電話41－0725
3　活動内容と抱負
このサークル活動を通し、心身の鍛練、互いに人間的親交を深め、社会的知性をたかめていきたい。

92　1　サークル名　市原ジュニア　バドミントンクラブ
2　講　師　小柳　博・瀧本和大・小柳智恵子先生
代表者名　小柳　博　電話61－1399
3　活動内容と抱負
小中学生を中心にバドミントンを通して、技術、体力、そして負けずぎらいの子を育てる。今年の目標は、県大会でよい成績を残し全日本小学生大会に参加する事です。

93　1　サークル名　八幡バドミントンクラブ
2　講　師　小柳　博先生　代表者名　小柳　博　電話61－1399
3　活動内容と抱負
バドミントン愛好者による競技力向上と健康スポーツの相反する目的を持って、会員で日々努力し、親睦をめざしています。

94　1　サークル名　光バドミントンクラブ
2　講　師　菅野　章先生　代表者名　菅野　章　電話95－4203
3　活動内容と抱負
生涯スポーツとしてのバドミントン活動、技術レベル向上と妥協しない心を大事に1年1ケ月、1日、1日の元気活動です。

95　1　サークル名　ファミリーサークル
2　講　師　無　代表者名　鵜坂千恵子　電話41－4973

3　活動内容と抱負
毎月第1・2・4火曜日（午前9時半から）、全員楽しくバドミントンをしています。健康維持と仲間の輪を広げることを大切にがんばっています。

96　1　サークル名　楠の子会クラブ
2　講　師　なし　代表者名　盛　隆志　電話41－0461
3　活動内容と抱負
バドミントンを楽しみながら、仲間の輪を広げ、また体力向上を目的としています。

97　1　サークル名　なのはな
2　講　師　三橋洋子先生　代表者名　尾上衣子　電話41－1831
3　活動内容と抱負
週1回、主婦が集まって卓球で汗を流しています。コーチは国際的にも活躍されておられるすばらしい方ですが、会員達はついおしゃべりの方に熱が入り、球を打つ手も止まってしまったり……と、楽しさ優先で和気あいあいとやっています。

98　1　サークル名　市原卓球愛好会
2　講　師　田中政信・竹崎正人先生　代表者名　田中政信　電話75－1208
3　活動内容と抱負
当愛好会は、老若男女・少年少女を問わず、初心者の方でも楽しく研修しています。また、健康な心と体力づくり、卓球技術の研修に励んでいます。公民館での研修を、仕事に家庭づくりに役立つ様な、温かい人と人との交流の場として生かして行きたいと思います。

99　1　サークル名　かよう会
2　講　師　樋口静枝先生　代表者名　佐野敏子　電話43－3324
3　活動内容と抱負
全員出席を目標とし、基礎をかため、技術の向上をはかり、できるだけ多くの試合に参加したい。

100　1　サークル名　市原八幡スポーツ少年団
2　講　師　林　剛先生　代表者名　内藤武男　電話61－1929
3　活動内容と抱負
八幡中学校の生徒を中心に、卒業生、父兄で卓球練習をしています。2月には、県大会があります。上位入賞をめざしたいと思います。また卓球はスペースをとらず気軽に親しめるスポーツですから、もっと地域に広めたいと思います。

101　1　サークル名　高齢者卓球クラブ
2　講　師　楠原　浩先生　代表者名　吉川砂夫　電話41－0725

3　活動内容と抱負
中高年者の心身共の健全を願うと共に、公式の卓球ルールに従い練習を重ね且又健康体操を音楽にのって県なのはなと専用体操を行い、クラブ員の融和を計る。又折を見てレジャー等を計画し楽しい日々を過し、共に意気意気人生を送ることにしています。

102　1　サークル名　　オレンジ
2　講　　師　　無　　　　　　代表者名　大島幸子　電話４３－９７３５
3　活動内容と抱負
卓球。講師のいない素人集団ですので、だれでも気軽に参加できます。体力づくりを兼ねて、楽しく卓球を続けていきたいと思います。

103　1　サークル名　　白球会（卓球）
2　講　　師　　岡本高雄先生　　代表者名　森内　進　電話４３－００６４
3　活動内容と抱負
サークル（卓球）を通して輪を広げ、健康増進にはげむ。

104　1　サークル名　　市原クラブ
2　講　　師　　無　　　　　　代表者名　土田　仁　電話７５－２４９３
3　活動内容と抱負
バスケットボール。２月のリーグ戦で全勝して、今年こそ１部入りを決めるぞ。

105　1　サークル名　　スターダスト
2　講　　師　　無　　　　　　代表者名　佐藤政光　電話４３－２００４
3　活動内容と抱負
バスケットボールを通じて自己の向上と発展及び仲間の輪を広げる活動を中心とする。今年の目標は三部上場を目指す。

106　1　サークル名　　気康会
2　講　　師　　若佐重雄先生　　代表者名　赤城きみ子　電話４１－２２４９
3　活動内容と抱負
私達は気と健康法の研究と実践をめざしています。正しい呼吸法、正しい姿勢と気の導入によって、全身の細胞を活性化し、精神的な安定をはかり、自然治癒力を高め、いきいきとした健康創りをめざしています。

ひばり読書会

堀田善衛『路上の人』を読んで　　小川光子 …… 33

『路上の人』を読んで　　佐藤禎子 …… 34

『モ　モ』　ミヒャエル・エンデ 作　　野城千鶴 …… 35

『花衣ぬぐやまつわる……』　田辺聖子 著　　卜部恵美子 …… 36

『ホテル』　アーサー・ヘイリー著　高橋豊訳　　直田稍子 …… 36

『由　熙』　李　良枝 著　　西村妙子 …… 37

『花衣ぬぐやまつわるわが愛の杉田久女』　　西村澄子 …… 38

『由　熙』　李　良枝 著　　白土貞子 …… 39

『変装－私は３年間老人だった』　パット・ムーア著　　石橋みな子 …… 39

『山　姥』　　磯部紀代子 …… 41

ひばり読書会平成２年度課題本 …… 42

堀田善衛『路上の人』を読んで

小　川　光　子

すべての道はローマに通ず、ローマは１日にしてならず、等多くの諺を持っているローマ、現在もローマ法皇庁が有る。人の歴史、地球の歴史４５億年のうち生物の発生は現在から６億５千年前といわれている。単細胞の原生物から動・植物が分化しそしてそれぞれ多くの進化を経て、現在の人類の元は約１５０万年前アフリカ大地溝帯であるとされている。アフリカから北上しそれぞれの地で人間はそれぞれに生き且移動した。キリスト誕生に至るまで今問題のイラン・イラクの地はチグリス・ユウフラテスの河にはさまれた豊かな土地で、ソロモン王朝等華麗な文化の花開いた処であった。ペルシャ・ギリシャ・インドが争い合った地がアフガニスタンであり、パキスタン（クシャワール）にはガンダーラ美術が誕生している。キリスト教の布教と他宗教、剣とコーランのマホメットをいただくイスラム教等、血を血で洗う宗教戦争の続く中で、何百年も経てローマカトリックの教皇制の確立を見る。教皇の城の内部には宝物としてマリアの乳をおさめた器があったり、キリストの血のついた十字架があったり、免罪符を作って売ったり、丁度現在厄除け札とかおみくじとか絵馬とか、私達のよく見かける様なものを売ったりして懐を肥やしていた、１３世紀頃の事である。

路上の人はこの時代、多くの巡礼者の道案内をしたり他、多くの情報を持っていた人ヨナ。旅芸人と付き合ったり、わざと路上でびっこをひいて出たりしながら多くの人々と付き合う中に真面目な巡礼者セギリウスと出会う。彼は神学研究をしていて彼の眼には法皇庁の堕落した姿が忌まわしく真のキリスト教とは……と追求するが、教皇により毒殺されてしまう。

ヨナは又路上に……でも今度は大きな城壁の中の僧院の下働きをする。そこでは僧院の仕事をしながら時々、村々の情報を城内に知らせる役もした。ローマカトリックに対して異端の考え方をしている等々の報告である。そんな時ヨナはアントン・マリアに出会う。マリアは騎士であった。これと気の合ったヨナは城を出て一緒に旅に出る。多くの意見交換もあったであろう。マリアはまだ学生の頃恋をした。相手は尼僧であったけれど教皇に追放されてしまっていた。マリアは忘れられず探す。しかし、その尼僧は異端の宗教のおさとなっていた。教皇はこれを虐殺で報いる。これを知ったマリアは法衣をぬいでヨナと共に路上の人となった。ヨナ・デ・ロッタ、ロッタはイタリア語でルートの意とのこと。読み終わって何か闇の怖さを知らされた想いがした。

現実の歴史は１５１７年マルチン・ルッターがローマに巡礼して教皇制の不合理を知り、免罪符の乱売を憤ってこれに対する抗議書９５カ条を公表した。そして教皇の破門を受け宗教改革の端をひらいた。カトリックに対するプロテスト（反抗）である。１５２２年、聖書のドイツ語訳を行い、自ら幾多の讃美歌を作った。プロテスタントの確立である。日本からは、１５８２～１６０２年伊達政宗の下臣の支倉常長等少年使節４人がローマを訪問している。通商貿易を……との意を伝えたが日本の思うようにはならなかった。緻密で詳細な記録で最も有名なのは１５世紀～１７世紀のイエズス会士の書簡集であって、当時の人達が肌で感じた日本の姿も書かれていると言う。

現代、今のローマ法皇パウロ6世の情報量の多さ、確かさは米大統領のそれに勝るという。湾岸危機の真の姿は？　現代でも世界各地に「路上の人」はいるのだ。原稿を書いているさなかに湾岸戦争が起きた。米大統領は短期に戦争を終わらせると言ったが、実際には長期化の様相を示しつつある。路上の人が多くいた11世紀の時代。十字軍がヨーロッパからイスラエル等現在の中東各地を遠征し、キリスト・イエスの墓のあるエルサレムの回復を計ったが後半（13世紀後半）では宗教目的より現実的利害関係によって動き、当初の目的は達し得なかった。20世紀の現在でも、絶対に宗教戦争にしてはならない。

『路上の人』を読んで

佐藤禎子

今、私達は真の闇を忘れてしまった。裸足で歩く足裏の感触も、食べ物を手に入れる苦労も、神や自然に対する敬虔な心も。この物語はこれらが日常を支配していた時代の話である。

13世紀ヨーロッパの庶民にとって、国家などというものにあまり関心はなかった。生まれた所で日々平穏な暮しが出来ればそれで良かったのだ。ところが領地の奪い合いで支配者はしょっちゅう変わるし、そればかりか言葉や宗教さえも突然異なるものを押しつけられることがある。そのほか、しがみつく土地すらない人々は路上に出て、見つかる限りの仕事（騙り、かっぱらい等も含めて）をしながら生きていかねばならなかった。

主人公の1人ヨナも路上で生きるひとりであった。彼はそれこそ何もなしの男だったが、どんな環境でも生き抜く才覚と、人を楽しませる才能と、物事の本質を見抜く直感は持っていた。ある時、旅芸人の仲間に入り諸国を回っていた折りに、セギリウスというドイツ生まれのカトリック僧に出逢う。セギリウスは命がけの研究に没頭しているが、その研究というのはどうやらローマカトリックにとって表に出されては困る類のものらしい。セギリウスは人間にとって真の信仰とは何かということを追求していた。そのためその筋により命を奪われてしまう。死後の書類を託されていたヨナだが持ち出そうとした時にはすでに研究書類もセギリウスと共に抹殺されてしまっていた。主を失ったヨナは、偶然か神の意志か、アントン・マリア・デ・コルディアと出逢う。アントン・マリアはイタリアの伯爵家に生まれローマ法王付大秘書官という地位にある人物で、セギリウスの親友だ。

庶民は日々の暮しに苦しんでいるのに、教会は富と権力にあぐらをかいている。教会にとって民衆は無知であればあるほど都合がよいのだ。聖書は一般の人間が読むことは禁じられていた。活字を普及させると皆が聖書を勝手に読み、教会の神秘性が薄れるのを怖れていたのだ。教会の権力欲は限りなく高まり異端の信者をあらゆる手を使って排除していく。カトリック内で恵まれた地位にいるアントン・マリアはこれを黙って見ていることが出来ず、ヨナを伴って異端カタリ派の救出に奔走するが結局カタリ派は死に追いやられてしまう。その中にかつての恋人がいたのだが、彼女は助かる事を望まず、アントン・マリアはどうすることも出来なかった。日本人的思考だと、こんな時は無情を感じて旅に出たり、山に隠棲して読経三昧の日を送るということになるのだろうが、イタリア生まれの彼は力強く明るい。次の目標に向かって前進してゆく。人間の尊厳ということを主に、親友セギリウスと誓い合った"人間あっての宗教"めざして法衣をぬぎすてる。

いつの世でも、生き易い人と生きにくい人がいるものだと思った。教会の中で無知な信者を騙すニセの聖遺物を作って何のいたみも感じない僧。追手の目が光っているのを知りながら真実を追求しなければ良心が許さないセギリウスのような人。13世紀の広いヨーロッパが霧の中からあらわれて、タイプの異なる様々な人物がはっきり描き分けられて大いに魅了させられた。

折りしも東西ドイツ統合やソ連邦内の共和国の独立問題、アメリカを中心とする国連軍とイラクの衝突など、国家間の線引き問題が続々と起きている。個人と国家との関係というか、宿命を思わずにはいられない。

『モモ』　ミヒャエル・エンデ作

野城千鶴

時間の大切さを表わすのに、時は金なり、少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、とこの様な言葉が頭に浮かんできます。

この物語の主人公であるモモは、われわれ現代人が人間らしく生きられる様にと時間どろぼうに盗まれた時間を取り返してくれた、年令不明、どこから来たのかもわからない不思議な女の子です。この本は児童文学書でありながら現代社会の汚点を鋭く指摘しています。現在の社会は発展という的に向かってつっ走るあまり、人間としての心が忘れられかけています。良い暮しをする為にといって子供達を追いたて、大人達も又社会に追われ、困っている人を振り向く暇さえなくなりかけています。その代償として青少年問題、地球汚染の問題等に直面しています。社会のルールを覚える第一段階でもある子供達の遊びも今はあまり見かけられなくなり、餓鬼大将という言葉も聞かれなくなりました。子供の時だからこそ経験してほしい友達を思いやる心、共に悩みを解き喜び合う厚い友情等失われてゆきつつある現象を思うと心が痛みます。モモが時間の国に行く途中で見た風景は、砂漠化した都市の姿であり、役立つものごみの山であったと、これは正に今、解決しなければいけない事の一つでありこのままだと未来の地球の姿にもなりかねません。

私が詩的で美しい文章だと感激したのは、モモが時間の国で見た、人間一人ひとりに与えられた時間の花の光景の部分です。美しい色を持った花の蕾が次々と生まれ光を放ちながら徐々に開き、やがて頂点に達し閉じてゆく。その花を生む殿堂の荘厳さが身体に伝わってくるようです。私にもこんな美しい時間の花が与えられているのです。じっと目をつむってみる。私の時間の花はあとどれ位開いているのだろうか。汚してしまった部分がいかにも残念に思えます。残りの花びらの色は絶対に汚し

てはいけない。何故ならば、それはモモが命をかけて取り戻してくれた大切な時間の花なのだから。

『花衣ぬぐやまつわる………』　　田辺聖子著

ト部　恵美子

杉田久女は、大正から昭和にかけて数多くの艶麗な句を遺し、女流俳句の先駆者として活躍した人です。明治２３年高級官僚の娘として鹿児島に生まれ開明的な雰囲気の中でのびのびと成長しました。結婚は、東京芸術学校を卒業した杉田宇内という人で九州小倉で新生活が始まりました。「貧しくても意義ある芸術生活」を理想とする妻は中学教師の職に甘んじて絵を描こうとしない夫にしだいに失望していったのです。兄の手ほどきで俳句を始めた久女は高浜虚子の「ホトトギス」と運命的に出会い才能が花開いていきました。

しかし、作句生活を快く思わない夫の態度に苦しめられた久女。芸術と家庭の間で懸命に生きた久女を思うとき、当時の社会の中でよくぞ頑張った、と思うのです。

久女の夫宇内はごく普通のまじめな教師でした。そしてその人間観人生観に関する限り風俗の域を出なかったのです。女はこうあるべきもの、という信念があり、それを逸脱する女は宇内の目には、不遜とも驕傲とも映ったのでしょう。女の自己表現欲、生き甲斐などは放縦で身のほど知らずな欲望に思えたのに違いないのです。女は温和で謙虚であればいい、というその時代では、ごく一般的な誰もが正しいと思っている価値観の持ち主でした。久女の創作に傾ける意欲、情熱を宇内には理解する事も許す事もできようはずがありません。

最も身近にいる人に理解してもらえない久女の絶望感、心の渇きが伝わってきます。一度持ってしまった自我や創作活動への情熱は、決して消えることがない以上、夫の側の理解の無さは、それを世間が正しいと認める故に女に多大な犠牲を強いてしまうものだと思います。またその時代、夫と妻が話し合う、意見の交わすという事のない時代だったということに、ずい分驚かされました。

久女の、心を寄せる人にあまりにも近づきすぎてしまうという人柄は、夫との不和や理解してもらえぬ苦しみが大きく影響していることと思います。

そんな不幸なめぐり合わせの中でも、久女のつくる俳句は、おおらかで美しい。

『ホ　テ　ル』　　アーサー・ヘイリー著　高橋豊訳

直　田　精　子

勧善懲悪物語である。と言っても、スーパーマンが出てくるわけではない。普通の人、過去に大失敗をしながらも、人生を捨ててしまわないで生きている人を中心とし、登場人物全てが主人公と言えば主人公である。

舞台は、セント・グレゴリーホテル。ずさんな経営により深刻な赤字を抱え、抵当期限が数日後に迫っている。という設定である。あらゆる融資を拒否されて苦悩する頑固一徹の老経営者と、彼の片腕となって奔走する精力的な副総支配人。人種差別問題、高貴な身分の夫婦の犯罪、脅迫、盗み、大事故、そして恋愛等々、多種多様な要素が織り込まれている。信頼を裏切る者は敗北し、罪を犯した者は事故で死に、あるいは起訴され、愛を認めなかった者は悲惨な形で愛を知る、というように登場人物は皆、運命のツケを払わされるのである。古い世代と新しい世代のせめぎ合い、古い世代が消え去る時の胸の痛みが読者にはっきり伝わってくる。それは、「悪」を為した者が最後に応じた報いを受けるのを読む時の安堵感と両立しているのである。さらに、その風貌の為に客でありながらホテル側から軽んじられていた老人が、実は大富豪であり、倒産間際のグレゴリーホテルを生き永らえさせてくれるあたりは、本当に胸のつかえがおりた気分だった。

著者の他の作品にも共通しているのが、このハッピーエンド風の終結の仕方である。つまり、読者は、からみあった人生ドラマの海を泳がされ、嵐に出合い、波にもまれてようやく岸に上れるのである。それも幸福感と共に。だが、単純な仕立ての物語ではなく、素材・事実に関する精緻な知識を用い、ドキュメンタリーの説得力が小説にあふれ織り込まれているので、読み返す度に読者は大きな満足感を得るのである。私が、ひそかに本著を「疲れた時の『ホテル』」とよぶ所以である。

『由　　熙』　　李　良枝著

西　村　妙　子

この著者の本は、初めてである。日本で生まれ育った在日韓国人"由熙"は、もう一つの母国である韓国の大学の留学生となるが……。言葉の壁、生活習慣の違い等から挫折してしまう。

作者は、彼女の屈折した内面を繊細に描き、ただでさえ暗いテーマを一層重苦しい空気につつみ、読者は出口のない、やりきれない気持にさせられてしまう。過去の暗い日韓関係、民族問題等、歴史的背景を抜いては語れないテーマだけに、日本人である自分に次々に問いかけられぐいぐいと迫ってくるようで……。いつも韓国人の著者のものを読む時感じさせられるやりきれない罪悪感を、又もやいやという程、感じさせられた本であった。

由熙は、朝目覚めた時に出る言葉でもない、声でもない"あー"と長く、ため息の様な自分の声をハングルの아なのか、あいうえおのあ、なのか、そんな事にこだわり続ける。これは、自分は日本人なのか、それとも韓国人なのか、いや、日本人にも韓国人にもなりきれない自分にとまどい悩み、必死に自分を探している、彼女の呻きなのであろうか。思いやる事は出来ても、理解する事は祖国、母国などと改めて考えた事もない私に出来ることではないと……又もや身を小さくして思ってしまう。

私はある時、青年の主張で最優秀賞を取った、在日韓国人三世の金哲品（キムチョルジュン）君の

事をテレビで知った。金子哲晶（かねこてつあき）という日本名から韓国名を名乗る事を決意した彼は、初めて自分というものを確立したような気がして自分を見つめ直し、これから自分は日本人と韓国人とのかけ橋にならなければと韓国の大学に留学する事を決め、今は留学生として勉強に励んでいるという。賞をもらって、何か一言というアナウンサーに答えて彼は“やったぜ、かあちゃん”とガッツポーズをしてみせた。ホント、そんなかっこいい事ではなくて……とテレている彼は、明らかに日本人、日本の若者なのだ。いまや在日韓国人も二世三世で８０％を占めるという。韓国語はもちろん、キムチさえ嫌う若者が増えているとか。

由熙も日本人だったのだと思う。日本に帰ったら真っ先に何をすると思う？　きっとテレビを見るでしょう、という最後の会話。日本語で暮し、日本の食習慣に馴み、日本文化の中で生きている人達。指紋押捺はどうやら廃止のようだが外国人登録など必要なのだろうか。

そう!!　由熙はやはり日本人だったのだ。しかし、人間は民族!!　血!!　というものはぬぐい去ってしまえる様な単純なものではないのだろうが、折りしも今激戦中の湾岸戦争に思いが至り、又やりきれない思いで大きなため息をついてしまう。

『花衣ぬぐやまつわるわが愛の杉田久女』

西　村　澄　子

長野に分骨ではあるが、夫のはからいでアルプスの山々が見渡せる場所に杉田久女の墓はある。敬慕しつづけた恩師「高浜虚子」は、生前どんなに頼み哀願しても、句集の序文を書いてもらえなかった久女。墓の碑面には虚子による「久女之墓」とある。他の人なら頼まれなかったとか、虚子にも罪滅しの気持があったかと思われる。夫婦は反目と摩擦にその半生を終始し、心から溶け合うことなく終わったかに見えたが、妻の遺骨の一部を実家の墓に入れてあげたのは、男の愛情であった。

あの頃の金も時間もある上流婦人は、新しい女として恋に文学に熱を上げていたようである。久女は家事、子育ての傍、俳句に熱中し、世に出ようと必死に努力する。東の長谷川かな女、西の杉田久女、と言われる様になり、ホトトギスには毎回俳句が掲載され、高い評価をあびる様になる。

実力と才能がありながら人より敬慕しすぎたためか、又師に対する渇仰が人より熱っぽかったためか、俳壇の大御所に嫌われてしまう。昭和１１年一方的にホトトギスを除名されてしまう。久女は、正しいと思う事は何でも率直に話しをするため、怖い感じがする人だったと思う人も多かったようだ。

文壇、画壇なんであれ今を栄えるためには世渡りに長ける、という能力もいるようである。

昭和５年に募集した「新名勝風景」の２０句、１０万余句中「谺して山ほととぎすほしいまま」が首位で入る。これなどは句心がない人にでも情景が目に浮かぶようである。入院中、看護婦が気に入らぬとよんだ「芋の如肥えて血うすき汝かな」など、よく言い当てていると思わず頬がゆるんでしまった。「花衣ぬぐやまつわる紐いろいろ」この句は虚子も、女の句として男子の模倣を許さぬ特別の

位置にたっているとして認めている。

小説の「菊枕」「私の見なかった人」など、うとまれいやな女に描かれていたり、面白くするためさまざまの技巧をつかい真実がすげかえられて描かれてしまった。小説に描かれてしまうと、なすすべもなく濡れ衣をきせられてしまう。著者はそれを克明に、真実を調べ描きあげた。

久女、俳句会への不満のなか、精神的に影響を及ぼし昭和２０年冬さんたんな状況であった精神病院で没。

５０年代になり小倉にも久女顕闘がとかれ、開放的な気風がみなぎってきた。５９年久女の句碑「花衣ぬぐやまつわる紐いろいろ」が、堺町公園に建てられた。

生前には不遇、後世讃仰は、久女をはじめとして詩人・画家と多数あげられる。

『由　　熙』　　李　良枝著

白　土　貞　子

大学までずっと日本人学校に通った在日韓国人、李由熙は母国へ留学し、早く生活に慣れたいと一般家庭に下宿するが、学業中半ばに挫折し帰国する。

留学という一見華やいだものを感じるが、終了する人が１０％にも満たないという事を聞き、言葉の壁又生活習慣の違いの難しさを感じました。

由熙は、ほとんど日本語で過ごしたため独学で韓国語を学び、読み書きは一応出来ているが会話が苦手である。そのため、学校や町できく韓国語が催涙弾と同じように聞こえて辛く、息苦しい。又、韓国人って燃えやすく昂ぶりやすいから慣れないとびっくりすることばかりだったと不満と愚痴になる。真面目というか神経質というか韓国に順応出来なかった。

生まれ育くまれた環境に育てられて行くことをつくづく感じ、在日韓国人であるが感情感覚的には日本人だと思います。しかし、留学する事は自らの行為なのでもっと積極的に理解し進んで欲しかった。

由熙を通して在日韓国人の複雑な心の思いが、訴えが通ってきます。国と国との歴史的・政治的な事を思いながら読んだ一編です。

『変装－私は３年間老人だった』　　パット・ムーア著

石　橋　みな子

これは副題にもあるように、２６才の著者が３年間８０才の老女に変装をしていたという話である。工業デザイナーである著者パット・ムーアは会社を休職し、高齢者のニーズを追求するため大学に戻

り、生物学や老人学を学んでいた。学べば学ぶほど今の自分の年令では実際の老人が感じるように感じたりできないことにいらだち、プロのメイクアップ・アーチストの手を借り、それは驚くほどの80才の老女ができ上ったという訳である。

変装する時のその苦労も並ではないが、実行に移してしまう著者の奇想天外なしなやかさ！

彼女は、同じ店の同じ店員に対して、２６才の自分と８０才の自分で（もち、全く気付かれません）同じ実験を試みている。また、経済的に三つの異なったレベルの服装と人物像をつくり、社会の反応をみたりもした。そしてその待遇の違いの大きさに大いに驚くのである。やはりそれは彼女の予想をはるかに越えていたものであり、非常に厳しい老人の現実だったと。

しかし、嫌な経験と同じ位よい経験もした、と書いている。老人の生活の特徴となるお互いに対する深い配慮や内面的な豊かさを知らされ、また、幼い子供達が友人として受け入れてくれる無邪気さに触れ、大人の感化しだいで子供は変わる、と説く。そしてこの本文中の言葉「お年寄りたちが、かつては活動的で世の中の重要な役割をになっていたということは子供達には想像しにくい。とくに、体が不自由だったり、あるいはたまにしか来ない人については子供はその人が現在もっている役割によってしか評価しないものだ。そういう子供にとって老人は家具の一部とほとんど変わらないくらい一面的で無関係な存在に思われるだろう。老人を生きた歴史の宝庫としてとらえれば、この状態は変わっていくだろう。老人は価値があり必要な存在になるであろうし生身の人間が歴史をつなげているという感覚を子供がつかむのにかけがえのない貢献をするのである。」を私達におくっている。と同時に、次の言葉もグサリとくるではないか。

「背の低い人は背が高くなってみない限り背の高い人の気持が一生わからない。しかし老人たちは長い間老人ではない人として暮してきた後、ついに自分も老人の一人になってしまったことに気付く。若い時には老人に対する否定的な見解を何も考えずに受け入れ、自ら進んで賛成したこともあったので、今さらその考えに抵抗できる道理はない。やがて自分たちがその偏見の的になった時に、その偏見を正しいと思い込んでしまうのだ。」

私はある時、心根の優しい友達と老人のことについて話をしていた。と、彼女が「私、お年寄りの事を聞くのは暗くて嫌いなの。子供と遊んでいた方が明るいじゃない。」……私は少なからずショックを受けた。そんな記憶があるものだから、この本を紹介したくなった。

『山　　　姥』

磯　部　紀代子

山姥ひとり水仙抱いて朝市に
岐れ道の名もなき地蔵に雪積もる
春時雨児を横抱きに神楽坂
胸にしまふことひとつあり遠桜
一言がころころまろび花大根
フランスパンまた買ひに行く木の芽梅雨
よく喋る五百羅漢や残り花
離宮にも早苗植えられ京言葉
家中の灯りを消して四葩みる
にらめっこにあきて手折りぬ濃紫陽花
みみず可愛いと思ふ暮しとなりに付り
ハンカチをたたんで気のりせぬ話
短文を書く昼もあり冷索麺
紅一点は石榴のことと聞きし夜
墓石の裏に句のあり月の里
法話聞く人を照らして降り月
たっぷりとワインを注いで神の留守
煮凝を好みし母の割烹着
陸奥をあとに上総へ雪女郎
荒れ果てて庭に李の二つ三つ

ひばり読書会　平成2年度課題本

	書名	作者名	出版社
1	桜の園・三人姉妹	チェーホフ	新潮文庫
2	吉原はこんな所でございました	福田利子	主婦と生活社
3	老い（上・下）	ボーヴォワール	人文書院
4	花衣ぬぐやまつわる わが愛の杉田久女	田辺聖子	集英社
5	路上の人	堀田善衛	新潮社
6	家庭のない家族の時代	小此木啓五	ABC出版
7	引き裂かれた人生	山崎朋子	文芸春秋
8	モモ	ミヒャエル・エンデ	岩波書店
9	神さまの親類	畑山博	集英社
10	由熙	李良枝	
11	悪魔の飽食	森村誠一	光文社

編集後記

八幡公民館発行の文集「ふれあい」１３号が出来上がりました。

ご寄稿は１年間の活動の成果や、ご感想、ご意見を頂き有難うございました。

この文集が多くの主催事業の会員や、各サークルの方々に読まれ、文集を通じてなぐさめられたり、励まされたりして、ますます「ふれあい」の輪が大きく広がりますことを願っております。

諸事多忙な折にもかかわりませず、貴重な原稿をお寄せくださいました方々に深くお礼を申し上げます。

ふれあい

市原市立図書館
011217577

1992.

市原市立八幡公民館

L379
フレ
14

第14号

第１４号「ふれあい」の発刊によせて

公民館は社会教育の中核機関として、地域住民の多様な学習要求や地域の特性に応じた各種の学級講座を開催実施するとともに、文化、体育、スポーツ活動や地域の奉仕活動の拠点として大きな役割を果すことになっています。

わけても青少年の健全育成、婦人のための学習活動、高齢者の生きがい教育など、生涯学習の拠点として公民館の活動は、今後、益々重要な役割を果さなければならないと思っています。

本年度主催教室として１２講座、登録サークルとして１０４、また１年間の学習発表の場としての文化祭、武道祭を行ってきました。

これらの活動、諸行事を通して行った内容について、まとめた文集が「ふれあい」です。

この文集の中には、サークルの１つである「ひばり読書会」の作品も掲載しました。原稿をお寄せいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

この度の「ふれあい」を通して、公民館での学習内容を理解され、人と人との交流、地域との結びつきが一層深められることを期待しています。

公民館長　元吉　隆

主催教室

主催事業

○成人講座	成人講座に学びて	庇立キン	1
○郷土史講座	真里谷氏の財宝金の「チャボ」の謎	地引久組	2
○親子教室	親子教室に参加して	蘭田妙子	3
○家庭教育 婦人学級	家庭教育・婦人学級に参加して	昆嶋ヤス	3
○古典文学教室	源氏物語を受講して	白鳥治子	4
○詩吟教室	勿怪のさいわい	林　文組	5
○自然観察会	ふる里の野山に想いを馳せて…	仮本チイ子	7
○陶芸教室	初めての陶芸教室	馬南絹子	7
○ワープロ教室	ワープロ教室に参加して	堤　恵津子	8
○バトミントン教室	バトミントン講座に参加して	田辺陸江	9
○文化祭	文化祭所感	田中政巳	10

成人講座

成人講座に学びて

尼立キン

5月茶道、私の家でも、5年生になった孫が学校の部活で、お茶のお稽古を始めましたので、「私も孫に負けられない」との気持で先生方のお話や、動作の一つ一つも見のがさない様気をつかい、和紙のちぎり絵には、私事とかちあい欠席で、がっかり。次の機会にはかならずとはりきっています。

ラウンドダンスには、もう40年も前の事。公民館の出来た間もない時、立野先生により123、223、323、423、と座布団の4隅を踏み、一生懸命夜なべに教えていただいた時の事を、懐かしく遠い遠い想い出に浸りました。

又、青少年の非行の件に付いては、時代の流れとは、母親の勤めが多くなり、金銭感覚のうすれやカギッ子が増える。それらの対策等考える考えさせられる事ばかりです。

財産の運用と税、大変な収穫をしました。財産とは、売買の時、又人の死による相続、それ以外にあまり縁のない事と思っていましたが、大間違え、生前贈与等、それに、保険にも色々問題があり、預貯金にも、そんな事気にもとめず、孫に保険を掛け貯金通帳を作り、いいおばあちゃんぶって一人喜んでいましたが、後日の事を考えると、やっかいな事をしたものだ。知らなかった事とはいえ、反省させられました。

秋葉先生の生き甲斐の創造には、昭和初期戦時中、戦後の話、私もその時代を生きた一人、私も娘時代青年学校に入り、その後指導員として同窓、後輩の指導をした事もありました。弟も志願兵として8月19日入隊する事になっていました。当時の事を思いおこし戦争で帰らぬ人となった皆様に涙をおぼえました。若い人達にこの話長く伝えてもらいたいです。当時の国民の気持を知って貰いたいですね。ほんとうにいい話です。

公民館教室でこそで、普通の講演会等ではとても学べない身近な問題、ほんとうにこまかく見聞き出来質問も気楽に出来る。長生きした今、健康であるには、余暇のつかい方、第3の人生前向きに生きたい。

始めなければ何事も進めない。

生涯勉強の求道精神で、と教えてくれました。出席する度半分忘れても、実のある事ばかりですので、長い事出来るだけ出席する様に、心掛けます。

郷土史講座

真里谷氏の財宝金の「チャボ」の謎

地引久雄

天正18年(1590)7月、徳川家康の軍勢が房総半島の諸城を疾風の如く攻め進んできたので、真里谷家8代城主、真里谷信高は、是等の軍勢と戦っても負けると判断して、戦の前に城を棄て、那須を落去したが、後日再興時の資金と考えて、真里谷家150年の財宝を城の何処かへ埋蔵してこの地を去ったと伝えられる。埋蔵されたのは金の「チャボ」だけでなく、種々の高価な物が一緒に埋められている筈である。真里谷地方に次のような話が伝えられている。『朝日さす、夕日輝く「コウゲ」のもとに、金のチャボは隠されている。』

この唄は財宝の隠し場所の決め言葉となっているが『コウゲのもと』と言うのは何処か判らない謎である。

木更津市では真里谷城址に青少年施設を建設するため、数年にわたって発掘調査をしたが、金のチャボも財宝も見当らず縄文土器の破片などしか発見されていない。

安房の里見氏は安房から落去するとき、財宝を館山城から20粁も離れた嶺岡山中に埋蔵したと伝えられる。真里谷家の金のチャボや財宝も城内に埋められたのでなく、真里谷城の北東に聳える音信山のどこかに埋められたと言う説もある。真里谷家の財宝を探すなら音信山の山中と考えられるが、『コウゲ』の謎を解かない限り音信山の何処を掘り返しても、金のチャボは発見できないと思われる。

真里谷武田氏の埋蔵金と金のチャボ伝説は田中操先生の講座であって、先生は木更津市の真里谷小字、永井の須藤克利氏を訪れて、埋蔵されていると思われる根拠や、先代からの遺言、更に木更津市に伝わる民話や過去に発掘されたもの等について伺って来られたのである。

須藤家の財力や家屋並びに広大な屋敷、其の他、基地、墓石の豪華さ、真如等の不動仏と不動堂との関係、また「チャボ」や山鳥の彫刻などは伝承の裏付けか、或は埋蔵場所の暗示を意味するものか不思議である。

須藤家は先祖の八ェ門(2代襲名)や福増氏など、寄材の急増や時期、宮大工の佐藤家との因縁などから埋蔵金との関係があるのではないか、とも考えられる。

田中先生は真里谷地区を探訪されて、関係場所を撮影、『スライド』に作成して講義に活用されたので、現地を観ているような感じで興味深く拝聴できた。

近年開発に伴う埋蔵文化財や、考古学などで、各地の古墳や遺跡の発掘調査が実施されているので、埋蔵金発掘について書いてみた。

最後に公民館は地域住民の教育の場であり又、教養と親睦の園であると思う。講座も年毎に充実しているが、その裏で講師の委嘱や資料の準備その他、関係職員方のご苦労に感謝しながら、健康と痴呆防止に令寿に負けず生涯勉強に努めています。

親子教室

親子教室に参加して

霍田妙子

6月15日、母と妹と私の三人で、公民館の親子教室に参加しました。

「電池の日」って知っていますか?

と言う質問から始まりました。それは、+極と−極を並べて十一月十一日だそうです。アルカリ電池、マンガン電池、太陽電池などがあり、今日はマンガン電池を作るそうです。

一人一人に材料が配られて、電池作りの始まりです。亜鉛缶、二酸化マンガンに炭素棒など初めて見るものばかりでした。

小学三年の妹も二酸化マンガンで手をまっ黒にしながら、スポイトで水を入れたりふたをしたり母といっしょに楽しそうにがんばっています。最後に、紙に好きな色をぬり日付けと名前を書いて出き上がりました。

「豆電球がつくか確かめて下さい』

と言う先生の声にびっくりしました。

私の作った電池で豆電球が本当につくのか、不安な気持ちでドキドキしてしまいました。はじめに母の作った電池でためしたら、パッと電球がつきました。次に妹もつきました、今度は私の番です。

「つきますように!」

と心の中で思いました。

「あっ!ついた』

と大きな声をだしてしまったのでちょっとはずかしくなってしまいました。

世界でたった一つしかない自分の電池を家に持って帰りました。もったいなくて、なかなか使えそうにありません。

今までの親子教室で、工作教室や七宝焼きなども楽しかったけれども、私が一番楽しみにしているのは、12月のケーキ作りです。私も妹もはやく作りたいなぁと思っています。

家庭教育・婦人学級

家庭教育・婦人学級に参加して

鹿嶋ヤス

「お料理の申込みをしない?」と誘われて即座に賛成、婦人学級に参加することになりました。楽しみにして待った1回めは「魚料理」です。献立の説明を聞いて、いよいよ始まりです。一匹ずつ配られた季節の魚、カツオ、こんなに大きな魚をどう処理するのか興味津々です。先ず、勢いよくさばいた半身は醤油につけてすし飯に、残った半身はサラダに、骨についている身はすり流し汁に、というように、一匹のカツオが余すところなく、それぞれ形を変えて食卓にのります。懸命に、そして忙

がしく各グループを廻りながら、指導してくださる専門先生につられて皆も真剣、教えたり教えられたりしながらの実習です。

会食も楽しく「おいしい」と、あちこちから聞こえ、はなやいだ雰囲気になります。

2回めは「肉料理」です。ステーキをメインに、前菜・スープ・デザートとフルコースの縮踏版です。目先の変わった、初めての味わいに、早速今夜にでも作って食卓を飾りたい気持ちになります。

3回めは、楽しみにしていた「会席料理」です。時にはユーモアを交え、要領よく話してくださる先生の説明を聞いてとりかかります。3回めともなると、だんだん慣れて要早くなります。作り方のプリントや説明のメモを片手に計量したり、一人が酒小匙2、レモン汁小匙1と読むのに合わせて、他の一人が計ったり、それぞれのグループが協力しあって作ります。時にはスープを沸騰させすぎて失敗するグループがでてきます。そんな時、先生はよくできたグループのスープを見本に、持ち廻って見せてくださいます。何はともあれ、出来上ったお料理をテーブルに並べた時の満足感、いや自分たちで作った料理を味わう時の気持ちは何とも言えません。

最近は、テレビの料理番組をみて、作ることがあります。本を参考にして作ることもあります。ちょっとのヒントで目新しい一品ができ、どちらも主婦にとって強い味方です。

しかし、材料の選び方、包丁さばき、火加減、味加減を見聞きしその場で確かめる程、身につくことはありません。示範を見ながら技術を学ぶこともできました。学んだすべてを作ることはできませんが、どれかを作ることに心がけてきました。楽しく学ぶことの多い婦人学級でした。

古典文学教室

源氏物語を受講して

白鳥治子

物語の中に多く登場する人物の中で私の好きな女性は「紫の上」です。源氏は禁じられた藤壺への恋の代りに、藤壺の姪、紫の上を二条院の自邸に迎え、彼女は源氏が理想の女性像とするスタイルに教育されて行く。

まだあどけない童女が、やがて源氏の正妻に準ずる地位を得、その幸せは人々から羨ましがられていたのだったが、須磨に落ちて行く源氏との悲しい別れ。二条院の一切をまかされたその大きな負担は、彼女にとってあまりにも辛い役目だった事でしょう。

これまで、源氏と係りのある女性の世話。又は対外的な問題の処理などは、深窓の姫にとってあまりにも重荷であり、それなのに明石の君の噂を聞く、紫の上の心中にすっかり同情してしまいます。

源氏は許されて帰京し、六条院完成後は地上の極楽のようなおだやかな生活であったが、「女三の宮」が源氏の正妻として降下するに及んで、紫の上は深い苦しみを持つようになってくる。今までの彼女の苦労は一体、何の為であったのか。六条院での自分の立場を思うと、乱れに乱れる心をじっと耐えて、ただひたすらに世間の物笑いにならぬようにとけなげにも源氏に尽すのであった。

「明石の中宮」扶育者として、源氏からも尊重され、表面的にはすべての点で立派な女性として認められているが、次第に彼女は心に吹きぬけて行くむなしい風に、遂に出家をのぞむが、それは源氏の身勝手で許されなかった。

心身の疲れから、紫の上は病となるが、「六条御息所」の物の怪に悩まされるが、物の怪となりたいのは、むしろ紫の上であろうに。

心の安らぎを求めて出家を願っても、そうする事により残された源氏の事を思えば、それを断念しなくてはならない彼女が、哀れに思われ運命の苛酷さに、無常を感じさせられる。

紫の上はその晩年に「自分は身にあまる幸福と、人知れぬ深い悲しみの人生であったがこの悲しみが自分の生きる支えであった」とのべている。

この事は、私達の過してきた「女の一生」に通じるものがあり、紫式部の筆の冴えは勿論だけど、この「女の一生」が身にしみて、紫の上が、より身近く感じられるのです。

唐詩教室

勿怪のさいわい

林文雄

私も近年唐詩に関心を寄せるようになり、余暇をみては唐詩選や中国詩選などをひろげて、詩聖或は詩仙と言われる詩人たちの秀逸した詩才に感嘆呻吟したり、時には、日々の暮らしでの出来事や、大自然の四季の移り変わりの中で何かを感じた時など、印象に残っている詩文を思い出し、自分の触れた事象と結びつけながら味わい楽しんでおりました。

この春定年退職したので、愈々悠々自適と洒落こみ、読書三昧は無理としても、精々好きな漢詩の書物ぐらいは紐きたいと意気込んでいたところ、豈図らんや長い間の勤めで万事手抜きをしていた付けが山積しており、多忙な明け暮れに終始するようになりました。

然し、今後の人生のためにも、以前からのささやかな誓いを何とか実現したいと考えていた矢先、「広報いちはら」に唐詩教室開設の掲載を見つけ、勿怪の幸いとばかり早速申し込んだ次第です。

五月、唐詩教室の一年生として仲間入りしました。最初に驚いたのは受講者の多くが熟年層の様で、しかもご婦人方が殆どである事でした。然し、考えてみれば諸条件からして当然かも知れません。が、それにしても実によき時代だと思いました。

次に感じ入ったのは、受講者の学習意欲が旺盛な事です。いわゆる散歩気分の者は一人も見当らず、呑気な私も聊か緊張を覚えました。

今年度は二十四史と言う現本行の話題を教材として受講しておりますが、受講者からの唐詩も是非との要望をご快諾いただき、九月から同日の午後、サークルとして開設して下さっております。講師の片山先生はじめ公民館当局に深く感謝する次第です。私も唐詩の学習が狙いでしたので、正に吾が意を得たりと喜んでおります。

更に、この唐詩教室が受講者の大幅な入れ替わりもなく八年目を迎えたと言う実績のすばらしさに敬意と驚きを感じました。現今、活字ばなれや漢字ばなれの傾向が言々されている中で、字典や辞書を引かねば分らない漢詩の学習を根気良く続け、七年と言う長い歳月にも未だ飽く事を知らず、今後も継続するという貪欲な程の熱心さは一体どこから来ているのか不思議なくらいです。

察するところ、この要因は大別して三点が考えられます。順序は不同ですが、その一つは唐詩のもつ魅力でありましょう。近体詩のやかましい作法に則り、言語を選択、吟味し乍ら縦横無尽に駆使して、思想・人生、自然などを広く深く情感溢るる程に謳いあげた詩人たちの知識と思惟・感覚の豊かさや表現の力量、そして詩文のもつ独特のリズムと韻きが、時には重厚に、時には軽快に、読者の心をゆさぶりの鼓をつけずには置かないものがあります。

その二つは受講者の学習意欲（唐詩好き）でありましょう。人間誰でも自らを向上させたいと言う心理は一生涯存続すると言われています。そして自らを啓発して行く中で、自分が求めているものに出逢った時は替えようのない喜びや満足感を覚えます。

一篇の詩文に目を向けるとき、僅か四行或は八行の表現の中に人生なり自然なりが凝縮されながらも、それらが起承転結という流れの裡に素晴らしいドラマやパノラマを展開させ、而も千年以上も古い時代の詩が現代を鮮明に描写しているような生々しさを感じさせてくれます。

唐詩教室の受講者の大方は大正後半から昭和一桁年代のお生れと察します。随って人生経験も豊かであり、詩文の解釈・鑑賞の過程で自分の心情や感覚と重なるところが多いと思われます。戦乱、別離、望郷等の作品は胸に迫るものがあり、大自然の讃美では現実以上の絵画の世界に誘らせてくれます。こんな時、自分の心が豊かになった様な感を抱き、漢詩に触れてよかったと言う気持になりましょう。

その三つは申す迄もなく講師片山先生のお人柄と学究の深さに在ると思います。素人には取り付き難い漢文を受講者の理解に適すべく意を尽くし、専門的立場から分り易く而も多くの資料を基に大切な情報を盛り込まれての講義は興味深く多くの示唆を与えて下さいます。このように先生の人徳・力量は受講者の意欲向上の大きな原動力であります。加えて、この講座を通して私どもに国家・社会・人生・自然への心を啓いて下さる言わば水脈であると思います。

片山先生が、この講座にお運び下さる限り、私も研鑽を怠らぬよう、努めて出席し、先生から少しでも多くを学び、吸収し、摘みとって今後の人生を豊かなものにして参りたいと考えております。

自然観察会

ふる里の野山に想いを馳せて…

篠本テイ子

何年前からでしょうか。自然観察会に参加させて頂いて、諸先生方のご配慮とご指導を頂いて参りました。私のふる里は、山形県の庄内地方で、長い冬が終り春が訪れますと、一斉に春の息吹きが始まります。桜、桃、あんずと、皆一度に花開き、雨段を織りなして、それは見事です。野の花も開き始め、其の中でも、一番印象に残って美しいと思った草花は、可憐に咲く、カタクリと二輪草でした。雑木林の傾斜地に一面のカタクリが、少しの風にも花をゆらして咲いている姿は、何とも言えない美しさでした。又二輪草は少し平地の木立の下に、一面に白い絨毯を敷きつめた様に咲いているのが、今でも目に焼きついております。こんなふる里の想い出がありますので、千葉の泉公園にカタクリの群生地があると聞いて、一度行って見たいと思っておりました。今年度の計画に、春は泉公園となっており楽しみにして居りましたが、雨で中止となりがっかりして居りました。秋に再び泉公園に行く事となりました。案内図を頂いて見ますと、とても広い公園で、自然を其のまゝ残そうと作られた自然公園との事でした。短時間では到底廻り切れないとの事で、取敢えず、珍らしいトリカブトの花の咲いている所に案内して下さいました。私は初めて見る花です。紫のきれいな花、皆「わあっ」と歓声をあげました。こんなきれいな花が、人をも殺す猛毒をもっているとは思われませんでした。そこに行く道に、ドングリが砂利をばら播いた様に可愛らしく落ちており、サザンカも今が見頃でした。色々な木々が、紅葉あり、又赤い実をつけており、生憎の雨の中でしたが、濡れた落葉を踏んで坂をくだって行くと、広い菖蒲田があり、其の先の雑木林の傾斜地がカタクリの群生地との事。今は姿はありません。春には他にも色々の、野の花が咲くとの事でした。春を楽しみにして、次の目的地の加曽利貝塚へと向いました。

草木の名前は、仲々覚えられません。何度も根本先生にお聞きする始末で、申し訳ない思いでした。全部とはいきませんが、覚えたら楽しいと思いますが?。これからも会に参加させて頂き、其の都度だけでも、ふれあいが出来たらと思っております。山野草は、自然にあってこそ美しいものです。自分の足で歩いて、野草に会いに行きましょう。

陶芸教室

初めての陶芸教室

瓜畑貞子

親しい方からのお誘いで参加する事になった主催事業の陶芸教室第一回がH3.5.7スタートいたしました。八幡公民館としては窯の設備がなかった為、初めての講座ということで館長さんはじめ先生方のお喜びも一入でございました。講師には市原在住の新進作家根本正男先生。誠に爽やかで温厚なお人柄、芸術家特有と聴いている気難しい雰囲気等どこにもなく終始和やかな半年間でございました。

文 化 祭 所 感

田 中 政 信

8月より準備に入った八幡公民館文化祭もテーマ『みんなで造ろう文化と友情の輪』という主旨のもとに、平成3年11月2日、3日と、私達の待ちに待った文化祭を迎えました。両日とも、多数の地域住民の皆様にお越し頂きまして、誠に有り難うございました。

初日は、実行委員及びお手伝い頂いた関係サークル代表の方々の御協力と元吉館長はじめ職員の皆様の御指導のもとに、『生け花』『書道』「俳句』『煎茶』『和裁』『工作教室』『編み物』『手芸』『洋裁』『陶芸』等、一年間の素晴らしい研修作品をずらりと展示致しました。どの作品を見ても、「プロ」を凌ぐ程の出来栄えで、目を見張る作品揃いでした。これも、日頃の講師による御指導と各サークル会員の皆様の御努力が、この様な作品の1つ1つの結果として現れたのだと信じて止みません。

最終日は、『体育室』に於いては、武道の発表及び、「ダンス」部門の、華麗にして生き生きとした成果発表が展開されました。特に、模擬店では、料理サークルの皆様に入念な味付けをしていただき、おいしいもの揃いで大繁盛となり、おいでいただいた皆様の舌を満喫させた事でしょう。

「講堂」におきましては、開会式から始まり、『演奏』『着付け』『詩吟』『民謡』『民踊』『学習発表』、中でも今年は、球技部門より卓球愛好会が『カラオケ』を披露し楽しい催しとなった。また、進行もなかなか頑張りをみせ、観客の目を耳を舞台に集中させた事と思われます。

皆様の御推薦を頂き、日頃の御恩返しも兼ね、私達の文化祭を盛り上げようと決意し、実行委員長を引き受けさせて頂きました。そして、楽しい雰囲気の中で、数多くの観客の皆様が喜んで下さっている姿を見て、来年の文化祭をもっともっと明るく、面白く、市原の名物催しとなる様、勉強していきたいと感じました。

何と申しましても、公民館は社会教育の場です。健康的な人造りを目指して、これからも各サークルの皆様の助けを借りながら、一層励む決意でございます。また、文化祭が盛大に終了出来ました事は、関係各位の御協力、御支援の賜物と感謝致します。

最後になりましたが、各サークル会員皆様方の御発展と御健康を祈念致し、反省会の御意見を大切にして、来年度の文化祭の楽しい夢を見たいと存じます。

サークル

（平成3度分）

№		サークル名	№		サークル名	№		サークル名
1	編物	たんぽぽ	18	洋裁	ひまわり	35	美術	日本画
2		美幸会（初）	19	和裁	もみじ	36		美術教室
3		すずらん	20		大来会	37		彩紅会
4		手編みヴォーグ	21	生花	なでしこ	38		風雅教室
5		あやめ	22		青年生花	39	着付	着付教室
6		美幸会	23		しらゆり会	40		雅
7		ベルアミサークル	24		婦人生花	41	詩吟・謡曲	国仁会
8	手芸	手作りの会	25	茶道	あけぼの	42		さつき会
9		和紙ちぎり絵	26		八木会	43		睦会
10		くみひも	27		深久会	44		翠謡会
11		木喰虫	28		煎茶（一）	45	音楽	女声コーラス
12		ビーチ	29		煎茶（二）	46		民謡教室
13			30	書道	墨瑞	47		おこと教室
14		ラタン教室	31		かな書道	48		青少年おことサークル
15	洋裁	すみれ	32		書道（一）	49		市原市民ばんど
16		白ゆり	33		書道（二）	50		市原アコーディオンサークル
17		市原学習会	34	美術	パステル教室	51		わらび会

№	サークル名		№	サークル名		№	サークル名	
52	音楽	さくら（琴）	70	料理	フラワー教理	88	バレーボール	O．B．B．会
53	舞踊	上総やよい会	71	料理	若葉料理	89	バレーボール	若宮レディース
54	舞踊	八幡民踊会	72	料理	さくら料理教室	90	バレーボール	いしずか
55	舞踊	萌木会	73	料理	市原料理	91	バレーボール	わかみやクラブ
56	舞踊	華の会	74	料理	八幡料理教室	92	バレーボール	D．V．B．C
57	ダンス	宇宙	75	その他	学友会	93	バドミントン	ファミリークラブ
58	ダンス	市原ファミリースクウェアーズ	76	その他	ひばり読書会	94	バドミントン	市原ジュニアバドミントンクラブ
59	ダンス	ラウンドダンス市原	77	その他	女性囲碁碁友会	95	バドミントン	八幡バドミントンクラブ
60	ダンス	市原リシアルダンスサークル	78	その他	新生会	96	バドミントン	光バドミントンクラブ
61	ダンス	ラウンドダンス・エイトワン	79	その他	このゆびとまれ	97	卓球	市原卓球愛好会
62	ダンス	スポーツダンス研究会	80	その他	千葉友の会	98	卓球	白球会
63	体操	健康美容体操	81	その他	中国語教室	99	卓球	オレンジ
64	体操	健康体操	82	その他	ちびっこクラブ	100	卓球	活きいき卓球
65	体操	八幡リズム体操	83	その他	幼児サークル	101	卓球	かよう会
66	体操	ヨーガ八幡	84	その他	根の会	102	卓球	なのはな
67	体操	気功会	85	その他	英会話サークル	103	卓球	市原八幡スポーツ少年団
68	料理	ヘルスクッキング	86	その他	ちちの木会	104	バスケット	市原クラブ
69	料理	白百合クッキング	87	その他	秋桜	105	バスケット	スターダスト

№1　1　サークル名　たんぽぽ
2　講　　師　松井悦子先生　　代表者名　清水　貴子　　電話４１－０７４３
3　活動内容　手あみ

№2　1　サークル名　美幸会
2　講　　師　斉藤幸子先生　　代表者名　田口　寿恵　　電話４３－０６７８
3　活動内容
基礎を大切にし応用のきく手編みを楽しむ。
今年度はスーツの大作も出来ました。

№3　1　サークル名　すゞらん
2　講　　師　田中芳江先生　　代表者名　斉藤　政江　　電話４１－３８９４
3　活動内容
若い人たちと和気あいあい先生の指導により製図、編み方、小物アクセサリーなどを作っています。来年の文化祭は、頑張りましょう。と話しています。皆さんも、ぜひ入会してください。

№4　1　サークル名　手あみヴォーグ
2　講　　師　田村民子先生　　代表者名　斉藤　静子　　電話４１－８４２８
3　活動内容
一針一針手を動かしてあんでいくセーター、衿ぐり袖ぐりの丸味も思いのまゝ、ヴォーグメジャーを使用して減目増目をします。思いのまゝの作品が出来ます。どうぞ皆さん、お気軽に入会して下さい。

№5　1　サークル名　あやめ
2　講　　師　田中芳江先生　　代表者名　矢向　節子　　電話４１－５６５５
3　活動内容
手あみ

№6　1　サークル名　美幸会（初級）
2　講　　師　斉藤幸子先生　　代表者名　大根　かね　　電話４１－１６２０
3　活動内容　手編み
古い毛糸をいかして作品を作り、楽しく和気あいあい学んでやっています。

№7　1　サークル名　　ベルサークル

　　2　講　　師　　杉木公子先生　　代表者名　川上　敬子　　電話41－0753

　　3　活動内容

　　　手編み全般の作品作り

№8　1　サークル名　　手作りの会

　　2　講　　師　　なし　　代表者名　白土　貞子　　電話43－0734

　　3　活動内容

　　　手作りを通して会員相互の親睦を計る。

№9　1　サークル名　　和紙ちぎり絵

　　2　講　　師　　寺田揚子先生　　代表者名　神山多美子　　電話41－1554

　　3　活動内容

　　　このちぎり絵教室は花を題材にした女性の方の身近なよりよい勉強と思います。お陰様でこれ迄にも多くの方が見え、現在も多勢の人達が楽しく勉強しています。これからもより多くの方々との出会いを大切に一生懸命頑張ってまいりたいと思います。

№10　1　サークル名　　くみひも

　　2　講　　師　　松川とも枝先生　　代表者名　戸谷富美子　　電話43－4374

　　3　活動内容

　　　ひもを組む。

　　　伝統のひもを利用し、たのしいアクセサリーなどを作り、親睦をはかる。

№11　1　サークル名　　木喰虫

　　2　講　　師　　堀田笙子先生　　代表者名　小出　裕　　電話74－9327

　　3　活動内容

　　　木彫、毎月第1、第3（火曜日）9：00～13：00まで木彫りにてお盆、茶托、鏡文箱、マガジンラック、色紙額、ティッシュボックス、帽子掛、その他身近なものを楽しみながら、気長に彫っています。毎年の公民館文化祭にむけて大作が出来る様頑張っております。

№12　1　サークル名　　ビーチ

　　2　講　　師　　牧とし子先生　　代表者名　市川　奈奈　　電話43－5150

　　3　活動内容　　紙ねんど人形（ロマンドール）

　　　空ビンの利用で人形や置物などを作り、壁飾りや小物入れ、ブローチを部屋や胸に飾り、女性の楽しい想像から生まれる豊かな感性をもとに、みんなで大切な時間を共に過します。みなさんも御参加下さい。

№14　1　サークル名　　ラタン教室

　　2　講　　師　　斉藤いつ子先生　　代表者名　宮田さき子　　電話41－3792

　　3　活動内容

　　　優しい先生の指導のもとで、いろいろな籐の糸を使い、人形、鉢カバー、壁かけ等、さまざまな作品を編んでいます。手作りの物で、身の回りを暖かくしたいと思っています。入会はいつでも良いので一緒にやってみたい方はどうぞお待ちしています。

№15　1　サークル名　　すみれ

　　2　講　　師　　松浦征子先生　　代表者名　時田　愛子　　電話21－5230

　　3　活動内容

　　　松浦先生とアシスタントの国原先生とにフレンドリーに洋裁を教えて頂いて、メンバーが家族的で和気あいあいの学習をしております。おかげで友達ができ、その上流行の手作りの洋服を着ることに一種の誇りをもっております。

№16　1　サークル名　　白ゆり洋裁

　　2　講　　師　　小沢よし子先生　　代表者名　丹下　和子　　電話41－8296

　　3　活動内容

　　　洋裁の基本習得と技術向上を目的とし、友人との出会いを大切に、人間性豊かなサークル活動を目ざしていきたい。

№17　1　サークル名　　市原学習会（洋裁）

　　2　講　　師　　松浦征子先生　　代表者名　増山　幸子　　電話41－5155

　　3　活動内容

　　　誰でも、どこでも、学べる通信教育で、生涯学習として文部省認定の学習内容を、年令、性別を問わず学べます。洋裁だけでなく、料理、保育、機械、リフォームなど各方面の学習ができますので、みなさんも気軽に参加してください。

№18　1　サークル名　　ひまわり

　　2　講　　師　　松浦征子先生　　代表者名　斉藤百合子　　電話43－5197

　　3　活動内容

　　　洋裁及び手芸を通して、技術の向上、又、交流を深め、年一度の日帰り旅行等を楽しんでおります。手作りの好きな仲間達の楽しい集いです。

№19　1　サークル名　　和裁もみじ

　　2　講　　師　　桜井ふみ子先生　　代表者名　福間美奈子　　電話41－0999

　　3　活動内容　　和裁の裁ちかた仕立て方

№20　1　サークル名　大衣会
2　講師　西川代志子先生　代表者名　藤田　房江　電話43－7081
3　活動内容
和服離れの折、日本の伝統衣服を、広く伝え、作る喜び着る喜びを味わい、基礎縫いから単衣・あわせ・コート・リフォーム等、和服全般の縫い方・和服の手入れ、着用の常識等学びます。

№21　1　サークル名　なでしこ（生花）
2　講師　田中京華先生　代表者名　斉藤　和枝　電話36－2169
3　活動内容
家の中にお花があったらといろいろ空想し習い始めた。美風流生花「実力」が付くように、指導してくれます。いつでも入部ができますので皆様も如何でしょうか。

№22　1　サークル名　青年生花
2　講師　松原博水先生　代表者名　小牧るり子　電話36－1207
3　活動内容
文化祭への年一回の出品と先生の華展の出品です。お勤め帰りの人が生活に張りと潤いを求めてやっております。いつでも入会できますのでお待ちしております。

№23　1　サークル名　しらゆり会
2　講師　寺崎寿真先生　代表者名　田隈　富子　電話41－5791
3　活動内容
花のある明るい家庭を作る若い方々と経験豊かな母様方と一緒に楽しく勉強しております。初めての方も気軽にお立寄り下さい。

№24　1　サークル名　婦人生花
2　講師　松原博水先生　代表者名　斉藤美代子　電話41－3234
3　活動内容
地区の文化の交流と人間関係を大切にこんにちまいりました。

№25　1　サークル名　あけぼの
2　講師　山口宗浦先生　代表者名　篠崎　玲子　電話74－7584
3　活動内容
裏千家の茶道の基本を学ぶ事により、精神の修業を計り、各人の教養を高め調和をはかっています。

№26　1　サークル名　八水会
2　講師　松村美枝子先生　代表者名　国吉　俊子　電話41－7669
3　活動内容
お茶に興味のある方達に、広くのんびりと楽しんでおけいこの出来る教室としてやっております。いつでも気軽にお立寄り下さい。

№27　1　サークル名　深久会
2　講師　深見　宗久先生　代表者名　小林美代子　電話41－1958
3　活動内容
客をもてなす心得、菓子の選び方、茶花について、焼物について、床の拝見、お掛物のはなし、道具の観賞等は、お点前に関しては、お薄、濃茶、つゞきお薄、包みぶくさ、一客一亭、自服点前、茶　かざり等、魅力あるサークル作りを目指しております。

№28　1　サークル名　煎茶（一）
2　講師　永田ヒサエ先生　代表者名　細井けい子　電話22－0797
3　活動内容
煎茶を通して地域の文化を広め、又人の和をつくり、文化祭等にも参加する。

№29　1　サークル名　煎茶（二）
2　講師　永田ヒサエ先生　代表者名　北原資奈子　電話41－9516
3　活動内容
煎茶を通して地域の文化を広め、又人の和をつくり、文化祭等にも参加する。

№30　1　サークル名　墨瑶
2　講師　安藤くに子先生　代表者名　今井ひで子　電話43－0146
3　活動内容
現在月3回、木曜日の午前中、書に親しみ毛筆上達のため、楽しく練習を行っております。これからも、書道の練習を通じて、皆さんの和を大切に、少しでも、上達できる様に頑張りたいと思います。新加入者を歓迎致します。

№31　1　サークル名　かな書道
2　講師　安藤秀峰先生　代表者名　山口　郁子　電話41－8297
3　活動内容
仮名の基礎から始めて、四季折々の俳句、短歌を書きながら、美しい曲線、力強さ、躍動感のある文字、作品作りを学んでいます。又日常役立つ文字の練習もあり、「和」を大切に、一歩づつ「書芸」に近づきたいと頑張っています。会員を募集中です。

№32　1　サークル名　　書道　（一）
　　2　講　　　師　　薮田麗香先生　　　代表者名　福嶋　弘子　　電話４３－８５６４
　　3　活動内容
　　　草行楷書の練習

№33　1　サークル名　　書道　（二）
　　2　講　　　師　　河津武夫先生　　　代表者名　木村桂三郎　　電話４１－１８３９
　　3　活動内容
　　机に向い座った位置、姿勢等の持ち方角度、基礎的な事から先生の直筆による手本漢字千字文を主体として誰にも分かりやすい書体楷書を月２回習っています。希望により行書又は細字のお手本を戴き習えます。練習直筆手本月に６枚位戴けます。文化祭全員展示書初掲示、生涯学習として楽しみながら学習しています。

№34　1　サークル名　　パステル教室
　　2　講　　　師　　福原照夫先生　　　代表者名　山内　祐子　　電話 勤務先 ２２－１７２３
　　3　活動内容　　静物や風景画の製作　　　　　　　　　　　　自宅 ４３－７８７０

№35　1　サークル名　　日本画
　　2　講　　　師　　仲林敏次先生　　　代表者名　成清　時正　　電話７４－７２０８
　　3　活動内容　　日本画の製作

№36　1　サークル名　　八幡美術教室
　　2　講　　　師　　在津義人先生　　　代表者名　堀川　正夫　　電話７４－７２７５
　　3　活動内容
　　教室では主に静物の油絵を描いています。自由に自分を主張することをモットーに楽しく絵を描ける。誰でも気軽に参加できるサークルです。新加入者を歓迎します。

№37　1　サークル名　　彩紅会
　　2　講　　　師　　岡村順一先生　　　代表者名　伊東　寨子　　電話４１－６４９６
　　3　活動内容
　　週に一度、油絵を描いています。静物画が主ですが、皆夢中で口も聞かずに絵筆を動かしています。無心になれる貴重なひとときです。これからも自らの個性を大切に、自分なりの表現方法を、更に深く追求していきたいと思います。

№38　1　サークル名　　風雅教室
　　　講　　　師　　大木五大夫先生　　代表者名　吉川美代子　　電話７４－２２７５

　　3　活動内容
　　書・画・俳句三昧一体の境地を一定の空間に創作する事に依り風雅の心を育て文化的教養の向上に努める。

№39　1　サークル名　　着付教室
　　2　講　　　師　　鈴木文子先生　　　代表者名　長谷川芳江　　電話４１－９４８１
　　3　活動内容
　　道具を使わずに手結びで着付ける方法を習っています。着付けをしながら人との和をだいじにし、和気相々となごやかにやっていきたいと思います。

№40　1　サークル名　　雅
　　2　講　　　師　　芳口千恵先生　　　代表者名　高橋　秀子　　電話４１－６６７５
　　3　活動内容
　　「類は友を呼ぶ」と言う言葉がありますが、着物好きの友と出合い着付サークルを行ってまいりました。年一度の文化祭での着付ショー、織元への見学と充実した活動です。
今後は視力障害者の方に教え、伝統ある着付を娘に伝えたいと願っています。

№41　1　サークル名　　国仁会八幡教室
　　2　講　　　師　　鷲見国仁先生　　　代表者名　中久喜ひろ子　電話７４－３６３２
　　3　活動内容　　詩吟及び吟舞の研修。（日本国風流）
　　年１回づつ国仁会教室合同の研修会。日本国風流千葉県研修会及び国風流横浜大会等に参加。其の他市の文化祭に参加。

№42　1　サークル名　　さつき会
　　2　講　　　師　　　　　　　　　　　代表者名　新田　正之　　電話４１－８７５４
　　3　活動内容
　　謡曲は幽玄と一口に言われますが、幽玄とは何か、どうすれば実体験として味わえるか、一曲を何回も繰返して謡い、話し合っています。小鼓も同様に、古典的な楽器を楽しむと同時に、間（ま）を学んでいます。

№43　1　サークル名　　詩吟サークル　睦会
　　2　講　　　師　　河合登志風先生　　代表者名　太田　正則　　電話３６－２５４１
　　3　活動内容
　　日本の伝統芸能である詩吟を通して、心身の健康をはかり、又会員の親睦を深めるために、小宴会、室外での練習などを行なっています。入会は随時ですので、お気軽に参加下さい。

№44 1 サークル名　翠謡会
2 講　師　角一平先生　代表者名　松崎　勇　電話43−3767
3 活動内容
観世流謡曲（素謡）の会を毎月一回（第3日曜日）午後1時より5時迄、当館の和室にて開催しています。現在当会員数は、24名います。
目的、古典芸能の継承保存並びに、愛好者相互の親睦をもはかっています。

№45 1 サークル名　いちはら女声コーラス
2 講　師　金木哲先生　代表者名　大川和加子　電話43−3667
3 活動内容
歌うことの好きな仲間が、毎週火曜日コーラスをしています。お腹から声を出して歌うことは健康には大変良いそうです。そして気持も若々しいのです。「ご一緒に歌いませんか！」。歌の好きな方募集していますのでどうぞ。初めての方も歓迎します。

№46 1 サークル名　民謡教室
2 講　師　藤野謡村先生　代表者名　小沼　平見　電話41−4393
3 活動内容
地域の皆さんと民謡を楽しみながら普及と親睦を育てていき、地域住民の一人でも多くの人に民謡を楽しく唄ってもらいたいと思います。

№47 1 サークル名　婦人おこと教室
2 講　師　林美有記先生　代表者名　岸　絢子　電話43−6927
3 活動内容
初めての人も参加して和やかに一緒に稽古しています。
どなたでも気軽に弾けます。八幡公民館文化祭と市三曲に毎年出演しています。

№48 1 サークル名　青少年おこと教室
2 講　師　林美有記先生　代表者名　杉田　裕子　電話36−6759
3 活動内容
日本人の心である琴の音を青少年の人にも理解して楽しんで弾いているグループです。琴は教室に用意してありますので誰でも参加出来ます。年一度の公民館文化祭に向けて和かに練習しています。

№49 1 サークル名　市原市民ばんど
2 講　師　代表者名　田中　雅彦　電話62−8228
3 活動内容

臨海まつり、体育祭、文化祭、成人式等での演奏。
養護施設等で演奏。

№50 1 サークル名　市原アコーディオンサークル
2 講　師　山岡秀明先生　代表者名　角田　昭一　電話74−8751
昼23−9802
3 活動内容
アコーディオンの技能を習得し、これを児童又は地域の文化向上に寄与する。

№51 1 サークル名　わらび会
2 講　師　藤野裕生、鈴木時良先生　代表者名　藤野久子　電話41−6431
3 活動内容
月二回、第2、第4の木曜午后6時〜8時50分まで民謡の練習。

№52 1 サークル名　さくら（琴）
2 講　師　池田昭波桑先生　代表者名　長谷川美智子　電話22−1844
3 活動内容
毎週土曜日、午後1：00〜5：00まで、第二和室にて。
満三才より、初めての方から以前習った事のある方まで、おけいこを楽しんでいます。2年に一度ぐらい市原市文化祭に参加しています。

№53 1 サークル会　上総やよい会
2 講　師　関谷きよ先生　代表者名　加瀬井勝子　電話41−0946
3 活動内容　民踊

№54 1 サークル名　八幡民踊会
2 講　師　藤方希代鼓先生　代表者名　西口奈津子　電話61−0199
3 活動内容
市原市各行事に出場、ボランティアで頼まれて参加等進んで協力したいと思います。

№55 1 サークル名　萌木会
2 講　師　鈴木つね子先生　代表者名　木島とよ子　電話41−0415
3 活動内容　日本舞踊
日頃は多忙な人達ですが、優雅な音色に合わせての日本古来の芸術に触れる事の喜びに、一同年を忘れて和やかな雰囲気で過させていたゞいています。

№56 1 サークル名　華の会
2 講　　師　藤見華香先生　代表者名　宮田えい子　電話74－6584
3 活動内容
日舞に親しみ、かつ技術の向上を計り、初級・中級・上級のコースに分けて、みんなでワキアイアイと楽しく活動しています。

№57 1 サークル名　宇宙
2 講　　師　大野桂子先生　代表者名　中西　正子　電話41－9760
3 活動内容
若石健康法、気功など中国医学の健康法を取り入れ、呼吸法も覚えながら、運動をしています。「自分の健康は自分で守る」をめざして、頑張っております。明るく楽しいサークルなので、口コミで会員が集まり、友達の輪が大きくなっています。

№58 1 サークル名　市原ファミリースクエアーズ
2 講　　師　古川晴彦先生　代表者名　泉水　寛夫　電話61－0205
3 活動内容
アメリカで発達したフォークダンスであるスクエアダンスを楽しむことを通じ、老若男女だれもが友達になれることが特徴です。スクエアダンスは基本的な動作を初心者のための講習会でマスターしてもらっています。これで一生楽しめます。

№59 1 サークル名　ラウンドダンス市原
2 講　　師　塩川喜美代先生　代表者名　加勢のり子　電話43－3428
3 活動内容
ラウンドダンスおよびフォークダンスの基礎知識と技能を習得しつつ、人格の向上につとめ、人と人との和を深め、豊かな人間性を育てること。

№60 1 サークル名　市原ソシアルダンス
2 講　　師　小川武久先生　代表者名　伊藤　勝彦　電話98－0171
3 活動内容
LET'S DANCE、ジルバやタンゴ、ワルツにルンバ、皆さん楽しく踊ってみたくありませんか。当サークルは毎週火曜日夜7時から「明るく楽しくカッコよく」をモットーに、楽しく生き生きしたダンスサークルです。

№61 1 サークル名　ラウンドダンス　エイトワン
2 講　　師　市後信子先生、八木陽子先生　代表者名　加茂川直子　電話41－1281
3 活動内容

誰にでも出来て、ワルツ、ルンバ、チャチャ、のリズムにのって、いい汗かいて、年何回の会食、パーティで、コミュニケーション作り、とても楽しいサークルです。週1回何か軽い運動をしてみたいと思う方、1度見学にいらっしゃいませんか。

№62 1 サークル名　スポーツダンス研究会
2 講　　師　渡辺英美先生　代表者名　黒沢　武夫　電話21－7772
3 活動内容
10ダンスのマスター

№63 1 サークル名　健康美容体操
2 講　　師　扇谷ミユキ先生　代表者名　林　千恵子　電話43－2407
3 活動内容
健康維持の為の体操

№64 1 サークル名　健康体操
2 講　　師　板橋裕一先生　代表者名　溝上クニ子　電話41－3809
3 活動内容
健康体操、操体法を無理なく行う事で日常の健康を維持、増進、管理をする事を目的としたサークル活動です。ゆったりとした気持で参加している内にその良さが解ってくる健康体操です。年令も関係無く参加できます。是非一度御参加してみて下さい。

№65 1 サークル名　八幡リズム体操
2 講　　師　太田和子先生　代表者名　三宅　幸子　電話41－6640
3 活動内容
リズム体操

№66 1 サークル名　ヨーガ　八幡
2 講　　師　平泉長子先生　代表者名　藤田　礼子　電話43－4035
3 活動内容
健康維持増進の為、運動不足を解消して若さを保つためできるだけ継続を目標にしています。

№67 1 サークル名　気功会
2 講　　師　若佐重雄先生　代表者名　赤坂きみ子　電話41－2249
3 活動内容
私達は、気について、正しい呼吸法、リラクゼーション、基本的な各種操体法について

背推（姿勢）と健康について、いつでも好きな時、少しの時間でも出来る。気功法について実践し、会員相互の親睦を目的とする会であります。

№68　1　サークル名　ヘルスクッキング
2　講　師　寺門明子先生　代表者名　岡庭実千代　電話７４－２０９１
3　活動内容
ヘルスクッキングは、毎月第１、第３木曜日１８：００～より行なわれる夜間サークルです。現在メンバーは、女性ばかりでなく、男性の方もおります。今年の文化祭では、模擬店で見かけた人もいらっしゃると思います。興味のある人はぜひ一度見に来て下さい。

№69　1　サークル名　白百合クッキング
2　講　師　田中憲子先生　代表者名　池迫　了子　電話２１－７５５２
3　活動内容
和風、中華、西洋料理、お菓子作りを、楽しく実習しています。
手近な材料で安く、家庭でもすぐ役立ちます。

№70　1　サークル名　フラワー料理教室
2　講　師　寺門明子先生　代表者名　鈴木クニ子　電話４１－３８５７
3　活動内容
毎月１回八幡公民館で寺門先生をお招きして、料理の実習をしています。また市主催の文化祭にも参加して好評を受けております。今後は高令者社会の進む中で、家庭で簡単にできる料理を勉強したいと考えております。

№71　1　サークル名　若葉料理
2　講　師　上田悦子先生　代表者名　中西　鈴子　電話２１－７１２６
3　活動内容
バランスのとれた食生活を考え調理実習を行なう。おいしい物をたくさん作り、食べたいと思います。

№72　1　サークル名　さくら料理教室
2　講　師　寺門明子先生　代表者名　砂　慶子先生　電話４１－４６９０
3　活動内容
家庭料理を中心に、ちょっとした工夫でおもてなしにもなるような、勉強をしています。材料の切り方、盛りつけで同じ料理が生きたり、死んだりするのはとっても楽しい事です。今年は懐石料理の勉強ができたらと思っています。

№73　1　サークル名　市原料理
2　講　師　寺門明子先生　代表者名　篠田きよ子　電話４１－１７０４
3　活動内容
会員相互の親睦を計り、料理の技術を学ぶと共に、国際色豊かな市原料理です。

№74　1　サークル名　八幡料理
2　講　師　寺門明子先生　代表者名　永島　和子　電話４１－７３７３
3　活動内容
四季折々その基礎を学び、会員相互の親睦を計り、楽しく料理を作っています。

№75　1　サークル名　学友会
2　講　師　無　代表者名　白井　照　電話４１－１０６７
3　活動内容
高齢者で生涯学習を実践する同志的団体で年間行事予定を基に学習に、親睦に励む、楽しい団体で１０年余りの歴史があります。

№76　1　サークル名　ひばり読書会
2　講　師　代表者名　磯部紀代子　電話４１－６４９９
3　活動内容
課題本を決め、同じ本を１０冊県立図書館からお借りして全ての人が読み、読後感を話し合います。雑談も時にはして和を保つ楽しい会ですので、若い人の参加をお待ちしております。

№77　1　サークル名　碁友会（女性囲碁）
2　講　師　小島致司先生　代表者名　田中　信子　電話６２－０８１１
3　活動内容
老化を防ぎ乍ら棋力向上を目指しています。

№78　1　サークル名　市原断酒新生会
2　講　師　松本忠男先生　代表者名　日下　勝　電話２２－７５２８
3　活動内容
酒害者同士が、お互いに助け合い、協力して、例会出席により、体験発表して、断酒継続に、結びつくようにする活動です。

№79　1　サークル名　このゆびとまれ
2　講　師　無　代表者名　阿南　信広　電話７４－１７６２

3　活動内容

心豊かな人間らしい輝きを求めて、合唱や朗読、おどりや太鼓、スポーツや学習など、会員の要求で次々ととりくんできました。特定の講師はいませんが、強力な周囲の援助で、舞台発表では感動を呼んでいます。お気軽に覗いてみませんか？

№80　1　サークル名　千葉友の会
2　講　師　　代表者名　安藤　勝子　電話41−8577
3　活動内容

衣食住、住、家計の中から毎年テーマを決めて勉強しています。今年は食と家計その他に環境の事についても話し合っています。毎年11月下旬に食費、予算の立て方のお話などを入れた、家事家計講習会を開いています。

№81　1　サークル名　中国語教室
2　講　師　垣花和美先生　代表者名　相川　松枝　電話21−3967
3　活動内容

中国語の勉強をしながら中国文化にふれ生涯学習の場とし地域社会の交流をはかることを目的とする。

№82　1　サークル名　「ちびっこクラブ」
2　講　師　川嶋えい子・森田文子先生　代表者名　平野美津子　電話41−6790
3　活動内容

入園前の幼児が、遊びの中で、集団生活に慣れ親しむことを目的とし、歌・紙芝居、せいさく等行い、お母さん同志の交流も深められる様、運動会、クリスマス会などの行事も行う。

№83　1　サークル名　幼児サークル
2　講　師　森田文子先生　代表者名　平野美津子　電話41−6790
3　活動内容

幼稚園入園前の子供達が集まって楽しく遊べれたらと始めたサークルです。折り紙、お絵かき、唄、から始まって運動会、お遊技。泣いたり笑ったり元気に遊んでます。お母さん達も参加して子供を中心に子供の事を考えてやっていくサークルです。

№84　1　サークル名　市原市手話サークル　根の会
2　講　師　栗原武男先生　代表者名　薮谷　洋子　電話0438 63−2793
3　活動内容

聴覚障害者と健聴者が交流しながら福祉の向上をはかる目的で活動しています。そしてコミュニケーションをスムーズにする為に手話を勉強しています。ろうあ協会の行事にも参加して楽しく交流を深めています。

№85　1　サークル名　英会話　サークル
2　講　師　川端千鶴先生　代表者名　谷　元吉　電話23−6527
3　活動内容

海外旅行に行っても、何んとか通じる英語をと、バイリンガルの女子大生に講師になって頂いて、毎週水曜日の夜、楽しくやってます。なかなかうまく話せませんが、気長にやっていこうと思っています。

№86　1　サークル名　ちちの木会
2　講　師　田中喜作先生　代表者名　白井　敬子　電話22−6063
3　活動内容　俳句創作

№87　1　サークル名　秋桜（バレーボール）
2　講　師　樋口静枝先生　代表者名　近江真理子　電話41−7618
3　活動内容

全員出席を目標とし、基礎をかため、技術の向上をはかり、できるだけ多くの試合に参加したいと思っています。

№88　1　サークル名　O．B．B会
2　講　師　山越安行先生　代表者名　宮越　綾子　電話41−8568
3　活動内容　ワンバンドバレーボール

№89　1　サークル名　若宮レディーズ
2　講　師　無　代表者名　佐藤　恵子　電話43−8735
3　活動内容

チームの輪と健康増進にと心身共に前進していく和のチームです。

№90　1　サークル名　いしづか
2　講　師　草野　弘子　代表者名　大塚　一枝　電話22−1936
3　活動内容

バレーボール

№91　1　サークル名　わかみやクラブ
2　講　師　　代表者名　長塚　千鶴　電話41−5758

3　活動内容

バレーボール大好き人間が集まって、美容と健康そして親睦を兼ねて、練習してます。試合成績にはムラがありますが、今日よりは明日と、頑張って楽しくやってます。バレーボール好きな方、ぜひ一緒に汗を流してみませんか。お待ちしてます。

№92　1　サークル名　DVBC
2　講　師　無　　代表者名　佐田　正　電話24－1211
3　活動内容

バレーボール、バスケットボールの試合に向けての実践練習。

№93　1　サークル名　ファミリークラブ
2　講　師　　代表者名　植草　夏江　電話41－0601
3　活動内容

サークルを通じ、健康を大切に、親睦を深めバドミントン競技を楽しんでいます。

№94　1　サークル名　市原ジュニア・バドミントン・クラブ
2　講　師　小柳　博先生　代表者名　小柳　博　電話61－1399
3　活動内容

小中学生を中心にバドミントンを通して、技術、体力、そして負けずぎらいの子を育てる。今年の目標は、男女共県大会でトップをめざして大きく羽ばたく事です。

№95　1　サークル名　八幡バドミントン・クラブ
2　講　師　小柳　博先生　代表者名　小柳　博　電話61－1399
3　活動内容

バドミントン愛好者による競技力向上と健康スポーツの相反する目的を持って、会員で日々努力し、親睦をめざしています。

№96　1　サークル名　光バドミントン・クラブ
2　講　師　菅野　章先生　代表者名　菅野　章　電話95－4203
3　活動内容

生涯スポーツとしてのバドミントン活動、技術レベル向上と妥協しない心を大事に1年、1ヶ月、1日、1日の元気活動です。

№97　1　サークル名　市原卓球愛好会
2　講　師　田中千秋先生　代表者名　田中　政信　電話75－1208
3　活動内容

当愛好会は老若男女、少年少女を問わず、初心者の方でも楽しく研修しています。また健康な心と体力づくりと卓球技術の研修に励んでいます。これが、仕事に、家庭づくりに役立つよう、温かい人と人の交流の場として生かしたいと思います。

№98　1　サークル名　白球会
2　講　師　オカモトタカオ先生　代表者名　モリウチススム　電話43－0064
3　活動内容

明るく楽しい卓球

№99　1　サークル名　オレンジ
2　講　師　無　　代表者名　福田　照美　電話43－4018
3　活動内容

卓球、講師のいない素人集団です。誰でも気軽に参加できます。体力づくり、ストレス解消に、楽しいサークル活動の輪に参加しませんか。

№100　1　サークル名　活きいき卓球クラブ
2　講　師　楠原　浩先生　代表者名　吉川　砂夫　電話41－0725
3　活動内容

体操テープで後は婦人中高年令者を対称として日本卓球協会のルールでラージボール専用として練習を行い、市・県・国の対外公式試合にも出場可能です。主体は楽しく行い、心身共の健全性を願っていて友和の心を養っています。

№101　1　サークル名　かよう会
2　講　師　樋口静枝コーチ　代表者名　佐野　敏子　電話43－3324
3　活動内容

毎月第2、3、4週の火曜日に初心者から上級者までいっしょに、コーチの細かい指導のもと、意欲的に活動しています。また市原市内の大会にも参加し、できるだけ多くの人が参加し、前年度より良い成績がとれることを目標としています。

№102　1　サークル名　なのはな
2　講　師　無　　代表者名　尾上　衣子　電話41－1831
3　活動内容

毎週水曜日、日頃の運動不足とストレス解消に役に立ちます。試合などには参加していませんので、ちょっぴり厳しさに欠けていますが、皆マイペースでやっています。
無理なく、長く続けていける楽しい会にしたいと思っています。

№103 1 サークル名　市原八幡スポーツ少年団

2 講　師　友田勝賀先生　代表者名　内藤　武男　電話６１－１９２９

3 活動内容

八幡中学校の生徒と中学出身のＯＢで、地域の卓球人口をふやすために週一回練習をしています。小学生で練習したい人がいたら声をかけて下さい。

№104 1 サークル名　市原クラブ

2 講　師　無　代表者名　土田　仁　電話７５－２４９３

3 活動内容

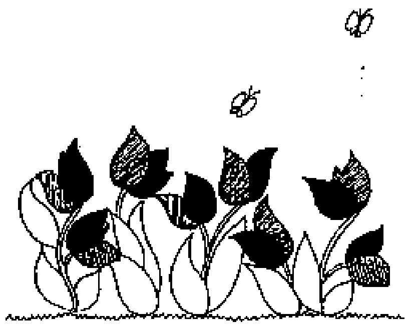
市原の№１を目指して毎週、練習していますので、よろしく。

№105 1 サークル名　スターダスト

2 講　師　松尾恵一朗先生　代表者名　内田　勝彦　電話２１－７７４７

3 活動内容

バスケットボールを通じて自己の向上と発展及び仲間の輪を広げる活動を中心とする。今年の目標は三部上場を目指す。



ひばり読書会

目　次

1 『髪の花』を読んで　吉永正子 …… 33

2 『大地の子』を読んで　野城千鶴 …… 33

3 優しい雨　松本尚子 …… 34

4 『掘り出された奈良の都』読後感　宮吉慶子 …… 34

5 『花ひらく、心を永遠（とわ）に』　西村妙子 …… 35

6 『大地の彼方で』を読んで　西村澄子 …… 35

7 『リプレイ』を読んで　直田精子 …… 36

8 わからなくていい話　佐藤禎子 …… 36

9 『掘り出された奈良の都』を読んで　小川光子 …… 37

10 森瑶子の世界へ　卜部恵美子 …… 37

11 「吉屋信子記念館」をたずねて　猪野春枝 …… 38

12 本性への響一『悪魔の飽食』を読んで　石橋みな子 …… 39

13 平成３年度読書グループ研修会に参加して　磯部紀代子 …… 40

o 読書会ノートから …… 40

o 学習日誌より …… 41

o ひばり読書会平成３年度課題本 …… 42

○ 編集後記 …… 43

初体験で粘土なるものゝ感触を手にいたしました時、まるで大きな岩にでも振り回されるかの如く、ただ板の上を転がるのみ。その粘土も一旦先生の手にかかるとまるで"生命"を得たかの様に鮮やかに手の中で弾み始めます。そして目を見張る"技"が私達の前に披露される訳です。

茶道の入口に立って20数年、その道具の魅力をなまじ数多く見ているせいか頭の中で描く自分の作品は、恐れ多くも楽、井戸、織部と作品がイメージされ、形成の段階で早くも打ちのめされる始末、これは天性のもの、センスの問題等と粘土の選択を間違えた事を悔いたり……。しかし、子供達が土いじりをしたり、どろんこに夢中になるが如く私をはじめ参加した15名は目を輝かせ乍ら、楽しげに2時間を過ごします。これ程陶芸が魅力のあるのは、人間の本性として土という自然なものへの憧れ、又人間本来の創造性が頭をもたげ夢中になるのではないでしょうか。

窯入れの時の心ときめく時間、又窯出しの時の緊張感。良い出来と喜ぶ人、ここをこうすれば良かったと笑う人。そのまゝ陶器の店の棚にならべても良い程の出来ばえの人、私の様に自己嫌悪に落ち込む人、夫々に又楽しいひとときなのです。私達の視界から遮断された窯の中、そこには汚れもなく、土と炎の芸術が繰り広げられているのです。

記念すべきサークル第I回が11月より誕生いたしました。性懲りもなく又、乏しい感性を再確認する為に、早速参加の欄に○印を付した次第です。

ワープロ教室

ワープロ教室に参加して

堤　恵津子

夫が一ヶ月以上の入院と決った時、寂しさを紛らす為、夜の自由な時間を前々からやりたいと思っていたワープロの勉強を始めようと機器を購入した。ひとつのことを気長にすることの好きな私は、毎晩説明書を見ながら年賀状、暑中見舞い、人名簿、プログラム等、打つようになった。でも正式に習っていないので、いつか機会があればワープロ教室に行って勉強したいと思っていた。6月20日付「いちはら広報」で受講生募集の欄を見た時「すぐに行こう」と決心をした。定員10名、週一回の開講で、暑中見舞いをイラスト入りで打つ勉強のために4回の受講ができました。第一回目「私にも出来るかしら？」中年になっての勉強は久しぶりのこと、不安と期待を胸に教室へ入った。

機種、名称、キーの打ち方等の説明から始められたが、機種は違っても少しワープロに慣れていた私にはとても判り易く楽しかった。初級ワープロ教室なので、やさしく丁寧に説明があり、判りにくいところでは先生が一人、一人親切に教えて下さった。

何の説明書もそうですが、詳しく書きすぎて判読できない場合が多いような気がします。その点、中吉先生の作られた説明書は簡単明瞭ですぐ理解できました。

実際にワープロを前に先生をすぐそばに勉強できることは本当に幸せでした。配置、変換には少し頭を使いましたが、初心者は遅くてもキーを打って出た文字をひとつ、ひとつ落ち着いて見て、次の

行動を起こすと、むやみにキーをポンポン打っていくよりは、表示された文字を正しく理解してワープロに慣れていく、そして面倒とか、むずかしいとか思う気持を抑えて根気強く打っていくうちに、いつか上達もあるのではないかと希望を持っている私です。

最終回にはイラストも上手に入った暑中見舞いが打てました。公民館のワープロ教室に参加して少し自信もつきました。これから益々発展していく社会にいろいろな面で順応していける人でありたいと思います。そして我が家のワープロが宝の持腐れとならないよう機会ある毎に活用するつもりです。

バドミントン教室

バドミントン講座に参加して

田辺啓江

市原市は市民スポーツとしてバドミントンがとても盛んで、県内・県外での活躍も素晴らしく、大きな実績を上げていると聞きます。

このたびは、その指導者・小柳諸師の指導を受ける機会に恵まれ、久し振りに「学ぶ」ことの素晴らしさを味わい、充実した数日を過ごすことができました。しかも、今回は主婦を対象とした講習会であったため、ためらいも少なく気軽に参加することができました。

とかくスポーツ講習会となりますと、青少年層を対象とするものが多い中、このような企画をしてくださいました公民館の方々には心からお礼を申し上げます。

さて、私は年数の上からは随分バドミントンとかかわってきたのですが、今回の講習において基礎技術から親切に指導していただき、これを繰り返し何度も練習しているうちに、バドミントンとはこんなに難しく奥が深いものなのかということを改めて認識いたしました。「たかがバドミントン、されどバドミントン」と言う訳です。これからも続けていくであろう私のバドミントン。ライフに大きなカンフル効果があったようです。

講習会は、初心者、経験者合わせて約15名の受講者でしたが、我流が身についてしまった自称経験者より、講師の指導を素直に受容できた初心者の方がその成果が大きかったように思います。公的なスポーツ講習会は強い選手を育成するものではないので、基礎をしっかり指導する今回の講習会のような内容でよいと思います。

そして、「市民スポーツの普及」の視点から、このような講習会を機会に多くの市民が気軽に公民館や運動公園などの体育施設を利用するようになり、健康増進と併せて市民間の交流が図っていけたら素晴らしいと思います。そのためには各地区にある公民館、運動施設などの運営・管理面のあり方も市民の利用形態や要望の変化に対応して見直し、改善していく努力が必要だと思います。

これらの施設に勤務する職員の方には日々多くのご苦労があろうと拝察しますが、市民の文化活動やスポーツ活動の拠点として期待されている施設なだけに、今後一層利用しやすい施設づくりに努力していただきたいと願っています。

『髪の花』を読んで

吉水正子

此の本は、或るお粗な精神病院を題材にしたもので、患者が病院から母に（といってもほとんどが、架空の母）に書き送った手紙の小説です。出来るかぎりの平常心をたもつ病院の内部、今も残っている患者と看護人の間のきびしい関係を中心に、手紙を書くことによって辛うじて、何かに耐えている様に思える。患者の中に、どれほど人間的に生きたいと願う深い心、自分の病気をどんなに、嫌悪しながらも人間の誇りを求めている人、患者の間の優しさと、嫉妬の交流等、病院も一つの社会の場であるんだなあ、と思う。

「正気になってから初めて太陽を浴びた。二月末の風は冷たいが、風を通して、太陽の光の一本一本が、温かく背に沁みるのが判る」体験にもとづいて、色々書かれているので、かなりの枚数を一気に読ませた本でした。（心を病む者の人間としての幸福は何か？）

「髪の花」は引き取り手がないために、全快しても、なお十数年を病院に隔離されている方々が、今多くいることと、その望みない生を社会に訴え、何らかの救済措置が、講ぜられることを祈って書きましたとの作者のことばです。

『大地の子』を読んで

野城千勛

体調をくずして洗濯、掃除を終えた後、横になっている時間が多かったお陰で、山崎豊子のこの大作と出合うことが出来た。

一人の孤児のたどった過酷な日々と、それに耐えぬいた主人公の強い精神力、強靭な身体にも感銘を受けると同時に、今でも僻地で教育も受けられず、働くことのみに生きている、多くの孤児が居る事を思うと心が痛む。丁度今もテレビで、肉親探しのニュースが流れているが、この様に日本に来られる孤児はまだ幸運な方で、この様な機会があることも知らずに、苦しい生活を送って居る孤児が大勢居る事実をこの本で知った。戦争の恐ろしさは勝ち負けで終るというものではなく、かけがえのない人生までも、破壊してしまう。こんな不幸な歴史があるのにもかかわらず、地球のどこかで相変らず戦争が起こるのは、人類の宿命であろうか。

人類の持って居る愛と憎の心、そのどちらを出すかによって人間として恥ずかしくないか、はたして私は人の為にどれだけ愛の部分を出す事が出来るだろうか。主人公の受ける、愛と憎の箇所を読むたびに、このことが問われている様に思われた。中国の文化大革命の内容等も知る事が出来、大いに満腹感を味わうことの出来た本である。

優しい雨

松本尚子

この夏永年住み慣れた市原を後にして東京都江戸川区北小岩郵政宿舎へ越してまいりました。下町の人情がまだ残っていて、穏やかで優しい人達に巡り会う事が出来ました。

9月に入って毎日が雨と台風が入り混じり、そんなある日の事です。久し振りの晴れだったのでベランダには沢山の洗濯物が干してありました。この宿舎の左隣が福祉センターで、その向いに北小岩小学校があります。ベランダの前の垣根の隣が通学路で登校下校時間はとても賑やかで笑い声や学校での出来事の会話が聞こえて来ます。午后2時すぎ頃何処から子供の声が聞こえて「雨ですよ」「雨が降ってますよ」、と何度も繰返している。ベランダに出て見ると本当に雨が強くベランダの中まで入っていた。2人組の男の子が立ち止って4階の宿舎に向って声を出していた。小学4、5年生くらいだったと思います。

私は嬉しかったので思わず「ありがとう」と大きな声でお礼を言った。傍にいた男の子が、「ほら、言って良かったネ」と相手に言っている。その子は「うん」と首肯ながら微笑んでいる。1本の傘を2人でさしながら叉隣の8階のマンションに向って「雨ですよ」「雨が降ってますよ」と歩いて行ったその声がいつまでも余韻を残しこの鬱陶しくて嫌な雨が何故か子供達の優しさで消えて行くのです。

『掘り出された奈良の都』読後感

宮吉俊子

奈良朝の宮廷とその周辺の中央官庁街、それを取りまく京城から、昭和36年1月数枚の木簡が発見された。考古学者ならずとも胸をときめかした事だろう。当時の新聞に写真と記事が載った四十代なかばの私には「なんでこんなに大騒ぎするのだろう」というのが本当の感想であったと思う。その後マスコミで「悠久の夢とロマン」と題して多数取りあげられてきました。1200年前の天平文化のきらびやかさだけが印象深い東大寺等の仏像や正倉院の宝物、それらがアジアだけでなく遠い外国からも日本に渡り、けんらんたる宮廷生活の衣食住に使われたのかと思うと、それらが夢を与えてくれると考え違いをしていた様である。昭和38年に新聞学芸面に平城京の生活白書と題して連載され反響を呼び、この本が生まれたとか、なるほどとうなづける。発掘調査とか考古学といえば学術調査報告的か骨董趣味的な見方に流されがちである。作者は泥にまみれ欠落部分のある木簡を実際に見、その時代に生きた貴賤老若人々の生きざまを直接肌に感じ、それらの人間の織りなすドラマを頭に浮かべ自由な発想や想像で展開する。読者はそんな作者の夢やロマンを又一段大きくふくらませその夢の中で遊ぶ事が出来、木簡を持ち荷を運ぶ都人の指の温さを感じ、心の中まで見つめる事の出来る様な素敵な本でした。

『花ひらく、心を永遠（とわ）に』

西村妙子

今、至る所にそんな街がありそうな気がする地方都市の近郊地に団地が出来て20数年、子供達が成人して、どの家も初老の夫婦だけ。街はこんな形で過疎化が進んでいるとか、我が身にも確実に忍びよる老いを感じる時、そんな街が重なり合い、余計寂々としてくる。老いた母や姑を見送る日が近いと感じた時、母の人生は？姑の一生は？幸せだったのか。どんな生きざまだったのか、もっと知っておきたいとの思いがつのる。そういえば姑はかまどの前でさえ、本を読んでいたっけ!! 今はどうだろうか？この「花ひらく心を永遠に」永関睦代著のあとがきに、書店には、専門書から小説、武器まで、色々のコーナーがあるのに、何故シルバーブックコーナーはないのか、とある。本には又、「お年寄りに贈る本」の副題がついている。《シルバーコーナーねえ、これからの社会、是非欲しいワナア》・75才のタミさんと海辺から流れてくる不思議な歌の主との出会いを、叙情的に描いた「天女のように」など9編のお年寄りの為の童話を集めている。《いくつになっても、ロマンチックもメルヘンチックも、感性だけは失ないたくないよネ》読みやすい大活字、美しい挿絵。《それって嬉しいワァ。この頃小さい活字は辛いもの》というわけで、今後大いに登場して欲しい一冊である。そして、花ひらく心、いつまでも持ち続けたいと思う。

『大地の彼方で』を読んで

西村道子

知人が自身の戦争体験を基にした反戦小説を自費出版された。昭和17年自動車第30連隊に入隊、中国各地を転戦、何度も生死の間をさまよい戦争の不条理と悲惨さをいやというほど味あわされた。戦争そのものより、戦争での人間の二面性、被害者としての中国人の悲劇など是非書き留めておきたかった。

小説の舞台は20年1月から7月初めまでの中国広西壮族自治区柳州とその近郊。日本兵川田軍曹は、復興隊の隊長代理。復興隊は食料の調達の他に重要な任務として、住民に砂糖を作らせ、砂糖を原料に酒を作りアルコールを不足するガソリンに混ぜて自動車を走らせるためであった。

上官に姑娘（クーニャン）を4.5人連れ帰る様命令される。その中の春英、互いにひかれてゆく。ゲリラから川田を救い「日本は憎い、でも悪い事しない日本兵の1人1人には憎しみ湧いてこない」又川田にしても将介石は憎いが中国人に対して春英と同じ気持。撃ち合いは身を守るためであり唯々勝つため戦争がつづく限り仕方なかったでしょう。

初恋だった春英を花姑娘にさせなければならなかった、辛さなどが切々と胸を打つ。

憲兵がゲリラを拷問するのを見て、川田自身がゲリラを拷問することになるとは思っても見なかった。相手国民衆の苦しみや悲しみも同時に書かれている。

『リプレイ』を読んで

道田靖子

物語は、43才の主人公の突然死の場面から始まる。題の「リプレイ」＝「再生」がなければ戸惑ってしまう所である。ところが、死んだはずの彼が気がついたのは、18才の肉体の自分が、当時住んでいた学生寮寮で覚めた瞬間だ。最初はパニックに陥るが、記憶や知識は元のままだから、競馬や株については予想ではなく結果として知っている彼は、たやすく金持ちになる。人生をやり直すことができるならどんなにいいだろう．という夢を実現した人間の話だ。しかし、運命はそれ以上の人生を彼に与える。43才の同じ日に再び死に、18才のある日に再び戻る。何回も。何度もくり返し与えられる人生、手に入れた全ての物を失うことが確実にわかっている人生は、何度もサッと取り上げられ、失う人生でもある。社会的実績も家族も最愛の娘も。私は彼の喪失感に身震いしてしまう。一度きりの不満足な人生さえありがたいと思う。また、「あの時こうしていたら」とか「しなかったら」という悔いを全部改めることができれば、と誰でも思うが、光の当たる幸せな部分だけを張り合わせた人生はなく、自身で取捨選択し掴み取った人生にも光と影があることを知った。訳者の杉山高之氏によると、作者のケン・グリムウッド氏についてはほとんど情報がないそうだが、そんなことも読者の期待と想像力をかき立ててくれるのである。

わからなくていい話

佐藤位子

11月3日の朝日新聞日曜版を見て思わず笑ってしまった。アラン・レネ監督の映画「去年マリエンバードで」の記事が2面にわたって載っていた。記事の副題は、「だれにもわからない筋立て」となっていた。

大分前にこの映画を見たがさっぱり判らなかった。それ以来、あれは一体なんだったんだろうとももどかしく思っていたのだが、この記事で一応のカイケツを見た思いでよろこんでしまったわけだ。「わからなくても当り前だったんだ」と。

この映画は1961年公開以来、ほとんどの人がわからないと言いながら30年間も人気が継続している不思議な映画だそうだ。記者は、主な登場人物を演じた俳優や脚本家、助監督、記録係などの関係者を訪ねて話をきく。俳優も助監督も話のスジは全く判らなかったという。スジが判らないよう

に混乱させて撮影したというからおどろく。しかし、脚本家のロブグリエ氏は、「『わかる』って何ですか？初めがああで最後はこうと納得することが『わかった』ことになるんですか？」といっている。なるほど「わかる」というのはりくつとして判るというほかに、感覚として判るという場合もある。でも普通はスジが通ってそれを納得した時でないと判ったことにはならない。でもそうでない判りかたも時には大切かもしれない。

『掘り出された奈良の都』を読んで

小川光子

天平時代の発掘現場から見た奈良の都の面白さ、そして一般民衆の辛い生活を現代に置き替えての文章だった。私達の住む市原市にも同様に掘り出された奈良の都の政治様式がある。天平以前の縄文期、古墳時代の市原では、鯛、真鯛、とびえい、すずき、まふぐ、いるか、さめ等の骨が見付かっている。貝は勿論、他に野兎、狸、狐、鹿等も食べた跡がある。犬の骨なども見付かっているが犬の骨は1個体がまとまって出土している事から埋葬したものと思われている。又アケビ、柿、栗、山桃、桃、胡桃、菱草、山百合等球根など食べた後もあり黒潮で黒潮と親潮が落ち合う処が房総の位置である事から、紀伊、伊豆、房総等にそれぞれ同じ様な地名が分布している。例えば、めら、白浜等、当時の丸木舟のよい中継点であったのであろう。古墳等も牛久古墳、小田部古墳等市原でも最古四世紀末のものだが大和政権による政治的統合を背景に出現したものである。そして757年上総国府を市原、郡本、能満、惣社等の域をまとめた地域に、国分寺を建て、この地方を管轄した。そして台地より見る広々とした田地に条里制をしき収穫した籾を税として取り立てた。「庭中の阿須波の神に木柴さし吾は斎はむ帰り来までに」と万葉集によまれた阿須波神社は穀物の神であり国府が統括地の穀物の豊穣、ひいては国土の安寧を祈る神である。奈良時代の有名な歌人である大伴家持の従兄弟である大伴稲君は上総国司として上総の防人を難波津まで引率した兵部少輔（兵部省次官）は任地で大伴家持と面接し防人歌と進上している「葦垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ」防人として行く夫、又は恋人との別れを歌ったもので、見知らぬ土地へ行く防人のわびしさを送る者の悲しみが歌われている。「夏麻引く海上潟の沖つ洲に船はとどめむさ夜更けにけり」長く離れていたが任期を終えて帰って来た。併し上陸は明日になる。長い旅を終えてほっとした思い。海上潟は古代市原市域は市原郡と海上郡とが存在し歌の場所は姉崎地区から五井地区にかけての海を指している。旅を終えて故郷を海から見る奈良時代の美しい湖畔の様子が眼に見えるようだ。奈良から遠く離った市原市にこんなにも近しく文化の交流が有った事を考古学的ではなく文学的に読んで見た。

森瑤子の世界へ

ト部　恵美子

我が家は、今、高一と中一の男の子がふたり。中一の方は、自分の好きな世界しか見えない。高一の方は、すっかりおとなびてしまっている。私の知らないうちにである。戸惑うことしきりのこの頃である。でもそのお陰で、子ども達から解放されたことに気付いた。土曜日は彼等は弁当を持って学校に行き暗くなるまで帰らない。日曜日は、できたら親共は家にいない方がうれしいと言ってくれる。そこで、私と夫は週末朝から晩まで、遊び回れることとなった次第。うれしいというより何とも変な気分。いつのまにか役目御免となったらしい。彼等は、もうお母さんを喜ばせてあげようとは思わないらしいので、しぶしぶ夫と遊ぶことにした。

思いがけなく突然、森瑤子の世界が私にも近づいてきたようである。私は美しく装って夫にエスコートされて、遊ばなくては……。私には遊ぶための時間だけは、どうやら確保されているらしいので、その他の知性を磨くべく、遊ぶためには、どうやら磨きぬかれた感性と知性が必要らしく、今はせっせと、森瑤子の世界に浸りきっているこの頃です。

「吉屋信子記念館」をたずねて

猪野　春枝

11月2日友達と三人で鎌倉の吉屋信子記念館をたずねました。実は以前、読書会で吉武輝子さんの「女人吉屋信子」を読んだ時から一度行ってみたいと思っていた所でした。

記念館は、鎌倉駅で下車、江ノ電側に出て、長谷寺に行く方向に30分程歩き、バス通りを右に入った小路の奥にありました。山を背に白と黒の近代数寄屋風の建物はパンフレットにある様に古都鎌倉の自然にとけこみ、静かな落ち着いた感じでした。玄関を入ると応接室があり、奥に和室が続いていて、その右が書斎になっています。応接室ではソファに掛けて資料を見たり、係の人と話すこともできます。ガラスのケースには、彼女の生前使用していた筆記具や印かんと原稿や俳句なども並べられていました。書棚には著書がぎっしりつまっていてその多いのに驚かされました。またその中には昔姉達の本棚にもあった少女小説だったりしてなつかしい気がしました。

記念館の一般公開は毎年5月と11月の1日から3日までと、あとは日曜・祝日及び年末年始を除く9時～4時迄、15人以内の小グループに応接室及び和室を開放しているそうです。（但し有料）

ホトトギスの活けられた床の間のある和室から芝生の先の植込を見ながら"こんなところで読書会をするのもいいなあ"と思いました。

本性への轡 —『悪魔の飽食』を読んで

石橋　みな子

脳死や臓器移植についての日本の決断はまだまだのようである。私は今まで、自分の死後の体を医学の進歩のため献体したり、臓器の使えるものは使ってほしいものだと思っていた。が、この本を読んでから少し考えが変わりつつある。人間の根元にある本性を「事実」ということを通してつきつけられたからである。

これまでの私はどちらかというと"性善説"肯定派だったけれど、この一冊は（『続・悪魔の飽食』も購入して読まずにはいられなかった）私にまったく反対の考えを持たせた、とまで言っても過言ではない。人間はどんな人も究極のところ恐ろしい本性を宿し、適応するという自己防衛能力のため判断力を置き忘れ、歯止めのない地獄の穴へ落ちる可能性がある。この「731石井部隊」の事実が戦争時であり、平時とは事情が違う、というなかれ。

著者の森村誠一も文中に言う。「内容の残酷外道こそ人間に潜む恐るべき本性であり、平時の人間が法律と秩序と理解によって辛うじてその本性に轡をかけられているとおもわざるを得ない。その轡の重さに人間の英知がある」……平時の本性への轡……どうであろうか。常に問いかけのほしい今、でもある。

医学に限らず、経済界の、ルールもなくお金に群がる社会。轡なくして信頼関係もない。

平成3年度読書グループ研修会に参加して

磯部　紀代子

11月12日県立中央図書館へ行き、「読書会と図書館のかかわり」についての発表を聞きました。君津市読書会連絡協議会と移動図書館副館長の熱心さに感動致しました。

公民館の中で活動し、婦人会、PTA、生活に密着した個々の読書会から昭和54年9月に5つの読書会が準備会を持ち、結成記念合同読書会を始めた歩みのパンフレットを資料に55年より文芸講演会、著者を囲む会と次々に作家をお招きしている行動力に驚きました。本に限らず「短歌について」のお話しや、バスハイク、事例発表、グループ研修会「読書会の充実、発展をめざして」の代表発表等、「私の主張」教育振興大会まで行って総会を開く横のつながりに、係の方の御苦労が偲ばれます。平成3年度には公開合同読書会をして「長崎市長への7300通の手紙」「モモ」「人麻呂の暗号」を当番を決めて、司会、記録、最後に一堂に集って全体会で各自報告、図書館を考える、老後を考える、水と環境を考える等々、羨ましく思いながら聞かせて戴きました。まだ図書館がなくほとんどの行事を中央公民館で施設活動とか、移動図書館共催という形で予算を計上しています。

YBCの援助も昨年度で終りましたが、今後は県と市の予算、企業からの寄付を戴いて頑張って活

躍されますよう心よりお祈りしつつ西村澄子さんと落葉の道を帰宅しました。

読書会ノートから

「細川ガラシャ夫人」　5月23日

戦国の武将達がキリスト教に興味を持ったのはなぜか。死んでも名を残したキリストと自分と同視したのかと思った。信仰の強さを感じた。ガラシャ夫人の生涯に興味を持っていたので面白く読んだ。理想的に描かれすぎたのではないか。他の著者によるガラシャ夫人を読んでみたいと思った。男性優位社会を痛感。自分の信仰を貫く事と、他者との関係について考えさせられた。

「狭き門」　6月27日

キリスト教にまつわる文学。日本の風土とは違う。主人公が自己中心的な生き方をしている。好き嫌いがはっきりしている。

「生き物の集まる家」　7月25日

読みやすいが理解しにくい内容。作者が26才の頃の作品で若さから来る意外な発想、グロテスクな所、大へんすばらしい構成で書かれている。推理小説に近いものであるといえる。心理描写、情景描写がすばらしい。

「生きる」—アメーバから人まで—　8月22日

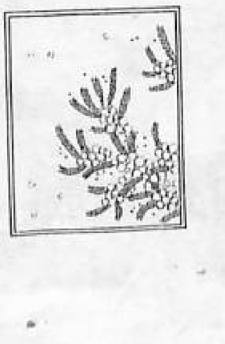
自然に息づくアメーバから人間まで、生きる為に様々な工夫をこらして生きる事の不思議、豊富な観察と実験で綴り、愛情あふれる一冊である。ムツゴロウ先生の愛情が一杯感じられ、青春に贈りたい書である。

「日蓮」—その生涯と思想—　9月26日

日蓮にはキリスト教的な考え方がある。釈迦誕生の時、インドには文字がなかったというのは疑問。著者が学者であり仏教者ではないので、解っていない部分も多々ある。釈迦以降、日蓮までの間は貴族、権力者の為の仏法で日蓮が悟を開いてようやく宇宙の生命体を「南無妙法蓮華経」と表わした。どの宗教、宗派も根源は同一のものであり、願いは皆同じではないか。無宗教、無信仰だとむずかしい本だった。

「山鳴り」　10月24日

地方の旧家の主人のエゴイスティクな生き方や主人公、他の人物の色々な人生模様が面白かった。人間の内面が一寸した言葉にも感じられ、よく書けていると思った。作者の意図が解らない。

学習日誌より

5月31日	5月末日原稿締切
	15周年文集を編集
6月　5日	再度編集、表紙の色と絵を決定し、カットの絵を添えて印刷所に依頼しました。
7月16日	見本刷りの表紙の字を縮少し、原稿のチェックをしました。
8月　末日	文集完成
9月	文集配布
10月31日	「ふれあい」の目次と課題本と著者略歴の下書き
11月　7日	「ふれあい」の学習日誌より原稿の下書き
11月　9日	「史劇の中の愛」講演会参加3名、千葉大学教授　栃木孝惟氏
11月28日	原稿の読み合せ、チェック
12月19日	忘年会　辰巳台「大京」
1月予定	文学散歩　野水仙の里
3月予定	湯河原1泊　15周年記念旅行